
ツイートピア

・」

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツイートピア

【Zコード】

Z49870

【作者名】

・

【あらすじ】

時は西暦2100年。人間の体内にツイッターを組み込むシステム「バイオツイッター」が実用化された時代のお話。主人公の「ノルコ」は、ごく平均的な家庭に育つた女の子。彼女を中心として過ぎてゆく日常は、一見ありふれたもの。が、バイオツイッターによる相互監視が当たり前になっていたり、お金を必要としない経済システムが確立していたりと、よくわからないことになっている。しかしそんなことはノルコにはどうでも良いことで、以下の課題は「良いお嫁さんになる!」ということだった……。（ワンシーン）

40文字以内
(

ツイートマーク (記書き)

【用語】

ツイート…つぶやき。

TL…タイムライン。ツイートを新しいものから順に並べたもの。

リプライ…特定の人に向けたツイート。

(1) パパパパパパ、目覚まし時計を止め、少女はベッドから起き上がる。彼女の名前はイズミ・ノルコ、小学五年生だ。寝癖がピンピンはねた頭をポリポリしつつ、つぶやいた。ノルコ「おはよー」早速、友達や家族から来る。いつしか世界はツイートで結ばれるようになったのだ。

(2) 鼻歌をつぶやきながら服を着ると、ノルコはランドセルを持つて一階に駆け下りた。朝ごはんの仕度が出来ていた。ノリコ「めだまやきだ!」母「今日はお米を買ってこないと」父「また円高かー」弟「ウエエーイ」みんな好き勝手につぶやいている。朝からとても元気やかのだった。

(3) ノルコは田玉焼きの黄身とご飯を混せて、醤油をちょっとかけて、プチ卵かけご飯にして食べるのが好き。イズミ家は父と母とノルコと弟の四人家族だ。弟の名前はイズミ・セルゲイビッチ・ロマーノフ(自称)なんだけど、長いから弟でいいよね。弟「ウイイイ?」

(4)

朝食を食べたノルコと弟のワク(本名)は、集団登校のために玄関の前でみんなを待った。ノルコ「あうう、寝癖が」何度もクシを入れてみるが、てっふんの毛が手ごわいのだった。そのうち皆がやってきた。「アホ毛」「アホ毛だ」「アホアホ!」「アホ毛」「ノルコ」「うるへえ」

(5)

ノルコ達、眩つぶやね音小学校の一団は、朝日が照らす小奇麗な街角を歩いていく。集団登校するのは治安が悪いからではなく、その方が楽しいからだ。「あつ、ノルコの二ーソ、新しくなつてる!」「うわっ、犬のウンコー!」「通報してやる!」通学路をにぎやかなリプレイが飛びかう。

(6)

校門付近に変な人が立っていたので、一行はリプレイをいつたん止めた。男「ビヴォーチョ! ついにここににたどり着いた! 素晴らしい!」男は一人ツイートを繰り返しながら歩き去つていった。少し不思議な人であるらしい。ノルコは「一人ツイートって楽しいのかな?」と思った。

(7)

教室に入ると自動的に全クラスメートと相互フォローになる。レイタ「ちつ、今日の授業つまんねーの! 体育も音楽もねーじゃん! 楽しみ給食しかねーじやん!」サトウ・レイタ君がいつも通り咳きまくっている。彼は金髪ツンツン頭の自称イケメンだ。ノルコは正直ウザイなといつも思う。

(8)

ノルコ「算数だつておもしろいよ?」レイタ「へつ!」彼はそう言つて机の上に飛び乗ると、くるくる回つてからビシッとノルコを指差しつぶやいた。レイタ「算数が好きな女つて変だな!」女子「そんなことない!」×15リツイート。少年は朝から全女子を敵にまわしてしまつたようだ。

(9)

レイタ「割り切つてやるぜ！ 7÷3でも9÷2でも、俺なら割り切つてみせるぜ！」一同が全員ため息をついた時、予鈴がなって先生がやつてきた。先生「そつか、じゃあまずキミから割り切つてあげようね」先生はそう言ってレイタの両耳をつまむと、思いつきり引っ張った。レイタ「ア”ツー！」

(10)

レイタ「体罰反対」午前の授業中、彼はずつとそう咳いていた。おかげで午前中のタイムラインは「体罰反対」と「レイタうるさい」で8割がた埋め尽くされてしまった。給食の時間、彼は先生と田が会うや否や。レイタ「たいばせ……」とうとうクラス全員にリムーブされてしまった。

(11)

お昼休みのあと授業はお昼寝の時間と決まっている。しかも科目は【つぶやき史】で、先生は癪しのウイスパーボイスの持ち主、ツブヤ・クオ先生だ。クオ「じゃあ今日は教科書11ページから始めるんだお」もう既に3人寝た。先生はなぜかメロンを持つている。

(12)

クオ先生はメロンを片手に持ちながらつぶやき始めた。クオ「今から一世紀くらい前に、世界中でインターネットといつものが流行つたんだお。ちょうどこのメロンの表面の模様みたいに、地球上に通信ケーブルが張り巡らされてたんだお」そしてまた6人ほど寝た。

(13)

クオ「このメロンはあとで先生が美味しいただくんだお」そういうつてクオ先生は教え子達の反応を待つ。どうやらウケを狙つた。

らしい。「ZZZ……×3リツイート」クオ先生はにっこり微笑むとメロンを教壇に置いた。それだけのために持つてきらう。

クオ「じゃあ、続きを話すんだおつ」「

(14)

クオ「インターネットが普及してしばらくたつたある日、頭のいい人たちがツイッターっていうソフトを開発したんだお。それをみんな、パソコンという原始的な情報端末で楽しんだんだお。それなりに面白くて便利なものだつたんだお」みな次々と眠りに落ちていいくが、授業内容は丁しに残るので特に問題ない、たぶん。

(15)

クオ「パソコンはやがてモバイルに、モバイルはブレイン・インプラントに、ブレイン・インプラントはナノ・インサートにどんどん進化していつたんだお」自称【けなげな美少女】のノル「も、横文字がいっぱい並んだために我慢できず、氣絶するよつとして寝てしまつた。

(16)

クオ「パソコンと呼ばれていた装置は、今はみんなの体に組み込まれてるんだお。耳たぶをクリックすると丁し画面が出るのもそういう仕組みだお。何か質問あるお?」しかし起きているものは誰もいなかつた。それを見て先生はニッコリ微笑んだ。クオ「よしつ、じや今日はこれで終わりだお!」

(17)

チャイムとともにノル「は田」を覚ました。ノル「あうづ、今日も耐えられなかつたか……」そして自分の耳たぶクリックし、クオ先生の授業丁しを、映像モードで呼び出した。ノル「うわあ」先生はぐねぐねと身振り手振りを駆使し、わかりやすい説明に心

を砕いていたのだ。ノルコ「いい先生だあ」

(18)

ノルコはクオ先生のTシャツを閉じ、前の席のレイタを見た。レイタ
「ZZZ……うおおつ、ひつまぶしい」 どうやらいい夢を見てい
るようだ。腹立たしい。ノルコはレイタの椅子をボコンと蹴っ飛ば
した。レイタ「敵襲?!……ZZZ」 ノルコは次の授業の準備を
しつつ、家族のことを考えていた。

ツイートペア19～40（前書き）

【用語説明】

ファボる：ツイートをお気に入り登録すること。

DM：ダイレクトメール。送った人と送られた人しか見れない。

耳たぶクリック：視界にT-S画面が表示され、その場所の情報を確認できる。

(19) ノルコが午後の授業をうけていたが、母のイズミ・ヨコはスーパーに買い物に来ていた。リプライが飛んできた。店長「よつ、奥さん相変わらず若々しいね！ お子さんがいるとは思えねえや」水色ワンピース姿のヨコ。よく学生と間違われ、ナンパされる。ヨコは返信する。ヨコ「うふふ、当然なのよ店長」

(20) ヨコは野菜と肉をカゴに入れ、お米売り場に向かつ。ヨコ「ヨコが5%も下りにしましたよ？」ヨコは耳たぶクリックでお米売り場の丁口を開いた。「まあ、お向かいさんったらヨコも一度に……欲張りねえ」そしてヨコのお米をよいしょと詰め、そのままスーパーを出た。

(21) 店長「奥さんちょっとー！」店長が必死の形相で追いかけてきた。ヨコ「あらなにかしら？」店長「奥さん、今日はシユウマイが5割引なんですよ！ 買つていってくださいよ！」といつてシユウマイをヨコに押し付けてきた。店長「まったく、奥さん欲がないんだからっ！」

(22) ヨコは車に乗ると、行き先を自宅に設定して発進させた。そしてシユウマイが5割引きであることの意味を考えた。ヨコ「つまり、いつもの感覚より2倍多く買つてもひんしゅくを買わないのよね。買つても買わない、うふふ」今は全てが丁口で管理される。マネ

— という概念は時代遅れになつたのだ。

(23)

つぶやね市は太平洋に面しており、年間を通してカラツとした気候。ノルコの父、イズミ・アフレルは臨海地区にある研究所で働いている。家から車で30分ほどの場所だ。アフレル「うわっち！」試験管が絵に描いたように爆発して、ネバネバした液体が飛び散つた。アフレル「やつちまつたか」

(24)

アフレルは服や髪やメガネについたネバネバを溶剤でふき取る。はたして何作つてゐるのか？ アフレル「口に入れても大丈夫な糊を作つてます」 糊 地味ではるが、重要な工業製品の一つだとところでアフレル君は絶倫なんですか？ アフレル「い、いたつて普通ですが？！」

(25)

アフレル君はなぜ化学製品に関わるつと？ アフレル「本当は僕、『火星』開発に行きたかったんですよ。でも学力が足りなくてダメでした」なるほど化学製品の『化製』と『火星』をかけてるんですけど。ダジャレがお上手で。アフレル「いや……そういうわけじゃ」

(26)

アフレル「僕がここで働いているのは、たんに僕がこの仕事をこなせるからです。僕にできる仕事の中で緊急性が高かつた仕事、それが『食べられる粘着剤の開発』だった訳です。平凡な理由ですよ」なるほど。ところで一人ツイートの多いアフレルさんを見て、同僚の方が心配そうな顔をしています！

(27)

実験を終えたアフレルはデスクに戻った。夕日が海に沈もうとしていた。デスク上の電子フォトに家族の笑顔が写っている。アフレル「ふう、今日も良く働いたなー」アフレルが火星を目指したのは事実なのだ。そして彼は、火星に行けたら幼なじみのヨコに告白するつもりでいたのだ。

(28)

妻のヨコは昔からよくモテた。アフレルは自分と彼女では釣り合はないと思っていた。だがある日、アフレルは意を決してこうつぶやいたのだ。アフレル「もし僕が火星に行けたら、そこからヨコにプロポーズの手紙を送るよ」と。笑って流された。しかしヨコは密かにそのツイートをファボっていたのだ。

(29)

アフレルは一心不乱に勉強した。理系の大学に進学し、修士課程まで進んだ。その後就職し、資格を得るために職務経験をつみつつ、夜遅くまで勉強した。しかし彼が第5次火星開発選抜に合格することはなかつた。次の選抜は10年後だつた。彼は、あの約束は忘れてくれと、ヨコにDMを送つた。

(30)

ヨコ『じゃあ私も一緒に連れてつてくれるのね、火星に!』それがヨコから届いた返事だつた。あれから月日が流れ、二人の子供が生まれ、今に至る。アフレル「そろそろ帰るか」外に出ると、空に星がまたき始めていた。アフレル「ちゃんと約束守らないとね」彼はそう呟きつつ、家路についた。

(31)

ノルコ「おなかすいたよ!……」学校から帰宅したノルコは自室でそうつぶやいた。今日はいつもの【おやつ】が置いてなかつた

のだ。弟に聞いてみたところ。ワク「ヴェイ、シユウマイなんて知らナッシン！」とのことだった。ノルコ（今夜の食事はきっと荒れるなあ……）ノルコは率直にそう思った。

(32)

アフレル「ただいまー」父のその声が夕飯の合図だった。ノルコはダイニングに飛んでいった。テーブルの上にたくあんが一切れだけのつたご飯が置いてあり、その前で弟がグズっていた。ワク「わよばれた」ヨコ「お母さんにはみんなわかつちやうんだから、ワクは悪い子ね」

(33)

弟のワク（セルゲイ・ピッヂ・ロマーノフ）は友だちとの交友で悪いことを覚え始めた。食卓でシユウマイを食べると、食卓下にその記録が残つてバレるけど、自室でコツソリ食べれば大丈夫だろうと思つたのだ。ヨコ「レンジでチンした時間が、ノルコが帰つてきた時より20分も早かったのよ？」

(34)

アフレル「ダメじゃないかワク。ほら、ちゃんと謝つて」しかしほくは、たくあんご飯を持って部屋に閉じこもつてしまつた。きっと泣いている所を見られたくないのだろう、そうノルコは思つた。部屋の下へは人に見られないように、部屋主の権限でロックをかけられるのだ。

(35)

ノルコは夕食中、姉としてなんとか弟を更生させねばと思つていた。そこで弟に対してもMを送ることにした。Mは二人の間にしか聞こえない、言わば心の声である。ノルコ《意地はつてもいいことないよ？　お母さん、目が本気なんだから》しかし返事はない

かつた。

(36)

その「」もまた、密かにワクにDMを送っていた。『『今の中、悪いことをするとなんでもすぐにバレちゃうの。でも良いことするとすぐに褒めもらえるの。だからお母さんはワクに良い子になつて欲しいの』』しかし返事はなかつた。

(37)

父のアフレルもまた、ワクにDMを送つていた。アフレル『ふほほおー、やつぱり母さんの作る料理はうまいなあー。このショウガ焼きさいこー！ ふほつふ。ワクー、早く戻つてこーい。みんな待つてゐぞお？』しかし返事はなかつた。

(38)

三人ともDMに集中しているので、食卓は異様なまでに静かだつた。一方ワクは、部屋の机につづふしたままDMを受信していた。ワク（ショウガ焼き……ウウイイ）しみ上げる食欲に負け、ワクはすゞしごと食卓に向かつた。どうやらアフレルのへんてこなDMが、一番効果的だつたようだ。

(39)

ダイニングにやつてきたワクに、三つの視線が注がれていた。ワク「ソーリイ……」と黙つてモジモジ。『『「もつとちゃんと謝るの」』ワク「あ、アイムソーリーなんだゾー！」三人は互いに視線を交わし、そしてワクの方を見て、同時に言つた。「日本語で！」

(40)

ワク「おやつ食べちゃつてごめんなさー……」『『「いいわ」』そう言って『『』』のショウガ焼きを暖めなおした。その田ワ

クは！」飯を2回おかわりした。育ち盛りなのだ。田口はおやつを増やさなきゃと思った。ノルコ「ところでシユウマイ美味しかった？」
ワク「オフコース！」

シートマスク41～61（前書き）

【用語説明】

BOT・プログラムに並んで、オーバーのシートの真似をしたりする。

RT・リツイート。シートをつむじつかう。JR。

(41)
ノルコはお風呂に入つてパジャマに着替え、自室のベッドでゴロゴロしていた。ルイ「ノルの明日のアホ毛はね、きつと3本！」ノルコ「そのアホ毛というのをやめなさい……」時々クラスメートからリプレイが飛んでくる。レイタ「おまー 風呂長が……」即効ブロック。

(42)
ピヨッター「今日のシユウマイのうほほ」机の上のひよこ型Bマークのピヨッターがわけの分からないことをツイート。ノルコ「今田はとんだシユウマイだつたぜ」ピヨッター「とんだアフレルの糊が爆発」ノルコはプツとふき出しちしました。ノルコ「はしたないわつ」

(43)
ノルコは部屋Tシを操作して三日分巻き戻した。三日前、友だちがノルの部屋に遊びに来たときの光景が再現される。ノルコ「あつ」友だちのルイが床に落としたボッキーを、みんなに見られないようコツソリ口に運んでいた。ノルコ「5秒ルール?!」ノルコは速攻問い合わせた。

(44)
ルイ「だつて、もつたいないじゃないか……」ノルコ「ちゃん」と毎日掃除してゐるんだから。汚くなんかないんだから！」ルイ「え？ そういう理由で怒ってるのか？」ルイを小一時間問い合わせた後、ノルコは口口口で丹念に床を掃除した。ノルコ「10秒だ

つて1分だって大丈夫なんだから…」

(45)

いい加減じゅうたんがむしれてきた」。母からDMが来た。ヨコ《よるほー》ノルコ「あつ！」そしてあわてて時計を見た。10時を回りうとしていた。ノルコ「ねなきや！」ノルコはベッドに飛び込むと、地球のみんなに向かって「おやすみー」とつぶやき、田を開じた。

(46)

「…………。朝の田覚まし時計がなる。ノルコはパツチリ目を開いて起き上がる。ノルコ「おはよ……うっ」自分の頭をさわってみたら、今日は寝癖がついでいなくシットリしていた。窓の外からシトシトと雨音がきこえてくる。ノルコ「今日は雨なんか」

(47)

ノルコは朝はんを食べる前にトイレに行く派だ。ノルコ「丁がないことを確認……と」そついつて耳たぶをつまむ。トイレ内にTシを置くことは法律で禁止されているのだ。ノルコは確認を終えると便座に座った。ちなみに、けなげな美少女はウ〇コなんてしません。

(48)

食卓にて。ワク「マアム、ソイソースプリーズ！」アフレル「おっ、ちょっと円安になつた」ノルコは厚焼き卵をじ飯に埋めてギュウギュウ固めて、なんちゃつて卵おにぎりにして食べるのが好き。ノルコ「うーん」天気が悪いと何となく家の中が陰鬱だな、とノルコは思つたり。

(49)

ノルコは今日も玄関の前でみんなを待つ。花柄傘クルクル。ワク「袈裟斬り！ 袈裟斬り！」 弟は自分の傘（別名、聖剣シツツシユバルト）で雨を切ろうと頑張るもズブ濡れだつた。ルイ「のーるー！」 友だちがやつてきた。ルイ「むう、ノーアホ毛か」 ノルコはルイにチヨップした。

(50)

ノルコ「あつ、またあの怪しい人」 校門の近くに真っ黒なレインコートを着た謎の男が立つていた。一同はリプライドにるか足まで止めてしまつた。男「雨……レイン……今日は重大なことが起きそうだぞ……。ビバー・チエ！」 そして男はスキップしながら去つていつた。ノルコ「なんなのかー？」

(51)

ノルコ「はつくしゅ！」 算数の授業中くしゃみをしてしまつた。ノルコ「ティッシュがないなう」 RT「ティッシュ」 RT「ティッシュ誰か RT「ていしゅー RT「ていしゅを誰に？」 RT「亭主をノルに RT「ノルの亭主？」 RT「どういふことなの？」

(52)

レイタ「なあ、なんで俺がノルの亭主なん？」 ノルコは問答無用でこぶしをみぞおちに叩き込んだ。レイタ「うふぐうー」 そして隣りのリンちゃんがくれたティッシュを受け取る。ノルコ「ありがとう、みんな！」 そして鼻をかんだ。あくまでもおしとやかに。ノルコ「ちーん」

(53)

次の授業もノルコの大好きな体育だ。みんなで跳び箱やらマットやらを用意する。ノルコ（なんか頭がボーッとするな……） ルイ

「ノルコ顔赤いよ？ 風邪ひいたんじゃないのか？」 ノルコ「しかし体育は休みたくないなう」 体育館の屋根を叩く、雨の音が響いていた。

(54)

飛び箱が得意な子のグループは、台上前転の練習をしていた。レイタ「俺、兄ちゃんからすっげえ技教わったんだぜー！」 といつてレイタは台上宙返りをやつてのけた。「うおお」 体育館中がその大技にどよめいた。ノルコはそれを見て、ムツとしてしまった。勝手なことをしては危険が危ないじゃないか。

(55)

ノルコ「先生やつていいって言つてないじゃない、怒られるよ？」
レイタ「なんだー？ ひがみかー？」 ノルコ「違うもん！ あ
のくらい私にも出来るし！」 レイタ「じゃ、やつてみろよー」
ノルコ「やらないよ！」 そう言い捨てて、ノルコは飛び箱に向かう。

(56)

ノルコ（宙返りくらい、出来るよ……） ノルコは助走の途中、ふとそう思つてしまつた。ノルコ（ロイタ板を強くけつて、体が浮いてから手を突けばいいだけなの） しかし、そんなことをする気はさらさらなかつた。ノルコはただ台上前転をするだけのつもりだつた。しかし……。

(57)

飛び箱が間近に迫つていた。ノルコはいつも通り飛ぼうと板に踏み込む。その時だつた。ノルコ（んん？！） 頭の中がムズつとした。そして気がつけば板をかなり強く蹴つてしまつていた。体が予想以上に高く舞い上がつた。ノルコ「うそ！」 あぶない！ その

場の誰もがそう思つた。

(58)

ノルコは前転とも前方宙返りともいえぬ、中途半端な姿勢で跳び箱に突っ込んだ。「キャアアアアアー！」ツイートではない本物の悲鳴が、場の空気をつんざいた。頭から突っ込んだノルコは台の上でバウンドし、そのままマットに向かって放りだされた。誰もが唖然とし、凍りついた。

(59)

そしてノルコは氣絶した。目を覚ました場所は保健室だった。保健医のジェネ先生がそばにいた。ノルコ（うつん……）ジェネ「気がついたのね」先生は身を起こそうとしたノルコを制しつつ。ジェネ「頭を強く打つて氣を失ったのよ、まだ横になっていた方がいいわ」ノルコは小さく頷いた。

(60)

リジェネ「どこか痛むところは？」ノルコは首を横にふる。特にどこも痛くなかった。リジェネ「そう、今は大丈夫でも後から症状が出るかもしれないから。あとで病院で検査するからね」ノルコは再び、ただ黙つて頷いた。その様子を見て、先生が不審げに首を傾けた。

(61)

ノルコはけして大人しい子ではない。先生もそれを知っている。そのノルコがまだ一言もツイートしていないのだ。リジェネ「もしかして……ちょっと、何かつぶやいてみてくれない？」ノルコ「つ……う……」二人はみるみる青ざめた。ノルコは「つぶやけなくなつた。

(62) 医者「ファイルが壊れている」 医者は出し抜けにそう言った。
 ノルコ「えええ！？」 ノルコは今、母の付き添いで病院に来ている。
 「壊れてる」という単語にノルコしたたかビビッたわけだが、何せ
 咳くことが出来ないのでした。ノルコ（どうなつちやうんだひ……）

(63) ノルコ「な、治るんです？」 医者「再インストールすれば良い」
 そう言って医者は、棚から小瓶を取り出した。そして中身をスプ
 ーンですくう。群青色のいかにも毒々しい液体だった。医者「はい、
 あーんして」 ノルコは小刻みに首を振った。どう見ても、マズそ
 う。

(64)

医者「注射にする？」 ノルコは速攻で口を開けた。注射は古代
 における拷問の一種である。もっての他だ。医者「じゃ、あーん」
 ノルコ（？…@¥！） なんとも例えようのない味がし
 た。強いて言つなら、水色のビー玉を溶かしたような味？

23

(65)

「ぎょくじつ」 ノルコはその怪しげな液体を一思いに飲み込んだ。横で母のノルコがあおあおしていた。医者「よしよし」 ノルコ
 え、もう終わりですっ」 医者「はい、10日ほどでファイルは修
 復されます……いや、2週間くらいだったかな？」 ノルコはとて
 も心配だった。

(66)
つぶやけなくなつたノルコ。風邪で熱も出てきた。けな氣で病弱な薄幸の美少女となつたノルコは、自室のベッドに埋まつていた。ノルコ（うーん、うーん……）うなされ声すらＴＬに残らない。噂によると、人は100日つぶやかないと死んでしまうらしい……
ブルブル。

(67) ルイ『ノル、無理しちゃだめだからね。明日はけやんと休むんだよ? ノートは私がとつとくからせ』 友だちのルイからお見舞い DMが飛んできた。ノルコ(ありがとうルイちゃん、ついでに給食のミルマークも……) と返信しようとしたら出来なかつた。ノルコ(歯がゆいわー)

(68)
『えつ、ほんとにツイートできなくなつたの?』 『レイタのあんばんたんが悪い!』 『ノルちゃんかわいそづ……』 『100日もからないつて絶対!』 『つぶやけなくても元気だして!』 次々飛んでくるDM。しかし返信できない。たん的に言つてノルコは切なかつた。

(70)

熱がさらに出でたようだ。ノルコは「」を閉じた。「けふつ、けふつ」咳は出る。しかしツイートにはならない。ノルコ（咳をしても……ノーツイート）滅多に泣かないノルコも、流石にちょ切れそうになった。これが100日も続いたら、ホントに死んじやうかもしれない。

(71)

トントン ノックの音。アフレル「はいるぞおー、卵がゆだぞおー」ワクも父の側にいて心配そうにしていた。アフレル「あーんしてやるか?」ノルコは首を横に振つてお椀とレンゲを受け取つた。アフレル「大丈夫だぞ、すぐに良くなる」そう言って父は娘の頭を撫でた。

(72)

アフレル「父さんなあ、もう少ししたら仕事がひと段落つくんだよ。それでな、ノルコの病気がよくなつたらな、みんなで旅行でもしようと思つてるんだ。どこがいいかノルコも考えておいてくれよ」そう言つて再びノルコの頭を撫でて、父はサッと部屋を後にしたのだった。

(73)

ノルコが『旅どんとこ』を調べていると、突然リプライが来た。レイタ「知つてるか? コーヒーはカフェインで牛乳はセロトニンだから、コーヒー牛乳飲みすぎるとオーバードーズ起こすんだぜ? 別名ゲリだぜ?」なんのこっちゃ? ノルコは普通にスルーした。

(74)

しかし何か気になつて、ノルコはレイタの「」を訪問してみた。案の定、叩かれまくつていた。「お前何言つてんだ!」「諸悪の根

源！」「お前のかあちゃんズンダモチ！」もしかしてレイタなりの贖罪なのか？レイタ「ちょっと、最後のヒテナ！」そんなわけないか、寝よう寝よう。

(75)
チュンチュンというズズメの鳴き声とともにノルコは目を覚ました。「おはよう」と咳こいうとするが、やはり出来ない。今日は大事をとつて学校を休むことになっている。ノルコ（何して過ご）（うかがな？）そんなことを考えながらノルコは一階へと降りて行つた。

(76)
食卓では父のアフレルがコーヒーを飲みながらWEB新聞を読んでいた。アフレル「おっ？」しかしアフレルはそれ以上なにも言わない、咳けなくなつた娘に対し、どう向き合えばいいのか計りかねているようだ。ノルコはそのままキッチンへ向かう。ヨコがパンを切つているところだった。

(77)
ヨコ「あら、早いのね。もつと寝ていいのよ?」そう言つてヨコはノルコの耳たぶをつまむ。「36・8度。まだちょっと熱があるわね、休んでいた方がいいわ」しかしノルコは首を振つて否定した。必要以上に心配されるのはもう嫌だなと思つたから。

(78)
ノルコは卵とフライパンを用意して、自分好みの完璧な半熟加減のスクランブルエッグを4人分作り、食卓に持つていつた。朝寝坊のワクが目をこすりながら降りてきた。ワク「は、はうどゅーゅーどゅー？」心配そうに他人行儀な挨拶をしてきたワクに向かつて、ノルコは親指をグツ！と立ててみせた。

(79)

ノルコはトーストに卵を乗せて食べたら負けと思っている。アフレルはとても急いでいるようで、ワクと同時に食卓を立つた。アフレル「今日は仕事の最終報告があるんだ」 呟けないノルコはケチャップでトーストに字を書いてみた。【いてら】 アフレル「ふほつ」 ワク「イエア！」

(80)

ワクは家を出るとすぐ学校に向けてダッシュした。ワク（トウデイ、姉ちゃん、イナッシン、アンビリーバボー） そんなミステリアスなフリーダムを感じながら走っていると、後ろから黒い影が迫ってきた。謎の男「ヒーハハー、ゴーアー」機嫌ボーカル！ ビバーチェ！

(81)

ワク「ホワツツ！？」 ワクは思わず走りながら身構えた。ワク「フーアーゴー！？」 謎の男「ふふふ、僕かい？ 僕はね、見ての通りのストレンジャーさ！」 そういって男は腰をクネクネさせながら、さらりとワクに迫ってきた。ワク「ヴェイイ？！ ゴーアウエイ！」

(82)

ワクはもう一度と一人では通学しまいと思った。こんなに怖い思いをしたのは初めてだ。あれから200mばかり男は追いかけてきて、ワクに聞いてきた。男「お姉ちゃんは咳けなくなつたんだな？ だな？」 ワク「ホワイゴーノウ！？」 男「HahaHa！ 僕は世界の全てを知つていいのさ！」

(83)

ワクは速攻で職員室に駆け込み、そして先生に報告した。先生は青筋たてて驚いて、ただちに眩音市ツイッター・ポリスに連絡した。不審者はシステムによって3秒以内に発見されるだろう。これで一安心だ。……しかし、その男は何故か捕まらない。そのことを後にワクは知ることになる。

(84)

その頃、職場にいたアフレルは、学校から連絡を受けてビックリしたもの、無事を知つてホッとしていた。ひとまず仕事をやつしけねば。研究テーマである【食べられる粘着剤】の最終報告をまとめてデータベースに登録する。アフレル「ふう、これでまた一つ、この世の中の富が増えたぞ……」

(85)

お昼休み、アフレルが妻の特製弁当を頬張つていると、上司に呼び出された。アフレル「なんでしょう?」上司「はいお疲れさん、これ辞令ね」アフレルは自分のデスクに戻り、その辞令の中身を読んだ。そこにはこう書かれていた。【価値ある研究をしてくれてありがとうございました、お疲れ様でした】

(86)

アフレルは昼から1時間ばかりかけて荷物を整理した。そして休息所の窓から海を眺めつつ、しばしボーとしていた。同僚が声をかけてきた。同僚「よう、やつたじゃないか! 次はどこにいくんだ?」アフレル「うーん、そうだな……何しようかな」同僚「おいおい、しっかりしろよ、せつかくのチャンスだぜ?」

(87)

アフレルは研究テーマを消化したのでリストラされた。仕事が無ければ働かなくてもよい、ごく当たり前のことだ。アフレルは3時

前に早々と帰宅した。アフレル「なんだか不思議な感じだなあ」
そんなことを呟きつつ、アフレルはしばしほんやりする。アフレル
「……自由か」

(88)

アフレルは仕事を達成したことへの感慨をひとしきり逡巡したのち、気を取り直して新たな職を探すことにした。耳たぶクリックでT-Sを表示し、就業に関するページを次々と開いていく。求人側と求職側が相互にフォローを投げ掛け合ひ、ベストなマッチングを摸索していくのだ。

(89)

しばらぐしてヨコが買い物から帰ってきた。今夜はハンバーグのようだ。キッチンに向かう途中でヨコは、職探しに没頭して口が半開きになつているアフレルを見た。ヨコ「まあ、あなた！」ヨコは驚きのあまり、買い物袋を落としてしまった。ヨコ「リストアされたのね！」

(90)

ノルコ（宇宙の果てみたいな退屈さだよ……）寝るのに疲れ果てたノルコが一階に降りてみると、そこには口を半開きにした父アフレルがいた。おまけに目は焦點もあつていなかつた。ノルコ（な、なにじと？）そしてキッチンの方からは……。ヨコ「シクシク、シクシク……」

ツイートピア（91）

ノルコがキッチンに入ると、そこには濡れタオルで顔をおおつて泣いている母のヨコがいた。心配になつたノルコは、ヨコのエプロンをギュッと握つてしまつた。テーブルの上には合挽き肉、まな板の上に玉ねぎのみじん切り……これが。ヨコ「ノルコ、お父さんが

ね……リストラされたのよー。」

(92)

それからノルコは母とハンバーグのタネを作つた。あとは夜になつたら焼くだけだ。そうして部屋に戻ろうとした時ワクが帰ってきた。そしてやはり口が半開きの父を、怪訝な目つきでしばらく眺めていた。なんだか大変そうなお父さん。咳けないノルコは心の中でこう呟く。(がんばれお父さん)と。

(93)

朝。今日は金曜日で、明日はお休み。ノルコは「もう一日休んだら？」と言われたが、退屈なので学校に行くことにした。ノルコ（つぶやけないからますます退屈なの）昨日はワクが不審者に追いかけられたということで、ちゃんとみんなを待つてからの登校だ。

ノルコ（るんるん）

(94)

ミニスカート姿のルイがやってきた。くしくもノルコと同じ服装だ。目が合うと同時に火花が散った。ルイ「ノル！ 無事だつたんだね！」恍惚の笑みで駆け寄つてくるルイだが……。ノルコ（みきつた！）ルイ「なにい！？」ルイの手はノルコのスカートを狙つていたのだ！

(95)

ノルコは自身の股間に迫り来る手を手刀で切り払うと、そのままルイに抱きついた。そして膝の先でそつとルイのスカートをまくりあげた。ルイ「ひやう！」秘儀『スカートめぐり返し』だ。ルイ「私の負けだと？」そしてルイはくず折れた。スカートめぐり。最近女の子の間で流行つてるらしい。

(96)

ルイ「どうやら……心配することは何もないみたいだね」ノルコはウンウンとうなずいてから、親指をグツ。ルイ「熱は下がつたんだ？」ウンウンうなずいてグツ。ルイ「今日の給食は五目おこわだぞ？」ウンウン、グツ。ルイ「本当につぶやけないんだね……」

…「うグッ！

(97)

いつもの穏やかな通学路だった。近所のおじいさんが道端を掃除している。プラーとクラクションを鳴らしながら「ミ収集車が走っていく。オートカーが等間隔を保つて道路を進んでゆき、空ではカラスがカアカアいいながら、コンビニの窓拭くお兄さんを見張っている。今日も世界は通常運行だ。

(98)

昨日のバラエティ番組のこと。今日の宿題のこと。いつの昔のだからわからないギャグ。ワク「ゲツツ、ゲツツ」友達「ゲラゲラ」下の学年の子の会話もいつも通り。でもノルコのクラスメートは。「私もなんか風邪ぎみかも、あつ」「あのアイドルは無口なところが、おつ」

(99)

ルイ「そんでもさー、うちのオヤジの靴下がすっぽくなっちゃってさー」ノルコはウンウンと相槌をうつ。ルイ「そういうやノルコんといのお父さんって……あ」ノルコ(?)ルイ「じめん、答えようがないよね、咳けないんだし」気にしないでと伝えるために、ノルコは精一杯の笑みを浮かべてみた。

(100)

3時限目はつぶやき史だ。いつもは寝る気まんまんの子達も、今日はしつかりクオ先生を見ている。ノルコがつぶやけなくなつたことが、少なからず影響しているようだ。つぶやきの秘密を知りたいという、好奇心の田が先生に注がれている。クオ(こ)これはやりずらいんだお……！

(101)

ノル口の顔をチラと見て、その空氣を読んだクオ先生は核心となることから説明することにした。つまりバイオツイッターの仕組みについてだ。クオ「昔パソコンと呼ばれていた機械が、今は僕らの体の中に入ってるって話は前回した通りだお。今日はそこのことなどを詳しくやつしていくんだお」

(102)

クオ「人間の体はたくさん要素で成り立っているお。赤血球とか白血球とかミトコンドリアとか細胞とかのことだお。それと同じようにして、ナノインサーティード・エレクトロ・デバイスというものが入ってるんだお」「先生は、これで誰か寝るかと思ったのだが……。みんな『やわざわ』 クオ「だ、だお」

(103)

クオ「略してZED。これは顕微鏡じゃないと見られないくらい小さな電子部品で、僕らの体に大体3～5兆個入ってるといわれてるお。この部品がお互いに連携しあって、僕らの中に一つのコンピューターを作り上げてるんだお」 みんな「どよどよ」 クオ（き）、緊張するお……）

(104)

クオ「ZEDも一種の機械だから、衝撃とかでたまに壊れるんだお。たとえば過去に、カミナリに撃たれて全身のZEDがショートしちゃった人がいたんだお。でも『リゲインスト』という薬を飲むことできちゃんと回復したんだお」 そういうて先生はニッコリ微笑んだ。

(105)

だからちゃんとノル口の病気もあるんだ、ということを理解し

て安心した何人かが、バタバタと眠りに落ちた。クオ（……なんだ
かこっちもホツとしたんだお）ノルコ（リゲインストってあの青
いドロッとしたやつのことかな？）ノルコは、その味を思い出し
て鳥肌をたててしまった。

（106）

クオ「そのリゲインストって薬のほかに、『インスト』っていう
薬があるんだお。これはNEDを持たない人がNEDを導入するた
めに飲む薬なんだお。でもきっとみんな、そんな薬は一度も飲んだ
ことがないと思うんだお。何故だとと思う？ それには深い歴史的
理由があるんだお」

（107）

クオ「インスト薬は、実は人間が作った薬じゃないんだお。ビッ
クリなことに機械に設計させた薬なんだお。量子コンピューターと
いう凄い計算機を使って、最も便利な通信機器とは何かという問題
を計算させた人がいたんだお。そしてそれは、どういうわけかドロ
ッとした液体だったんだお」

（108）

クオ「その液体が、体の中にコンピューターを作るものだとわか
つて、みんな困ったんだお。そして何年にもわたる物議を醸した末
に、爆発的に普及したんだお。NEDを使うかどうかは個人個人で
判断すればいいってことになつて、気づけばNED無しではやつて
けない世の中になつっていたんだお」

（109）

クオ「そして事件は起つたお。NEDはなんと遺伝するものだ
つたんだお。NEDを持つ親から生まれた子供は、みんな体内にN
EDを持っていたんだお。気づいても後の祭りだったお。半世紀も

しないうちに、人類の99%がNEDを持つようになったんだお

(110)

クオ「そしてNED化された人間社会は、政治・経済・文化、あらゆる分野において変化して、そして今の世の中が形づくられていったんだお……」そこでチャイムが鳴った。教え子はもちろん、全員の眠りの底におちていた。クオ「じゃあ今日はここまでだお。ちゃんと復讐するおつ

(111)

ノルコ（う、うう……今日も寝てしまったか） そして耳たぶクリックで授業Tを開いた。インスト薬がなんたら、というとこまでは記憶がある。ノルコ（ふむふむ……なるほど） そして驚愕の事実に打ちのめされた。ノルコ（スペクタクルだな……現実感がないわあ！） ルイ「ん、ノル？」

(112)

ルイ「寝ぼけてるのか？」 ノルコはじつと自分の手のひらを見つめ、そして見比べるようにルイの顔を見上げた。ノルコ（私達の中には私達の良く知らないものがいっぱい詰まっているんだ……） そしてルイの手をギュッと握った。ルイ「えつ……？」 ノルコ（人類恐るべし…）

(113)

今日の給食は五目おこわ。ちょっと珍しい。ノルコ（もぐもぐもぐもぐ）ノルコは赤飯とかおこわとか、ずっと噛んでたらお餅になるかなって思っちゃうタイプ。ノルコ（もぐもぐもぐもぐ）でもみんなは、ノルコが咳けないから、その代わりにやたらモグモグしてるんだと思つてしまつた。

(114)

ノルコのクラスでは5~6人で席を作り給食をとる。ノルコの島はカズノリ、レイタ、ルイ、リン、ヤマオの6人。委員長キャラのカズノリに絡みまくるレイタに女子らが冷えた突っ込みを入れるのが定番。そして少し不思議な少年のヤマオなのだが……いや少しころじゃない。

(115)

ヤマオはなんと生まれてから6回しか咳いたことがないのだ。これは世界的なレアケースだ。その内容は「おぎやあ」「うにゅる」「とでもいうかと」「右の上」「暑いと?」「それがいいと」特に4つ目の「右の上」は、学術的研究にも取り上げられたりするほどだ。何かと注目されている少年なのだ。

(116)

そんなヤマオが今、五目おこわをもぐもぐし続けるノルコをジッと見つめてるではないか! 7度目の咳きな予感が、教室中、いや世界中に吹き抜けた。ノルコ（もぐもぐもぐ）ヤマオ（ジー）ノルコ（もぐもぐもぐ）ヤマオ（ジー）ノルコ（もぐもぐ

（もぐ）しかし何もおこりなかつた。

（117）

レイタ「グアツテム！！」痺れを切らしたレイタがヤマオを羽交い絞めにした。そしてふくよかなアゴの肉をタプタプ。揉みたくなるほど豊かな福耳をビーン。カズノリ「や、やめなよレイタ君……せ、世界を敵にまわすよ！」レイタ「てめー！ 今日という今日は絶対つぶやかす！」

（118）

ヤマオに加えてノルコまで咳かないので、ノルコ達の島はやけに静かだ。人一倍つぶやくレイタも今日は空回ることが多く、ついに黙ってしまった。ルイ「リン、髪伸びてきたね」リン「うん、肩にかかるきちゃつたの」ぽつぽつと咳く一人だが……。レイタ「つまんねーの」

（119）

ルイ「レイタ！ あんたね！」ルイがバーンと立ち上がった。ルイ「誰のせいでノルが咳くなつたと思ってるんだ！ まだあんた謝つてもないでしょ？！」ノルコがあわててルイの袖を引くが。レイタ「しらねーよ！ こいつが勝手に俺の真似してコケたんだろ！？」

（120）

ルイ「真似じゃない、うつたんだ！ 周りのやつに引っ張られてそうなっちゃうことあるって、ウイキにも書いてあるんだからな！」この年頃の男子が口げんかで女子に勝つのは難しい。レイタ「……んだよ、咳けないからってなんだよ！」そつ言つて走つて出て行つてしまつた。

(121)

ルイ「食器片付けやがれバーカ！」ノルコはまじからかと言えば困っていた。ルイの肩を抑えつつ首をぶんぶん振る。そして気づけばクラスのみんなに対し頭を下げていた。ルイ「なんで謝ってんのさー もつ……」その気持ちをどう説明すればよいかわからないノルコ。出来たとしても呴けないのだ。

(122)

ひとまずノルコは座った。ルイ「ごめん、ついカッとなつて」ルイは悪くない。そしてみんなが言つほどレイタも悪くない。跳び箱の件では、実はノルコにも非があった。レイタを見返したい気持ちが少しあつたのだ。ノルコ（ひづり）すっかり冷えこんでしまった教室の空気、どうしよう。

(123)

ヤマオ「おこわうまい」ノルコ（ー？）ルイ「え！ なに？」
！「クラス中「シャベツタアアアアアアアア！」全世界「ギャア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」
ヤマオが……しゃべつた！ こんな時に！ 七番目の呴きはなんと、
「おこわうまい」だつた！

(124)

ヤマオの機転（？）によつて給食時間のピンチを乗り切つたノルコは、午後の授業をつつがなく済ませて家路へとついた。あの後クラスの話題は、ヤマオの7度目のツイートで持ちきりで、海外の研究者からも詳しい状況を知りたいという問い合わせが殺到するほどだつた。

(125)

たぶん今も教室で、ヤマオのツイートに関するリプライが飛び交

つていて。ノルコもそれに加わりたかったのだが、なにぶん咳けない身だ。ノルコ（つぶやけないって、つまんない！） そうノルコがため息をついたその時。 謎の男「フフフ……ビバー・チエ」 ノルコはゾッとした。

(126)

目の下に濃いクマのある怪しげな青年がそこに立っていた。ウネウネした黒髪で顔が半分隠れている。そして襟の高い黒のコートで全身を包んでいる。ノルコ（この人、昨日ワクを追いかけた人だ！）特徴が一致していたのですぐにわかつた。 謎の男「ふふふ、そんなんに警戒しないでくれよ」

(127)

謎の男「ああ、君はまるで声を失った小鳥のようだね」 ノルコ（知ってるの？！） 謎の男「僕は何でも知っている。そう僕は知りすぎた男なのさビバーチエ！」 男はまるでノルコの心を読んだようにそう呟き……いや。 ノルコ（この人、つぶやいてない！）なんと彼の言葉は丁しに映らない！

(128)

バイオツイッターが普及した現在、人は言葉を口にすればそれがそのままツイートになる。逆にツイート能力を失えば言葉を口に出されなくなる。今のノルコがその状態だ。しかしこの青年はツイートすることなく言葉を口にしている。それはつまり。ノルコ（生まれつきツイッターを持つていない人？！）

(129)

謎の青年「ふふ、それはちょっと違う」 青年は指をチッチとやり、おもむろに髪をかき上げた。ノルコ（！？） なんと青年には耳が無かった。あれでは耳たぶクリックが出来ない。 謎の青年「

僕はね、昔とある事情でツイートを失ったんだ 事情はわかつた
が……しかし。ノル口（私に何の用？）

（130）

謎の青年「何の用事があるのかと君は思つてゐるね？」ノル口
（だから何？）通報してしまおうと、ノル口が耳タブに手をあて
ると。謎の青年「君は僕を通報しない。その代わり僕についてくる
ノル口（なにゆえ？）謎の青年「僕が君の病気の治し方を知つ
ているからさ！」

(131)

ノルコは知らない男について行くほどお尻は軽くない。ふんつとそっぽを向いてその場を後にした。ノルコ（しかし、何か気になる）特にあの失われた両耳が。そして何もかもを見通したような、あの言動が。振り返えつてみると、男はちょうど曲がり角に消えていくところだった。

(132)

ノルコ（ちょっとだけ……）ノルコはいったん道を引き返し、近くのマンションの植え込みに隠れて、あの青年の動向をうかがつた。謎の男「トゥールットゥ～、ルーララ～ やあ！」男はクルクル周りながら通りを歩き抜け、時々通行人に唐突な挨拶をして驚かせていた。ノルコ（変な人！）

(133)

ノルコ（ただの変わった人なのかな？ 本当に悪い人ならとっくに捕まってるだろうし）バイオツイッターによる監視網が徹底された今は、歩きタバコ犯でさえ一瞬で捕まってしまう世の中だ。ノルコは男が角を曲がったのを見計らうと、小走りでその後を追いかけた。ノルコ（どこに行くんだろ？）

(134)

男は太い通りから、徐々に入り組んだ住宅地へと進んで行つた。ツイナビがあるので迷子になることはないが、追跡がだんだん難しくなっていく。ノルコは男の後ろ10mくらいを歩き、一戸建ての塀や植え込みに隠れながら尾行をつづけた。しかしどうとう見失つ

てしまった。

(135)

ノルコ（あれれ？）あむけひキヨロキヨロしてみるも、ドリードリード
も居ない。そしてハッと氣づく。君は僕について来る、という青年
の言葉通りのことをしてしまった。ノルコ（口惜しいわ……）
そして諦めて引き返そうとしたとき。「ビバーーチュ」ノルコは飛
び上がった。

(136)

謎の男「ほりやつぱりこへ來た！ 僕んちすぐそこだよ、力
モーン！」そうこつて青年はノルコを抱き上げた。ノルコ（－
！つーーー）謎の男「ハハハー！」男はそのまま100mほど
ダッシュ。その先にあつたのはなんと……ツイッター協会の施設だ
った。謎の男「ただいまー！」

(137)

教会ではなく協会だ。十字架とが立つてそな場所に鳥の姿を
したモニメントが飾つてある。ツイート鳥。ノルコ（あわわ……）
男は建物の中に入るとロビーのソファーにノルコを下ろした。謎
の男「君はここにさうと待つ。おばさんが紅茶を運んでくる」

(138)

男はの奥へと消えていった。どうやら何人かの人気がここで共同生
活をしているようだ。ノルコがどうしたものかと思案していると、
お茶のポットを持ったおばさんが、たまたま通りがかつた。おば
さん「あら？」ノルコがあわてて立ち去つたとする。おばさん
「お待ちなさいー！」

(139)

おばさん「そこに座つて。お茶でも飲んでいきなさい！何か事情があつて来たんでしょう？」ノル口（困ったなあ……）話そうにも呴けないし、来たのではなくて連れてこられたのだ。おばさん「まあ、もしかして呴けない？ 何かあつたのね……。ともかくいつたん落ち着きましょうね」

(140)

おばさんは茶器とスコーンを持ってきてノル口にふるまつた。お茶はハーブティーのようだ。本当は別の所に持つていくるのだったのだろう。ノル口はまるで自分が、迷える子羊になってしまったような気がして、ぶるぶると恐縮してしまつた。おばさん「遠慮しないでいいのよ、どうぞ召上つて」

(141)

ノル口はそう言われてお茶を一口。ノル口（おいしい！）おばさん「ここはツイッター協会。世間では『ツイートピア』なんて呼ばれているわね。ツイート社会になじめない人や、問題を抱えた人達の相談にのつたり、保護をしたりしているの。あなた小学生？」ノル口はコクコクとうなずく。

(142)

おばさん「下校してすぐここに来たのね。何か帰れない事情があるのかしら？ ときどき家出して行き場がない子がたずねてくることもあるのよ、ここは」ノル口はぶんぶんと首を振つた。そして建物の奥の通路を眺めた。あの男の人はどうに行つてしまつたんだろ？

(143)

おばさん「無理して呴かなくてもいいのよ。落ち着いたら少しすつ教えてくれればね」その時、あの男が戻ってきた。黒コートを

脱いで、白のカッターシャツ姿になっていた。謎の男「おばさん！ その子咳けない病気なんだよ！ 僕が思つた通りついてきたから、そのまま連れてきちゃつた！」

(144)

おばさん「またお前が連れてきたのかい？ これで何人目か…まあ仕方ないわね」 ノル口（また？） 謎の男「それよりおばさん！ またコウタがふさぎ込んでじやつてるよ」 おばさん「そうだよ、いま厨のおやつにしようと思つてたんだけど」 謎の男「よしじゃあみんなでお茶しよう！」

(145)

謎の男「やあやあ… ジハナハナ…」 男はノル口の手を引っつかむとグイグイ引つ張つていぐ。謎の男「おばさん、お茶とお菓子もつてきてね！」 おばさん「ちょ、ちょっとお前！ お待ちなさい！」 男は通路の奥の部屋を開けて中に飛び込んだ。謎の男「友達を連れてきたよ…」

(146)

部屋の中にはワクと回じくらこの歳の少年がいた。床の上に座りこんで、うつむいている。視線の先には2体のBOTが置いてあった。猫型BOTと大型BOTだ。一人が入ってきても少年は微動だにしない。遅れておばさんが来た。おばさん「やれやれ、まつたくこの子は……」

(147)

おばさん「「めんねお嬢ちゃん、この人にこの職員なんだけど、ちょっと変わったところがあつてね……」 男は少年の側にしゃがみ込んで話しかけた。謎の男「ああ、BOTばかりみてないで、僕らとお話しするんだ！」 少年は静かに首をふり、そしてつぶやく

く。コウタ「リッちゃんが咳かない……」

(148)

ノルコ（リッちゃん？） 犬型BOT「イタイノ？ クルシイノ
？ ダイジョウブダヨ……」 猫型BOT「……」 犬型BOT「
ヨシヨシ、ココガイタイノ？ ヨシヨシ」 猫型BOT「……」
リッちゃんとは猫のBOTのことなのだろうか？ ノルコはなぜだ
か胸が苦しくなってきた。

(149)

ノルコはおばさんの顔を見た。おばさん「まあ、色々とねえ……」
どうやら複雑な事情があるようだ。おばさん「それよりホウ、
このお嬢ちゃんことを教えて欲しいのだけど」 ホウとは謎の青年
の名前であるらしい。ノルコも早く帰りたいのでそうして欲しか
つた。だが。ホウ「待つて」

(150)

大型BOT「オトモダチ、キタノ？ シャベルノ？」 猫型BO
T「……」 犬型BOT「……」 猫型BOT「……」 犬型BO
T「……」 猫型BOT「……」 ヨー君「コウタ「……リッ
ちゃん！」 猫型BOTが咳いた。そして大型BOTの名前はヨー
君。つまりコウタの分身なのだ。

(151)

猫型BOT「ユー君」 犬型BOT「リッチャン、ヨシヨシ」
猫型BOT「ユー君」 犬型BOT「モウイタクナイノ？」 ヨシヨ
シ」 猫型BOT「ユー君、ユー君、ユー君」 突如、少年の瞳に
涙があふれた。コウタ「うう、うわあ、うわあああああああ
ああ……」

(152)

「コウタ「ああああああ！」」 ホウ「コウタ君！」 ホウは咄嗟にコウタを抱きしめた。そして一緒に泣き始めた。ノルコとおばさんは、わけも分からず立ち向かうのみだった。やがて。ホウ「ちょっと待ってるんだ！ すぐ楽にするよ！」 そういうつてホウは部屋を飛び出していった。

(153)

ホウはすぐに戻ってきた。なにやら田舎のタブレット端末を持ってきて、コウタの前にかざした。おばさん「あんたそれは！」 ホウ「今こそこれを見せる時なんだ！」 見せるつていつたい何を？ ノルコはだんだん怖くなってきて、足がすくんできた。少年の慟哭がただ事じゃなかつたから。

(154)

ホウ「ノルコ。君はいま僕に説明を求めている」 ノルコ（だから何なの！？） ホウはタブレット端末の電源を入れた。そこに表示されているのはT-Lのようだ。しかしT-Lは、見たことも無いほどの超高速で流れていた。ホウ「これは、グローバルタイムライン、G-T-Lだ」 G-T-L？

(155)

ホウ「この世の全てのツイートが流れるタイムラインだよ！」 名前は聞いたことがあつたが、見るのは初めてだつた。そして少年は泣き続けていた。ホウ「さらにこれがパーソナルタイムライン、P-T-Lだ」 そういうつてスイッチを押す。すると今度は、訳のわからぬ暗号の激流が表示された。

(156)

P-T-L？ そんなものは聞いたことがない。 ホウ「P-T-Lは、

その存在が公に知られていない。個人情報を多分に含むもの、とうより個人そのものだから」 ホウはノルコの顔をキッと見つめて言つた。ホウ「そしてさらにその上位T-Lが存在する。それが…… グロスオブP-T-Lだ！」

(157)

グロスオブP-T-L、何だそれは？ ノルコはもうわけがわからない。そしてふと気づいた。ユウタが泣き止んでいるのだ。そしておそらくユウタ自身のP-T-Lが表示されてるのであらうディスプレイを、ボーッと覗き込んでいたのだつた。ホウ「グロスオブP-T-L。それはつまり、神のT-L……」

(158)

ホウ「神のT-Lは全ての苦しみを癒す。全ての孤独をあがなう。そして、この世の全てを見るものに教える！」 そう言ってホウはスイッチに指をかけた。おばさん「けれどホウ！ それを見せたらその子もお前みたく……！」 ホウ「だけど今この子に必要なのはこれなんだ！ ノルコ、君も見るかい？」

(159)

ノルコは直感的に理解した。このグロスオブP-T-Lこそが、ホウがノルコの病気を治せると言つた理由なのだろうと。ノルコはディスプレイを見つめた。呪文のように暗号化されたT-Lだ。ホウがスイッチを押せば、そこに全世界の人間の意志が、暗号化されて表示されるのだ。

(160)

ノルコは咄嗟に両手を手で押さえた。見ない、絶対に見てはいけない。咳けない病は早く治したいけど見ちゃいけない。戻れなくなる。そんな気がする。ホウ「フフフ…… そうだね、それで良いん

だ、君は」ピッヒとスイッチが押される音がした。数秒してもう一度ピッヒと音が鳴った。

(161)

ホウ「もう目を開けて大丈夫だよ。お茶にしよう!」ノルコが恐る恐る目を開けると、少年ユウタの表情が見違えるほどに明るくなっていた。ユウタ「リツちゃん……いつでも一緒になんだね……もう痛くないんだね!」その代わりにおばさんが、顔を抑えてシクシクと泣いていた。

(162)

ユウタは驚くほど元気になり、お腹がすいたと言つてお菓子をねだつてきた。4人はロビーに戻つてスコーンを食べ、紅茶を飲みながらお話をした。ノルコは聞いているだけだったけど、ユウタが幼馴染みのリツちゃんの事をあまりに楽しそうに話すので、ついつい顔がほころんでしまつた。

(163)

ノルコの事情を理解したおばさんは「あやつく人さらいじゃないか!」と、ホウを叱責した。ホウは「すべてはGPT-Lの思し召しさ」といつてとぼけた。どうやつてホウがGPT-Lを発見したのか?そしてユウタの幼馴染みに何があつたのか?ノルコは聞かないでおくことにした。早く帰らねば。

(164)

ユウタ「また遊びに来てね、お姉ちゃん!」ノルコは3人に手を振りその場を後にして、そして家に向かいつつ色々と反省する。今日起きたことをお父さんが知つたらきっと酷く怒られる。お父さんは普段はアレだけど、怒ると本当に怖いのだ。ノルコは想像してブルブル震えた。

(165)

道路を横断するため歩道橋を渡るノルコ。弦音市の光景が目の前
いっぱいに広がる。手を繋いで買物に行く親子。道路を行き交う自
動車の流れ。マンションの影からちょこんと覗く、あの協会のツイ
ート鳥。いつもと同じ景色のはずなのに、いつもと違う景色に見え
る。ふとノルコはやう思つ。

(166)

不意に、ノルコの瞳に一筋の零が伝った。ビックリして思わず袖
で拭う。ノルコ（今日の私、なんだか変……）帰ろう。ノルコは
強くそう思う。暖かいご飯と優しい家族が待ってる自分の家へ。ノ
ルコはキッと前を見て、静かな微笑みに満ちる街角を、一日散に駆
けていった。

ツイートニア（番外編）（前書き）

震災に向けて。

ツイートペア（番外編）

(1-i) 話は3年前に飛ぶ。21世紀も終わろうとしていたある日、東京湾の沖合い200kmの地点でマグニチュード8の地震が起きた。太平洋岸に位置するノルコが住む亥音市は、激しい横揺れの後に大津波に襲われたのだ。

(2-i) ノルコが学校から帰宅した直後だつた。ノルコは母のヨコと、当時まだ保育所に通つっていたワクと身をよせあつて地震に耐えた。直後にアフレルからツイートが来た。アフレル「大丈夫か！」 そうして安否確認を済ませると、ノルコ達は歩いて避難場所の学校に向かつた。

(3-i) 父アフレルの職場は太平洋岸に位置する研究所だつた。鉄筋コンクリート造の研究所は、津波が来た際の避難場所に指定された。アフレル達職員は屋上に上がり、一切のツイートを伏せて退避困難者の声を探つた。

(4-i)

研究所から500mほどの個人住宅に住むお年寄りが、徒歩で避難していることがわかつた。津波到達まであと15分という速報が緊急ツイートされていた。間に合わないかもしない。警察も消防も間に合いそうに無い。アフレル達は直ちに救出作戦を立てた。

(5-i)

大至急、車を回すようオートカーコントロールに申請してみるも、パニック状態だった。そこで自衛隊の予備役だった研究員の一人が、自ら車を運転して現場に向かうことになった。その間アフレル達は、津波の状況を調べて知らせるために全力を挙げることになった。

(6-i)

沖合いに出ていた漁船は、全て波に対して船を立てていたが、漁港付近にいた1隻が波を乗り越えられず転覆した。数名が波に飲まれて見えなくなつた。連絡を受けていたレスキュー隊がスクランブル出動し、ヘリコプターによる決死の救助を開始した。

(7-i)

出発した研究員がお年寄りの元にたどり着き、連れて戻つてきてまもなく、津波の第一波が到来した。研究所1階のガラスを突き破り、2階の上まで水が押し寄せた。高さ4mの大津波だつた。アフレル達は身を寄せ合い、海へと去つて行く引き潮をい眺めながら、いま生きていることに感謝したのだつた。

(8-i)

津波が完全に引くころには、全ての人の安否状況が確認された。犠牲者が波に飲まれる際のラストツイートは丁寧にフィルタリングされたが、間に合わず見てしまつた人が数人いて、後にカウンセリングを受けることになつた。ノルコ達は避難場所の体育館からアフレルと連絡を取り、互いの無事に安堵した。

(9-i)

体内ツイッターの普及により、自然災害による被害は最小限に抑えることが可能になつた。しかし、今なお救いきれない命は存在する。時代がどんなに豊かになつても、技術がどんなに進展しても、人々の生きるために戦いは終わらないのだろう。

(10-i)

翌日の昼には亥音市は平常通りの活動にもどつた。ノルコのクラスでは地震に関する臨時講習が開かれ、そこでノルコは父の職場の人達が、逃げ遅れたお年寄りを救つたことを知つた。ワクはその日一日、父親自慢ツイートをして不謹慎だと母のヨコに怒られたりした。

(11-i)

その夜ノルコは犠牲になつた人のために何が出来るのかを考えた。でも答えなどあるわけがなかつた。そんなノルコに父はいつた。「祈るしかない」と。祈ることで何が救えるのか、今はまだわからぬい。でもノルコは祈ることにした。大きな明るい月の夜空に向けて。未来のために。

(167) ノルコは家につくと、静かにドアを開けてソーッと中に入った。いま父に見つかったらきっと、「殺すぞ!」と言われてしまう。ソーッと、あくまでもソーッと。アフレル「おかえり、ノルコ」居間からノッソリと父が現れた。ノルコはゾーっとした。

(168) アフレル「遅かったね」そう言つて父はノルコの肩を掴んだ。以前、ノルコが黙つて門限をやぶつた時、父アフレルはこう言つたのだ。アフレル「誰かにノルコを殺されるくらいなら、いま父さんが殺してやるぞ!」と。どんなに心配したんだろう。

(169) 帰宅が遅れた言い訳をしようにも、ノルコはつぶやけないのだった。小刻みに顔を振つてオロオロしていると、父は出し抜けにこう言つた。アフレル「ヤマオ君がしゃべったんだってね!」ノルコは一転して顔を縦にウンウン振つた。ヤマオ君は本当に偉大だ。

(170) どうやらヤマオ君が七度目のツイートをしたことは、父アフレルが仕事探しを中断してしまうくらいの衝撃をもつていたらしい。ノルコの帰宅が遅れた理由もそれだと、すっかりアフレルは信じ込んでいて、変な人について行つたとは微塵も思つてないようだ。

(171) 部屋に入つてすぐヤマオ君のTシャツを開く。相当なりプライドがヤマ

才君宛てにあつたはずだが、それでもツイート数は七つのままだつた。『おこわうまい』ヤマオ君はこのツイートでノルコを助けてようとしてくれたのか？ノルコはヤマオ君に聞いてみたかつたけど、残念ながら咳けないのだった。

(172)

そのころ、耳のない青年ホウ（本名キナシ・ホウジ）は協会の詰め所でタブレット端末をいじっていた。調子が悪いようだ。ホウ「画質がとってもバルラッチヨ」おばさん「そりや何年前の代物だね」9・5インチの薄型。ぞつと半世紀前の代物だ。

(173)

ホウはバイオツイッターを持つていない。そのため、こうして旧式のタブレット端末に、オリジナルの電子回路を組み込むという無茶な手法でもつてバイオツイッターをエミュレートしているのだ。今日やつと協会のコネで量子オーバードライブ回路を手に入れて組み込んだところだ。ホウ「ビバーーチェ！」

ツイートピア（174）

ホウは設定を終えると、GPT_{グロス・オブ・パーソナル・タイム・ライン}を表示させた。

全世界の人間の心の声が、おびただしい速度で流れしていく。その様子はまるでナイアガラの激流のようだが、それでも前よりスクロールが滑らかになつた感じがする。

(175)

ホウ「クルミナーレ！」イタリア語で絶頂を意味する言葉を発したのち、ホウは癲癇の発作を起こして気絶した。おばさん「もう、いわんこっちゃない」おばさんは慣れた様子で、ホウの足を引っ張つて部屋まで運んで布団をかけた。ホウはその布団の中で、ヌクヌクと眠りについた。

(176)

おばさん「まあ頑張りなよ、私達の英雄さん」 そう言っておばさんは、耳のないホウの頭を撫でて退室する。ホウはムーヤムーヤ言いながら、まるで子供のような寝顔で眠っている。そして事実、彼はいま子供の頃の夢を見ていたのだった。

(177)

ホウは捨て子だった。ホウを育てあぐねた両親は彼にツイッター削除の薬アンインストを打ち、万が一にも耳たぶクリックが作動しないようにと耳まで切り落とし、そして道端に捨てたのだった。彼は運良く協会に拾われたが、ツイッター能力は戻らなかつた。

(178)

子供の頃のホウは、ツイッターを失つていたためか、まったく他人と交流しなかつた。ありとあらゆるコミュニケーションを拒絶し、部屋にこもつて本を読むばかりだつた。そしてある日、思いついたように古典電子技術の勉強を始めたのだ。

(179)

おばさん（当時はお姉さんだった）をはじめ、協会の人たちはホウの変わりように困惑した。彼は彼が学ぶために必要なあらゆるツールを要求してきた。そしてやがてその意図がわかつた。彼は彼らの手段でツイッターを取り戻そうとしていたのだ。

(180)

彼が古典的な電子機器によるツイートを取り戻したのは11歳の時だった。バイオツイッターのネットワークと、昔ながらのワールドワイドウェブの間に接続を確立することは、専門家でも難しいことだ。しかし彼は自力でそれを成し遂げたのだった。そして彼はさ

らに独自の研究を続ける。

(181)

一人一人の人間をノードとして自然生成されているバイオツイッターネットワークだが、ホウはその中で「コアとなる領域を見つけた。すべてのツイートが必ずその場所を通るというポイントだ。彼はその場所を「セントラル」と名づけ、そこに接続するためのプロトコルを作った。

(182)

その過程でホウはパーソナルタイムラインを発見し、そしてまた神の「TL」とでも言うべきGPT-Lを発見した。そして、そのストリームを眼にした瞬間、彼の世界の全てが変わった。光が弾け飛び、鐘の音が鳴り響き、限りない幸福感と万能感に包まれたのだ。

(183)

ビバー・チエ　イタリア語で「快活」を意味するその言葉が、ホウの口癖になつたのはそれからのことだ。その後ホウは、自分で開発したGPT-Lディスプレイを使って、心に傷を持った多くの人を救つてきた。あたかも奇跡のように。それが彼が「英雄さん」と呼ばれる所以だ。

(184)

ホウ「ううん……」　ホウは30分ほどで眼を覚ました。起き上がりつて軽く腕を回す。首をひねる。立ち上がって屈伸運動をする。ホウ「オウイエイ」　どうやら調子が良いようだ。そして彼は、本来彼が知るはずもないその言葉を、最大限の確信をもつて「おうさんだのだった。ホウ「おこわうまい」と。

(185)

ノルコはカレーライスをぐちやぐちやにする人とだけは結婚したくない主義。ワク「チエーンジ!」ワクはもう2杯目のおかわり。そして父アフレルは落ち着かない様子でキヨロキヨロ。ヨコ「どうしたのあなた?」アフレル「いやーその」ワク「チエーンジ!」アフレル「食つのは早いなあワク」

(186)

アフレル「えーとだ、父さん思つたより早く暇になつちやつて、明日あたりどつか遊び行こうかなつて」そしてノルコをチラと見る。まだノルコのツイートは治つていないので。アフレル「どこか行きたいところある?..」するとノルコはすかさず手をあげた!ノルコ「まあ...」そしておろした。

(187)

アフレル「ノルコ?」ノルコは「へへ」と頭を叩くと、メモ用紙をとりだした。そこに「ペンで」東京のあうち」と書いた。アフレル「東京?」ヨコ「あんな田舎に?」ワク「チエーンジ!」そこでノルコはテーブルの上に手をおき、カタカタと何かを打つしぐさをする。アフレル「あつ、そうか!」

(188)

ヨコ「ええ? なあに?」アフレル「ノルコは頭がいいな、その手があつたな」と言つてノルコに向かつてグツ!ノルコもグツ!ヨコ「??」アフレル「いけばわかるさ。ということで明日は東京の爺さん婆さんに会いに行くぞ!」ワク「チエーンジ!

「げふつ」 ヨコ「ワク、食べすぎよー。」

(189)

翌日、一家はアフレルの実家がある東京に向かった。東京は喧音市から車で1時間ほどの場所にある大田舎だ。かつて日本経済の中核だった街は、超高層だんだん畑と首都高速道水田、大地下トンネル促成栽培場からなる食料基地になっている。ヨコ「いつ見てもすごい街」 誰がこうなることを想像しただろ？。

(190)

アフレルの両親、ノル口にとつては祖父母にあたるイズミ・クメゾウとウメナ 名前から察する通りあまり仲はよくないのだがは、トヨスの造成地に住んでいて、かぼちゃとかとうもろこしかを作っている。ときどきモンゼンナカに繰り出してオールしたりする、ハイカラな人達だ。

(191)

青々と風になびく稻草の海を抜けて車は走る。巨大なドーム型集光屋根をくぐり、色とりどりの果実がゆれる高層だんだん畑を見送る。やがて潮の香がかすかに漂つ、見晴らしの良い畑作地にたどり着く。見渡す限りの畑のなかに民家が点々と建つそのなかに、アフレルの実家はあるのだ。

(192)

クメゾウ「おーい、うおーい！」 遠くで手を振っているのはクメゾウ爺さんだ。農作業の途中で抜け出してきたらしい。迷彩柄のニッカポッカに麦藁帽子、トレーデマークのサングラス。アロハシャツから伸びるじつじつした腕も、シワのよつた顔も、真っ黒に日焼けしている。クメゾウ「よおーきたのー！」

(193)

ノルコとワクは車を飛び降りると、まっしづらにクメゾウおじいちゃんの元に駆けていった。クメゾウ「いよう！ チビっこども！」ワク「イエア！ グランパ！」といつて飛びつくワクを、クメゾウ爺は軽々と持ち上げた。力仕事でこぶ立った手、その膂力は老いてますます盛んなのだった。

(194)

クメゾウお爺さんはノルコ達の知らない遊びをたくさん知っている。まるで歩く玩具箱のような人なので、ノルコもワクもおじいちゃんが大好きだ。本当はノルコも「ヘイ！ ジーじ！」と言って飛び込みたかったのだが、つぶやけないことの気後れが少しあつたりした。

(195)

クメゾウ「んん？ なんじゃノルコ？ サッさと来んかい！」

そういうてホレホレとワクを担いでない方の腕を差し出す。ノルコは“うん！”とうなずくと、その腕に飛びついだ。おじいちゃんはノルコの体を持ちあげて、あつという間に肩の上に担いでしまった。

(196)

アフレル「父さんただいま」近くの空き地に車をとめたアフレルがやつてきた。クメゾウ「おー、よく来たな！ 仕事は見つかつたか？」アフレル「いや、それがまだ」クメゾウ「なんだ、まだ二ートなのか！」アフレル「に、二ート？」それはいつたいいつの言葉だらうと、アフレルは首をかしげた。

(197)

クメゾウ「はっはっは、まあ今では遠い昔の言葉だがな！」ヨーハ「うふふ、昔の方は何かと大変だったんですねー」クメゾウ

「うんむ、そうなじやぞー。ワク、ノル！」母さんは相変わらずべッピンさんだのー、うちのヒキニートにはまつたいないわ！」アフレル「ひ、ひどおー！」

(198)

三口「うふふ、私の田那はヒキニート。うふふふ。ところで、お義母さんはお畠に？」 クメゾウ「ああ、かぼちゃ畠の雑草抜いとるわい、いつて手伝つてやつてくれるかのー。さあチビども！ 今日はなにして遊ぶかな！ H a H a H a !」 そういう二一人を担いだまま家中に入つてしまつた。

(199)

三口が家の裏のカボチャ畠にいくと、ウメナがせつせと除草をしていた。紫色のレギンスにシルクの長袖シャツ。ひさしの長いピンク色のバイザーをかぶり、首の日焼けを防ぐためのスカーフがなんともお洒落。そのシャンとした姿を見るたびに三口は「あんな歳のとり方をしたいもだわ」と思うのだ。

(200)

三口「お義母さん、来ました」 ウメナ「よお嫁。じこさんはどこに行つたい？」 三口はさりげなく手袋をはめつつ。三口「お家へ」 ウメナ「あんのくせじじい！ 野良仕事を嫁にまかせて孫と遊んどるんかい、ドタワケ！」 と言いつつカマを手に取り立ち上がる。三口「こつものことですね！」

(201)

ウメナ「いつかキンタマ刈り取つてやるわー」 と言いつつカマをぶんぶん振るウメナさん。ウメナ「とにかく用意はしててるんだね？」 三口「はいもちろん」 手袋の上に腕抜きをはめている三口の装いは、もつぱつちり農作業仕様になつていた。ウメナ「ふ

んつ、イビリがいがないね！」

(202)

太陽の下、草をむしりて汗流す。薬剤は使わないポリシーだ。大変だが、一つ一つこだわりのこもった野菜に育つ。田口「実も大きくなつて」ウメナ「そろそろ収穫できるね」田口「毎年楽しみなんですよ、お義母さんのカボチャ」ウメナ「世辞はいいから手を動かし」口は悪いが本音では喜んでいたり。

(203)

ウメナ「ノルコの調子はどうなんだい？」田口「まだ治る気配は……。お医者さまが言つには有機パラメトリの再結合がなんたら……」ウメナ「細かいことはログを読んだからいいよ、友達とあまりつてないとが無いんだね？」田口「それはありがたいことに、みんな良い子たちで」ウメナ「うむ」

(204)

ウメナ「あの歳の頃が咳けないなんてのは、しんどいだろうねえ」田口「ええ、時々無理やり咳こうとしたり。こっちも何とか察して代弁してあげるんですけど……」ウメナ「ノルコはもつと歯がゆい思いをしてるはずさ」田口「ええ」ウメナ「早く治るといいんだけどねえ」

(205)

田口「そういえば、ノルコが何かを思いついたみたいで」ウメナ「ん？」田口「咳けなくても咳ける方法とか。でも教えてくれないんですよ、アフレルさんは気づいたらしくですけど」ウメナ「咳けなくても咳ける？ なんだいそれは？」禪問答のようなその問いかに、一人はそろつて首をかしげた。

(206)

クメゾウ「ゲンじいさんのパソコンなら仏間に押入れじゃ」ノルコはアフレルとともに仏間にいた。アフレル「まずは仏様を拝もう」そして仏壇のろうそくを点け、遺影をとりだす。先祖代々の写真の中からアフレルは、二つを選んで仏壇に立てた。アフレル「お爺さんお婆さん、遊びにきたよー」

(207)

羽織袴のいかめつらしい表情をした人はアフレルの祖父で、ノルコにどうては曾祖父にあたる「イズミ・ゲン」お爺さんだ。そしてその隣、白いワンピースに麦藁帽子の若い女人は「イズミ・ミチコ」ノルコの曾祖母にあたるが、若くして亡くなつたためアフレルも会つたことが無いのだといつ。

(208)

チーンと仏鈴をならし、二人は手を合わせた。アフレル「よしじゃあ探そうか」仏間の押入れを開けると、いつの昔のものかわからぬ電気機器がホコリをかぶつた状態で詰まっていた。このキラキラした丸いのはDVDと言つらじ。ノルコ「? ?」アフレル「それはノルコにはまだ早いな」

(209)

ややしばらくして、押入れの奥から一台のノートパソコンが出てきた。二人ともホコリまみれ。クメゾウ「だがパスワードがかかっているぞい。ほれ王手!」どうやらワクと将棋をして遊んでるらしい。ワク「サンドゥイッチ! リバース!」クメゾウ「うお?」

！ それはオセロじやー！」

(210)

誰も知らないゲン爺さんのパスワード。でもノルコは覚えていたのだ。4つか5つのころ、ノルコはお爺ちゃんの膝の上で、PCを起動させるところを見ていたのだ。ノルコはゲンお爺さんにこう聞いた。ノルコ「これなんてよむのー？」 ゲン爺さんは言った。ゲン「ツイート、ワイズ、プレイビー」

(211)

ノルコ「ぶれびー？」 幼い頃のノルコに、その意味がわかるはずがなかつた。しかし今ならわかる。そしてノルコ自身の名前と生年月日、それがゲン爺さんのPCを開くパスワードだ。「twee
t-with-bravery-505noruko」ノルコはたどたどしい手つきで入力し、そしてリターンキーを叩いた。「ウエルカムWINDOWS」

(212)

ウインドウズXYZが起動され、背景画面に3人の赤ちゃんが写し出された。ゲンお爺さんの3人の孫の写真だ。つまりそのうちの一人はアフレルということになる。とぼけた口元が特徴的だ。ノルコ（お父さんかわいい！） お父さんに言つたらどんな顔するかな？ ふとノルコはそう思つたり。

(213)

アフレル「この赤ん坊はいつたい誰なんだろ？ね？」 とかやつぱつとぼけつつ。アフレル「ノルコのお皿当てはこれだろ？」 そういう言つてさざ波のような形をしたアイコンを指差す。ノルコ（ツイーブ……これだ！） そしてアイコンをダブルクリック、ついクセで耳たぶクリックしそうになる。

(214)

ツイーブ∨e‐r12‐4 これは当時最先端のツイッター用ブラウザだ。フォロワー同士のネットワークを図式化したり、自分のツイートがどう波及していったかを解析する機能があり、かつ直感的に使いやすい構成。バイオツイッターの普及によりその役目を終えたが、今でもご高齢の方が使用していたりする。

(215)

ツイープの最終ヴァージョンである1‐2‐4は、バイオツイッターとの接続もサポートしている。よってこのブラウザを使えば、咳けない病気にかかったノルコでもツイートが出来るのである。しかし、その設定方法は古の彼方に忘却されてしまい、知る者は少ない。

(216)

ひとまずノルコは適当に何かツイートしてみることにした。ゲン「あーあー」当然だが、ゲンお爺さんの名前で咳かれてしまう。ノルコ（ルイちゃんに手伝つてもらおう）そしてアフレルの助言も得ながら、何とかしてルイのプロフィールを検索し、そしてフォローした。

(217)

ノルコはルイに何か話しかけようと、たどたどしくキーボードを手にかける。アフレル「じー」アフレルが覗き込んでいる。ノルコ（うーん）書いている途中の文章を見られるのって何だか恥ずかしい。アフレル「ん?」どうやら気づいたようだ。アフレル「お父さん烟を手伝つてくれるよー!」

(218)

空氣を読める父をもつたノルコは幸せ者だ、そう思いつつ文章作

成にとりかかる。ゲン「ルイちゃん。わたしノルコ」しかし反応がない。ルイのステータスは読書中になっている。たぶん自室でマンガを読んでいる。しばらくして。ルイ「ビ、ビ、どうぞまでで？」 明らかに困惑している。

(219)

ノルコが状況を説明しようと文章をつづっていると今度は。カイザワ「ふ、ふおおお……」ヨシシゲ「ビ、ゲンじいさんが……」ギンジ「黄泉帰りよつたあああああ！」なんだか大変なことになってきたぞ。ノルコはだんだん焦ってきて、おでこに冷や汗までにじんできた。

(220)

ゲン「えと、私ゲンおじいさんお口かりてます！」必死に事情を説明するも埒が明かない、お父さんを呼ぼうと思つたその時。ルイ「ノルコなの？ お爺ちゃんの口からツイートしてるの？！」ノルコはそのリプライをすぐさまツイートした。ありがとうルイちゃん。

(221)

ノルコ「ゲンおじいさんお口かりてます！」必死に事情を説明するも埒が明かない、お父さんを呼ぼうと思つたその時。ルイ「ノルコなの？ お爺ちゃんの口からツイートしてるの？！」ノルコはそのリプライをすぐさまツイートした。ありがとうルイちゃん。

(222)

カイザワ「おおー、そうこうとかー」ヨシシゲ「ゲンさんのお孫さんとなー！」ギンジ「どうどうゲンさんがお迎えにきたのかと思つたわwww」ノルコはホッと胸をなでおろす。ルイ「いき

なり95歳のお爺ちゃんから咳かれて何事がと思つたよー。」

(223)

ゲン「めん」「めん ウ」 ルイ「いや、別にいいんだけどね。とにかく咳けるようになつたわけだ」 ゲン「でもまんどいの、キー打つの、へんかんも」 ルイ「え?」 カイザワ「キーボードなんぞよく打つの一、わしらでもよつ使わん昔の機械なのに」 ルイ「ええ?」

(224)

ルイ「「めん、ちょっとググるわ」 キーボードなんて古代の代物は、最近では殆ど知られていなかつた。ゲン「お爺ちゃんの膝の上でめてたから」 ヨシシゲ「賢いのうー、5つかそこらだつたろうに」 ギンジ「ゲンさん」に似たのだろうな、あの人も切れ者であつた

(225)

ルイ「ノル……調べたけど、君は半世紀も昔の機械を使つているのかね」 ゲン「うぬ?」 ルイ「? ?」 ゲン「まちがい、うんうん」 ルイ「そ、そう……。まあ大変そうだけど頑張つて」 ゲン「んは?」を一回押すと出る」 ルイ「へええー、なんか大変そうだけど面白そうでもあるね」

(226)

ゲン「ゲンお爺さんはこれでしゃべるより早くしゃべつてた」 ヨシシゲ「まあ、昔の人はみんなそうだつたのう。ブラインドタッチといつてな、手元を見ないでキーを打つんじや」 ノル「は試しに、キーを見ないで打つてみた。ゲン「あ~せひ~たつとふじこ」 想像を絶する技術!

(227)

ゲン「むーソだー」　三シシゲ「まあの、今はもう失われし古代の技である」ノル口は画面の前でフウと一息ついで、そして何を呴いだからと考える。ノル口（初対面のおじいちゃん達と何を話せば良いのか？）そのとき。ウメナ「お、お義父さん！」三口「どうして呴かれてるんです？！」

(228)

ノル口（あわわ……やつぱりお爺ちゃんの名前で呴くとみんなを驚かせちゃう……）ノル口はこの作戦はやつぱりあきらめようと思った。知らない人に迷惑をかけてしまう。「私はゲンお爺ちゃんのひ孫のノル口です、みんなを驚かせるのでやつぱり呴るのはやめます」そうツイートしようとした、その時。

(229)

アシオ「ゲン爺さんが生き返ったと聞いてやつてきましたー」
サトコ「ああ？ ゲンさんがよみがえったって？ ウメナとつとつ
イカレたかい？」 イシゾエ「いやあ、どうやらゲンさんのお孫さ
んのようだあ」 ヨネクラ「え？ ゲンさんの孫さんって男ばつか
じやなかつたけ？」

(230)

ルイ「ゲンを・・・じやなかつたノル口！ 私の呴きリツイート
して！ みんな混乱してる！」 アフレル「ノル口、お父さんのツ
イートもだ」 三口「ああ、なんだノル口だったの」 ウメナ「へ
え、うまいこと考えたもんだね、義父さんのPCまだ生きてたんだ
ね」

ツイートピア（231）

ステイーブン「ローハー、ゲン！ ナツカシイね！」 チョ「わー、

何だか懐かしいクラスターが沸騰してきてる！」 ケンイチ「ゲンさんって確か、その道では一角の人だったよね。まとめウイキないかな」 ジブ「何だ何だ！ 祭りか！」 アゲオ「よくわからんがめでたい、酒だ！」

(232)
ノルコの意思とは関係なく、ゲンお爺さんと付き合いがあつた人や、当時の世相を知つている人たちが勝手に集まつてきて盛り上がりてしまつてる。まもなく「#FUKKASTU_GENN」というハッシュショウが立ち上がり、飲めや歌えやの大騒ぎになつてしまつた。ノルコ（うーん何だからう、どうでもいいや…）

(233)
どんちゃん騒ぎを横目に見つつ、ノルコはゲンお爺さんのプロフィールを見る。フォロー数750に対し、フォロワー数は4000人程度。ノルコの感覚としては少な目な方だ。故人とはいえ、お歳を召した方ならフォロー数が数万に達していてもおかしくない。

(234)

ノルコ（本当に大事な相手しかフォローしない人だつたんだ）
当然、その550人の中にもノルコも含まれている。最後にフォローした相手から10番目にはワクが登録されていた。PC版のツイッターなので、使用者が亡くなつてからもTSHはどんどん進行していくわけだ。

(235)

ゲンお爺さんのTSHを流れるどんちゃん騒ぎを眺めていると、ノルコは何だか、まだゲンお爺ちゃんが生きているような気がしてきた。まだ小さなノルコを膝の上にのせ、シワシワの手でマウスを作するお爺ちゃんが、今ここにいるような、そんな気が。ノルコ（

お爺ちゃん……元氣にしてるかな?)

(236)

ゲンお爺さんの最後のツイートは家族も知人もみんな知ってる。もちろんノルコも知ってる。ゲン「喜びは光、すべてに感謝」「麻酔でぼんやりとした意識の中、お爺さんは最後の力を振り絞つてそう呟いた。そして翌朝、静かに息をひきとったのだ。

(237)

ノルコはゲンお爺さんのTシャツを眺つていぐ。お爺さんがツイッターを始めたのが12歳の時。それ以来のツイートが全て詰まっているので、どんなに頑張つてもその一部しか見ることが出来ない。よほど根気よくTシャツを眺らぬといけない。だからお爺さんの若い頃のことは、誰にもわからないのだ。

(238)

ノルコが聞いた限りでは、ゲンお爺さんはちょっとした論客だったそうだ。昔から社会問題に強い興味をもつていたお爺さんは、バイオツイッター移行期の混乱の中で精力的な活動を行つた一人なのだ。ノルコ（昔はバイオツイッターなんてなかつた）ノルコはその時代をうまく想像できなかつた。

(239)

時は2030年代。はじめ、バイオツイッターは海外の一部で、ひそかなブームを起こしているだけのものだつた。しかし時の3大國、アメリカ、中国、インドにおいて本格的な普及が始まると、世界の情勢は大きく変わり始める。

(240)

当初、日本やEU諸国では導入反対の声が大勢を占めていた。人が、従来の人としての形を失ってしまう。そんな危機感が強かつたのだ。しかし経済活動にバイオツイッターが用いられるようになると、たとえ反対論を唱える人であつても、それを使わざるを得ない状況が生じてきた。

(241)

バイオツイッターを導入するか否か。その問い合わせに対するゲンの答えはこうだった。ゲン「導入は不可避な流れだ。だから賛成とか反対とか言ってないで、導入に向けたガイドラインを考えるべし」そしてこうつけ加えた。ゲン「しかし私自身は決してバイオツイッターを使用しない」と。

(242)

バイオツイッターは量子コンピューターによつて開発された。大規模量子演算機が膨大な計算の末に導き出した究極の「ミニユケーションツールで、その機能には未解明な部分が多くあつた。ゲン「バイオツイッターは遺伝するかもしれない」当初は一笑に伏されたその発言は、後的に的中することとなる。

(243)

『このままでは世界は、全ての人間が監視しあう究極の監視社会、ディストピアになつてしまつ!』過激な反対勢力が活動をはじめ、世界のあちこちで血生臭い事件がおきた。それに対しゲンはこう反論した。ゲン「ツイッターによる相互監視を、オーウェル的な一方監視状況と同じに考へるのは間違いだ」

ツイートピア(244)

また、それと正反対の主張もあつた。『体内ツイッターを使って

全ての人間の行動を把握すれば、犯罪も事故も自殺も無くなる、活用すべきだ!』 それに対するゲンは。ゲン「特定の個人、団体に對して、監視する権限を許すべきではない。そういう強い監視は、より深い抜け穴を作るだけで意味が無い」

(245)
自由で透明感のある意思疎通は、人の心を正しく明るい方向へと導くだろう。そんな性善説のような考えに基づき、ゲンはバイオツイッターの価値を認めていた。しかし、その副作用を十分知らないうちに見切り発車をするのは良くないという理由で、ゲン自身は使用を拒んでいたのだ。

(246)
しかし実際に「遺伝する」というバイオツイッターの副作用が知られるのは、普及してしばらくたつてからのことだった。後から知つて深く後悔する者は後をたたなかつたし、ゲン自身も深く反省したものだ。もっと明確に、反対の立場をとるべきだったのではないかと。

(247)
ゲンとミチコの間に生まれたクメゾウは、バイオツイッターを持たぬ者として生まれた。ゲンはクメゾウが12歳になるまで体内ツイッターの使用を認めず、12歳の誕生日に決断させた。クメゾウはその日のうちにインスト薬を打つた。もうバイオツイッターなしには成り立たない世の中だったのだ。

(248)
クメゾウお爺さんからアフレルお父さんが生まれ、そしてノルコとワクが生まれた。ツイッターを体内に宿す者として。ノルコ(ゲンお爺ちゃんのつぶやきは、どれくらい今の歴史に影響しているん

だらう?) ふとそんなことを考えたりするノルコだった。

(249)

一般庶民のつぶやきが、世界の歴史を左右すると考えるのは難しい。しかし時にはほんのささやかな咳きが、多くの人の心意によつて増幅され、無視できないほど大きな力をもつことはありうる。ゲンのシートの中にも、そんなシートがあつたのかもしれない。可能性は誰にも否定できないのだ。

(250)

t w e e t _ w i t h _ b r a v e r y 勇氣をもつてつぶやく。そんなゲンお爺ちゃんの言葉を、ノルコは今ならわかる気がする。ノルコ(はづかー) ビクつとなつて振り返ると、ノルコの後ろにお父さんやお母さん、ワクもクメゾウお爺ちゃんもウメナおばあちゃんもいて、みんなでPCを覗き込んでいた。

(251)

クメゾウ「パスワード知つとつたんかい!」 ワク「こんな古い機械がよく動くわね」 アフレル「どうだい、友達とはしゃべれた?」 ワク「クール!」 ノルコはなんだか恥ずかしくなつてしまつて、PC画面をパタンと倒した。ウメナ「さ、ぼちぼち切り上げな。もうすぐお昼だよ」

(252)

将来は良妻賢母になるんだとノルコは心に決めていた。一度PCを終了させて台所に向かう。煙で採れたカボチャをウメナお姉さん（そう呼ぶように言われている）と一緒に料理するのだ。ウメナ「ちょっと若いカボチャだからお団子にしようか」ノルコは注意深くカボチャを切ってレンジにかけた。

(253)

ウメナ「友達とはちゃんと喋れたかい？」レンジの中をジーフと覗き込んでいるとウメナがそう聞いてきた。ノルコはちょっと首をかしげ、そういうやそれどころじやなかつたなど思い起こす。ウメナ「別のこと夢中になつてたつてかい？」ノルコはウンウンとうなずく。

(254)

ウメナ「ゲン爺さんのフォロワーさん、まだあんなにいたんだねえ。何か発見はあつたか？」ノルコはちょっと考えて、そして首を横にふつた。ウメナ「そりや残念だ」ノルコはその言葉に首を傾げる。ウメナ「ゲン爺さんについては私に良くわからないんだ、口数の少ない人だつたからね」

(255)

ウメナ「ちよつとは名の知れた論士だつたらしいけど、ミチコ義母さんが亡くなつてからはとんと喋らなくなつちまつた」ノルコの表情が無意識のうちに真剣になる。それをウメナは見逃さなかつた。ウメナ「ミチコお義母さんのこと、聞きたいかい？」ノルコ

はウンと強くうなづいた。

(256)

ウメナ「あたしも、ミチコ義母さんと会つた事は3回しかないんだ」　ウメナは食事の準備をしながら続ける。「遊びに行つた時に2回、あと1回が…入院してた時のお見舞いだ」　なぜか一瞬、ウメナは言葉を詰まらせた。ノルコ（なんだろう？）　ウメナとクメゾウが、中学校以来の仲であることは知つていたが。

(257)

ウメナ「体が弱いわけじゃなかつたのにね、うちの畑を作つたのもミチコ義母さんだつたんだよ。本当に、ガンつていうのは嫌な病気だね」　そしてウメナは遠い目をする。ウメナ「綺麗な人だつたよ、遺影もそうだけど、あんな麦わら帽子が似合う人はそういうないやね」

(258)

ウメナ「ノルコ、自分から咳けない以外に支障はないんだね？」
ノルコはうなずく。ウメナ「ミチコ義母さんの若い頃の写真があるよ、少ないけどね」　それは是非見てみたい！　ノルコは思わずジャンプしてしまつた。それを見てウメナはニッと笑う。そして二人の間に数枚の画像が投影された。

(259)

野菜畑を背景にしたゲンとミチコのツーショット。二人とも宇宙服を思わせるデザインの「東京都公式農作業服」を着ている。すらつとした体形で長い髪を後ろに束ねていて、こうして見ると病氣で亡くなつたのが嘘のようだ。ウメナ「入植した時の記念写真だね」ノルコはまじまじと画像を見据えた。

(260)

イズミ・ミチコは第二次緑園都市計画における東京入植者の一人だ。南東北州の高校の園芸科を卒業している。いつどこでゲンお爺さんと知り合ったのか、それはウメナお姉さんも知らないらしい。ウメナ「こっちの写真は私がとったんだよ」それは台所で料理をしているHプロン姿のミチコだった。

(261)

ウメナ「ミチコ義母さんの作るかぼちゃ団子があまりに美味しかったんでね、教えてもらつたんだよ」写真の中のミチコは、もうもうと湯気の上がるカボチャを、片栗粉と一緒にボウルでこねていた。ノルコ（！？）ノルコは驚いた。熱々のカボチャを、なんと素手でこねていたのだ。

(262)

ウメナ「こねる時に一さじのサラダ油を加える。それがイズミ家に伝わるカボチャ団子の作り方だ。でもやつぱりこねる時の手の感覚なんだね、あの美味しさを生んでいたのはさ。私が何回作つてもあの味にはならないんだ、不思議なことに」ノルコは思わずうなつてしまつた。

(263)

その時ちょうどレンジがチンと鳴つた。カボチャを取り出して火の通りを確認する。ウメナ「どうだい？」スーっと箸が通つた。ノルコはOKサインを出す。そしてボウルの中にカボチャと片栗粉をいれ、一さじのサラダ油を加えた。ウメナ「やってみるかい？」ノルコは“おーっ”と手を上げた。

(264)

もくもくと湯気を立てる熱々のカボチャ。ノルコはぐつと息を飲

む。」チコ「おかあさんはやつていた。そして私はそのひ孫。やつて出来ないわけが無い！」そう意を決して手を突っ込んだ。ノルコ

(一) 热くて飛び上がりそうになつた。片栗粉をつまみからめて混ぜないと確實にやけどする。

(265)

ウメナ「……ほつ、やるじやないか」ノルコの眉間にびじびしシワがよる。熱くて熱くてたまらない。でも我慢してかき回していく。指先は真つ赤だ。ウメナ「あんまし無理するんじゃないよ？」でもやる、最後までやりとおす。なぜならばノルコは、健氣で勇敢な、お料理上手の美少女なのだから。

(266)

なんだかんだでノルコは最後まで混ぜきつてしまつた。すぐに流水で手を冷やす。しばらくヒリヒリしそうだ。ウメナ「よくやつたノルコ。これでお前さんも立派なイズミ家の女だね」さあ、あとは焼くだけだ。やがて台所にたちこめる香ばしい匂い。ノルコは胸がいっぱいになつた。

(267)

そのころちようど、食卓の長机でクメゾウとアフレルがビールを一杯やつていた。クメゾウ「くーー、仕事のあとビールはやっぱうめえな！」アフレル「父さん、さつきまでワクと遊んでなかつた？」クメゾウ「こまけーことはいいんだよー」アフレル「ええ？ うーん……」

(268)

ワク「ふはーつ、ヒック！」ココ「麦茶で酔つ払つてるの？」ワク「クメゾウ「なあー、アフレル。仕事ねえなら紹介するぞ？」この辺はいくらだつて人手がいるんだ、ブラブラしてねーで一つ

やつてみたらどうだ?」 アフレル「いやあ、大丈夫だから」 ワク「ホワッ、一ート、イズイット?」

(269)
クメゾウ「一ート(NEET)つてのはな、当時最先端つていわれた職業のことよ。一ード(NED)から点々とつて一ート。つまり何かが欠けてても特に問題はねえ、必要じやなくなることたあねえつてことだ!」 ワク「インタースティン!」 アフレル「意味がわからない……」

(270)
クメゾウ「親父がよくぼやいてたんだがな、昔は働かない奴はメシ食っちゃいけなかつたんだ。大変な時代だつたるーな」 ヨコ「ええ、それだといつも誰かが飢え死にしなきやいけなくなつちゃうアフレル「全員分の仕事をいつも用意するなんて不可能だからね」 ワク「アンビリー バボー!」

(271)
クメゾウ「だからつて、いつまでも無職でいいわけじゃねえんだぞ?」 アフレル「わかつてるよ、ちゃんと探してるつて」 クメゾウ「ま、変な仕事が好きなお前のことだ、時間はかかるのかもしれねえ。でもいい加減妥協しろよ?」 アフレル「うん、でももうすぐ見つかりそうな気がしてるだ」

(272)
ヨコ「ねえねえあなた。いつたいどんな路線で探してるの?」 アフレル「うん、まあ、やっぱあれだね」 パク「あれ?」 ワク「ホワッ、ザット?」 アフレル「夢のある……感じのかな!」 そういうアフレルは照れくさそうにアゴをさすった。何だかみんな、ため息が出てしまった。

(273)

クメゾウ「まあ……夢もいいが、夢だけじゃ食えねえぞ!」ヨ
「うふふ、そうですね。ところでさつきからいい匂いがするんだ
けど、何を作っているのかしら」ノルコがウメナと一緒に料理を
作っている、他のみんなは待つていてと言い残して。みんな、それ
となくそわそわしているのだった。

(280)

まもなくウメナが皿を持ってやってきた。ウメナ「お前らー。今
田のはノルコの手作りだ! ありがたくいただけーい!」ドーン
と置かれた皿の上で、焼きたてカボチャ団子が湯気を立てている。
ヨコ「あら美味しそう!」クメゾウ「ほう、これはなかなか
クメゾウはさつそく箸を伸ばした。

(281)

ウメナ「たわけーい!」一瞬で叩き落とされる箸。クメゾウ「
なにすんじやい! 熱いうちに食うたろつかと思つたに!」ウメ
ナ「先にやることがあるんだよ!」すると台所から、小皿を手に
したノルコが歩み出でてきた。ヨコ「ノルコ?」小皿にはもちろん
カボチャ団子が乗っている。

(282)

ノルコはそのまま仏間に進むと、ゲンとミチの遺影の前に小皿
を置いた。そして正座し、仏鈴を鳴らし、厳かに手を合わせて瞑目
した。クメゾウ「フム アフレル「ああ、なるほど」ヨコ「
……ノルコ」ワク「オーマイガッ」何となくみんな、そつちを
向いて手を合わせてしまった。

(283)

ノルコは戻つてくると、さあ食べて食べてと手をバタバタさせた。ヨコ「ノルコもこの味を伝授されたのね！」 クメゾウ「じゃあ食うぞ！ 腹が減つて減つてたまらんのだ！」 クメゾウに続いて、みんなも次々と手を伸ばし始めた。ウメナ「ふふん、じゃあ他の食いもんもぱちぱち出すかね」

(284)

ウメナの手によつて次から次へと食事は出され、いつしか食卓は料理でびっしりに。ノルコが作つたのはカボチャ団子だけだったのでも、ノルコはまだまだ修行が必要だなと思った。でもみんな喜んで食べてくれたので、ひとまず満足することに。ノルコ（少しでもミチコお姉さんの味に近づけたかな？）

(285)

お茶を飲んで一服して、落ち着いたところへ帰ることになつた。クメゾウ「これ持つてけい！ ノルコ」 そう言ってクメゾウはノルコに例のPCを手渡した。クメゾウ「ここにあっても仕方がないしな」 ノルコはウンと頭を下げる。そして帰りの車の中ずっと膝の上に抱えて、大切に持ち帰つた。

(286)

ホウ「ベアトリー・ヒー！」　なにやら人名のよつた言葉を叫んでホウはぶつ倒れた。おばさん「またかい」　ホウ「おお……マイスリー……マイティア」　おばさん「？」　ホウは顔を赤らめ、両手で胸を押さえ、高揚している。おばさん「もしや……恋！？」

一体誰に？

(287)

ヨコ（あら……何だか寒気がするわ）　ヨコが街角で背筋を振るさせていた。彼女は今【古着パッチワーク英会話教室】の帰りである。ヨコ（今夜はおでんにでもしようかしら？　暑いからって冷たいものばかり食べてちぢやいけないわ）　せつやくヨコはアフレルにリプレイを飛ばした。

(288)

アフレル「おでん？！　いいね！　ガンモドキいっぱい入れてね！」　アフレルは面接先から即効リプレイを返してきた。ヨコ「決まりね」　ヨコはそそくさといつものスーパーに入つて行く。ところで奥さん、旦那のことニートとか言つておきながら無職なんですか？　ヨコ「主婦は立派な職業よ！」

(289)

ヨコは大根を取り、商品T-を確認した。ヨコ「あら、これクメゾウお義父さんのところの」　どんな商品にもマイクロサイズの電子タグが取り付けられており、全てツイッターと連動している。生産者はもちろん、種まき時期から使われた肥料の情報、果ては運

搬車両のナンバーまで調べられる。

(290)

クメゾウお義父さんが作ったのなら安心と、ヨコはその大根を力口に入れた。ヨコ「あら」隣にキャベツを手にしたまま直立不動になつている男性がいる。ヨコ（何をそんなに調べているのかしら？）品物の情報は芋づる式に際限なく調べられるので、気付いたらどんな情報まで調べてたりつてことか。

(291)

ヨコもいつだつたが、板チョコの情報を芋づる式に調べていって、気づいたら南米の地質学に詳しい人と話し込んでしまつていたことがあった。ヨコ（ほじほじにしないとねえ……）そしてヨコはほどせどに買い物を済ますと、やっぱレジを通りずに店を出た。といつか、なんであるのだろう……レジ。

(292)

ヨコ「あっ！」ヨコはハッとした氣づいて立ち止まつた。ヨコ（ガンモドキを忘れたわ！）ああしまつた、旦那様の大好きなガンモドキ、早くもどつて買い足さなければ。店長さんに笑われてしまふかもしぬないけど。そしてヨコが踵を返したその時だつた。ホウ「そこのお姉様、お忘れものはこれですね？」

(293)

イタリア風のシックな縦縞スーツに身を包んだホウが、手にガンモドキの入つた袋を持つて立つていて。ヨコ「ええ！？」ホウ「あなたがガンモドキを忘れるだらうことを予感していたので。きっとお困りになると思いましたので」ヨコは激しく困惑した。確かにガンモドキなのだけど。

(294)

ヨコ「あ、あの、ありがたいのですけど、知らない方から頂くわけには！」 そう言ってヨコは逃げるようにその場を立ち去った。
ホウ「ああ……なんてエレガントな人なんだ……ビヴァーチュ…」
ホウはガンモドキを強く胸に抱きしめた。そして堪えきれぬ喜びの発露として、小刻みに震えたのだった。

(295)

ヨコ（いつたい何だつたのかしら……どうして私がガンモドキを
買ひ忘れたことを？） ヨコは不審に思いながらも、心の奥ではド
キドキしていた。色々な男の人々に声をかけられてきたが、あんな風
にアプローチされたのは初めてだ。ヨコ（いけないわヨコ。私は子
も夫もある身なの！）

(296)

ヨコは始終落ち着きなく、ガンモドキを買つだけのために店内を
3週ほどグルグルしてしまった。店長「お、奥さん？」 ヨコ「え
？、ああ、ちょっと買ひ忘れをね。うふふ」 そうして店内をうろ
ついていると大変恥ずかしいことに、お化粧直しに行きたくなつて
しまった。ヨコ（いやだわもつ……）

(297)

たかがトイレ、それどトイレ。トイレには人の世の全てが流れで
いると言つ。そんなトイレだが、世の中に数少ない「非ツイッター
領域」でもある。誰にも見られることのない秘密の空間であり、同
時に誰の庇護も受けられない孤独な密室でもある。ヨコ（スーパー
のトイレを使うのは億劫だわ…）

(298)

たとえ情報共有時代であつても、トイレの秘密などはちゃんと守

られている。しかし同時に、トイレで何か事件が起きても、誰の助けも求められないのだ。しかし背に腹は変えないので、三ツ子はよくよく注意してスーパーのトイレに入り、お化粧を直すことになった。

(299)

ホウ「ジヴァーチ」 三ツ子「ひつー」 ティレの中からわきほどの男が現れた……ような気がした。三ツ子「……まつ」 極度の緊張でいるわけの無い人まで見えてしまったのだ。三ツ子（モキドキするわ……） 三ツ子恥ずかしいやら怒りしいやら、ひどく落ち着かなかつた。

(300)

三ツ子は家に帰る道中、ずっと先ほどの男のことを考えていた。三ツ子（ロブライをみられていたのかしら……？） でも、私とアフレルさんの共通フォロワーに、あんな方いたかしら……） 三ツ子はさんざん首をひねつて見るが良くわからない。そういうひつてこむつちこ、元に着いてしまつた。

(301)

三ツ子「ああ！」 ガンモドキを覗ついでいなかつた！ 三ツ子はその場にぐず折れた。三ツ子「もういやだわ……」 仕方ない、ガンモドキは何かで代用しよう。そのため息をつきつつ玄関を開けようとした三ツ子の目の前に、三ツ子「これは……」 そこには袋につぱいのガンモドキ。そして一刺しの赤いバラ……。

(302)

三ツ子はしばし放心状態のまま、その場に立ち尽くした。三ツ子（このガンモドキは……捨てましょつ） そう思いつつ赤いバラを抜き取つて、草むらに捨てようと手を上げるが。三ツ子（……この花に……）

……罪はないわ！）そして結局家の中を持ち込んで、キッチンの窓際に生けたのだった。

（303）

少し落ち着いたヨコは、赤バラの商品Tシャツを開いた。何の変哲もない赤バラのようだ。購入者はトキワ・チカコ（43歳）近所にあるツイッター協会の管理人さんだった。ヨコ「どうゆうことかしら……」ポツリつぶやくヨコ。ヨコ「あー、ノルコ」二つのまにかノルコが近くに来ていた。

（304）

ヨコ「えと……これはね、そこで拾ったのよ。綺麗でしょ？」ノルコはぴーんと背伸びをして、赤いバラの花をしげしげと見つめ、うんっと一つうなずいた。そしてテーブルの上においてある食材に気づく。ガンモドキがいっぱいある。お父さんの大好きなガンモドキ。ノルコ（今夜はおでんだ！）

（305）

ヨコは困ったなと思つ。これでガンモドキを捨てるに捨てられなくなつた。そして気づく。もしガンモドキの商品Tシャツをノルコが調べてしまつたら……。ヨコ「ねえノルコ、お願いがあるんだけど」ノルコはうんっとうなづく。ヨコ「お風呂を掃除しといってくれない？ お母さん少し疲れちゃつて」

（306）

暇で暇でしかたが無かつたノルコはダッシュでお風呂に向かつていつた。ホツとしたヨコは、ガンモドキの商品Tシャツを調べた。こちらの購入者もツイッター協会のチカコさんだった。しかしそこからの譲渡情報がまったく無い。紛失物と同じ扱いになつてゐるのだ。ヨコ（やっぱり気味が悪いわね……）

(307)

ヨコは購入者のチカラさんに直接問い合わせることにした。ヨコ「かくかくしかじか」チカラ「あらう、それは申し訳ありませんでした。うちのホウの仕業です」ヨコはチカラから詳しい説明を受け、例の男がツイッター能力を失なつた者であることを理解した。ヨコ「そういうことでしたか」

(308)

事情を理解したヨコは、まるで喉に刺さつた骨がとれたような気持ちになつた。そして鼻歌まじりで晩御飯の仕度を開始したのだった。ノルコ（ジー）ヨコ「はつ」全然、疲れているように見えないヨコを、ノルコがしげしげと見つめている。ヨコ「あ、ありがとうノルコ、おかげでお母さん元気になつたわ！」

(309)

その日の夕食、アフレルは大好物のガンモドキをモシャクシャほお張りながらビールを飲んでいた。アフレル「こんなにたくさん入ってくれるとは思わなかつたよ！」喜びいっぱいの表情のアフレル。ヨコ「え？ それほどでもないのよ？」微妙な微笑のヨコ。ノルコ（お母さん何かあつた？）

(310)

ヨコ「そういえばあなた。今日の面接はどこに行つたの？」アフレル「牛を見に行つてたんだ」牛？みんなそう思った。アフレル「親父の紹介でね、見てくるだけでもいいからつてさ」ヨコ「牧場を見学してきたの？」アフレル「うん。あと、ちょっとカウボーイ的なことをね」

(311)

そう言つとアフレルは、動画ファイルを起動して食卓の上に投影した。ワク「カウボーイ？」ヨコ「あらホント」のどかな牧場の光景だつた。動画の中でアフレルは、手綱を引いて牛を引っ張り出しているところだつた。アフレル「これが結構大変なんだ。なかなか言つことを聞いてくれなくて」

(312)

牛を引っ張るというより、引っ張られているアフレル。それを見て牧場主さんがゲラゲラ笑つてゐる。ヨコ「これじゃどつちが牛だからわからないわ」アフレル「えー？」そう？ヨコ「それで受かつたの？」アフレル「来たけりや来いつて言われたけど断つた。

思つた以上に大変な仕事つてわかつたから

(313)

ヨコ「やあ……」夫がカウボーイというのも悪くないかと思つていたヨコは、少し残念に思つた。アフレル「あつ！」その時なんと動画の中で、1頭の牛が放尿を始めてしまつた。アフレルが飲んでいるビールと同じような色をしている。お食事中にこれはいけない。アフレル「うわー、あー」

(314)

ワク「ライク・ア・ビアー！」アフレル「ワク、それは言つちやいけない……。『めんよみんな』そう言つて動画を消すアフレル。ヨコがポツリと一言。ヨコ「牛さんはいいわねえ、どこでもおトイレできて」ノルコ（ん？）その一言にノルコは、何となくピーンときてしまつたのだった。

(315)

ノルコ（お母さん、きつとおトイレで困つたことがあつたんだ）トイレにツイッターを設置してはいけないという法律がある。そのせいか「トイレで起こつた犯罪は世間に知られることがない」という都市伝説が広まつているのだ。おかげで公衆トイレは、何となく使いにくいつ状況だ。

(316)

ノルコは厚揚げをモジュモジュしながら思つ。学校のトイレも使いにくいのだ。世の中にはトイレに行くとかわるるといつ理由で我慢し続けて、腸閉塞になつてしまつ子もいる。さらに問題なのが、仮にトイレを覗かれたりしても、そのことを訴える手段がないということだ。

(317)

ノルコ（でも、いつ誰がどれだけ使ったか、なんてことが全部記録されちゃうのもいやだ） これは根の深い問題だとノルコは思つた。アフレル「どうしたノルコ？」 難しい顔して「 言われてハツと気づいて、おもむろに首を振るノルコ。お食事中に何てこと考えてたんだろう。ノルコ（はしたないつ）

(318)

ノルコは食器をキッチンに返す時に、母が皿に拾つてきたという赤いバラのトレーを調べた。ノルコ（あつ……） 購入者はツイッターアカウントのおばさん。この間会つたあの人だ。ノルコ（ということは）高確率でホウさんが絡んでるはずだ。そうノルコは推理した。何だか気分がゲンナリしてきた。

(319)

ノルコは自室に戻りつつ考える。お母さんのトイレの話ととホウさんの間に因果関係があるのだとしたら、それは一体どういう状況だろう？ ノルコ（あの赤バラ……もしかしたらホウさんがお母さんに上げたのかも？） ほぼ正解といえる推理。しかし、それとトイレとの因果関係は？

(320)

ノルコ（お母さんがトイレから出た直後に、ホウさんがお母さんに赤バラを渡した？） そこまでノルコは考えて、やつぱりワケがわからないなと思った。ホウの動機がわからない。なぜお母さんに赤いバラを？ 赤いバラってどんな時にプレゼントする？ ノルコ（あああー！）

(321)

ノルコ（お母さん、ナンパされたんだ！） そして母はそのバラ

を受け取つて帰つてきたのだ。これは由々しき事態。そう思つたノルコは、何が何でもホウさんとコントラクトを取らなければと思った。しかし。ノルコ（ホウさんにはリプライを飛ばせない……）直接会つて話すしかない……いや。

(322)

青年ホウには不思議な能力がある。あのGPT-3とかを見たせいで、人の心を読めるようになつたらしに。心が読まれてしまうのは、正直言氣分の良いものではないが、ならばそれを逆手に取ることも出来るはずだ。ノルコ（私達の平和な食卓を……乱さないでー）ノルコは目を閉じ、強く念じた。

(323)

『ビヴァーチュ』 どこからともなくそう聞こえてきた気がした。ノルコ（私のお母さん美人だから気持ちはわかるけど、お願ひだから変な氣を起こさないでー！） ノルコは10回くらいそう念じてから目を開けた。ノルコ（伝わったかな？） それを確かめるためにも、明日ホウさんに会いに行かないと。

(324)

ノルコ（お母さんの様子をもう一度確かめておこう） ノルコは一階に下り、キッチンへと向かう。ノルコ（……じつそり） 入り口の影から母ヨコの姿を覗うノルコ。ヨコは食器を洗つている。いつもと様子は変わらない。ノルコ（あつ） キッチンから赤バラが消えているのを、ノルコは見逃さなかつた。

(325)

ノルコ（まだ生き生きしてたのに……なんで？） ノルコはそこでハツと氣付く。隠蔽したのだ と。ヨコ「ん？」 ヨコに気付かれた。ヨコ「なあにノルコ。」 飯足りなかつた？ ノルコは首

を横に振つて、その場を後にする。アフレル「おっ、ノルコ」その後ちよつと、父が風呂から出た。

(326)

スウェット姿で頭から湯気を立ててるアフレルは、ビリやらノルコが微妙な表情をしていることに気付いたようだ。ノルコはマズいと思い、顔を伏せる。どう切り抜ける? ノルコ(……そうだ!)ノルコはお腹を押さえてモジモジした後、ダッシュでトイレに駆け込んだ。ノルコ(セーフ!)

(327)

もちろんお腹なんか痛くない。といふか、けなげ美少女はウロしない。ノルコは便座に腰掛けたまま、しばし考え込んだ。ノルコ(こういうときはどうしたらいいんだろう?)お母さんが浮氣するかもしれない……誰に相談することもできない(こうかつぶやけない。ノルコ(……いまつたな)

(328)

ノルコはリビングのT字にアクセスする。ヨコとアフレルが会話している。というか、普通に声が聞こえてくるのだけ。アフレル「また明日も面接だから、早くに出かけるよ」ヨコ「そう? 朝ごはんなん時にする?」アフレル「ううん、5時こまこまを出るから。移動しながら食べてくよ」

(329)

ヨコ「そんなんに早く?」アフレル「そんなんだ。南房総の先まで行くからね」ヨコ「結構遠いわね。受かったとしても通えるの?」アフレル「出社はたまいでいいんだ。あとは殆ど自宅できる。また研究職なんだけど」ヨコ「やつ、かかるといいわね!」アフレル「え? う、うん。がんばるよ!」

(330)

ノルコは手を洗つてトイレを出た。自室に戻りつつ思ひ。お母さんの様子がやっぱり変だ。何となく、お父さんと話したくないみたい。会話を出来るだけ早く切り上げようとしている感じがする。ノルコ（お母さん……まさかとは思うけど） そうしてノルコの不安な一夜は更けてゆくのだった。

(331)

そして翌朝。現在8時半。今日は日曜日なのでワクは朝寝坊している。結局、朝の4時に起きてアフレルのお弁当を作ったヨコは、ソファーの上でうつらうつらしている。一人でイチゴトーストを食べたノルコは。ノルコ（好機！） そう心の中で気合を入れて、家を飛び出して行つた。

(332)

ツイッター協会に行つて、ホウに会つて確認して帰つてくる。ただそれだけだ。スマーズに行けば10分で行つて帰つて来られる。しかし。ノルコ（どっちだっけ……） 住宅地の隘路は思いのほか複雑だつたりする。バイオツイッターの地図機能を使つていたにも関わらず、ノルコは少し迷つてしまつた。

(333)

ノルコ（勝手に出かけたつて、お父さんに怒られる…） ノルコは血の気がサーッと引く思いで、まるで迷路のような戸建住宅の細道をさまよつっていた。すると。「おはよう！」 ノルコは喉から心臓が飛び出すかと思った。後ろを振り返ると。ホウ「来るんじゃないかと思っていたよ、ビヴァーチュ！」

(334)

ノル口は内心ホッとしたが、それを顔に出すわけにはいかない。
ノル口（確かに生きや！） そしてジッと相手の顔をにらむ。昨夜の祈りが届いたなら、ホウは何らかのリアクションをしてくるはず。ホウ「そんなに僕の顔が気になるかい？」 と言つて髪をかき上げ、無い耳を見せてくる。ノル口（あれれ？）

（335）

私の心を読めるのなら答えてくれるはず。ノル口は念じた。ノル口（お母さんに何かしたの？！） するとホウは少しうな垂れた様子で、一つため息をついた。ホウ「昨日ね、コウタ君が家に帰っちゃったんだ。寂しくなるよ」 コウタ君とは、協会で会つたあの少年のことだが。ノル口（とぼけてる？…）

（336）

ホウ「君は僕に聞きたい」とがあつてこられた」 ノル口は首を縦に振る。ホウ「だが僕はそれに答えることが出来ない」 ノル口は首を傾げる。ホウ「なぜならそれは、僕の極めてプライベートな部分だからだ」 ノル口はその場で地団駄を踏んだ。ホウ「そして君は今、不公平を感じている」

（337）

そつちはプライベートとか言つておきながら、そつちが考えていることはお見通しではないか。そんなの不公平だ。ノル口はそう思つて地団駄を踏んだのだ。はしたないとは思いつつも。ホウ「君も、その気になればなんだつてわかるはずだ。僕が全てを管理しているわけじゃないんだから」 なんとも意味不明だ。

（338）

ホウ「君は恋をしたことがあるかい？」 ノル口はドキリとした。そう改まつて聞かれてみれば、ノル口は未だ誰にも恋をしたことがない

なかつた。ホウ「恋とは不思議なものさ。お互いの気持ちと気持ちが合わせ鏡みたいに向き合つて、どこまでも互いの姿を連ねていく。果てしが無い。ビバー・チエ」

(339)

ホウ「僕が君の心を読めたとしても、僕が僕の心を読めない限り、僕は何も掴めやしない。つまりはそういうことだ」ノルコはホウの言葉をただ黙つて聞いていた。お母さんとのことがどうとか言う以前に、その言葉には強い説得力があるように思えたのだ。そして自分にとつて大事な言葉であることも。

(340)

ホウ「さあ、そろそろ帰らないと、きっと大変なことが起ころるぞ」ノルコはギクリとしてその場でたじろいだ。ノルコはホウに何か一言いいたかつた。でも呴けないのだ。ノルコは奥歯を強くかみ締めてウンウンと唸つてみたが、鼻で空気がヒューヒュー言つだけだった。ホウ「ふふ。また今度だ！」

(341)

ノルコは家に帰つてソーツと中に入る。ワク「ホウエア？」寝ぼけたワクが突つ立つていたので、ノルコは反射的に「シー」と唇に指をあてて黙らせた。リビングのソファーでは、母がまだやすやと眠つている。ノルコはホツと内心ため息をついて、血室へと戻つていった。

(342)

ノルコは学習机の引き出しからゲンお爺さんのPCを取り出した。そして起動させている間に考える。先ほどのホウの話をまとめると、やはりホウはお母さんに恋をしてしまったようだ。そして合わせ鏡の例え話から察するに、その顛末はホウにもわからないのだろう。

ノルコ（ますます厄介だわ）

(343)

『GPT-Lは世界の全てを僕に教える』 ホウが言っていたあの言葉はウソなのだろうか。ノルコはふとそう思う。GPT-L、グロス・オブ・パーソナル・タイムライン、神のT-L。そんな良くなからぬものに取りこまれてしまった人が、今私のお母さんに恋してる。ノルコは気が気じゃなかつた。

(344)

まずはGPT-Lについて知らなければならない。ノルコはゲンお爺さんのPCでそれを調べることにした。キーワード検索機能を使って「GPT-L」の単語を含むツイートを片っ端から調べていく……つもりだったが。ノルコ（無い……全然） GPT-Lという言葉は、どこをどう探しても見つからなかつた。

(345)

まるで何か大きな存在によつて、言葉そのものが隠されてしまつているようだつた。ノルコは薄ら寒い気分になつてきた。ノルコ（そうだ！）あの管理人のおばさんなら知つてるかもしれない。ノルコは思いつくや否や、ツイッター協会の管理人、トキワ・チカコさんのプロフィールを検索した。

(346)

ゲン「こんにちはチカコさん。私はこの間お世話になりましたノルコです。ゲンといつのは私のひいお爺さんの名前です。今私は、ゲンお爺さんのPCを使ってツイートしています。チカコさんに聞きたいことがあります」ノルコは頑張ってこの長文をこしらえて、そしてチカコさんにリプレイした。

(347)

チカコ「あらノルコちゃん、お久しぶり。何となく事情はわかつたわ。聞きたいことつてなあに？」ゲン「少し時間がかかります。うつのに」チカコ「構わないわ、今はお腹(ほん)のホットケーキを作っているところなのよ」ノルコはお腹ががグウと鳴るのを抑えつつ、キーボードを手にかけた。

(348)

ゲン「ホウさんのGPT-Lのことを知りたいんです」T-Lの向こう側でチカコさんがピタッと手を止めたような感覚があった。ゲン「どうしても気になつて。調べてもわからなくて」チカコ「あれはね……何で説明したらいいのかしら」どうやらチカコさんに良くわからないようだ。

(349)

ゲン「ホウさんはGPT-Lで、世界の全てを知つたと言つてしまつた」ノルコはそこまでツイートして手を止めた。今朝ホウと会つた時のことば、チカコさんに伝えない方がいい。なぜなら「ホウにどんな用事があつたの?」と聞かれたとき、どう返事をして良いか

わからないからだ。

(350)

ゲン「もしホウさんが世界の全てを知っているのなら、ノルコ達の将来とかも知つていることになります。それが私には不安です」
チカコ「うーん。確かにそれはわかるわ。ホウがその知識を使って何をしてかすかわからないものね」
ゲン「はい」
チカコ「でもね、その心配はきつとないわ」

(351)

ゲン「どういふこと?」
チカコ「今のところ、ホウがGPT-Lの力を悪用したことはないわ。それに、世界の全てを知つているなんてこと自体、私はちょっと疑わしいと思つていて。もしかすると、ただのあの子の妄想なんじゃないかしらって」
ゲン「妄想」
チカコ「そう、ただの妄想かもよ?」

(352)

チカコ「あら、ホットケーキが焦げてきたわ、ちょっと待つてね」
ゲン「すみません」
チカコ「いいのよ」
ノルコは、チカコがホットケーキをひっくり返している間に考えた。
ただの妄想、確かにそれはあるかもしれない。でもホウさんはしばしば人の心を読むじゃないか。

(353)

ノルコはそのことをチカコさんに聞いてみた。
チカコ「ホウは昔から勘の鋭い子だったわ。ツイッター能力を早くに失った影響からね。どこか人を見透かしたような所があつたわ」
ゲン「そうなんですか」
GPT-Lという単語そのものがホウの創作物なのだろうか?
ノルコはそう思つよになってきた。

(354)

ゲン「GPT」といつもホウさんの妄想?」チカ口「妄想かもしれないし、実際にあるものなのかもしないし、まあ、私にもちよつとわからないわね」ノル口は正直ガツカリしたが、チカ口さんの話を聞くうちに、ホウさんはノル口達の悪いようにほしないのではという安心感もわいてきた。

(355)

チカ口「ホットケーキが一枚出来たわ。ゲン……じゃないノル口ちゃん。食べに来ない?」ノル口は必死で首を横に振つて、すぐにそれが意味の無いことだと気付き、とつさにキーボードを叩いた。ゲン「もうおひるなかたばまち」そんなことしたらお父さんに怒られちゃう…

(356)

チカ口「もうお昼食べたの? それは残念」ゲン「おかまいなくです」チカ口「ほらほら、匂いにつられてホウがやつてきたわよ。GPTのこと聞いて見る?」ゲン「おねがいします」焦つて打つと相変わらず変な言葉になつてしまつのが歯がゆい。チカ口「あのねホウ、かくかくしかじか」

(357)

そしてノル口は大変なことに気が付いて、座つたまま飛び跳ねてしまった。ノル口（ホウさんがさつき私と会つたつてこと言つちゃつたらどうしようつー）ノル口はなすすべなく、ただホウがそのことを言わないようにと念じるのみだった。ノル口（ないしないしないしないしょー!）

(358)

しばりへして。チカ口「ノル口ちゃん。ホウがね、今とってもわ

かりやすい例え話をしてくれたわ」 どうやら祈りは通じたようだ、ノルコはホッと胸をなでおろした。ゲン「聞きたいです！」 チカコ「ええ、もちろん。ホウはGPTのことを、『すくべ良い映画のやうなもの』って例えたの」

(359)
すくべ良い映画と聞いて、ノルコが真っ先に思い浮かべるのは、オードリー・ヘップバーン主演のローマの休日だ。「世界で一番素敵なかげディ」というキーワードで色々調べていたら、この古い映画に行き当たった。その日のうちに一回見て、それからもちょくちょく見ている。素敵な映画は何度見ても素敵だ。

(360)
チカコ「良い映画って、何回見ても面白いものでしょう？」 結末とかみんなわかってるのに」 ゲン「わかります」 チカコ「何もかもがわかついても、ぜんぜん飽きない。何度見ても新しい発見があつて、胸がドキドキする。ホウはGPTのことを、そう例えているのよ」

(361)
何度も新しい発見がある。その言葉にノルコはゾーンときた。先ほどホウは言っていた。恋とは合わせ鏡のようなものだと。今ある自分の状態によって、相手の見え方が変わってくる。それと同じように、GPTから見えてくるものも変わってくる。言わばそれは、自分と世界との間の合せ鏡なのだ。

(362)
ゲン「すくべよくわかりました。ありがとうございました」 チカコ「いえいえどういたしまして。また何か気になることがあつたら、遠慮しないで聞いてきてね！」 ノルコはひとまずチカコさん

とせよならした。今日のところはこの辺にしておこう。なんだか頭の中がいっぱいだ。

(363)

グゥウー。またお腹が鳴つた。ノルコは部屋で一人、顔を赤らめた。ノルコ（頭を使うとお腹が減るの） そろそろお昼（はんの時間）。ノルコ（腹が減つてはなんとやらー） ノルコは椅子から飛び降りて、一つグーンと背伸びをすると、パタパタと足音を立てて一階に降りていった。

(364)

窓辺からあふれ出す陽射しがダイニングテーブルを照らしている。テーブルの上にはバターと蜂蜜の瓶。キッチンから漂ってくるは香ばしい匂い。ヨコ「もう少しで焼けるからね、ホットケーキ」ノルコ（！？）チカラさんもホットケーキを作つてた。これは何か関係があるとノルコは思った。

(365)

ノルコはテーブルについて、コップにミルクを注いで一口飲む。ノルコ（ふつー）牛乳を飲むと気分が落ち着くのは何故なんだろうと、ノルコはしばし思いを馳せる。そしてダイニングがとても静かなことに気付く。ワクは？ ヨコ「ワクはお友達の家でご馳走になるんだって、いいわねー」

(366)

ワクが日曜日に友達の家に居座る。ノルコ（毎週恒例のアレか）アレとは何か。それはまた後の話。それより家の中が静か過ぎて落ち着かないノルコは、ひとまずテレビをつけてみた。JPN48000の特集でもやってないかな？ テレビ「お昼のニュースです」どうやら期待は外れたようだ。

(367)

「テレビ」今国会において法案が提出されていました、公衆洗面所におけるツイッター常設に関する法律、通称『トイレ法』の集中審議が週明けから始まります「どうやら政治関連のニュースらしい。ノルコ（トイレ法？）また訳のわからない法律を作りうとしてい

るなー、とノル口は思った。

(368)

『「できたわー、ちょっと作りあがひやつた」』　ヨコがお皿の上に三段重ねになつたホットケーキを持つてやってきた。ノル口の隣の席に座つてナイフで八等分にする。『トライレ法ねえ、これつてなにげに切実な問題よね』　ヨコはテレビを眺めつつ、ため息を一つついた。

(369)

ノル口は聞きたくても聞けないことがたくさんあつたが、どのみちつぶやけない身なので黙つてホットケーキをパクパクと食べた。『『ねえノル口、ここだけの話なんだけどね』　ヨコは形的にあたりを見回してから、そつと口元を送つてきた。『……実はね、お母さんナンパされちゃつたのー』』

(370)

ノル口はもう少しで舌を噛んでしまつといふだつた。ひとまず畠間にシワを寄せて困惑の意を伝えておく。『シックなスーツに身を包んだ、若い紳士だつたわ。ねえノル口、お母さんびうしたらいいと思う?』　シックなスーツに身を包んだビバーチュ、もといホウ。ノル口はプツと噴出してしまつた。

(371)

『『ちよつとノル口ー、お母さんは本氣でノル口に相談してるのよ』』　ノル口はペロリと頭を下げて謝つた。『まあ、お母さんの気持ちもつ決まつてるんだけど、ノル口にも話しておきたいと思つたの。ノル口ももうすぐ大人になつて、お母さんみたく殿方に声をかけられるよつになるから』

(372)

お母さんの自身満々な所は是非とも見習いたい。そうノルコはいつも思う。ヨコ『1、一度だけテートする。2、すげなくことわる。3、お友達になる』ヨコはそう言いながらホットケーキの切れ端を選択肢代わりに置いていく。ノルコはうーんと考えるふりをした。本当はもう決まってるんだけど。

(373)

ノルコは3番のホットケーキをフォークで刺し、そして口の中に放り込んだ。モグモグ、おいしい。ヨコ『うん！ ノルコなら3番を選んでくれると思った！』 そう言いつつ、ヨコは1番と2番のホットケーキを食べてしまった。ヨコ『やっぱりね、こういう縁は大切にしないといけないわ！』

(374)

お母さんはやっぱり魔性の人だ。ただそこにいるだけで男の人を苦しめてしまう。ノルコは素直にそう思う。そして自分もその血を受け継いでいるのだなとしみじみ実感し、未だ小さな胸の奥でフツフツと女の魔性をたぎらせたのだった。ヨコ『ノルコに相談したら、お母さん何だかすつきりした！』

(375)

その頃。アフレルは、妻と娘がホットケーキを囲んで不適な笑みを浮かべていることなど露にも思うことなく、面接先の研究施設を見渡していた。アフレル「なんて大きい施設なんだろう」 クサヨシ「ふふふ。これが人類最後の砦、ガンバール研究基地の全貌だよ」 アフレル「人類最後の……砦……」

(376)

館山市から車で30分、南房総の先端に位置するは野島岬。そこ

から太平洋に突き出す形で全長2km、幅60メートルの滑走路が延びている。その付け根には巨大な巻貝を思わせるフォルムの施設が建っている。巨大ロボット研究所兼対悪性地球外生命体迎撃基地、通称「ガンバール研究基地」である。

(377)

アフレル「現実感がない……」アフレルは研究基地の近くの高台の公園にきていた。先ほどクサヨシ氏に基地の中を案内してもらったのだが、体育館ぐらいの建物に格納されている「巨大な鉄の手」やら、一機で100トン超の出力を生み出すロケットブースターやらですっかり目が眩んでしまった。

(378)

クサヨシ「もし、悪意を持つた地球外生命体が侵略してきたら、あの滑走路から我らがガンバールロボが出撃し、持てる力を奮つて戦うことになるのだ」アフレル「うわあ……」そのガンバールロボは現在開発中でバラバラになつていて、完成すれば全長80メートルを超える巨大ロボとなる予定。

(379)

アフレル「でもまだ未完成なんですね？」クサヨシ「我々がその気になれば4時間以内に組み上げ出撃させられる。設計上の3%ほどの戦力しか発揮できないが」アフレル「倒せるんですか？」そうアフレルが問うと彼は。クサヨシ「ふふふ……無理に決まっているだろ？」「と、自身満々に答えた。

(380)

クサヨシ「だつてアフレル君、宇宙空間を何万光年も渡つてこれるほどの生命体だぞ？今の人類がどう『さかしま』になつたって、勝てるわけがないじゃないか」と言っておきながら自信満々であ

る アフレル「じゃ、なんで作ってるんです？ 面接受けに来た僕が聞くのもなんすけど……」

(381)

クサヨシ「アフレル君、君はそんなことも調べないで我らが研究基地の門を叩いたのか」 アフレル「はい、そうなんです」 クサヨシ「ふふ、君が来たタイミングから察するに、我々が求人を出した瞬間に飛びついたのだろう、時間にして今から2時間前だ」 アフレル「まさしく！」

(382)

アフレルは本当は別の研究所の面接を受ける予定だった。しかし行きの電車の中で求人検索をしている際、「巨大ロボット開発の研究員募集」の文字をついつかり発見してしまい、即効で食いついて、受けるハズだった面接を蹴つてまで、ここガンバール研究基地を訪れたのだった。

(383)

第5次火星開発選抜の3次審査を通ったアフレルの実績が評価され、こうして飛び込みの就職面接と相成ったのだが、十分な予備知識を蓄える余裕などあるわけがなかつた。クサヨシ「まあいい、立ち話もなんだ、そこに座りたまえ」 アフレルは促されるまま、近くにあつたアヒルの遊具にまたがつた。

(384)

クサヨシは白衣をサッと翻すと、音も無くアヒルの隣のカエルにまたがつた。スプリングの足を使って前後にギッタンギッタンするアレだ。クサヨシ「倒せるアテのない宇宙人への対応として、巨大ロボットを建造するのは何故か。君の質問はそういうことだね？」 アフレル「はい、そうです」

(385)

クサヨシ「ではその質問をそのまま君に返すとしよう。何故だと考えるかね?」アフレルはハツと息を飲んだ。つまりこれは口頭試験なのだ。アフレルはいま試されている。アフレル「はい、僕が考えるにその理由は……」アフレルは一息おいて宙を見やる。道具が僅かに傾いだ。アフレル「心意氣です」

(386)

クサヨシは常時険しいその表情を僅かに緩めて言った。クサヨシ「心意氣とね? その真意は?」アフレル「はい、つまり勝てないからといって戦う気持ちまで捨ててしまう訳にはいかないからです。そんなことでは全ての宇宙生物に見下されてしまいます。さらに僕たち人類の尊厳を自ら放棄することにもなります」

(387)

クサヨシは黙つて耳を傾けていた。アフレル「悪意ある侵略者から地球人類の尊厳を守る。その目的のために持てる力を結集するとの意義は、実際とても大きいのではないでしょうか」アフレルは自分の考えを言葉にするたびに、目の前の非現実的な研究基地の光景が、ごく当然のもののように思えてきた。

(388)

アフレル「さらに、最先端の技術を集結し、科学の可能性を追求するための絶好の場となり、御施設で開発された技術は、僕たちの生活の中に確実に生かされていくはずです。そして何より……」クサヨシはもうかなり満足げな表情だ。アフレル「子供達が喜びます!」クサヨシ「ハツハツハ!」

(389)

クサヨシ「うむ、ほぼ合格と言つていいいだろ。子供が喜ぶか。」

「言われて見ればそういう意義もあつたな」 アフレル「では……」

クサヨシ「さつそく本部に通達しよう。また一人、我が秘密基地に熱い野郎が加わったとな！」 アフレルはグーッと胸の前で拳をにぎりしめ、そして天に突き上げた。

(390)

クサヨシはカエルの遊具をギッタンギッタンしながら続ける。クサヨシ「君はこれまでの経験から、有機化学の応用に精通しているようだ。現在、油圧駆動系の開発部隊に不足がある。さつそく明日から現場に加わって欲しい。開発資料は全て公開されている。膨大な量だが君なら処理できると信じている」

(391)

アフレル「明日からですか？」 クサヨシ「善は急げというではないか。何か問題が？」 アフレル「僕は眩音市に住んでいるので、引越しする必要があるんです」 クサヨシ「基地のB2に寮がある。すぐには手配できるぞ。完全個室で共同の温泉もあるのだ」 アフレルは正直困った。家族にどう説明しよう。

(392)

クサヨシ「時間が必要かね？」 確かに時間が必要だった。しかし巨大ロボットの開発なんてなかなか出来ることじやない。一瞬の躊躇も許されないとアフレルは直感していた。アフレル「いいえ、大丈夫です。明日から出向いたします」 クサヨシ「よろしい。では本日はこれにて終了、また明日だ！」

(393)

クサヨシはカエルの遊具からエレガントに飛び降りると、そのままスタートと歩いて基地へと戻つていった。アフレルはその背が見

えなくなるまで目礼を続け、再びアヒルに跨る。どつと疲労が押し寄せてきた。アフレル（単身赴任……）遠い水平線眺めつつ、アフレルはしばしボーッと佇んだ。

(394)
 ワク「デルアアアアアックス！ バール！ クラッシャアアアア
 アアアアー！！」 天をつんざくワクの叫びとともに、ガンバール
 の右腕に装着された巨大なバールが、目玉のお化けみたいなエイリ
 アンに振り下ろされた。エイリアン「ギヤアアアアアアアアアア
 ース！」 撃破ポイント201。

(395)
 ワク「ハアハア……アイ・ウイル・ワイン！」 タケシ「やつた
 ゼワク！ 自己ベスト更新だ！」 ワクは今、友達のタケシ君の家
 でWEBアプリの「救星機神ガンバール」をプレイしている。タケ
 シ君の家の壁は防音性が高く、思う存分雄たけびをあげることが出
 来て臨場感バツグンなのだ。

(396)
 タケシ「次のエンカウントは30秒後だ、今度はオレがいく！
 ワク、ナビは頼んだぜ！」 ワク「オーケイ！ リープ・イット！」
 救星機神ガンバールはFPSゲームの一種で、プレイヤーは巨大
 ロボットガンバールのパイロットになつて、迫り来る宇宙人を撃破
 していくという構成になつていてる。

(397)
 主兵装は右手の巨大なバールと、左手のレールガン。あわせてガ
 ンバールだ。もちろん「頑張る」という言葉とかけてあることは言
 うまでも無い。ステージによつてはロケットスラスター、誘導ミサ
 イル、長距離レーザーなどの副兵装も使える。また、最大3人まで

ナビゲーターをつけることも出来る。

(398)

ワク「エネミー・イズ・カミング。3・5・7」 タケシ「おつと複数敵か、熱くなるぜ！」 現在、全世界に三千万人のプレイヤーがあり、それぞれ腕を競いあつてゐる。そして万が一、本当にエイリアンが侵略してきた時は、上位のプレイヤーが本物のガンバルの操縦者に選ばれることになつてゐる。

(399)

ワクはこのアプリのことを最近知ったのだが、実は公表から15年以上が経過してゐる。いまだその人気は色あせない理由は、まさしくガンバークが實際にあるためである。ワクもその仕組みを初めて知つたときは、おでこが真つ赤になるほど興奮した。パイロットに選ばれる可能性は、常にあるのだ。

(400)

このゲームのニークなところは、年齢が低ければ低いほど撃破ポイントが高く与えられるところだ。そこには「巨大ロボットの操縦者は少年に限る」という開発者の思想がこめられている。世の中には30歳すぎのプレイヤーもいるが、加齢でポイントを稼げなくなるので、いざれは引退する。

(401)

というわけで、今を生きる少年ならば、誰でも一度はガンバールのパイロットを目指すご時世なのだ。タケシ「いっちょ撃破！」 ワク「キープ・コア・ガード！ レフト！ カミン！」 左9時方向から慣性の法則無視して突つ込んでくる円盤が、ガンバークの足を掠めた。タケシ「くつ！」

(402)

タケシはスロットルを上げ、敵の追撃を振り切る。ガンバールの脚部に装着されたブースターから灼熱色のジェットが噴出する。ブースターの燃料は最大稼動で3分しか持たない……が。ワク「ファイナルアタック・オールレディ」 タケシ「ロックオン！」 ワク&タケシ「ヒア・ウィ・ゴー！！」

(403)

メインブースターから太陽の如き閃光があふれ出た。機体の限界を超えてガンバールが飛翔する。反物質燃料の投入による、桁違いの出力が開放されたのだ。タケシ「耐えてくれ！ ガンバール！」 機体そのものを超高速の弾丸に変えて、ガンバールは残り2体の敵に突っ込んでいく！

(404)

体当たりで一体撃破し、進路変更。強烈なGに耐え切れず、バルを装着した方の腕が瓦解した。タケシ「がんばれー！」 ワク「ガンバール！」 レールガンを頂点として、流星のような弧を描いて敵に突っ込むガンバール。衝突と同時にトリガー・オン！ タケシ「シュウウウト！！」 ワク「エキサイティイイイン！」

(405)

ボロボロに傷ついたガンバールは、それでもなお、その巨体を雄々しく空に羽ばたかせていた。その背後で最後の円盤型エイリアンが爆散飛散激散する。タケシ「やつたぜ！」 ワク「ウイー・ウイ・ウイン！」 撃破ポイント198。タケシ「ちっくしょー、これでもまだワクに負けてるぜー！」

(406)

現在の最高撃破ポイントは302で、保有者はルーマニアに住む

10歳の少年だ。ガンバールのプレイヤーは世界中により、ワク達も彼らとタッグを組んで遊ぶ。ワク「グッゲーム！」タケシ「ぐつげーむ！」だからワクは頑張って英語を勉強したのだ。独学なので見事な日本英語になってしまったが。

(407)

タケシ「よし、次だ次！」一人が次のステージに進もうとしたその時、ワクにアフレルからDMが来た。ワク「アリトル・ウェイティン」タケシ「ほい？」ワクはいつたんアプリを切つてDMに集中した。こんな時間にお父さんからDM。なんだろう？ アフレル『ワクー、今ちょっとといいかー？』

(408)

ワク『ホワツツ？』アフレル『仕事が決まつたぞー』ワク『コングラツチュレイション！』アフレル『ありがとー。でも困つたことに単身赴任なんだ』ワク『タンシンフーン？』アフレル『ソロ・アサインメント』ワク『OH！』英語で言つた方が通じるつて……とアフレルは思つたり思わなかつたり。

(409)

アフレル『やつぱ、いやか？』ワク『うーん……ノープロブレム！』アフレル『そ、そうか』あつさり問題なしと言られてホツとしたような、でもちょっと寂しいような、そんな複雑な思いがアフレルの脳裏に巡つた。ワク『ホワツツ・ワーク？』アフレル『んとなー、ガンバールの開発なんだ』

(410)

ワクは興奮のあまり、その後30分くらいの記憶が吹つ飛んだ。タケシ君がいうには、部屋の壁が突き破られるかと思ったとか。防音性の高いお家にも関わらず、近所から「子供が雄たけびを上げて

「じとうるさい」との苦情が入ったとか。とにかくすゞい興奮っぷりで、一時的にフォロワーが半減したくらいだ。

(411)

その日の夕方。ヨコはタケシ君のお母さんにお詫びのリプレイをしているところだった。ヨコ「うちのワクがご迷惑をおかけしました」タケシママ「いえいえ、男の子はあれくらい元気な方が良いんですね、オホホホ。我が家家の防音機能がまだまだということですよ、ウフフフ」

(412)

ヨコはリプレイを切ると、家族のみんなに向かってポツリつぶやいた。ヨコ「タケシ君とのママは、なんであんなにこだわるのかしら? 防音に」みんな一様に首を傾げたが、これはという回答を思いついた者はいなかつた。それよりもっと大事なことがある。ヨコ「あなた、就職おめでと!」

(413)

アフレル「あ、ありがとうございます、ヨコ」ヨコ「ううん、明日からお仕事頑張ってね。今夜はお祝いにお赤飯を炊いたのよ」アフレル「うつ」実はアフレル、赤飯があまり好きではない。特に甘い豆の入っているのが苦手で、彼の中で甘いご飯は、ご飯とする認識されない程のシロモノなのだ。

(414)

アフレルは自分で背広のシワを伸ばしながら、正直肩身の狭い思いだつた。明らかに妻の機嫌が悪くなつていて。それもそうだ、単身赴任なんて大事な事を、相談もなく決めてしまつたのだから。アフレルはDMを送つた。アフレル《ねえヨコ、怒つてる?》ヨコ《ううん全然。なんで?》

(415)

アフレル『いや、僕一人で大事なこと決めちゃったからさ……。
気にしてないならいいんだ』　ヨコ『うん、別にそのことは気にし
てないわ。あなた甘い赤飯苦手だつたけど、塩豆の赤飯なら大丈夫
よね』　アフレル『え？　うん、全然OKだよ！　何でも食べるよ
！　だって、明日からはもう……』

(416)

ヨコ『秘密基地の』はんつてどんなかしらー、あなた何食べたか
ちゃんと教えてね。参考にしなきゃ』　アフレル『うん。『ご飯を食
べる時間はみんな合わせよう。食べるものは別になっちゃうけど、
やっぱりみんなで食卓囲むつて大事だと思うし』　ヨコ『ええ、そ
うね。ちゃんとしないとね』

(417)

夕食後。ノルコはワクの部屋で、ガンバールについて教えて
もらっていた。ワク「ウイ・ビート・ハイリアン・ウイズ・ガンバ
ール」ノルコ（ようわからんのう、巨大口ボツトつてなにかー？）
話をしたり聞いたりしながら姉弟は、晩御飯の時から両親が口を開いていないことを気にしていた。ワク「へい……」

(418)

イズミ家の「」は現在、ワクのツイートだけになっている。きっと
パパとママはDMで話し合つてるんだと思う。しかし両親ともム
ツツリしている状況は、子供にとって居心地のよいことではない。
ワク『喧嘩？』　珍しく日本語DMのワク。しかしノルコに出来る
ことは、口をへの字にするくらいなものだつた。

(419)

ルイ「ノルコノルコノルコー！」 突然ルイからノルコにリップライが来た。ルイ「ちょっととちょっと！ お父さんがガンバールの研究員になつたつて本当？！ マジ本当？！」 突然まくし立てられて、ノルコはしばらくポカーンとしてしまつた。しかし考えて見れば、どのみちつぶやけない。

(420)

ルイ「ああー、もう！ ノルコと話したい話したい話したい！」 最近全然遊んでないじゃないか！」 そんなルイの熱烈ラブコールに、ノルコはほんのりと頬を赤らめる。ノルコ（そうだ！ こういう時こそお爺ちゃんのＰＣ！） ノルコはさつそくゲンお爺さんのＰＣを立ち上げた。

(421)

ゲン「私もみんなと話したいと、いつも思つてゐるよ」 ルイ「わつ、びっくりしたー。ノルコか。うん、そうだよね。ごめんねなんか無理言つちゃつてさ。でも凄いねお父さん。巨大ロボット開発なんて、地球上のちびっ子たちの憧れじゃないか」 ゲン「でもノルには良くわからない」

(422)

ルイ「わかんない人にはわかんないのかなー、巨大ロボットのロマン！ 強くて大きくて黒光りしてゐんだぜ！」 ノルコはそういうのより、可憐で小さくて薄桃色なものの方にロマンを感じるタイプ。ゲン「そんなに凄いの？」 ルイ「うん、超すごい！ JPN 48000のメンバーになるくらい！」

(423)

それはちょっと微妙な凄さだとノルコは思つ。JPNのメンバーってそこそこオシャレで、あとは踊りと歌をちゃんと覚えれば、

案外簡単になれちゃうものだ。なんたって4万8千人もいるのだから。ルイ「なんかさ、最近ノルコの周りで色々起きるね。気付いてるか？ 今ひそかなノルコブームなんだぞ？」

(424)

ゲン「私がブーム？」 ルイ「うん、近頃フォロワー数どんどん増えてるだろ？」 確かに、ルイの言つとおり、近頃ノルコのフォロワー数はうなぎのぼりだ。ヤマオ君がつぶやいた時にドンと増えて、ゲンお爺さんのPCを使つようになつてからもジリジリと増え続けている。ゲン「ふーむ」

(425)

ゲン「そんなことよりツイート治したい」 ルイ「はは、まあそうだよね。フォロワー数が増えたつて自分がつぶやけないんじゃ切ないよね」 ゲン「うん」 呟けないことは確かに切ない。しかしノルコは最近、呴けないことを逆に利用するようになつてきた。つまり、体よく無視できるのだ。

(426)

ゲンお爺さんのPCを使つようになつてから、知らない人にフォローされたり、リプライされたりすることが多くなつた。その多くはゲンお爺さんのフォロワーさんだ。お爺さんは本当に氣に入つた人以外はブロックしていたようだけど、亡くなつてからもそれを続けることは出来ない。不良フォロワーも増えてきている。

(427)

亡くなつてからもフォロワーが増えるなんて、ゲンお爺さんは凄い人だつたんだなとノルコは思う。でもそのフォロワーさんの中には、殆ど嫌がらせに近いリプライをノルコに飛ばしてくる人もいるのだ。そういう人たちをノルコは、呴けないことを理由にして無視

している。

(428)

ルイ「ノル?」ノルコは少し考えたのち、DM機能を使ってルイに返事を送った。ゲン『このじる、変なリプライが来るの。知らない人から』 ルイ『え、まじで? 痴漢か? !』 ゲン『ううん、何か政治みたいなこと』 ルイ『政治? 何て言われるんだ?』 ゲン『私がゲンお爺さんの正統な後継者だとか、そんなの』

(429)

ルイ『うわ、それってゲンお爺さんの熱烈な信者なのかな。迷惑な話だね。ブロックしちゃえば?』 ゲン『そのほうがいいかな?』 ルイ『うーん、その人が何て言ってくるのか詳しく知りたいな。明日、学校の後にノルんち寄つていい? 見てみたいよそれ』 ゲン『そうしてくれるとうれしいな』

(430)

ノルコは母に、明日お友達が遊びに行くことを伝えようとしたけど、呴けないので代わりにルイが伝えることに。それから母がノルコに「OKよ」とリプライを入れるという、ちょっと回りくどいことをする。ノルコはPCを閉じ、ガンバールのことですっと友達と喋っているワクをよそ目に、お風呂に向かった。

(431)

ノルコはお風呂の脱衣所に入つて扉にカギをかける。洗濯機の上に畳んだパジャマを置き、そして服を脱ぎ始める。ノースリーブの夏物セーター。バナナのプリントが入つたシャツ。ベージュ色のショートパンツ。水色の横じまが入つた靴下。全部綺麗に畳んで、洗濯機の横のカゴに入れていく。

(432)

全ての衣服を脱ぎ終えて、カゴを覆うようにしてバスタオルを置くと、ノルコは浴室へと入つていった。ノルコ（ふーんふーんふーん……）呴けないので頭の中で鼻歌をハミング。まずはシャワーを浴びる。こうして体を流してから湯船につかり、それから体を洗つたりするのがイズミ家の流儀だ。

(433)

ボディソープで体を洗いながら、ノルコは自分の体をチェックする。最近とにかく肉がつく。小さかつた頃のノルコはガリガリにやせていて、あばら骨とか尾てい骨とか、とにかく骨が突き出ていた。ノルコ（……お相撲さんになっちゃうー）成長期なので仕方ない

ことながら、やはりそこは女の子。

(434)

ノル口（……ハツ！）ノル口はお風呂場にT字が設置されることを思い起こして、一瞬息を飲んだ。でもすぐ、それがなんのこつけやと思い直す。お風呂場で自分の体をしげしげと観察している女の子なんて、はしたなすぎて家族にも知られたくない。でもT字にはそこまでは記録されない。

(435)

イズミ家のお風呂T字には色んなことが記録される。誰がどれだけお湯を使ったか、何のお湯に何分つかったか、お風呂のフタはちゃんとしたか。さらには、どんな歌をハミングしたかとか。どれも資源の有効利用と、家族の健康管理のために欠かせない情報だ。そのためノル口は、先ほど監視されているような気分になったのだ。

(436)

ノル口（お風呂にはT字があるけど、トイレにはT字がない。不思議）体を洗い終わったノル口は、再び湯船につかりつつそう思う。お風呂とトイレの間に何か違いがあるのか？ わかるような、わからないような。しかしどにかく法律で決まっている。トイレにT字を置くことは現在タブーなのだ。

(437)

ノル口（そもそもトイレにT字を置いてどうするかー？）お小水の量でも調べて記録するのだろうか？ 後はいつ誰が何分利用したかとか？ そんなことはまっぴら御免だと、ノル口は素直に思う。もつともらしい利用目的としては、緊急時の通報用だが、それだって別にT字でやる必要はない。

(438)

ノルコは顔を湯船に半分沈めてブクブクしつつ、改めてT-Lを設置することの意義を考えた。一番重要なT-Lの機能は、その場でなされた会話や独り言を記録するというものだ。記録しておけば、あとでゆっくり状況を省みることが出来る。必要があれば、かなり過去まで遡って検討することができる。

(439)

次に、その場に人や物がどれだけ存在したかを記録することだ。人々がお互いの行動を把握しやすくなり、物をなくした時もすぐにT-Lをたどって発見できる。誰もいない場所で一人ぼっちになつても、かつて人々がそこで活動していた時のT-Lを眺めたりして暇をつぶすことができる。

(440)

いまやT-Lは、生活に欠かせないものという次元を超えて、空気や光のように、じく当たり前に存在するものになつている。それがトイレだけには適応されていないのだ。トイレにT-Lを設置しないことで、人々は一体何を守っているのか？ 改めて問われてみれば、なんとも答えようもないことだ。

(441)

こんな難しい問題を、まだ小学5年生のノルコに解けるはずも無く、しかも何だかのぼせてきた。ノルコ（そろそろあがろう……）
そうノルコが思つたとき、唐突に一通のリプライが飛んできた。
ミギノウエ「この間リプライした件、考えててくれたかな？ ノルコ
ちゃん」 またきた。ノルコは風呂場の中で一人、臨戦態勢をとつた。

(442)

しかしノルコは、いつも通り無視することにした。ミギノウエー君はミスター・ゲンのひ孫さんだ。そしておそらくは彼と似たポリティクスを持っている。と僕は推測する。やはり君は、ゲンお爺さんの意思を継いで、政治の表舞台に立つべきだし、それが出来る人物だと僕は思う」

(443)

ミギノウエーという人物は、トウキヨウのアカサカに住んでいる男の人で、年齢は34歳。職業はプログラマーとなっている。彼はノルコに対し「政治の表舞台に立て」という一貫した主張を続けてい る。ノルコ（……一体何なんだろう?）さらに困ったことに彼は、ゲンお爺さんの相互フォロワーなのだ。

(444)

ゲンお爺さんがフォローしている（生前の話だが）ということでのノルコはこの人を信用したいとも思っている。しかしその主張が「政治に首をつつこめ」だというのは、いかにも胡散臭い。ノルコは逆に色々質問してみたい気分だったが、いかんせん咳けない身。それ相手も気にしていいらしい。

(445)

ミギノウエー「君が咳けない病気だつてことは良くわかつてゐるし、別にそれで全然かまわないんだ。ただ僕の話を聞いてくれさえすれば。その方が僕らにとつても都合が……いや、特に深い意味は無いんだよ、ゲフフンッ」このよつた含みのある言い回しをちょくちょく使ってくることも、ノルコをイラッさせた。

(446)

ミギノウエー「改めて言つておくよ。君にはゲンお爺さんの意思を継ぐ資格と、そしておそらくは義務がある。この国の国会議員は、

全国民による相互投票によって、法案ごとに選出される。そこに年齢制限は存在しない。つまり小学生の君でも国会での議決投票に加わることができるんだ」

(447)

ノルコ（それは知っています！）　体内ツイッターの普及によって、選挙システムも変化した。国民は、自分達の知る人の中から「この人が国會議員だつたらいいのに」と思う人に投票することができる。しかし選出されるのは投票数の多い人ではなく「投票関連度」の高い人だ。これは少しわかりにくい。

(448)

例えば、ノルコがルイに投票し、ルイがヤマオに投票した場合、ノルコは“ヤマオを支持するルイ”を支持したことになる。つまり、ルイとヤマオの両方に投票したことになり、票が累積されるのだ。この場合、ノルコ〇票、ルイ1票、ヤマオ2票という形で、票が振り分けられることになる。

(449)

もし、その状態でヤマオがノルコを投票すれば、そこにノルコ・ルイ・ヤマオのループが出来上がる。こうなった場合、票は累積されず、それぞれ1票として処理される。この操作が現在の日本国民の間で行われるわけだ。つまり理論上の最大獲得票数は（全人口 - 投票棄権者数）となる。

(450)

ノルコ（だからって私が国會議員に選ばれるわけない、常識的に考えて）　ノルコ達は、友達同士で投票しあつたりするが、結局ループがたくさんできてしまうので、大した票にはならない。ミギノウエー「果たしてそうかな？」　ノルコ（！？）　ミギノウエー「おっ

と、なんでもない。ゲフフンツ「

(451)

ノルコ（今の、頭の中を覗かれた感じは……） ホウさんみたいだとノルコは思った。そしてその仮定が意味するところは。ノルコ（GPTL！？） ホウ以外にもGPTLを利用してしている人がいてもおかしくない。ノルコは愕然とした。このミギノウエという人はきっと、私を利用して政治を動かそうとしているんだ、と。

(452)

ノルコはお風呂を出るにした。そしてパジャマに着替えている間中『何も考えないこと』に徹した。思考を読まれてしまうのなら、何も考えなればいい。ミギノウエも潮時と思ったのか、ピタリとリプライを止めた。今の世の中、夜遅くに偏執的なリプライをし続けても、何ひとついいことはない。

(453)

ノルコは脱衣所を出た後も何も考えなかつた。何も考えずお風呂上りのスピードリンクを飲み、自室の絨毯にコロコロをかけ、ランドセルにノートとマイ箸を入れ、机の上のピヨッターをジーッと見つめ、洗面所に行って歯を磨いた。ノルコ（思つたより簡単だ何も考えないの。あ！） 考えない考えない。

(454)

何も考えないようにしていたノルコは、家族に話しかけられたら何かしら考えなきやいけなくなるな、なんてことも考えず、まるで夢遊病に罹ったようにフラフラとダイニングに歩いていつて、食卓の椅子に座つた。向かいの席にアフレルが座つていた。テレビがついていて、『道講座をやつっていた。教育チャンネルだ。

(455)

ノルコ（ ） ノルコはもつまつたく完全に無思考の境地に達していた。自分が何も考えていなことも気付いていなかつた。一方アフレルは、テレビの方を向いてはいるが、目の焦点はそこではなく、遙か彼方だつた。何か物凄い勢いで思考しているようにも見えたし、ノルコと同じく何も考えていなようにも見えた。

(456)

そのまましばし時が流れた。テレビだけが、ダイニングの沈黙を癒していた。テレビ「弓は強く握ってはなりません。人差し指と親指の股に軽く気持ちをこめ、小指の付け根を締めます。俗に卵握と呼ばれ、ちょうど生卵を手に持つくらいの力加減です。強く握ってしまうと弓が返らず、矢勢が弱まり、狙いも定まりません」

(457)

テレビ「執り掛け、打ち起こし、引き分け。一連の所作の中でも常にこの卵握を意識します。何度も繰り返し練習し、意識しなくとも出来るようになります。親指が的に向かつて伸び、角見が十分に利いていれば、離れの際に弓がクルリと手の甲側に返ります。以上が『手の内』の作り方です」

(458)

テレビ「手の内を隠すという言葉がありますが、それは弓道の手の内からきていると言われています。手の内の作られ方は射手の数だけあるといわれ、弓道において最も工夫がなされる個所です。日々の鍛錬の中、何年もかけて作る大切な手の内ですので、そうやすやすと人に教えるわけにはいかない訳ですね」

(459)

何も考えていないノルコは、もちろん弓道講座の内容など頭に入

つていなかつた。目の前でアフレルがボーッとしていることも頭になかつた。今、ノルコの頭にあるのは、真っ白な心地よい海だ。真っ白な海水が、真っ白なしぶきをあげ、真っ白な砂浜に押しては引いている。ザザーン、ザザーン。

(460)

アフレル(…………あつ) アフレルがノルコの存在に気付いた。アフレル(いつからそこに……?) 娘は弓道講座を熱心に見ていた。まるでテレビの中に溶け込んでしまつたのではないかと思うくらい、熱心に。アフレルはいつか娘が弓をやりたいと言つてきたら、喜んで了承してあげようと思つた。

(461)

ヨコ「あなた、お風呂は?」 寝室で布団を敷いているヨコがツイートした。家丁しが一段下がり、その上にヨコのツイートが書き加えられる。アフレル「あつ、うん、今入る!」 アフレルはノルコを横目にチラつと見ると、せかせかとお風呂に向かつていった。ヨコが寝室で、一人静かにため息をついた。

(462)

妻がムツツリとした様子で「別に怒つてないわ」という時は、間違ひなく怒つている。事実ヨコは怒つていた。夫が勝手に単身赴任を決めたことではなく、一番最初にワクに相談したためにだ。仮にも一家の大黒柱が、まだ10にもならない息子に、就職に關する相談をしたのだ。

(463)

その事実はヨコの美意識に反していた。アフレルの美点は、いつも純真で裏表がないことだが、しかしそれは時として「いくつになつても大人にならない大きな子供」という印象をヨコにもたらす。

先ほど「あつ、うん、今入る！」だつて、まるで言葉を覚えたばかりの子供のようだ。

(464)

単身赴任のことも、いつそ夫の独断で決めて欲しかつた。なんなら家族」と引越したつて良かつた。「オレは秘密基地の研究員になることにした、だからお前達もついてこい!」男ならそれくらいの強引さや『氣概』があつてもいいんじゃないかとヨコは思う。そういうなきや張り合いがない。

(465)

しかしそれを今の夫に求めることは、たぶん難しいだろ? ヨコ(……あらやだ!) 私は今いつたい何て考えた? 今の夫にはつて思つた? 夫は今も昔もこれからも、あの人だけのはずではないの? そう思いつつも、ヨコの脳裏には、先日ナンパをしてきたイタリア風の青年の面影が浮かんでいた。

(466)

あなたがガンモドキを忘れるだろ?」とを予感しておりましたので。 それって一体どんな予感なの? ヨコは今日までに何度もそう問い合わせたが知れない。確かに変わったナンパ術だ。しかし重要なのは形ではなく、思いの強さだ。ヨコ(いけない、疲れてるせいか、おかしなことを考える……)

(467)

ヨコは早めに寝てしまおうと思つ。寝る前に炊飯器のタイマーを確認しようとキッチンに向かつた。通りがけのダイニングにノルコがいた。ヨコ「あら? ノルコな見てるの?」ノルコは『道講座が終わったあとに「これから番組予定」を見ていた。恐ろしく熱心に。まるで田がテレビになつてしまつたかのように。

(468)

ヨコ「??」 ヨコは何がそんなに気になるのだろうと首を傾げた。何かとても重要な番組でも予定されているのだろうか? いや、そんなことはない。ヨコ「……えつ?」 ノルコが唐突に椅子から立ち上がった。そして耳たぶ操作でテレビを消す。まるでゼンマイ人形のようなカチカチとした動きだった。

(469)

ヨコは変だなと思った。しかし出来ることは一つしかなかつた。ヨコ「ノルコ」 ノルコは反応しない。ヨコ「ノルコ!」 強く言つて肩をさすつた。ノルコがその場でビクッと跳ねた。ヨコ「どうしたの?」 ノルコはしばらく口をポカーンと開けて、それから何かに気が付いたように首を横にプルプルさせ始めた。

(470)

ノルコはその後すぐに走って出て行つてしまつた。ヨコはキッチンでオロオロとした。どうしちゃつたの私の子。明日お医者さん? それとも今すぐ? しばらくしてヨコにリプライが来た。ゲン「おふろでのぼせた~」 そのツイートで、ヨコの胸中の不安がスッと溶けた。ヨコ「もうノルコつたらー」

(471)

ノルコもノルコでホッとした。変な子と思われてしまうところだつた。やはり人間、何も考えないで生きて行くのは難しい。ノルコ(もう寝るから-) ノルコは自分の心を覗いているかも知れない誰かに向かつてそう唱える。そして布団をかぶつて電気を消すと、すみやかに夢の世界へと潜り込んだ。ノルコ(おやすみ!)

(472)

きーんこーんかーんこーん。朝の予鈴がなつた。遅ればせに登校してきた子供たちが、足早に教室へと向かっていく。ジェネ「うーん……」保健室の一角では、机の上で保健医のジェネ先生がノルコのバイオデータをチェックしていた。ジェネ「なかなか治らないわねえ……ノルちゃんのツイート」

(473)

ジェネ先生はウェーブがかつたブロンドをさりげなくかき上げ、淹れたばかりの特濃コーヒーを口に運ぶ。近ごろ蒸し暑い夜が続いて寝不足ぎみなのだ。ジェネ「バイオロジーネットワークに異常はないし、もういつツイートが戻ってもおかしくない状態だけど」そう言つてジェネ先生はうーむと考え込む。

(474)

ジェネ「もしかして、つぶやき方を忘れている? 何かきっかけみたいなものが必要?」しかしジェネ先生には、そのきっかけの作り方が今ひとつ思いつかない。ジェネ「困ったわね。そのうち自然にあるのかしら?」とんとんとん。ドアがノックされた。ジェネ「はーい、どうぞー」

(475)

クオ「失礼するおつ」入ってきたのは「眠りのウイスパー・ボイス」の二つ名を持つクオ先生だった。ジェネ「あら、どうしたんですか?」クオ「いやあ、そのお。ちょっと今朝からお腹の調子がよくないんだお。何かいい薬ないかなと思つておつ」ジェネ「ふ

わああ～～。ちょっと待つて下さいね

(476)

生あくびを噛み下しつつ、ジェネ先生は棚から整腸剤を取り出した。ジェネ「はい、どうぞ」 クオ「どうもなんだおつ」 クオ先生は薬を上着のポケットにいれると、ぼんやり窓の外に目をやつた。クオ「今日はいい天氣ですね」 ジェネ「ええ、本当にー。うつらうつら」 ジェネ先生、今にも寝そう。

(477)

クオ「今週いっぱい天氣がいいらしいんですよ。それでその……今度の水曜の祝日、もしお暇だったらお……」 ジェネ「こつくり、こつくり」 クオ「一緒にパラグライダーなどやりにいきませんかおっ、おっおっおっ」 クオ先生は額に汗だったが、ジェネ先生は鼻から ZXZマークがもれていた。

(478)

きーんこーんかーんこーん。お昼休みの予鈴がなる。ジェネ先生が催眠術のような眠りから覚めたころ、ノルコ達のクラスでは給食の準備をしていていたところだった。ヤマオがトレーを渡し、ルイが白飯をよそい、ノルコがつみれ汁をつぎ、レイタがだし巻き卵をのせ、リンが金平と佃煮を添え、カズノリが牛乳を配る。

(479)

給食の準備ができたころ、突然レイタがノルコに言つてきた。レイタ「だし巻きやるよ。好きだろ?」 そういうつてだし巻き掴んだトングをググイと突きつけてきた。ノルコはオタマを持ったままボカーン。ノルコ（……いつたいどういう風のふきまわし?） しかし、だし巻きはしつかり頂いた。

(480)

レイタ「……悪かつたな、いろいろ」 そう気まずそうに言い捨てる。レイタは自分のトレーを持って行ってしまった。ルイ「なんのかな？」 いまさらノルコは首を傾げつつ、自分の分のみれ汁をついで席へ向かう。そして全員着席し「いただきます」をする段取りとなつた、その時……。

(481)

レイタ「ちょっとまつた！」 レイタがいきなり立ち上がり立上がつて叫んだ。教室にどよめきが走る。レイタ「今、この場でガンバールやつてるやつ、スタンダップ！」 申し合わせたかのように、クラスの半分以上が立ち上がつた。ルイもなんとなく、つられて立ち上がつてしまつた。

(482)

ルイ「レイタあ？」 レイタはルイの怪訝な視線も気に留めず言う。レイタ「俺は……俺は今ほど嬉しいと思ったことはない！」 といつて胸の前に握りこぶしを作る。レイタ「全員、ノルコに向かつて敬礼だ！」 ぱぱぱつ！ いくつもの敬礼が、突然ノルコに向かつてなされた。ノルコ（な、なにごと！？）

(483)

ノルコばんざーい！ ノルコのパパばんざーい！ 戦え我らのガンバール！ 地球の未来に光あれ！ 謎の唱和斎唱が、ノルコを中心としてなされていた。ルイ「……そういうことか」 レイタ「俺、ノルコのクラスメートでほんつとうに良かつたぜ！ 友達の父さんが秘密基地の研究員だなんて、まじ最高だぜ！」

(484)

レイタ「なあノルコ！ 俺たち友達だよな！ な！ 食いもんを

交換する仲だよな！ 大親友だもんな！」 そしてノルコの手をとり強制ハンドシェイク。レイタ「で、今度ノルコの親父さんの職場に行つてみたいんだが」 「と、そこまで言つたところで、ノルコの膝蹴りが彼の尾てい骨に炸裂した。レイタ「あ”――！」

(485)

給食後、ノルコ達は会議を開くことにした。例の迷惑リプライについてだ。放課後ノルコの家について、ゲンお爺さんのP.C.D「ミギノウエ」について調べるのだ。レイ「犯人はミギノウエってやつなのか、変わった名前だな」 カズノリ「しょ、小学生に政治の話をけしかけるなんて。ふ、フトドキな人だよ！」

(486)

ノルコの席を囲むようにして、ルイ、リン、カズノリが座つている。少し離れた窓際では、ヤマオがボーッと外を眺めている。レイタは体育館だ。テコンドーの修行をするらしい。リン「ミギノウエ……さん？ なんだかどこかで聞いたような？」 ルイ「えっ、どこで？」 リン「どこでつていうか……なんだかいつ？」

(487)

カズノリ「あ！」 秀才肌のカズノリ君が何かに気づいたようだ。そしてヤマオの方を振り向いた。カズノリ「や、ヤマオ君の。よ、四番目のツイート」 ノルコ（…） ルイ＆リン「あ！ そうだつた！」 そして4人の視線がヤマオに集まる。ヤマオ「……」 ヤマオの切れ長な目と福耳が、ゆづくづくこちらを向く！

(488)

一同 ヤマオはしばし首だけをこぢらを向けた状態で佇み、そして再び窓の外に視線を戻した。ルイ「なあヤマオ。まさかとは思うけど、何か関係あつたりするか？」 ミギノウエって人と？」 ヤマ

オは両腕を組むと、やや上方を見やつて考え込んだ。そしておもむろに首を振る。知らないということだ。

(489)

ルイ「そうだよな、ただの偶然だよな。『めんなヤマオ』 ヤマオは手の平をこちらにかざし（問題ない）と伝えてくる。カズノリ「な、何はともあれ、げ、ゲンお爺さんとの、か、関係を、し、調べないと、ねつ」 政治問題とかに強そうなカズノリも、今日はノルコの家に行くことになつていて。

(490)

やがて5時限目の始まりを告げるチャイムがなつた。ノルコ達は席に戻つて準備をする。タッチパネルになっている机の天板を綺麗に拭いてノートを起動し、耳たぶクリックで教科書を表示、タッチペンを机の隅に置いて準備完了。ノルコ（……ん？） ヤマオがノルコの方を見ている。なんだろう？

(491)

先生が教室に入つてきて、電子黒板の落書きに黒板消しをかけていく。その間中、ヤマオはジッとノルコを見つめていた。ふくよかな顔の輪郭に埋もれる切れ長な瞳。その瞳がさらに細く糸のようになる。極限にまで収斂されたその視線は、ノルコの網膜さえ貫いて、まるで頭の中に直接メッセージを伝えてくるかのようだった。

(492)

「起立！ 礼！ 着席！」 日直の号令とともにノルコはヤマオの視線から開放された。ノルコは席に着きつつ思つ。ヤマオ君は私に向けて何か重要なことを伝えてきたのでは？ 実はミギノウエーっていう人と関係がある？ ヤマオ君とミギノウエさんは、実はやつぱり知り合いなのか？

(493)

考えるほど謎は深まるばかりだ。ノルコ（問題が山盛り…）つぶやけない病気、ミギノウエの政治勧誘、秘密基地員になったお父さん、ナンパされたお母さん、ホウとGPT、ヤマオの意味深な視線…。ノルコ（もう何が何やら…）まったく思考がまとまらない。ノルコはひたすらタッチペンを回し続けるのだつた。

(494)

放課後になると、一同はまっすぐノルコの家に向かった。女子3人の中に男一人のカズノリ、それとなくヤマオ君をさそつてみた。すると以外なことに、二つ返事で了承してくれたのだった。ルイ「ヤマオが放課後寄り道つて珍しいな！」 そう、ヤマオが誰かの家に遊びに行くなんて滅多にないことだ。

(495)

ノルコは家に着くと、心の中で（ただいまー）と言にながらドアを開けた。カズノリ「お、おじやましますつ」 ルイ「こんにちわー」 リン「おじやまですつ」 ヤマオ「…………」 母のヨコはダイニングから顔をのぞかせつつ、ヨコ「はいはー、いらっしゃー。ゆづくらしていってね！」

(496)

ヨコは子供たちが一階に上がっていくのを見送った後、お菓子のジュークの用意を始めた。ヨコ（ヤマオ君つてああいう子だったのね。なんて大人びてるのかしら、まだ小学生なのに） 玄関先でのお辞儀の仕方なども堂に入つていて、夫のアフレルにも見習つて欲しいくらいだった。

(497)

ヨコ（ヤマオ君のおうちにはお父さんがいないのよね……確か）
ヤマオは母と二人暮らしである。父親はヤマオが生まれてまもなく、まさに煙のように消えてしまったらしい。しかも、生まれてきたヤマオはなかなか言葉を発しなかった。この当時のヤマオの母の気持

ちは、想像に余りあるなとヨコは思った。

(498)

言葉を発しないヤマオは、当然ながら知能障害が疑われた。しかし3歳時の知能テストの結果、ヤマオの知能指数は平均を上回っているということがわかった。事実、ヤマオは殆どと言ってよいほど母親の手を煩わせなかつた。それどころか、気落ちしがちな母を慰めるような行動さえ見せたのだった。

(499)

EQ・IQともに人並みはずれた天才児。しかし滅多につぶやかない。ヤマオはある種のサヴァンなのではないかと考えられ、発達心理学や児童心理学に関わる人達の目を引くこととなつた。ヨコ（確かに凄い子だけど、それでもノルコのお友達に変わりはないわ）
そしてヨコはノルコの部屋にお菓子を運んでいった。

(500)

子供達はお菓子を持ってくれたノルコの母親にお礼を言つと、さつそく例のPCを起動させた。ルイ「これがPCってやつか！
なかなか使えるようにならないな」 リン「このカリカリって音なんだろ？」 カズノリ「た、たぶん。き、記録装置が、う、動いて
るんだよつ」 ヤマオ「……」

(501)

PCが起動すると、すぐにツイッター用のブラウザを立ち上げる。
カズノリ「む、僕らのツイッターと、似てるね」 ルイ「
だな。これでツイートをどんどん逆登つていけば、いずれミギノウ
エつて人のリプライに行き当たる」 リン「でもどれだけ逆登れば
いいのかな？ 下手すると終わらないんじゃない？」

(502)

一回だけしたものかと首をひねったその時、ヤマオの瞳がキラーと光った。ヤマオはノルコの肩を軽くつつくまるで「ちょっとPCいじってみていい?」とでも聞くよつて。ノルコはウンと首を縦に振る。ヤマオはさつそくマウスを片手にPCを操作はじめた。カズノリ「や、ヤマオくん……す、ごい」

(503)

ヤマオがやつたことは至極単純な操作だった。ゲンとミギノウエの名前、両方を含むツイートの検索をかけたのだ。ルイ「そうか、この手があつたか!」 リン「こんなのは普段やらないから、わからなかつたねー」 誰かさんと誰かさんが何を話していたか、なんてことノルコ達の世代は殆ど気にしないのだ。

(504)

カズノリ「さ、流石だね、や、ヤマオ君。尊敬するよ……」 そういう喋っている間にも、ノルコはゲンとミギノウエの会話をどんどん読んでいった。最初の方は、ゲンお爺さんが亡くなつた時の御悔みのツイート、その下が闘病中の励ましツイート、その中に、どうも政治っぽい話題がチラホラ混ざつてこる。

(505)

ミギノウエ「@ゲン…ああ、人類はまたかけがえのない人を失なうんですね。ああ……」
「冥福を」 ミギノウエ「@ゲン…しっかり!
気をしっかり持つてくださいミスター! 僕はもっと貴方と話たいことがあるんです!」 //ミギノウエ「@ゲン…落し物管理条例法案が否決、やりましたよ!」

(506)

ルイ「なんだか普通に親しかつた感じだね」 ゲンお爺さんが亡

くなつた時、ノル口はまづからいだつたからよく覚えてないのだが、でもその時にミギノウエ氏とこんなやりとりがあつたなんて、正直おどろきだつた。ノル口（私に政治の話ふつてくれるのも…わからぬもないかな？）

(507)
一同はさりに古いシティーを読んでいく。ゲン「@ミギノウエ：落し物管理条例案の『管理』は『監視』の婉曲表現だと私も思います。紛失物の情報を第三者機関により一元管理し、落とし主に確實に返却する。聞こえは一見よいが、要是特権団体による情報の独占であり、一方的社會監視の一助となるだろう」

(508)
カズノリ「な、なんとも本格的、的な議論だ、ね」 リン「落し物ひろつた時つて、たまに返す返さないでもめるんだよね」 ルイ「この『監視』って言葉が重要なんだな？」 ノル口はウンウンうなずく。一方監視という概念が、世の中を底なしのドロ沼に引きずりおろすのだと、お爺さんはよく言つていた。

(509)
ゲン「@ミギノウエ：もう一〇〇時間くらいぶつ続けてPCの前におるな？ 散歩でもして口に当たつてきなさい」 ミギノウエ「@ゲン・うわなぜバレタwww」 ゲン「@ミギノウエ：わしが何年ツイッターやってると思つちよるwww」 ミギノウエ「@ゲン：ちよつとコンビニ行つてきますwww」

(510)
ミギノウエ「@ゲン・ゲンさんは、宇宙人の存在つて信じてるですか？」 ゲン「@ミギノウエ：いてもおかしくないじやろ」 ミギノウエ「@ゲン・侵略とかしてきたらどうします？」 ゲン「

@ミギノウエ・全力でバトる」ミギノウエ「@ゲン・えつ…
ゲン「@ミギノウエ・血の氣の多い奴等にはそれが一番」

(511)

ルイ「ずいぶん仲よしだね。Wの連発にはちょっと時代を感じるけど。ゲンお爺さんはどんなきつかけでこの人と相互フォローになつたんだろうね」 リン「ゲンおじさん、相互少なめ」 カズノリ「あ、相手を、え、選んでたんだ、ね。な、何かき、基準があつたの、かな?」 ノルコはしばし考えた後、キーボードに手をかけた。

(512)

ゲン「何となく良い感じのする人をフォローしてた」 カズノリ「な、なんとなく?！」 ゲン「言葉の汚い人はフォローしなかつた」 ルイ「まあそれはあるね」 ゲン「神秘的な感じのする人が好き」 カズノリ「な、なんでそんなこと知ってるの?」 ゲン「むかし好きな女の人のタイプを聞いたの」

(513)

ルイ「うんまあ、ツイートみてる分にもそれとなくわかるかな。ノルコのお爺ちゃんつて、きっと風変りな人に好かれるタイプなんだ」 言われてみれば、ミギノウエという人はどこか理解不能なところがある。自分だけベラベラ喋つて、相手の返事を待つことなく消えてしまふあたりなんか。本当に何を考えてるんだろう。

(514)

ルイ「頑張つてT-S逆登つてみよつ」 それからノルコ達はひたすらマウスをカチカチやつてT-Sを過去へと逆登つて行つた。ノルコ（みんなお菓子食べるの忘れない?）ノルコに促されて気づいたみんなは、マウスを交代でカチカチやりながらブリツツやら揚げ団子やらをつまんで食べた。

(515)

ヤマオ「…………」ヤマオはジュークのストローを咥えたままジーッとディスプレイを見つめている。マウスを必死に力チカチやつてるのはカズノリで、だんだん慣れてきたためか、Tシは結構な速度で流れしていく。しかしヤマオはその一文一文をしつかり読んでいるようだった。ノルコ（読めるの？…）

(516)

ルイ「よし！ 行き着いたぞっ、みんな！」一同、PCの前につめよる。【投稿日時：2009年8月2日12時34分】ミギノウエ「貴方の考える愚民思想の問題点とは？ RT@ゲン・とかく大抵の発案者は愚民思想の持ち主で自分だけが賢いとおもつとるこれが一人のファーストコンタクトだった。

(517)

ルイ「……な、なんだ?」一同沈黙。カズノリ「に、人間のほとんどは愚かだから、だ、誰か頭のいい人が、し、し、指導してあげなきや、い、いけないって考えだけど……」ルイ「そうなのか? なんだかムカツとする考えだな。アホはアホなりに考えてやつてるしんだし」リン「うーん、私は政治の話とかさっぱり」

(518)

カズノリ「つ、続きを読んでみよ」カズノリの提案で一同PCに目を戻す。思いがけないキーワードに、みな少々恐縮している。ゲン「特権集団による権力の独占は、往々にして公共の利益に反する決断を生む。もつとも、これは一般論だが。RT@ミギノウエ：貴方の考える愚民思想の問題点は?」

(519)

ミギノウエ「@ゲン：個人の管理能力を超えた今日の情報氾濫が、市民生活を混乱させている事実があります。それを防ぐための一元的管理は、検討されて然るべきでは?」ゲン「@ミギノウエ：その混乱を乗り越えることでのみ人は進歩する。一方監視が作る仮初めの平穏は、いずれ利権の温床となり社会を蝕むだろ」

(520)

ノルコ（ゲンお爺さん、なんだかとつても難しいお話してる……）ノルコはそう思つたが、その一方で。ノルコ（……でも何となくわかる気がする）とも思つた。カズノリ「ど、どうやらミギノウエさんは、げ、ゲンお爺さんのポリティクスに、興味を持つて、り、

リプライしてきたんだね

(521)

ルイ「いやまてよ、何となく対立してゐるよつに読めないか?」
リン「うんっ、私もそう思つ!」そして一同はさらに読み進める。
ミギノウエ「@ゲン：ではプライバシー問題はどうします? バイ
オツイッターは個人情報の秘匿性を奪いました。取り戻すにはセキ
ユリティー団体による管理が必要です」

(522)

ゲン「@ミギノウエ：プライバシーという概念は不变ではない。
時代によつて変化する。現在のような相互監視社会において、プラ
イバシーは一種の贅沢品であるし、過剰な保護はかえつて猜疑心を
深め、人々を孤立させる」ミギノウエ「@ゲン：隠しが人々を
孤立させると言つのなら、いずれ人は服すら着られなくなります」

(523)

ルイ「そりやただのあつけじゃないか! やつぱちょっと変だ
ぞこのミギノウエつて人」リン「服は着ないわけにいかないよ…
…」カズノリ「ん? ん?! つ、次のツイート!」ゲン「@
ミギノウエ：世の中には、一家そろつてスッポンポンという人々も
おる。いずれ人類がみなそうなる可能性は否定できまい」

(524)

ノルコ(……確かにいるけれど) いわゆる裸族と呼ばれる人々
であるが、まさかそんな切り替えしをするとは。みんな、自分なら
こんな質問された時点で無視を決めてしまうだらうと思つていた。
ルイ「凄いね、ノルコのひい爺さん」リン「で、でもすっぽんぽ
ん?! えー?」

(525)

ノル口（そういえば……）以前、こんな事件があつた。プライバシーの保護を訴える過激な人たちが、無作為に抽出した人々の入浴シーンをネット上にばら撒いた事件。そうすることで、人々のプライバシー意識に火をつけようとしたのだ。今の世の中、その気になればこんなことも出来てしまうのだ、と。

(526)

無論、隅々まで相互監視の行き届いたツイート社会において、彼らの行動は見逃されるものではなかつた。すみやかに晒し上げられ、社会的な制裁を受けた。件の入浴シーンは、発信元から末端までくまなく検索され、完全に消去された。全てバイオツイッターを使ってたどるので、労力はそれほどかからないのだ。

(527)

晒された側の人達は「別に恥ずかしいとかはない」と主張。晒そくとする側が逆に恥を晒して憲りるという、相互監視社会らしい決着がついた。ルイ「服を着ることが常識じゃなくなるつて、あるのかな？」　リン「あ、大昔はみんな裸だつたんだろうけど」　カズノリ「つ、続きを読む……」少年は顔を赤らめていた。

(528)

ゲン「@ミギノウエ…」う考えればどうか。生まれたままの姿を保護すべき個人情報と捉え、裸になつたり裸を表現したりしてはいけない、という決まりを作つたとする。それで個人のプライバシーが守られるのだろうか？　私たちはただ『裸を表現する自由』を特定団体に奪われただけではないだろうか？

(529)

ゲン「@ミギノウエ…決め事というものは、だいたいが人から自

由を奪う。バイオツイッターによる情報拡散は自然現象として不可逆であるから、それを制限したら際限がない。世の中は際限なく窮屈になり、行動は自ずから決定され、人々は自由意志を失うだろつ。それは良くない事と私は考える」

(530)

「ミギノウエ「@ミギノウエ：貴方は今、自由意志という言葉を使われましたが、この相互監視が隅々まで行き届いたツイッター社会にだって、はたして自由意志があるのかどうか。僕たちは今、裸を表現するどころか、夕食の献立を考えるにしたって、世の中の目を気にしなければなりませんよ？ 行動は自ずから決定されつつある」

(531)

ゲン「@ミギノウエ：自由とは何もかもが思い通りになることは違うと私は思う。問題は相互監視ではなく一方監視。一方監視の行き着く果ては独裁であり、果ては全人類の愚民化だ。そもそもバイオツイッターが無ければ監視はないのか？」

(532)

ミギノウエ「@ゲン：少なくとも昔は、夕食時の会話まで衆人監視の下におかれることはありませんでした。今はその気になれば地球の裏側のご家庭の内情まで瞬時に調べられる。果たしてこのままでいいのでしょうか？ 相互監視下における自由は気球みたいなものだ。全ては世の中の空氣次第です」

(533)

ゲン「@ミギノウエ：人は本質的に、衆人監視の下で生きるものだと私は思うが……。自由を気球と比喩することは、言ひえて妙と思う。バイオツイッターが無くとも、近くに一人でも他者がいれば、それは監視されていると同じこと。我々はみな、相互監視という名

の空氣に漂つ、一隻の氣球なかもしれん

(534)

ゲン「@///ギノウエ・少し、昔の話をじょ。私はかつて完全なプライバシーを保つた生活を体験したことがある。完全な個室で一人で暮らし、外に出るときもネットに出るときも、完璧な匿名性が保たれていた……と思っていた。実際は、監視カメラや通信ログなどで、常に誰かが監視していたわけだが

(535)

ゲン「@///ギノウエ・自由気ままと実感できる日々も、やがて終わりが来た。バイオツイッターの爆発的な普及によつてだ。推進派と反対派が激しくせめぎ合い、血生臭い事件もおきた。しかしその抗争は不思議な構造をもつていた。推進派も反対派も、『個人の自由を守る』ことを旗に掲げていたのだ」

(536)

ゲン「@///ギノウエ：推進派は相互監視を広めることで世の中を公平にしようとした。隠し事や不正が出来ない社会でこそ、人は真に自由になると考えた。反対派は、個人が内面的な秘密を持つ事こそが自由であるとし、それを守ろうとした。本音と建前を、外向きと内向きを、あくまでも仕切らうとしたのだ」

(537)

ゲン「@///ギノウエ：まさしくそれは、自由とは何かを定義するための闘争だった。正直、いまだ私には判断がつかない。みなバイオツイッターは便利だからと言つて導入しているが、私は確かな判断がつくまではと導入していない。この歳になつてもまだ、自由とは何なのかわからないのだ」

(538)

ゲン「@ミギノウエ：ただ一つ、確信を持つて言える」ことが一つだけある。それは、情報の拡散は不可逆であるということだ。どんな隠し事もいつかはばれる。完全なセキュリティーは存在しない。いずれ遠い時の彼方、私達は全てを共有し、魂だけの姿になつて生きているやもしれん。ただ一つの、情報の塊として」

(539)

ミギノウエ「@ゲン：そこが幸せな場所とは、僕には思えませんね。出来ればそうなつて欲しくないとさえ思いますよ。それは自由というより単体化。情報共有の終局は人類の単体化ですよ、そんなの良いわけがない……それはきっと、滅亡と同義だ」

(540)

ゲン「@ミギノウエ：まだ人間はそこまで極端な状況はないよ。何のためにトイレがあると思つてているのかね。一人で思索にふけるくらいの自由は、まだいくらでも残つてている。なんなら部屋のT-Lを外すなり、いつそログオフするなり、好きにすればよい。人はいまだ試行錯誤の最中」

(541)

ミギノウエ「@ゲン：ログオフなんてとんでもない！ そんなことしたら慈善団体が心配して部屋に乗り込んできますよ！ 世の中おせつかいな人がいっぱいいて、ありがた迷惑なことです……まったく。僕は部屋T-Lをつけてませんが、それだけでも色んな人から怪しまれるんですよ？」

(542)

ノルコ達はゲンとミギノウエのやりとりを眺めながら、首をひねっていた。難しい話のようで、実はとても身近な話のようだ。リン

「確かに一、部屋のＴ－つてつけるのが当たり前になつてるね
ルイ「つけないと逆に怪しまれるんだよな。あの部屋で何か「ソソ
ソ変なことしてゐやつ、て」

(543)

カズノリ「く、空氣、つてやつ、だね」 リン「そりそり、空氣
空氣」世の中、空氣というものは法律以上に生活を拘束している。
ノルコ（だからトイレのツイッターは「禁止」つてことになつて
のかな？）トイレにまでＴ－つける空氣が流行つたら世界は終わ
りじゃないかと、ノルコは根拠なく思つた。

(544)

ゲン「@ギノウエ…怪しまれるとて、それを選ぶのもその人の
自由だと私は考えるがな。先ほども言つたが、情報の拡散は自然現
象として不可逆であるし、相互監視化も後戻りできない所まで來て
いる。我々は状況に従つてこれからを考えていく他あるまい。本当
の自由とは何か、考えていく他あるまい」

(545)

ギノウエ「@ゲン：自然現象として不可逆ですか。その果てに
ある理想の社会は、一つの巨大な村みたいなものなのでしょうか。
誰もがみな村の全てを知つていながら、空氣を読んで見てみぬふり
をするような。……少なくとも僕達はまだ悩む自由を持つてゐる。
ちょっと考えて見ます。フォローしても？」

(546)

この後、ゲンの「勝手にするよろじ」の一言で、一人のリプライ
合戦は終わつてゐる。ルイ「どういきさつでフォローしてんだ
か」 カズノリ「さ、さんざん言ひ合つて、せや、逆に仲良くなつ
たつて感じ、かな？」 ノルコ（それはどうかな……そういえば、

何のために集まつてたんだつけ?)

(547)

リン「ところでね、あの単体化っていうのはなんのことなのかな?
あの辺のやりとりがよくわからくて」 カズノリ「う、うーん。
じ、人類単体化、つてのは、え、SF小説とかで、よ、よくある、
し、シチュエーション」 ルイ「みんな同じような人間になっちゃ
うつてアレだろ?」

(548)

カズノリ「う、うーん、そうだな、た、例えるなら……」 その
後、カズノリは『おばちゃん』と『引きこもり』を例に挙げて説明
した。もし世の中が、空氣の読み合いに長けたおばちゃんだけにな
つても、逆に名無しの引きこもりだけになつても、みんな同じ
ようになるといつ意味で単体化してしまつ、といつようなことを。

(549)

ルイ「んで、結局どうちも嫌だねつて結論?」 カズノリ「い、
いや……」 リン「ミギノウエさんはー、プライバシーを守るた
めの管理を誰かやつたほうが良いって言つてー、ゲンさんはそれに
反対してー、ミギノウエさんはわからなくなつてしまつてー、悩む
自由があるんだー、つて結論じやない?」

(550)

なぜか一同、ヤマオ君の方を向いた。ヤマオ君はしばしげーっと
リンを見つめた後、一度だけウンと首を縦に振つた。ルイ「うー、
よくわかんねー。んで、結局私らは何がしたかんだつけ?」
カズノリ「ん?」 リン「あつー」 ルイ&リン&カズノリ「あー
!ー」 そして一同、今度はノルコの方を向いた。

(551)

ノルコ（……そうだった）ミギノウエ氏をブロックすべきか否かという話だつた。ノルコ（……どうしよう）リン「リンは、別にブロックしなくていいと思うのー」ルイ「ん、まあ、悪い人じゃなさそうだぜ？」カズノリ「ちょ、ちょっと困った人かも、し、しれないけど」というわけで結論は出たようだ。

(552)

その後ノルコ達は、WEBアプリで夕方までひとりしきり遊び、それぞれの家へ帰ることに。ルイ「あ、カラスがないでるぜ」リン「カラスがなくから」カズノリ「か、帰らうか」ヤマオ「……」ノルコはみんなを玄関前でお見送り。ヨコ「ちょっとみんな、これ持つて帰つて食べてっ」

(553)

そういうてヨコは、リボンでラッピングされた袋をわたす。中身は手作りマドレーヌだ。一同「ありがとうございます！」ヨコ「また来てねー」みんなバイバイと手を振つて、それぞれの家路につく……が。リン「私、ちょっと買い物してかえるね！」そしてどうこうわけかヤマオとアイコンタクト。

(554)

ルイ「お、おおづ。氣をつけてな！」カズノリ「ま、また明日」そしてリンとヤマオは一人で別方向に歩いていつてしまつた。ルイとカズノリはそれを見送ると、照れくさそうにモジモジし始めた。カズノリ「お、送るよ」ルイ「べべ、別に一人で帰れるつてつ」カズノリ「で、でもそんなど、遠くないし……」

(555)

なんだかんだ言いつつ、二人は並んで歩き始めた。街は夕日に照らされていた。カズノリ「きょ、今日は、なんだか色々、べ、勉強になった、ね」ルイ「あ、ああ……そうだな」一人ともまったく逆の方を向きながらのぎこちない会話だ。ルイ「ノルコも大変だ

よ。つぶやけないってだけで、こんなに色々面倒になるんだな」「

(556)

それでふつつりと会話は途切れた。でもそれで構わなかつた。なにせ保育園からの仲だ。いまさら会話の間を気にするような間柄でもない。二人はただ黙つて家路を進む。茜色に染まつた街角は、夕食の買出しをする人や仕事を終えて帰宅する人で賑わつてゐる。野球道具を肩に担いだ、部活帰りの学生もいる。

(557)

二人は特に意味も無く、それぞれの耳たぶをクリックした。すぐさま視界に夥しい数のAR情報が空間投影される。道行く人の頭上に簡易プロファイルとT-Sが表示され、店先には広告用AR映像が流れ始め、監視装置の存在を表す光点がいたる所で光りだす。生まれた時から慣れ親しんだ、ごくありふれた光景だ。

(558)

カズノリ「と、特に危険は、な、ないみたい」ルイ「まあ……街の中だしな」市街地は相互監視網の密度が非常に高いので犯罪はめつたに起こらない。カズノリはコンソールを操作して「不審者チエッカー」を表示させた。これは人々の移動経路を調べ、拳動不審な人をピックアップするサービスだが、よほど用心深い人しか使わない。

(559)

同じ所をウロウロしたり、不自然にゆっくり歩いたりするとチエッカーに引っかかる。誰かにくつついて歩いても引っかかる。それが赤の他人でも友達でも関係ない。そのため、今のルイにとつて一番の不審者はカズノリという結論が出てしまつてゐる。カズノリ「わ、わけがわからないつ」「ルイ「ほへ?」

(560)

とはいえ、カズノリはやはり男の子であり、好きな女の子のこと

を何としても守りたいと思うのは当然だった。ルイ「カズノリはホ

ント心配性だなー」カズノリ「そ、そんなことないよつ」二人

の馴れ初めは保育園時代までさかのぼる ルイは今にもまして男

らしく、そしてカズノリはさらに吃音がひどかつた、あの頃。

(561)

いじめっ子1「ちゃんとつぶやけつづーのー」昔の話である。

保育園のすみで本を読んでいたカズノリは、少年達にいじめられて

いた。バイオツイッターの形成に不具合のあったカズノリは、深刻

な吃音障害を抱えていた。カズノリ「ほ、本……か、かか、かえ、

え、えし、かえして！」 いじめっ子2「ちゃんとつぶやけたら返

してやるよ」

(562)

ルイ「てめえらなにやつてんだー！」 口と同時に手足が出る。

腰の入った右ストレートと後ろ回し蹴り、一瞬のうちに一人を吹き

飛ばした。ルイ「人の弱みにつけこむなんてサイテーだな！ その

本返しやがれ！」 いじめっ子2「暴力だつてサイテーだろこの男

女！」 ルイ「なに！？ もういつぺんいつてみろー！」

(563)

いじめっ子1「何度もつて言つてやるよ男女！ ゼットー嫁の貢

い手ねーぞお前」 いじめっ子2「そーだよこんにやるーー！」 お

返しとでも言わんばかりに、少年はルイの顔めがけて拳を振るつて

きた。ルイ「つ！ てめえら顔ねらいやがつたな！」 いじめっ子

1「いーだろ、おめー女じやねーもん！」

(564)

いきなり勃発した肉弾戦に、周囲の子供らがざわつき始めた。「またルイちゃんがやつてる……」「せ、先生呼ばなきや！」「喧嘩しちゃだめー！」「いじめっ子ー「女扱いしてほしかつたらもつと女らしくすればいいんだ」いじめっ子2「そーだそーだ。またルイが入殴つたつてリツイートしまくつてやるー」

(565)

ルイ「うぐつ……」普段から「もつと女の子らしくしなさい」と大人たちに言われているルイは、またカツとなつて手を出してしまつたことを後悔した。逆に弱みを握られるハメになつたのだ。ルイ「……てめえらホントに腐つてやがる！」いじめっ子達はそのルイのつぶやきをすかさずリツイートした。

(566)

いじめっ子1「口の汚い女子はいやですなー」いじめっ子2「いやですのおー」ルイ「ぐぬぬ……」いじめっ子1「てめえら、じゃなくて、あなた様方、つて言いなさい？」いじめっ子2「くくく、がははは」ルイ「間違つてる……お前ら絶対間違つてるー」

(567)

カズノリ「……る、るる、ルイち、ちゃん。も、ももも、もう、もうい、いい」ルイ「カズノリ？！」いじめっ子1「だーかーらちゃんとつぶやけつての！ うひやひや！ 笑い死ぬ！」カズノリ「き、ききき、きみの、の、ひひひょうばん、わ、悪く、な、ななぢやうよ」

(568)

ルイ「だけどさー」カズノリ「い、い、い、い、ん、だ」

そしてカズノリはルイと少年らの間に割つて入つた。いじめっ子1「なんだあ？」 いじめっ子2「やんのかこのもやし野郎」 カズノリは彼らに奪われた本を指差す。カズノリ「あ、あああ、げ、あげ、る、よ、そ、そそ、それ」

(569)

いじめっ子1「はあ？」 カズノリ「べ、べべ、べん、きょ、きょきょうする、といい、いい、いいい、よ、そ、そそれ、それで」 いじめっ子2「笑えない冗談ですなあー」 カズノリ「き、ききき、きみ、きみ、たち、は、あ、あ、あ、あああ、あたあた、あま、あたま、がががわ、わ、わ、わるい！」

(570)

二人のいじめっ子は互いに顔を見合させ、そして額に血管を浮かび上がらせながらカズノリをにらみつけてきた。いじめっ子1「なめた口きいてんじゃねーぞゴラア！」 そして拳をボキボキ……鳴らないが、鳴らすふりだけした。いじめっ子2「歯あ食いしばれや！」 ルイ「か、カズ……！」 カズノリ「うぐう！」

(571)

カズノリは右頬を思いつきり殴られた。いじめっ子2「どーだ、痛いだろう」 いじめっ子1「はやく謝らねーともう一発いくぞ？」 「あーん？」 カズノリ「うつ、うう……くつ！」 カズノリは歯を食いしばって痛みをこらえ、そして殴られた反対側の頬、すなわち左の頬を少年らに向かつて差し出した。

(572)

カズノリ「そ、そそ、そその、ほほほ、ほん、ほん、に、かかか、かいて、ああるよ」 カズノリが奪われた本、そのタイトルは「せかいのせいじんたち」だった。カズノリ「こ、ここ、こつち、こつ

ちの、ほほ、頬、ほおも、な、な、なぐ、なぐる、と、いいんだ…

…よ！」　その時、タイムラインが火を噴いた。

(573)

二人は本当にぶち切れて、カズノリに殴りかかつってきたのだが、直前で動きを止めた。いじめっ子1「な、なんだこの感じ」　いじめっ子2「あ、頭が、頭があ！　わあああー！」　そして二人は頭を抱えてその場にしゃがみこんでしまった。ルイ「な、なんだ…」カズノリ「こ、こここ、これ、は、は」

(574)

二人のTしに、『近所の、いや日本中の説教好きな人たちからの説教リプレイが押し寄せていた。バイオツイッターによるリプレイは、その人の脳内回路に直接送信される。いつきにリプレイが流れ込んだ影響で、脳がパニックを起こしたのだ。いじめっ子1&2「頭が痛い！　痛いよー！　わあああー！』

(575)

すぐに先生たちがやってきて、炎上したTしの火消しにあたる。少年らのツイッターは自動的にログオフされたが、一人はしばらくその場に伸びていた。いじめっ子達への説教リプレイは、彼らはおろか、彼らの両親、兄弟、親族にまで飛び火し、保育園の先生や、どういうわけかカズノリとルイのTしにまで送られて來た。

(576)

10分ほどでTしは鎮火した。後日、いじめっ子の二人は、知恵熱を出してしばらく休むことになつた。その間うわごとのように「ごめんなさい」とか「もうしませえん」とかつぶやいていたらしい。その一件以来だつた。ルイとカズノリの間に、友情とはちょっと違つた、仄かな感情が芽生え始めたのは。

(577)

話は現在に戻る。ルイの家がある集合住宅が見えてきた。二人は暮れ行く夕日を眺めながら、とてもゆっくりと歩いていた。ルイ「なあ」 カズノリ「んつ？」 ルイ「いまどんなこと考えてた？」 そうルイの方から話しを振ってきた。カズノリ「ああ……む、昔のこと、とか」 ルイ「昔の？ いつのだ？」

(578)

カズノリ「ほ、保育園のとき、の……こと」 ルイ「ほあ？、そりやまたずいぶん昔の話だな」 カズノリ「ほ、僕が、ま、まだ全然うまく、うまく呑けなかつた、あのこひ。よく、いじめられて、ルイに、助けられた」 ルイ「だなー、しおちゅう喧嘩してたつけ。ま、今でもやうだけどわ」

(579)

カズノリ「む、昔つから喧嘩つぱ、ぱやかつたよね。ルイは」 ルイ「まーなー。アレでも精一杯抑えてたつもりだったんだけど、全然女として扱われてなかつたなー。いや今でもだけどさつ」 そういうて自虐的に笑うルイだつたが。カズノリ「そ、そんなことないさ！」 ルイ「えつ……そ、そつか？」

(580)

カズノリ「る、ルイは……その、や、や、やや、優しい、い、じやないか、げつふげつふ！」 ルイ「お、おいっ、無理すんな……つて、私は優しくなんかないぞつ」 カズノリ「そんなことない、ルイは、優しいよ、お、女の子らしこう」 ルイ「お、おま……か、痒いじやんか、そんな言われたら……どつしたんだよ」

(581)

カズノリ「だ、だだ、だつて。じ、じじ、自分のこと、女らしくない、とか、な、何度も言うんだもの。よ、よくないよ、自虐的に、な、なるのは」 ルイ「そ、そつかな？」 カズノリ「ルイは、お、女の子、らしいよ、大丈夫だよ」 ルイ「だ、大丈夫とか！ なんか病気みてーじゃないか！ 逆には立つってば！」

(582)

そういうしていろうちに、もうルイの家の前だ。5階建ての集合

住宅、そのゲートの前で、なんとなく名残惜しそうな二人。ルイ「ついちゃつたな……って！ 別に深い意味はねーんだからなつ」

カズノリ「う、うん、わかつてる」 ルイ「わわわ、わかつちゃダメだろ！」 カズノリ「う、うめん……」

(583)

ルイ「じゃ、じゃあな。また明日なつ。ちゃんとメシ食えよ？ ジャねーと筋肉つかねーぞ？」 そう言つてルイはカズノリの肩を

たたく。カズノリ「うん、ちゃんと食べるよ」 ルイ「ちゃんと歯も磨けよ？ 黄ばむぞ？」 カズノリ「うん、ちゃんと磨くよ」

ルイ「お、おおう、じゃあな！」 カズノリ「うん、ま、また明日」

(584)

ルイを見送つて、少年はその場を後する。ルイとはずつとこんな調子だ。僕らはまだまだ子供なんだと少年は思う。でも僕達は友情とは違う何かでつながつていて、みんなも応援してくれている。カズノリ「うふふ」 少年はそつと含み笑いをこぼした。ルイ「な、なに笑つてるんだぜ？」 カズノリ「つうん、別になんでもないよ、ルイ」

(585)

そのころノルコは、自室でルイとカズノリのやり取りを眺めて二コ一コしていた。早くもつと仲良くなつて、ノルコ達を結婚式に招待して、そして私に向かつてブーケを投げてくれたらしいのに……。そんなことまで妄想してしまつノルコ。もし一人を邪魔する人がいたら、じゃじゃ馬の如き後ろ回し蹴りで容赦なくお星様になつてもらう勢いだ。

(586)

ノルコ（……やつ）かんし社会） 誰もが誰もを監視できる状況においては、空氣こそが何よりも重要だ。世の中には、クラス内の男女が親しくすることを許さない空氣というものもあるらしい。二人の名前が書かれた相合傘を電子黒板に描かれて、さんざん冷やかされる……とかなんとか。ノルコ（そんなの絶対ゆるさない！）

(587)

空氣はみんなで守らなければならぬもの、という感覚がノルコの中にはある。しかし一方で、その空氣のために思うようにならないうこともある。例えばノルコは以前、従兄弟のお兄さんのことを「いいな」と思つたことがある。でもお兄さんは当時18歳で、ノルコは9歳だった。ノルコ（……かなわない恋も、あるわ！）

(588)

そのお兄さんは、よくノルコをまつてくれた。しかし、ある一定の線を踏み越えてくることはしてなかつたし、こっちから踏み込もうとしてもそつけなくあしらわれた。ノルコにもその理由はわ

かつていた。そういうことは一般常識的に認められない空気なのだ。ノルコ（歳の差があと5歳少なければ……）（うつ）

（589）

相互監視社会特有の問題といつのは、やはりあるの。ノルコは先ほどのゲンとミギノウヒのやうどりを思い起こす。……その気になれば、地球の裏側にいる人々の生活まで監視できてしまう。ノルコ（やつてみよつ……）そして耳たぶをクリックし、海外Tシに飛んだ。ノルコはちょっとビデキドキしていた。

（590）

リオデジヤネイロはちょうど朝日が昇ったところだつた。それはついさつきノルコが見送つた夕日である。ノルコ（……朝からラブラブな人達はさすがにいなか）と思いまやさすがはラテンの国。明け方の公園のベンチで中むつまじくする若いカップルをノルコは発見した。

（591）

他にも、朝のカフェで一人静かにコーヒーを飲みながら本を読んでいるカップルも見つけた。ノルコはなんとコーヒーの銘柄と本の題名まで知ることが出来てしまった。店内にはゆつたりとしたボサノバが流れしており、その曲をピックアップして自分の部屋のBGMにすることも出来てしまつた。

（592）

ノルコ（ちょっと楽しいかも……ふひひ）下手すると時間を忘れて一日中検索してしまいそうだ。でもノルコには他にもつとやるべきことがある。今日の授業の復習をしないといけない。もうすぐ夕食の時間で、今日から単身赴任のお父さんとのオンライン夕食があるので遅れるわけにはいかない。

(593)

何でも自由に調べられるといつても、調べられる時間には限りがある。検索できる情報が増えれば増えるほど、知ることの出来る情報は相対的に減っていく。そんなちょっとした無力感を誰もがぽんやり感じている。だからこそ一番大切な情報だけはけして見逃してはならない。情報の海に溺れないためにも。

(594)

ノルコはお父さんとお母さんの寝室の「」を調べた。今日からお母さんは一人で眠ることになる。寂しくないだろうか。ノルコ（…あつ）最新ツイートは昨日の朝だった。昨夜二人は一言も会話することなく就寝したのだ。こんなことはノルコの知る限り一度もない。ログオフしていたわけでもない。

(595)

ログオフ……夜に夫婦が寝室でこの状態になるところのは、つまるところがそういうこと。この場合のログオフを追及するような行為は、常識的に入りえないことで、ノルコだってそれくらい知っている。人は木の叉から生えてくるわけではないし、ペリカンが運んでくるわけでもないのだから。

(596)

ログオフでもないのに、お父さんとお母さんが寝室で一言もツイートしないというのは、はっきり言って異常事態で、地球の裏側の恋人達の事情より、よっぽど重要度の高い検討課題である。ノルコ（……やっぱり喧嘩してるのかな）お母さんはホウさんと友達になると言つてゐるし、どうなることや。

(597)

そのころ……。イイズカ「アフレル！ 2番バルブ閉めて！」

アフレル「は、はい！」 ハップブル「ハリー・アップ！ 破裂するゾ

ー！」 秘密基地の地下にある大規模試験場で、巨大な鉄の腕がガツコンガツコンと轟音をたてていた。アフレル「バルブ閉まりました！」 全身オイルまみれだった。

(598)

アフレル（す、すごい……まさか初日からこんな仕事を任されるなんて） 油圧駆動系試験のアシスタンントとして雇用されたアフレルは、いきなり実動試験の現場に放り込まれた。ガンバールの腕、特に拳の部分は機構が複雑であり、試験はいくらやつてもキリがないのだ。

(599)

ハップブル「ヘイ、アフレル。いきなりこいつつかつちまつて悪イネ」
アフレル「いえいえ！ こんなすごいメカニズム……むしろ燃えてきましたよ！」 イイズカ「いいねえ新入り。燃えすぎて火いつけねーよーにな！」 昼からずっと試験にかかりつきりなアフレル。夕食の時間がすぎてしまっていることに……気づいていなかつた。

(600)

ロボットアームは、ビルほどの大きさがある鉄骨製の支持体に取り付けられていて、油圧、電気系統、測定機器等々の夥しい配管・配線類とつながれている。アームの先の手が開いたり閉じたりするたびにアフレルが立っている支持体の足場が激しく振動する。アフレル（……うふふ、揺れるし油くさいし大変……）

(601)

軽い吐き気をもよおしつつも、アフレルは試験場のメインT字に目を光らせ、測定装置のA R情報を常に確認してデータを拾い、さ

らに同時進行で装置の機構について学習していた。アフレル（いきなり実機に触れるなんてラッキーだ！）視界を埋め尽くすほど の AR 情報とタイムラインに、アフレルの頭脳はパンク寸前だった。

(602)

その時、計器の一つが異常な数値を示した。小指を制御する油圧配管3系統のうち一つが、異常な圧力上昇を示している。アフレル「いけない！ 小指3番下げてください！」 イイズカ「ダメだ、カットできない！ 故障か？！」 ハツブル「破裂スル！ テイク・カバー！」 次の瞬間、アームの小指付け根から黒いオイルが噴出した。

(603)

幸い、下にいた作業員は全員退避していたのだけが人はなかつた。作動油は高温になつていて危険だ。ここで作業は一旦中止となり、後片付けが始まった。作業員総出で油の処理をする。ドラム缶にして10個分程度のオイルがこぼれた。全ての作業が終わるころには日付が変わっていた。

(604)

アフレル「遅くなつてしましましたね……僕がもつと早く気づいていれば」 イイズカ「いや、あれでいいんだ。半分は壊すのが目的の試験だからな」 アフレルは温泉で汗を流した後、他の職員とともに食堂に来ていた。食堂は24時間やつていて、ビュッフェ形式になつてゐるようだ。

(605)

まずはライスと味噌スープをよそう。おかげは紅鮭とインゲン豆の煮物という純和風な選択。それに美味しそうなオムレツがあつたのでケチャップソースをかけてトレーに乗せた。アフレル（秘密基地というわりには、以外と普通だなあ……）するとイイズカがちよこちよこと肩をつついてきた。

(606)

イイズカ「ここに来たらやつぱりこれ食べないとな」 アフレル「……なんですかこれ？」 イイズカが指し示したのは緑色のグニヤグニヤした物体だつた。よく見るとその中に、黄色いツブツブしたものやら、半透明の細長いものやらが入つてゐる。見るからに怪しい食べ物だつた。

(607)

イイズカ「まあ食つてみるつて」 ハッブル「だまされーたーと、思つテー」 アフレルはしぶしぶながらも、それを一さじくつてお皿のすみに乗せた。アフレル（……ぐによぐによしてゐる）そして食堂の片隅に置いてある解析装置「MONOSUGOH」にトレ

ーを乗せ、料理の種類と量を記録した。

(608)

解析装置は料理中に含まれている有害物質の量も調べてくれる。アルテヒド、ダイオキシン、カドミウム、セシウム……。もちろん全て検出限界以下だったが、すべてご丁寧に記録された。アフレル「なにか意味があるんですか?」 イイズカ「まあ……秘密基地だしな」 ハップル「何がまるまるかカラナイ」

(609)

席につくとアフレルは、例の緑色のグニグニを箸でつついてみた。アフレル「……ホントに食べられるのかな」 イイズカ「さあ、食べた食べた」 ハップル「体にいいYO!」 箸でつまんで鼻先までもつてくる。クンクン。なんだか病院の処置室みたいな匂いがする。なんともいえない薬臭だ。

(610)

アフレル「……もぐもぐ……ん?」 見た目はドロドロだが食感は不思議とサクサクしていた。たまに粒々が潰れてプチツとなる。半透明のこれは……クラゲか何かだろうか? 味はすこし酸っぱくて磯の香があり、ヨード臭がきつい。アフレル「なんだろう? 魚介の漬物みたいなものですか?」

(611)

イイズカ「ふむ、俺も最初はそう思つたさ。でも実はこれな……地球の食材じゃないらしんだ」 アフレル「えつ!」 イイズカ「……ここだけの話なんだが、この研究所の地下で、宇宙人を培養してゐるらしい……」 ハップル「そうそう、宇宙人ね。エイリアン」 アフレルは見る見る青ざめた。

(612)

アフレル「そ、それとこれとどういう関係が……！」　イイズカ
「どうもこうも、宇宙人なんて公表できるわけがねえだろ？　でも
実験すれば残骸は出てしまうわけだ。それで手っ取り早い証拠隠滅
として……だな」　アフレル「じょ、『冗談ですよね？』　イイズカ
「どうかな、だつてここは秘密基地なんだぜ？」

(613)

アフレル「じゃ、じゃあこの料理はさしづめ、宇宙人漬け……」
ハップル「そ、そ、宇宙人のピクルスという話だよ、ウヒヤヒヤ」
イイズカ「くくく……食べちまつたねアフレル君。実はそのエイ
リアンの細胞はまだ生きていて、食べた者はみな宇宙人に体をのつ
とられててしまうんだ……」

(614)

アフレル「（ガタガタブルブル）……じゃ、じゃあイイズカさん
達はもう……う、ううう！」　アフレルは突然自分の首を押されて
苦しみだした。アフレル「ううあ……うガガツ……ゲボア！」　と、
その時、ちょうど目の前をクサヨシ研究主任が通りがかつた。なぜ
か割烹着姿だった。クサヨシ「……何してるんだい？」

(615)

アフレルは顔を真っ赤にしながら味噌スープをすすっていた。ク
サヨシ「はははっ、君も随分とノリの良いやつだなあ」　アフレル
「い、いやだつて、そういう流れでしたし！」　イイズカ「まあ、
こここの洗礼みたいなものだ、悪く思わんでくれよ」　ハップル「あ
そこまでノつてくる人もメズラシイけどネー」

(616)

謎の緑色の正体は「松前漬け」だった。ただしかなりアレンジさ

れでいる。クロレラ抽出物がたっぷり入っているため、毒々しいまでの緑色を呈しており。風味付けにアブサントを用いているため薬臭がする。クサヨシ「ガンバール基地特製の『エイリアン漬け』だ。バターチーズトにのせてもうまいぞ」

(617)

割烹着姿のクサヨシ研究主任は、まかないの【タコさんワインナーチャ漬け】をサラサラとやつている。アフレル「あ、あの、調理師だつたんですか？」クサヨシ「最近はね」イイズカ「ここは人事異動が激しいんだよ。主任、以前はレーダー開発の担当でしたよね？」いや、激しいどころじゃないだろ？

(618)

クサヨシ「料理とはいわば一種の科学だ。キッチンに立つことで得られる閃きもある」アフレル「そうなんですか？」ハッブル「チーフは二ユータイプなレーダーのプロダクションがジャムつてんだよアフレル」アフレル「じゃ、ジャム？」ああ、煮詰まつてことですか」クサヨシ「うむ」

(619)

クサヨシ「煮詰まつた時はキッチンに立て。我が家家の家訓だ」本当かな？とアフレルはいぶかしんだ。アフレル「新型のレーダーですか。僕は専門外なんでお役に立てそうにないんですけど、どんなレーダーなんですか？」クサヨシ「ふむ……一言でいえば、体重〇キログラムの宇宙人を観測できるレーダーだ」

(620)

クサヨシ「もし君が地球侵略を日論むエイリアンだったとする。なんとかしてコツソリ地球に浸入したい。しかし、地球にはそれなりの文明があり、電波望遠鏡などで銀河系全域までをもレーダー観

測している状況だ。さて、どうする？」アフレル「なんとかして観測網を潜り抜けないといけないわけですね。うーん……」

(621)

アフレル「あつ、それで体重が〇というわけですか」クサヨシ「そう、質量が〇というのははつまり、光や電磁波などの光速エネルギー一体のことだ。もし、宇宙人が純粹なエネルギーだけの姿で地球に侵入してきた場合、今の我々に発見する手立てはない」アフレル「ま、まるでSF小説ですね……」

(622)

クサヨシ「ふふふ、我々は今、そのSF小説の真っ只中にいるのだぞ、アフレル君」アフレル「確かに……。いやでも、そんなことが可能なんですか？」クサヨシ「わからん。だからこうして毎日割烹着を着てキッチンに立っているわけだ」アフレル「はあ……」ハップル「案外もう侵略されてたり」

(623)

イイズカ「その可能性もあり、だな。今こつして話していることも、実はみんな筒抜けだったとか……」一同、しばし辺りをキヨロキヨロとする。アフレル「……なんかゾツとしますね」クサヨシ「我々はすでに発見されている……か。ま、それはそれで面白い」ハップル「おトモダチになれたらイイネ」

(624)

クサヨシ「ふふ、トモダチか。それがベストな状況ではある」クサヨシは残りのお茶漬けをスルスルとかきこむと席を立った。クサヨシ「では失礼するよ」そして鼻で「お化けなんてないさ」をハミングしつつ、軽いステップでどこかへ行ってしまった。イイズカ「宇宙人とトモダチ……か」

(625)

その後三人は食事を取りながら、純エネルギー生命体を直接観測する方法をあれこれ話し合つた。しかし、これといったアイデアは浮かばなかつた。イイズカ「そもそも物理的に可能かどうか……」ハッブル「ライフディフィニションも考えないと」アフレル「うーん、困難な課題ですねえ」

(626)

イイズカ「そういうやアフレル、遅くなつちまつたが家族には連絡したか?」アフレル「……はっ」アフレルの手から箸がこぼれ、カラソカラソと音を立てた。アフレル「あつー!」ハッブル「ど、どしたノ?」アフレル「しまつた……今夜同じ時間に食事とろつって約束してんだ……」

(630)

イイズカ&ハッブル「あちゃー」アフレル「ちょっとすいません……」そう言ってアフレルは、家族のT-Sを確認した。もちろん三人とももう寝ていた。次にダイニングのT-Sを確認する。夕食はいつもより遅めの時間にとつたようだ。ワクのツイートが残されていた。ワク「ダッド・イズ・ノット・ヒアー?」

(631)

ヨコ「うん。お父さんは忙しいみたいなの。一田田だからきっと色々あるのね」アフレルはハツとなつた。そしてすぐさまDMを確認した。ヨコからのメッセージが残されていた。ヨコ『私達のことはいいから、お仕事がんばってね。終わつたらでいいから連絡してね』アフレルは深くため息をついた。

(632)

「イイズカ」「……どうなんだ?」アフレル「いえ、大丈夫です…
…取り乱してすみません」ハップル「カーゾクーはダイジーにし
ないとー」アフレル「ええ、まったく。でも仕事も大事ですから
…」「イイズカ」「まあ、あんまり無理はするな。今日はもう休ん
だ方がいいだろ?」いつテカイ仕事が入るかわからんからな」

(633)

アフレルはそそくさと食事をすませると、割り当てられた自室へと向かつた。巻貝のような形の研究基地、その地下1～3階が単身者用の居住施設になつており、海から見た反対側に扇状に広がつてゐる。高速の動く歩道が完備されており、全員が10分以内で職場を行き来できる設計になつてゐる。

(634)

宇宙船の船内を思わせるインテリア。アフレルはエアロックのような自室の扉に手をあてる。すぐに生体認証され、プシューというエアシリングダーの音ともに扉が開いた。初めてこの部屋に案内されたときは、その凝つた作りに思わず小躍りしてしまつたアフレルだが、今はガツクリと肩を落としていた。

(635)

4畳ほどのスペースにデスク、ベッド、冷蔵庫、映像端末、シャワーといった、最低限の設備が配置されている。アフレル「少し寒いな」アフレルは耳たぶクリックで暖房を作動させ、ベッドに腰掛けた。アフレル（……ヨコになんて謝ろ?）秘密基地への単身赴任。初日の夜はこうして更けていった。

(636)

ヨコ「ふんふ～ん、ふふ～ん」　ヨコは朝からとても機嫌が良かつた。軽やかなステップでキッチンを動き回り、3人分の朝食を作っていた。ヨコ「あらいけない」　コーヒーメーカーの設定が、いつと同じ一人分になっていた。ヨコ「こんなに飲めないけど、まあいいわっ」　特に気にせず料理を続ける。

(637)

ヨコ「ノルコー、起きてたらワクを起こしてちょうどいい」　もちろん返事はないのだが、二階からドタドタと足音が聞こえてきて、それがリプライみたいなものだった。ワク「ムニヤムニヤ……アウチッ！　ウワーオ！」　ボディプレスとバックドロップを立て続けにぐらつたようなツイートを聞きつつ、ヨコはサンドウイッチを切る。

(638)

今日の朝食はサンドウイッチ、トマトオムレツ、シーザーサラダ。そしてヨコ特製の野菜ジュースだった。ノルコ（朝からやけに豪華だなあ）　ヨコ「お父さんがいなくて寂しい分、頑張っちゃったのよ？」　ワク「イテテ……hum?　Oh!」　眠気まなこにむちうち状態のワクも一気に目が覚めたようだ。

(639)

ノルコはトマトオムレツを品定めするような目つきで眺めつつ、そろりとナイフを入れた。ノルコ（……か、完璧だ）　しつかりと煮詰められたトマトソースが、一分のムラもなく卵につつまれてい

た。こんな手間も技術もいる料理を朝から……。ノルンは嫌な予感がした。オムレツは美味しく頂いたけど。

(640)

ワク「グッド・モーニング・ダッド、ホワッシュ・ドウーリング？」
ワクが何気なく送ったモーニングコール。ノルンは父の反応に注視した。アフレル「お、ワク、おはよ。今からシャワー浴びるとこだぞー」ワク「うー、ショウ・ミー・ブリーズ！」ワクは研究基地の部屋が気になるようだ。

(641)

ヨコ「ワク？ お父さんのシャワーなんか見てどうするの？」
ワク「W-r-o-n-g-」アフレル「ははは、ワクは基地の中が気になるんだろう？ でもシャワーは普通のだぞ？」それでも見たいというので、アフレルは一通り部屋の中を見せてあげた。部屋はまるで宇宙船の中みたいで、ワクはよだれをたらしてしまった。

(642)

ヨコ「ワク、きたいわ。ところであなた、なんだかひどい顔よ？
ちゃんと眠ったの？」アフレル「いやあ、色々調べてたらね……少しばは寝たよ」ヨコ「大変なのねえ……」アフレル「あ、き、昨日はごめん。夕食すっぽかしちゃって」ヨコ「ここによ。子供達の夢のためにも頑張ってね、あなた」

(643)

アフレル「う、うん、ありがと……」ヨコはとても機嫌がよそそうに見えたが、それが返つてアフレルを不安にさせた。まるで自分がいなくなつてしまっているかのような印象を受けたのだ。ヨコ「昨日は何食べたの？」アフレル「……ん、社食で普通に食べたよ。ちよつと変わったおかずもあつたけど」

(644)

そうツイートしつつ、アフレルはノル口達の食卓トレーをチラツと確認した。アフレル（何を食べてるのかな……え！？）とても豪勢な朝食だった。こんな朝ごはんを見るのは新婚の時以来かもしれない。アフレル「……」、「こんど帰る時、お土産に持つていくよ。エイリアンの漬物なんだけど」ワク「エイリアン！？」

(645)

朝なのでそんなにゆっくり話していられなかつたが、アフレルの新しい職場での話は、ノル口達にとって刺激的なものだつた。アフレルがシャワーに入つてしまつてからも、ワクはしばらく興奮状態にあつた。ヨコ「職場の人とも仲良くやつてゐみたいで良かつたわね、お父さん」ノル口とワクはうふと頷いた。

(646)

ノル口（でもお父さん、すぐ疲れた顔してた）それに、お母さんの顔色を気にしている様子だつた。ノル口（……色々気にしてるんだろうな）しかし、それよりさらに気になるのが、お母さんの異常なまでの機嫌の良さだ、まるでこれから好きな人に会いに行くような。ノル口（どうなつちゃうんだろ？）

(647)

ノル口とワクが、ランドセルをゆらしながら歩いていくのを見送つたヨコは、ルンルンとステップを踏みながら、寝室のクローゼットへと向かつていつた。ヨコ「どれにしようかしら」まるで初めて恋を知つた女学生のようだ、ヨコは次々と衣服を身にあてがつては、鏡の前でくるくると回るのでした。

(648)

ヨコが青年ホウとデートの約束をしたのはつい先日、ツイッター協会のチカラさんに事情を聞いたときのことだ。ホウがツイート能力を失った経緯を聞いたヨコは、その胸にしめつけられるような切なさを感じた。ホウ（あの人のこと、可哀想なんて思っちゃいけない……でも放つておけない！）

（649）

いきなりガンモードキを持つて現れて、奇矯なふるまいでナンパしてきてホウのことを、はじめは不審に思ったヨコだったが、フタをあけて見ればあら不思議。両親のネグレクトにより耳とツイート能力を失いつつもその過去を乗り越え、ツイッター協会で世のため人のために尽力する好青年だったのだ。

（650）

ヨコ「是非とも一度お会いしたいですわ」 それが開口一番、ヨコの口から出た言葉だった。ツイート能力を失っているホウと話すには、直接会うしかない。言づてをチカラさんにお願いして、ホウと連絡を取つてもらつた。チカラさんの話によると、ホウは喜びのあまり、その場で3回転ジャンプをして気絶したといつ。

（651）

ヨコ（……こんな年増の主婦とのデートを、ジャンプして気絶するほど喜んでくれるなんて…） しかも回転よ回転、どんな状況だったのかしら？ そんなことを考えつつも、お化粧に余念のないヨコだった。衣服は水玉のワンピースに黒のジャケット。バッグは花柄のトートバッグを選んだ。

（652）

水玉模様はヨコの勝負色である。ヨコ（水の色は私の色……）半端な気持ちで会つわけではない、という自分自身へのメッセージ

だ。しかし、あくまでも良い友達になることが目的なので、華美な色使いは極力さけ、バッグの花柄のワンポイントに限った。ヨコ（こんなものかしら？）

（653）

身支度を整えたヨコは、玄関の中でそわそわしながら時間が来るのを待つた。ホウが車を手配してくれることになつていて。ヨコ（そわそわ……そわそわ……）その時、外からクラクションが鳴つた。ヨコ（ドキーン！）玄関を出るとそこには、とりわけ目立ちはしないが、高級そうなグレーのセダンが来ていた。

（654）

ヨコはサッと車に乗り込んだ。中は無人でドアが閉じられると自動で発進した。内装は豪華な作りになつていて、助手席の部分は給仕コーナーの付いたテーブルになつていて、下のクーラーボックスにアイスティーと白ワインが用意してあつた。クリーム色の本皮シートにゆつたり腰掛けると、ヨコはまつでお姫様になつたような気分になつた。

（655）

隣の座席にバラの花束が置いてあり、手紙が挟まれていた。ヨコは花の香をそつと嗅ぎ、手紙を開いて読み始めた。【僕の敬愛なるミセス・イズミ】あくまでも年上の、敬うべき相手としてヨコは会食に招待されたようだ。手紙には、ヨコとデートできることがいかに嬉しいかが綴られており、独特のコーモアの中にも进るような情熱が伺えた。

（656）

会食の場所は、成田空港の近くにあるホテルレストラン。飛行船の離着陸を間近に見ながら食事をしようというわけだ。距離的には

亥音市から車で30分といったところ。道中、車窓に流れる景色を眺めつつ、先ほど読んだ手紙とバラを胸に抱いて、ヨコはつづりとした面持ちだった。

(657)

ヨコ（こんなにも誰かに心を尽くされたのはいつ以来かしら……）
そう自身に問い合わせねばならぬような気持ちだった。もちろん今でもその気になれば、そういう相手を得ることは難しくない。けれども今は家庭を持つ身。いくつもの幸せを同時に求めることが許されない。そう思い、ヨコはふうとため息をついた。

(658)

やがてキーンという飛行機のエンジン音が響いてきた。現在では殆ど使われなくなつた液体燃料式のジャンボジェットだ。国際線の一部でのみ運用されている。そのジャンボジェットの数倍はあるとかという、巨大なソーラー飛行船が、今ゆっくりと飛翔を始めているところだった。化石燃料が使えなくなつたことで、空の事情は大きく変化した。

(659)

ヨコはその飛行船を見て新婚旅行のことを思い起こした。空飛ぶホテルと呼ばれるエンタープライズ号に乗つて、アフレルとヨコは一週間かけて地球を一周したのだ。しかしその間、アフレルはヨコに謝りっぱなしだった。アフレル「ごめんヨコ、せめて雨漏りだけはしないように頑張るから!」

(660)

いつたい何がおこつたのか？ 世界トップクラスの豪華客船であるエンタープライズ号、その客室を予約することは非常に困難だ。以前ならお金さえ用意できればなんとかなつたのだが、今はお金の

介在しない世界。客室のチケットを得るには、気長に待つか、飛行船のキャプテンを説得しなければならないのだ。

(661)

エンタープライズ号のキャプテンは非常に大雑把な人で、客室から溢れた人でも通路やらホールやらに泊めてあげることあった。アフレルはそんなキャプテンの計らいで、飛行船の最上部にある空中庭園に泊めていただけのことになったのだが……。アフレル「まさか天井がないなんて思わなかつたんだよ！」

(662)

台風の近くを飛行すると聞いて、アフレルは必死になつてテントを持っている人を探し、何とか借りて空中庭園に張つた。そして雨風がビュウビュウ吹く夜を、ヨコとともに過ごしたのだ。飛ばされそうになつたり、雨がしみてきたり、飛ばされ度あの星を見られるのなら、また高山病になつたり、それは大変なことだった。ヨコ（……一生忘れないわ）

(663)

もつとも今となつては笑い話。（キャプテンが一番笑っていたようだ）それに良い思い出がなかつたわけでもない。アンデス山脈のウユニ塩原で見た星空は、それは素晴らしいものだつた。もう一度あの星を見られるのなら、また高山病にかかつたつて良いと思えるぐらには。

(664)

そんな追憶に浸つているうちに、待ち合わせのホテルに到着した。ヨコはジャケットの襟を正して気合を入れた。ヨコ（しつかりもてなされないと！）車のドアが聞く。ドアマンが指示示す道には赤いカーペット。そしてその向こうに、フォーマルな装いを淀みなく整えた青年の、少し赤らんだ笑顔が待つていた。

(665)

そのころアフレルは、仕事を午前中で切り上げて、咳音市へと向かう電車の中にいた。アフレル（……やっぱり一度帰らないとダメだ）ヨコの態度がどう考へてもおかしい、そのことがずっと頭からはなれなかつたのだ。アフレル（僕は一度、ヨコに怒られる必要があるんだ……きっと）

(666)

アフレルはこう考へていた。ヨコは僕の単身赴任のことを良く思つていなくて、本当は言いたいことが沢山あるのだけど、ノルコやワクのいる前での口喧嘩はしたくない、だからずつと一言二言笑つて我慢しているんだ。と。アフレル（……腹をわって話し合わなきやいけない。それも、ちゃんと直接会つて）

(667)

アフレルの手にはエイリアン漬けが入つた紙袋が握られている。子供達が学校から帰つてくる前に話しあを済ませて、そして何も気兼ねすることなく、みんなで夕食を楽しもう。お土産話もいつぱいしよ。アフレル（就職して一日田で休暇とつちやつたけど……でも家族の方が大切だ）複雑な思いを乗せて、電車はカタコトと進んでいく。

(668)

夫が家に戻つて来るなど思いもしないヨコは、優雅な昼食の真っ最中。程よく火の通つた石鯛のムニエルに舌鼓を打つていた。ヨコ「とっても美味しいわ。こんな素敵なお店、どうやつたら予約できるの？」ホウ「直に会つて交渉したんです。僕はツイッターが使

えませんからね

(669)

ホウ「不便じやないかと良く言われるけど、いつこう時は別ですよ。やつぱり、本当に熱意を伝えたいと思えば、直接会つて話すのが一番ですからね」ヨコ「まったくその通りだわ。私達はバイオツイッターに頼りすぎているかも知れない」ホウ「まあ、生まれつき備わってるんですけど」

(670)

ホウの年齢は19歳と聞いている。ヨコは実際に会つてみて、想像した以上に大人びた青年だと思った。老成していると言つて良いくらいだ。ヨコ（いったい、どんな人生を送ってきたのかしら……）話題もツイッターのことになつていて、ヨコは、今こそ彼の過去について尋ねる時だと感じた。

(671)

ヨコ「ホウ君も、元々はツイッターを使えたんでしょう？なんとか元に戻すことは出来ないのかしら？」ホウ「難しいですね。アンインストを使われましたから。僕の中にはまだ、アンインストの分子が生きていって、リンインストしようとすると拒絶反応が起るんですよ」ヨコ「まあ……」

(672)

ホウ「でもいいんです。僕はツイッターは失つたけど、その代わり、こうして貴女に出会うことができた」突然の告白に顔を赤らめつつもヨコは　ヨコ「前向きなんですね」と言葉を返した。ホウ「ええ、このとおり髪がボサボサで、後ろが良くな見えないものですから」ヨコはその微妙なユーモアにくすぐると笑つた。

(673)

ヨコ「私、ホウ君のコーモア好きよ？ なんというか、ツイッターで育つた人にはないセンスがあるみたい」 ホウ「そうですか？ そう言ってもらえると嬉しいな！」 ヨコ「でもきっと、色々な苦労があつたんでしょうね……」 ホウ「ええ、それはもう！ でも今の一言で吹き飛びましたよ」

(674)

ヨコ「ほんとに？ もし良かつたら、何か話していくださらないかしら。少しでもホウ君の身なつてあげられればと思うの……」 そう言ってヨコは、真摯なまなざしでホウを見つめた。ホウはその視線のために、座つたまま昇天しそうになつた。ホウ「ああ……今日は僕の人生最良の日だ」

(675)

ホウは、幼少時に耳を切り落とされた時のことを話した。ヨコはショックで、食事の手が止まってしまった。ホウ「しかし正直なところ、僕の中には悲しみも怒りもなかつたんです。なんというか、まるでそれが当たり前の出来事だと思えた。きっとこの運命は、僕自身が選んだものなんだと」

(676)

ホウ「協会に拾われた僕は、それから何年も外に出ませんでした。でもそれは塞ぎこんでいたからじゃない。僕には心を静かにして考える時間が必要だったんですよ。それも、とても長い時間が」 ヨコ「まあ……私には想像すら難しいことだわ。さつと二年と経たずに気がおかしくなつてしまつ」

(677)

ホウ「もしそんな状況に陥ることがあつたら、僕はいつでもスープとガンモドキを持つて飛んでいきますよ」変てこなジョークだつたが、ヨコは思わず吹き出してしまった。張り詰めていた空気が、一瞬にしてほぐれたようだ。ヨコ「うふふ、でもどうしてガンモドキが必要だつてわかつたの？あの時」

(678)

ホウ「僕には未来が見えるんです……と言つたら信じてくれますか？」ヨコ「ええ、もちろん。なんだかホウ君の言うことなら何でも信じちゃいそうな気分よ」ヨコはホウの不思議な能力について、チカコさんから話を聞いていた。ヨコ「だつて、こんな素敵にエスコートされたことなんて、今までなかつたくらいなんですも」

の

(679)

ホウ「気に入つて頂けてなによりです。でも、そんなにですか？」ヨコ「ええ、まるで私のことも世の中のことも、何もかも知り尽くしているような感じだもの。その若さで、これだけのことが出来る人なんて、そうそういないわ」ホウ「ああ……そんなに貴方に褒められたら、僕は……僕は……」

(680)

ホウ「ビヴァーチュ！ クルミナーレ！ エウフォリカメンテ！」ホウは爆発したように立ち上がり、フロアをクルクル回りながら窓に向かつていった。ヨコ「えつ、えつ？！」なんだなんだとざわめくフロアで、ヨコはただオロオロした。ホウ「今日は本当に良い天氣だなー！ イヤアアアホオオウ！！」

(681)

ヨコはなんとかホウについて行つて、席に連れ戻した。そして水

を飲ませたりおしごりを首にあてたりして、血の上りきつた頭をなんとか冷やした。フロアが落ち着きを取り戻したころ、ホウは我に返った。ホウ「ああミセス、僕はとんだ失態を……」ヨウ「ううん、いいのよつ。私が褒めすぎたのがいけなかつたの…」

(682)

料理はデザートに変わっていた。ジエラードの三種盛りだ。冷たくて甘酸っぱい一口が、一人のテンションを良い感じに冷ましてくれた。ヨウ「なんの話をしていたのだつけ……ああ、そうだわ、ガンモドキの話だつたわね」ホウ「はい……あれは、その、なんどいうか、なんとなくわかるんですよ」

(683)

ヨウ「何となく、私がガンモドキを買い忘れることがわかつたの？」ホウ「そうなんです。そうしたら居ても立つてもいられなくなつてしまつて……」ヨウ「不思議！ 世の中にはまだ科学で説明できないことが沢山あるのね！」ホウ「ええ今はまだ。でも、この僕の能力はまもなく解明されるでしょうね」

(684)

ヨウ「まあ、そんなことまでわかるのね！ 一体どこまで未来を見通せるの？」古来より、高名な占術家は非常にものることが知られている。未来を見る目を持つものに、人は本能的に魅かれてしまうようだ。今のヨウも、ちょうどそんな状態だ。ヨウ「私、ホウさんのこともつと知りたい！」

(685)

その言葉にホウの顔は再び赤くなつた。ヨウはしまつたと思つた。ヨウ「わ、私つたらなんてはしたない……気にしないでね？」ホウ「は、はい……ゲフフン。どこまでわかっているのかといふと、

僕自身にもよくわかりませんね……、宇宙の終わりまでわかつてゐる氣もするし、一瞬先のこともわからない氣もする」

(686)

ホウ「思うに、未来が見えるのはきっと僕だけじゃないんですよ。誰もがみんな、未来を見つめる目をもっているんだ。誰かが未来を発見して、その未来を変えようとしてしまったら、きっと僕が見たはずの未来も変わってしまう。そうして少しづつ未来も変化していくんですよ」ヨウ「……深い話ね」

(687)

その時ちょうど、ジャンボジェットが一機飛び立った。ホウ「例えまあの飛行機、行き先は誰でも調べられます。つまり未来がある程度はわかっているといえる。でも誰かがあの飛行機の行き先を変えてしまうかもしれない。その時に、見えていたはずの未来は少し違つたものに変わってしまうのでしょうか」

(688)

ホウ「僕はたぶん、人より少しだけ未来がよく見えるだけに過ぎないんだ。きっとツイッターを失っていることが、その原因でしょう。僕にはツイッターを持つている人たちの行動が、自分とは関連性を持たない一つの塊として見える。そのことが、僕に未来を予見させるんですよ。おそらくは」

(689)

ヨウ「なんだか、ホウさんが前向きな理由がわかつた気がするわ。貴方は自分がどんなものを持って生まれてきたかを、ちゃんと理解しているのね。大人でもなかなか出来ないことなのに」ホウ「ええ。きっと人は何かを失った分、何かをちゃんともらつていて。でもそれに気づくには、人それぞれ時間がかかるんです」

(690)

その後も一人は楽しく食事を続け、食後の紅茶まで飲み終えた。
ヨコ「ごちそうさま、とても美味しかったわ！」　ホウ「僕も、楽しいひと時を過ごさせてもらいました……。ところで、このあとちょっと行ってみたい場所があるんですが」　ヨコ「あら、どちらに？」　あまり遅くならなければ　　ホウ「大丈夫、帰り道の途中です」

(691)

そのころ……。アフレルは眩音駅に着いたところだった。アフレル（ヨコ、今なにしてるのかな）ふとそう思い、T-Sを開いて確認する。アフレル（ん……成田？ 友達とでも出かけてるのかな？）まだしばらく帰つてこないようなので、アフレルは駅前で暇をつぶすこととした。

(692)

アフレルは書店に寄つた。書店とはいっても、本そのものはどこにも置いていない。本のタイトルが書かれたARコードが、ジヤンルや出版社ごとに整理され、並べられている。いまや書店は本を得るために場所ではなく、今の自分にはどんな書物が必要かといふことについて、じっくり考える場所になつていてる。

(693)

アフレルはセルフサービスのエスプレッソをいただき、甘口のマキアートにアレンジして休憩所へ持つて行つた。書店の中央に設置された休憩所は、腰を据えて本探し出来るよう、一人掛けのソファーが並べられている。アフレル「……ふーむ」アフレルは店内に流れるジャズを聴きながら、女心に関する書物を検索した。

(694)

ヨコ（この車を予約するのだつて大変だつたはず……）帰りの車はワゴンタイプの迎賓車だつた。後部座席が向かい合つて座れるようにセッティングされている。目的地に向かつ間、ヨコは家族のことについて話した。ヨコ「それでね、ノルコがのぼせてたのを勘

違にして、病気が悪化したのかと思ひちやつたの　ホウ「はつは
つは」

(695)

話題の中心は、やはり失咳症になってしまったノル口のことになつた。ホウはそのことを知つていたが、いま初めて聞いたように振舞つた。ノル口との間に面識があることは、彼女のために伏せておく必要があつた。ホウ「それで、その後どうしたんです?」ヨウ「娘はいまPICOをもつていてるから……」　ホウ「ほほつ」

(696)

ヨウ「それで何とか会話ができるんですよ。でなかつたら私、無理やり娘を病院に連れて行くところだつたわ」　ホウ「ふうむ……咳けないというのも、なかなか大変ですね」　ヨウ「本当にね。そうだ、ホウさんなら何かわからない? 娘の病気がいつ治るかとか、そういうこと」

(697)

ホウ「現時点での予測でしたら……しかし、あくまでも現時点です、さつきも言いましたけど、未来はちょくちょく変化する」　ヨウ「それでかまわないわ。ちょっとでもわかることがあれば教えてもらいたいの。もう、この頃は娘のことばかりが気がかりで」　ホウ「では僭越ながら……」

(698)

ホウはすこし考え込んでから言つた。ホウ「ふむ……娘さんは3日以内にはツイートを取り戻すようです」　ヨウ「え? そんなにすぐ?」　ホウ「はい」　何事もなければ　とは、ホウは付け足さなかつた。実を言えばノル口のツイッター、もう治つているのだ。ただそのことにノル口が気づいていないだけで。

(699)

ヨウ「3日以内って」とは、今日にでも治る可能性があるってことね?」 ホウ「ええ、いつも眩してもおかしくない状態のようですね?」 ヨウ「まあ……ホウさんにそう言つてもらえて何だか安心したわ」 ホウは一ヶコリ笑つてそれに答えた。しかし、心の奥では厳しい表情をしていた。

(700)

今、ホウに見えているノルの未来は、とても危うげなものだった。まるで見えない蔓草に、ノルの全身が捕われてしまっているようなのだ。そしてその蔓草の動きは、ホウの予見眼をもつとしても予想不能だった。ホウ（あれがノル君の眩きを封じよつとしているのか、それとも……）

(701)

ヨウ「ホウさん」 ホウ「ううむ……」 ヨウ「ホウさん?」 ホウ「え、あ、はい」 ヨウ「着いたみたいですよ?」 いい、遊園地ですか?」 ホウ「ああ、すみません。なんだかボーッとしていました」 ヨウ「あら、具合でも良くないの?」 ホウ「いえいえ、きっと貴方が田の前に居るからですよ」 ヨウ「まあ、ホウさんつたら」

(702)

そこは眩音市の近郊にあるちょっとした遊園地だった。噴水広場にメリーゴーラウンド、野外ステージと、いくつかの遊具。10分もあれば回れるような、こじんまりとした場所だ。ホウの目的はメリーゴーラウンドだった。ホウ「昔からの夢だつたんです。……好きな人と一緒に、メリーゴーラウンドに乗ること」が

(703)

ヨコはハツと息を飲む。そして胸元を手で押された。ヨコ（きつとお馬の上で抱きしめられるんだわ！）ホウ「一緒に、乗つていただけませんでしょうか。ヨコさん」ヨコはまっすぐホウを見つめつつも、揺れ動く気持ちに翻弄されていた。ヨコ（……ダメよヨコ、私には夫が、家族が……）

(704)

そしてヨコは決心した。ヨコ「私は馬車に、貴方はお馬に。それでも……良いです？」それは否定の言葉だった。貴方とは恋仲になれない。でも、親しい間柄でいたい。そんな我儘を、ヨコはあって押し通した。ホウはその答えがわかつていたかのように答えた。ホウ「もちろん、よろこんで！」

(705)

そして二人はメリーゴーラウンドに乗った。騎士のように白馬にまたがるホウ。お姫様のように馬車に揺られるヨコ。一人の間の距離は2メートルばかり。遠くはないが、きらびやかなメロディーにかき消されるから、二人の間に声は通らない。ツイッターが使えれば、話せるはずなのに、一人ともそう思わずにはいられなかつた。

(706)

二人の時はゆっくり流れた。一人が、恋に関するあれこれに思い尽くすに十分な時間をかけて、メリーゴーラウンドはめぐり巡った。精一杯胸を張つて白馬を驅る青年を、馬車の中で物憂げな表情を浮かべる麗しき淑女を、数人の子供達が指をくわえて見送った。そしてメロディーの終わりとともに、一人の夢は覚めるのだった。

(707)

ホウは白馬から降りて馬車へと向かい、ヨウの手をとり広場に下りた。ヨウ「すごく楽しかった。本当に久しぶりだったから」しかしその言葉には“でも昔はよく乗ったの”というニュアンスがこもってしまった。ホウ「ええ……僕は初めてだつたんですよ」ヨウはただうつむいて、車へと歩いていった。

(708)

帰りの車の中はとても静かだった。プロポーズをするために招待し、されるために招待された二人。その目的が達成され、その結果が決まってしまった今となつては、どんな言葉も白々しく響くだけだ。二人ともそれを承知していた。ヨウ（私の倍は若いこの方が、どうして私なんか……）ヨウはため息を抑えるので精一杯だった。

(709)

まもなく車はイズミ家に到着した。二人とも車を降りて、玄関の前で向き合つた。あとは笑顔で再会の約束をするだけだ。ホウ「今日は忙しい中、本当にありがとうございました」ヨウ「こちらこそ。とても素敵な一時を過ごさせてもらいました」ホウ「こんなものでよければ、またいつでも招待……いたします」

(710)

ヨウ「うん。あ、そうだ。今度はうちに遊びにくるといいわ。チカヨさんも誘つてね。旦那が単身赴任なものだから、昼間はとても寂しいの」ホウ「……はい、是非、伺わせてもらい……」そこでホウはこらえ切れなくなつてしまつた。空を見上げて涙を流してしまつた。ホウ「ああ……神よ……」

(711)

ヨウ「ホウさん……」ホウはこう思つていた。自分はこの先、人として異性と結ばれることはないだろう。なぜならば僕の精神は、

GPT-Lを覗いてしまったことで、神のT-Lに触れてしまったことで、社会的生命としての階梯を飛び越えてしまったのだから。ホウ「僕はもう、誰からも愛されないんだ……」

(712)

ヨコ「そんなことないわ！」 そう言つてヨコはホウの腕を掴んだ。ヨコ「しつかりして！ ホウ君はすぐ素敵な人よ！ もうはつきり言つちゃうけど、わたし、これまで付き合つてきた男は数え切れないくらいなの！ その中でも貴方はダントツよー。だからきつと間違いないわ、自信を持つて！」 ホウ「み、ヨコさん……？」

(713)

そういう次元の問題ではないんだけど…… そう思いつつもホウは、あまりになりふり構わないヨコの姿に、どことなく心温まるものを感じた。ヨコ「他にもっと若くて素敵な女の子が、貴方に声を掛けてもらえる日を待つてます。だから私なんかのために絶望しちゃダメ」 ホウ「……はい」

(714)

ヨコ「うーん、まだ納得していない様子なのね……。じゃあ、こうしてあげるわ」 ホウ「えっ！」 そしてヨコはそつとホウの体を抱きしめた。包み込むように優しく。ヨコ「一回限りの大サービスよ。私は貴方の二倍も年上で、夫も子供もいて……わかるでしょ？」 これ以上は……」 ホウ「……ああ」

(715)

ホウはただ素直に、ヨコの善意に身をあずけていた。しかし彼女が自分の“二倍年上”とは感じていなかつた。ホウには全てが自明のことのように思えていた。彼女が自分を振ることも、こうして慰めてくれることも知つていた。自分はもう、普通の人間が何度生ま

れ変わつても達することのないような境地に、すでに在るのだ……

と。

(716)

ホウ（……僕はもう、誰からも愛されないかもしね。でも、僕が誰かを愛することは出来るんだ） ヨコが抱擁を解くころには、ホウの涙は乾いていた。一人はもう一度、互いの姿を見つめなおす。ヨコ「こんなところ、誰かみられてたら大変ね」 ホウ「は、はい……すみませんでした、ははっ」

(717)

ホウが少し笑つたことでヨコは安心し、バイバイと少女のように手を振つて、家の中に入つて行つた。ホウはその姿を見送り。そして達観したように空を見渡した。そして車に乗り込んで、その場を後にした。自分は全てを知つていると彼は思い込んでいた。しかし、道端で呆然と立ちすくむアフレルの姿は、彼の目には映らなかつたのだ。

(718)

ノルコ（……大事件だわ！） 帰りのHRの時だった。ノルコはその場に棒立ちになり、カタカタと震えていた。一体何がおきたのか？ レイタ「すっげー！ ノルコすっげー！」 先生「すごいわ！ ノルコちゃん！」 リン「こんなことが弦音小で起るなんて！」 ガズノリ「よ、世の中、わ、わからないね！」

(719)

突然だが、ノルコは『国会議員』に選出された。公衆洗面所におけるツイッター常設に関する法律、通称『トイレ法』の法案審議に参加することになったのだ。ノルコ（どうしてこうなった！？） どうしてもこうしても、バイオツイッターの選挙管理システムに選出されてしまったのだから仕方ない。

(720)

パチパチと拍手が降り注ぐ中、ノルコはひとまず立ち上がりてペコペコと頭を下げた。そして座った。先生「というわけで、このクラスから国会議員が誕生しました！ なんと弦音小学校が始まってから3人目の国会議員さんですよ！ みんなでノルコちゃんを応援してあげましょうね！」 パチパチパチパチ。

(721)

2100年現在の日本では、全ての国民に被選挙権が認められている。国會議員は法案ごとに選出され、その法案が議決されれば解散となる。それぞれの法案にとつて一番ふさわしい人達を集めて審議するところ訳だ。つまり総選挙は切り無しに行われるわけで、

投票活動は「」へ日常的なものになってしまった。

(722)

選挙の仕組みは単純で、みんながみんな誰でも好きな人に投票して、その投票数を累積していくというものだ。普段、ノルコのクラスで一番累積投票数が多いのは、色んな分野で何かと注目されるヤマオ君その人である。しかし当のヤマオ君は、どうこうわけか今まで誰にも投票してこなかつた。

(723)

「なにがビックリしたかって、ヤマオがノルコに投票したってことだよなー」 ルイの言う通り、ヤマオの投票によってノルコの累積投票数が一気に増加した。システム上、ヤマオがノルコに投票したことはノルコにしかわからない。ノルコはヤマオの同意を得た上で、それをみんなに伝えたのだ。

(724)

「あとやつぱ、呑けなくなつたせいで、変に注目されたつてのもあるんだろうなー」 リン「うんうん」 ノルコ（それは喜ぶべきことなのか、さてはて） 確かに、投票してくれた人を調べてみると、知らない人がずいぶんいる。あのミギノウエという人もノルコに投票している。ノルコ（……なんでかー？）

(725)

ノルコは家の前でバイバイと手を振りみんなと別れ、そそくさと家の中に入った。リビングには母のヨコがいた。テーブルに座つて両肘をついて、どことなくアンニユイな雰囲気だ。ノルコ（あれ？……朝はあんなに機嫌よかつたのに） ノルコは何となくそつとしちゃおいた方が良いと思って、そのまま素通りした。

(726)

洗面所で手を洗つてうがいをする。アフレルのコップと歯ブラシ
が田の前にある。ノル口（お父さん、今頃なにしてるかな？）ノ
ル口はぬるま湯にうがい薬をいれて丹念にうがいをする。ガラガラ
ガラガラ……べつ。タオルで手と顔を拭ぐ。特に用はないのだけど
トイレについて、便器が清潔かどうか注意深く確認する。

(727)

ノル口（トイレ法……か）それはトイレにツイッターを設置で
きるようにするための法案らしい。ノル口はそのメリットについて
考えてみる。ノル口（ツイッターとカメラをつないだら、いつでも
トイレが綺麗かどうか確認できるかな？）それはそれで便利かも
しないとノル口は思う。

(728)

ノル口の将来の夢は「良いお嫁さん」になることだ。『くありふ
れた女の子の夢。でも女として生まれて、それ以上に叶える価値の
ある夢があるだらうか？ そうノル口は思つてゐる。良いお嫁さん
とは、自分達の暮らす家を最高の状態に保つことができる人であり、
トイレの管理はその最重要項目の一つなのだ。

(729)

ノル口（あつ、そうだ） 国会議員になつたこと、お父さんとお
母さんに知らせなきや。そのことを思い出したノル口はトイレを後
にし、二階の浴室へと上がつていつた。そしてPCを立ち上げ、ツ
イッターを起動させた。ゲン「なんと！ ノル口はこっかいぎいん
にえらばれましたー」あれ、フォロワーさんがまた増えてる。

(730)

ノル口はこっかいぎいんにえらばれましたー……ノル口はこっか

いきいんにえらばれました……。ノル口はこつかいぎいんにえらばれました……。そのツイートは静かに、しかし確実に拡散していった。野を越えて山を越えて、電子の海の遙かまで。口口口の穴をくぐり抜け、遠い天の彼方まで。

(731)

ヨ口「ええっ？！」ヨ口がそのツイートを読んだのは、呴かれてから2分30秒後だつた。ヨ口「え？　ええー？！　なんでノル口が？！」お、お父さんにも知らせなきや……あれれ？」ヨ口がアフレルの状況を確認すると「オフライン」になつていた。ヨ口「あら、仕事かしら？　こんな時に……」

(732)

チカ口「あらあらまあまあ」ツイッター協会のチカ口さんがそのツイートを読んだのは呴かれてから4分01秒後だつた。チカ口「ホウー、大変よ、ノル口ちゃんがね！　国會議員に選ばれたつて！」しかしホウは部屋の中でGPT-Lを見て気絶していた。チカ口「もうー、まったくこの子つたら」

(733)

クメゾウ「ブフーッ！」盛大に麦茶吹いたクメゾウ。ウメナ「きつたないな！　何をそんなに驚いて……なんだつてー！」二人がそのツイートを読んだのは、呴かれてから10分49秒後だつた。クメゾウ「ゲッフ！　ゲッフ！　とんだビックリ水だがな！」ウメナ「大変なことになつたね……法案のこと調べないと」

(734)

ユウタ「うわっ、すごい！　ノル口お姉ちゃんおめでとう！」みんなとサッカーの練習をしていたユウタが、そのツイートを読んだのは呴かれてから15分55秒後だつた。カントク「こらユウタ

「、よそ見するなー！」　ユウタ「すみません！　友達が国會議員になつたんです！」　カントク「なにー！　おいみんなー！　練習中止だ！」

(735)

カイザワ「小学生議員キター！」　ヨシシゲ「キタアアアア！」ギンジ「イエーツ！」　養老会の集まりでゴルフをしていた3人がそのツイートを読んだのは、咳かれてから18分後だった。その場にいたお爺ちゃんお婆ちゃん全員がゴルフを中断し、法案についての井戸端会議を始めた。カイザワ「トイレは生活の基本！」

(736)

クサヨシ「イズミ・ノル」……おお、アフレル君の娘さんか、なんと「割烹着姿でだし汁の味を見ていたクサヨシがそのツイートを読んだのは、咳かれてから28分30秒後だった。クサヨシ「そして彼女は……我が敬愛なるイズミ・ゲン御大、そのひ孫さんでもあつたか。うーむ、世間とは狭いものだ」

(737)

イイズカ「アフレルのやつ、まだログオフしてやがるぜ」　ハップル「ナンカ変ジャナーヴ？」　二人がそのツイートを読んだのは、咳かれてから32分後、クサヨシから連絡を受けてのことだった。イイズカ「いくらあいつが絶倫だからって、このログオフ時間は異常だ」　ハップル「ナニやつてんだ？」

(738)

そのころノルコは、ゲンの名前でつぶやいたツイートが、驚くほど沢山の人々に読まれてことなど露も知らず、母と弟の三人で夕食後の家族会議を開いていた。ヨコ「さて、まずは当選おめでとう、ノルコ」ワク「コングラツュレーション!」ノルコは（いやはや……）といった感じで頭をかいた。

(739)

ヨコ「お父さんと連絡がつかないんだけど、きっとお仕事の関係だと思うの。ひとまず3人で考えましょ?」ノルコとワクは頷いた。3人は「トイレ法」を可決すべきかどうかの検討を始めた。ヨコ「まず! この法案の発案者はミタ・セイさん。32歳の男性よ。発案者としては、かなり若いほうね」

(740)

ヨコ「出身校はケイオウ、法学部を出ているわ。とても頭のいい人なのね。しかも会社の社長さんなのよ? この若さで本当にすごい人だわ」本当に、思わず唸ってしまうほどすごい経歴だと、ノルコとワクは思った。ワク「ホワッソ・カンパニー?」ヨコ「B・ソーシャルの会社よ」

(741)

B・ソーシャルは社会生活を便利にしたり快適にしたりするためのプログラム製品の総称である。ワクがはまっている「救星機神ガンバール」もB・ソーシャルの一種だ。バイオツイッターのネットワーク環境に上乗せする形で使用される。バイオツイッターをOS

として駆動するアプリケーションソフトのよつなものだ。

(742)

バイオツイッターそのものは誰でも好きに使っていい。しかし、B・ソーシャルの開発や使用には様々な法的制限が加わる。そのためソーシャル・アプリの開発者には、情報工学の知識のみならず、法学、社会環境学、心理学など、広範にして高度な知識が要求されるのだ。

(743)

ノルコ（ふむむ……ただものではない） やっぱり法律を作るような人は、すごい人なんだとノルコは改めて思った。そんなすごい人の考えたことを、平凡な小学生である自分にいつたい何が言えるというのか？ ハコ「『さわやか日常』っていう会社ね。通称サワニチ。あの『不審者チョッカー』もここの製品よ」

(744)

ハコ「ところでノルコ、実はつぶやき治つてたりしない？」 ノルコ（え？） いきなりだなあ、なんだらう？ そう思いつつもノルコは、頑張つて呟こうとしてみた。ノルコ「…………？」 ハコ「無理そう？」 ノルコはうなづく。ハコ「そつ、残念ねえ。でもきっともうぐるから大丈夫よ！」

(745)

母がやけに確信めいてそう語つので、ノルコ少し首をかしげる。ノルコ（あつ！） その時、重要なことに気づいた。ノルコ（つぶやけなくても国会に出られるの？） ハコ「国会までに治ればいいんだけど、もし治らなくても大丈夫よ。みなさんの議論をちゃんと聞いて、きちんと自分で判断して投票すればそれでいいんだから」

(746)

ノル口（そうだったのか） ノル口は国会議員というと、あれこれと難しい話し合いをしなければならないイメージを持つていた。しかし言われてみれば確かに、国会議員の最終的な役割は議決することなのだ。ノル口はトイレ法に関して最終判断を下すことを、多くの人達から任されたのだ。

(747)

ヨ口「国会決議の仕組みについておさらりしておきましょうか。まず、誰かが発起人になって法案を常設議会に出さなきゃいけないのね。法案自体は誰でもなれるけど、だいたい企業の役員さんとか、大学の教授さんとか、市民団体の人とかがやることが多いわ。まずは法案を作つて常設議会に提出するのよ」

(748)

ワク「ジヨーセヅギカイ？」 ヨ口「常設議会っていうのは、提出された法案を審査して、優先順位をつける議会のことね。月に一回、何もなくても選挙をすることになっているでしょ？」 ワク「オーライエス！」 ヨ口「常設議会には他にも、政府や裁判所を生暖かく見守るお仕事とかがあつたりするのね」

(749)

ヨ口「そして常設議会で決められた優先順位の高い法案から順に、議決国会で審議していくのよ。ノル口が選ばれたのが『トイレ法案衆院議決国会』で、これとは別に『参院議決国会』というのがあるわ。これは、衆院議決国会での議決が、本当に間違のないものかどうか、改めて審議するための国会なのね」

(750)

ノル口（なんだかコムズカシイな） ヨ口「これは二院制といっ

て、議会制民主主義が確立したころから連綿と続く、古式ゆかしき伝統なのよ。何事もよく何度も考えてから決めなさいっていう、先人達のありがたい教えなのね。だから一人ともちゃんと覚えておいたほうがいいわよ」 ワク「イエア！」

(751)

ノル口（シューインとサンインは何か違うのか？）ヨ口「ノル口、頭の上にクエスチョンマークが出てるわよ？」いい質問ね。衆院は庶民が選ばれる傾向があつて、参院はインテリさんが選ばれる傾向があるわ。これも昔の一院制の名残ね。でも権限は衆院の方が強いのよ」ノル口（ふむふむー）

(752)

ヨ口「じゃあ、いよいよ本題に入るわよ。トイレ法案の中身！」そう言つてヨ口は、法案の条文をテーブルの上に表示させた。ヨ口「本法案は、公共圏における犯罪抑止を目的とし、そのために必要となるバイオツイッター関連機器を、公衆トイレ、及び公共施設のトイレの内部に設置することを許可するものである」

(753)

ノル口（やけに長つたらしい文章だな）それがノル口の最初の感想だった。そしてその次に思ったことが。ノル口（ん？公衆トイレ限定なの？）ヨ口「公共施設つてことは、学校とか市役所とかね。あと野球場なんかも。とにかく不特定多数の人が使うトイレにツイッターを設置できるようこじましちゃうつてことね」

(754)

ワク「コンビニも？」ヨ口「そりゃ、入るわね。スーパーとか映画館とかもきっとそういうわね」何となく外出しにくくなりそうだな、とノル口は思う、がしかし。ヨ口「お外で急にトイレに行

きたくなつても、ツイッターが付いてればきっと安心ね」ノルコ
(！？) 母とは意見が食い違つてゐるようだ。

(755)

ノルコは知らず知らず表情が複雑になつてしまつ。ヨコ「ん？ノルコは何か思つところがあるのね？」ノルコはハツとなつて顔を上げた。近づく、何も言わなくても色々と伝わるようになつてしまつた。ノルコは腕を組んでしばし考え込んだ後、大きく一つ「うむ！」といつた感じで頷いた。

(756)

ヨコ「まあ、そんなに簡単な問題ではないかも知れないわね。トイレにツイッターがあると最低でも『いつ、誰が、どれだけそこにいたか』ってことがわかってしまうもの」だからこそ犯罪抑止の効果があるので、そのぶん人は公共の場におけるプライバシーを失つてしまふことになる。

(757)

ヨコ「ただ、この法案で重要なのは、ツイッター設置を『許可する』つて所。許可なのよ許可。義務じゃないわ。だからきっと氣の利いたお店とかなら、ツイッターのあるトイレとないトイレの両方を作ってくれるはずよ」ワク「ワンダフル！」ノルコ（トイレが四つに分かれるつてこと？ んー？）

(758)

これまでの母の話でノルコが感じたことは三つ。母がどちらかといえばこの法案に賛成だということ。世の中にはトイレへのツイッター設置を待ち望んでいる人も少なからずいるだろ？！ということ。そして、トイレが四つに分かれるかどうかは、法案を成立させてみないとわからないんじゃないのか、ということだった。

(759)

ワク「ワクはどう思う？賛成？反対？」ワク「ええ……」
エーヴィ「まだわからない？」ワク「ノーアンサー」エーヴィ「うふ
ふつ、こんなこと普段考えないものね。でも大事なことだからこれを機によくよく考えてみるといいわよ？」そんなこんなで夜も更けてきたので、今夜はこの辺でやめる」とした。

(760)

その後ノルコはお風呂に入り、歯を磨き、明日の学校の準備をし、自室の床を口々口々で丹念に掃除した。そして寝る前に部屋T・Sを確認しようと、耳たぶをクリックした。ノルコ（あれ？）部屋T・Sが開かない。どうやら壊れているようだ。ノルコは部屋のドアのすぐ横に取り付けてある部屋用T・Sを手にとった。

(761)

部屋用のT・Sは、だいたいマッチ箱くらいの大きさだ。コンビニとかスーパーとかで簡単に入手できる。内部に組み込まれた各種センサーが部屋の大きさを認識し、部屋の範囲内でやりとりされる情報をT・S上に記録していく、いわゆるコビキタスコンピューターの一種だ。これを部屋に取り付けることが、現在は常識になっている。

(762)

ノルコ（新しいの買つてこなきや） 部屋用T・Sは電池が切れたり、踏んづけて壊したりしても大丈夫な仕様になつてている。すぐ近くに別のT・S機器があれば、そこに全てバックアップされる。ノルコが明日やるべきことは、部屋用T・Sを買ってきてスイッチを入れて部屋に置く、たつたそれだけなのだ。

(763)

ノルコの部屋のT・Sは、子供の部屋にふさわしい設定がすでにされているタイプだ。デザインも花柄だつたりウサギの絵が描かれたりと、いかにも子供用っぽい。ノルコはその部屋T・Sをひっくり返して、その裏側を見てみた。「サワニチエレクトロニクス」

と書かれたステッカーが貼つてあった。

(764)

ノルコは机の上のひよこ型BOT「ピコッター」にアクセスし、今はもう電池が切れてしまった部屋T-Lの、情報バックアップを引き出した。ノルコ（ほおほ） サワニチエレクトロニクスは、あのトイレ法の発起人ミタ・セイさんが経営する「さわやか日常」の関連企業だった。ノルコ（世の中せまいな）

(765)

ノルコはその情報をたどつて、「さわやか日常」社のビジターハウスにアクセスし、そこから社長室T-Lに飛んだ。ミタ・セイさんは今日の昼すぎに一時間ほど社長室について、秘書の人といくつかの会話をしたようだ。ノルコはそのT-Lをまじまじと眺める。ノルコはさながら、さわやか日常の社長室にいるようだった。

(766)

セイ「きみの教えてくれたレストラン、すこく美味しかったよ。先方もずいぶんと気に入ってくれたみたいだ。何より知名度が低くて予約しやすいからね。またあんな隠れ家的な場所を見つけたら、是非とも教えてほしいよ」 秘書「お役に立て何よりです。足で検索すると結構見つかるんですよ」

(767)

セイ「そなんだうね、あれはネット検索じゃまず見つからないお店だよ。生垣で入口を隠してあるレストランなんて初めて見たね。とことん目立たないようになつて店主の配慮がいたるところに伺えた。あるんだねえ、あんな店が」 秘書「とつておきですから。あと、あまり呴かれない方が」

(768)

セイ「おっとせうだつた。うつかりしてたよ、せつかくの隠れ家に行列でも出来たら大変だ、はははっ」秘書「はい。ところで、取引の方はうまくいきそつなんですね?」セイ「ああ、先方はこちらの提案にとても好意的だつた。予定通り進めてかまわないよ」秘書「かしこまりました」

(769)

ノルコ（お仕事の話？ レストランの話？）社長室T「をちまちまと読んではみたが、それがどういやり取りなのかは今ひとつわからなかつた。B・ソーシャルの会社の社長さんが、誰どどんな取引をしているのかなど、ノルコには想像もつかない。ただ、人柄だけはなんとなくわかつた。ミタ・セイさんは明るくて誠実そうな人だ。

(770)

ヨコ「よのほーよのほー」ノルコ（あつ）ノルコは時計を見た。夜の十時を回るところだつた。ノルコ（寝なきや、あう?）キンッ……ノルコの頭に頭痛が走る。ノルコ（なんか頭痛が痛むな）ノルコはキンキン痛む頭を、両手で「ぎゅう」と圧迫する。ノルコ（治つた!）そして何も気にせず眠りについてしまつた。

(771)

深夜11時。まもなく終電もなくなるという時間に、ギンザの街をうろつく男が一人……。アフレル「ういー……ヒックツ」ずいぶんと泥酔しているようだ。顔は赤いのを通り越して白みはじめており、髪の毛もボサボサだ。よろよろと千鳥足で、まっすぐ歩くこともままならない。アフレル「月がキレイだな、アハハ」

(772)

昼間、ヨコの浮氣現場を目撃した（と勘違いした）アフレルは、そのまま亥音駅に引き返し、あてもなく彷徨つた。電車を何本か乗り継いで、どういうわけか海芝公園に行き着いた。神奈川県の鶴見工業地帯にある海芝浦駅は、昼間は利用者が殆どない。出来るだけ人のいない電車をと、乗り継いでいった結果だった。

(773)

その名の通り、海の上に浮かんだ芝地のような作りの海芝公園。アフレルはひとまずベンチに腰掛けて海を眺めた。ときおり魚がぴちゃんぴちゃんと跳ねる海原。その向こうに見える赤茶けた古い工場。アフレル（まるで世の果てだ……）そう思うアフレルの背後にあるのは、実は世界トップクラスの電気メーカーだつたりするだが。

(774)

アフレルはそのままたっぷり1時間、そのまま海を眺めていた。子供のころから続く、ヨコとの思い出が、脳裏に駆け巡っていた。アフレル（思えば僕の人生は、失恋そのものだつた……）物心ついたころから思いを寄せていたその少女は、アフレルの目の前で次々と知らない男たちのものになつていったのだ。

(775)

幼稚園児の時、知らない少年と手をつないで歩いているヨコを見て、アフレルはショックで体重が半減してしまった。小学3年の時。ヨコが知らない男子とキスをしたことを知つて1週間学校に行けなくなつた。中学1年の時、ヨコに恋の相談をもちかけられて、毎晩逆立ちして過ごすほど苦悶した。

(776)

しかしアフレルは、めげずにその試練を一つ一つ克服していくつた。

そして高校生になるころにはそのカタルシスをバネにして勉学に励めるまでになっていた。アフレル（だから今もきっと……）ヨロ
が浮気したという現実をバネにして、より仕事に精を出すことが出来るはずだ。アフレルは何度もそう自身に言い聞かせた。

(777)

が。アフレル「…………」何かが事切れていた。アフレルは何も言わずにバイオツイッターをログオフした。両耳をクリックしたまま5秒間。たったそれだけでアフレルは、この世界の誰ともつながらない状態になった。アフレル「…………ふつ」ほくそえんでも一人、その声はさざ波の音にかき消されていく。

(778)

そしてアフレルは海芝浦を後にした。途中、鶴見駅のキオスクでワンカップ酒を大量購入した。キオスクのおばあちゃんはアフレルがログオフしていることに気がつかなかつた。気づいてたら止められただろう。そしてアフレルは電車に乗りながらお酒を飲んだ。それから先の記憶は定かではない。

(779)

深夜11時20分。うらぶれた夜のギンザを歩く男が一人。もう電車はなくなつた。ログオンすれば車を呼べるけど、そんなことはしたくなかった。街角にはもう誰も歩いていない。店も開いてない。時折わら草の塊が風に吹かれて、砂っぽいアスファルトの上を転がつていった。まるでやさしい西部劇のよつな光景だった。

(780)

歩きつかれたアフレルは、何に使われているかもわからない、薄汚れたビルの隙間にうずくまつた。かつてバブルと呼ばれた時代があつて、その時ギンザは世界の中心だった。地球上でもつとも高貴

で、華やかで、富に溢れた場所だつた。人々はこの場所にありつたけの金と見栄とを持ち寄つて、競うように消費したのだ。

(781)

だがそれも昔の話。ありつたけの金と見栄は、ありつたけの借金と無氣力に変わり、貨幣制度に基づいた大量消費社会の終焉とともに、この街は歴史の遺物となつたのだ。東京のいたる場所が農地化され、人々は地方に分散して暮らすようになり、そして最後には、お金そのものが地上から消えうせた。

(782)

ヒビーン　どこからともなく、馬のいななきが聞こえてきた。
アフレル（……誰が馬を飼つているのか？）心なしか空気が馬くさい。昔々誰かが言つていた『ギンザでベロ飼う時代』というものが、もうそこまで迫つてきているかのようだ。アフレル（ああ……）
僕らはいつたい、どこへ行くのだろう

(783)

アフレルは馬のいななきがどこから聞こえてくるのか気になつた。その馬の姿を見てみたいと思つた。ひとまず立ち上がり、いななきが聞こえる方角へヨロヨロと進んでいく。ヒビーン、ブルルル
そう遠くはないようだ。そしてやつぱり馬くさい。アフレル「ここを曲がったところか……？」

(784)

目の前にほのかな明かりが差し込んだ。ランタンの明かりだ。ボロボロのビルの間に、木造の馬小屋がある。ちょっと冗談みたいな光景だなどアフレルは思つた。丸太を大雑把に組んだだけの簡単な馬小屋に馬が2頭つながれているのだ。アフレルは街灯にむらがる夏虫の「」とく、その光景に引き寄せられていった。

(785)

田の前には間違いなく馬がいた。栗毛の馬が一頭、つぶらな瞳でアフレルを見つめている。気にするわけでもなく、嫌がるわけでもなく、ただアフレルがそこにいることを認めている。アフレル「いい馬だなあ」 そして馬がいるということは、飼い主もどこかにいるということだ。いつたいたいどこに？

(786)

すぐ隣のおんぼろビルに目をやると、看板に一つだけ明かりがついていた。地下一階『BARオールドウェスト』バー？ いつたい誰が来るんだろう？ そう思いつつも気になつて仕方なくなつたアフレルは、そのビルの階段を降りていった。その先にはいかにも西部劇に出てきやうなあの扉、スイングドアが待ち構えていた。

(787)
スイングドア。押しても引いても開く、扉というよりはただの中仕切りに近いような代物。アフレル（なんでギンザにこんな西部劇なお店が？）しかし、やけに威圧感のある入り口だった。中には荒くれどもがたむろしていて、よそ者は容赦なく厄介」とにまきこまれてしまつような。そんな威圧感だ。

(788)
アフレル（……ふつ、まあそれも面白いかもね） いつ東京湾の魚のエサになつてもいいような心境だつたアフレル。その扉のかもし出す威圧感など、今の彼にはどうでもいいものだつた。手で開けて入るのも芸がないなと思ったアフレルは、そのドアを背中で押し開けた。しかし千鳥足がからまつて、転げるようなくつ突入してしまつた。

(789)
そしてそのまま、ゴロゴロと倒れこむ。古びた木の床がギシギシとなつた。バーへの進入方法としては、おそらく最低な部類に入るだろう。アフレルは恐る恐る顔をあげた。マスター「おやまあ」カウボーイハットを被つた老年のマスターがグラスを磨いていた。マスター「とんだよそ者のおでましですな、ほほほ」

(790)
マスターはそのまま無言でグラスを磨き続けた。アフレルはその姿をボーッと見つめた。店内はとても狭く、テーブル席が二つだけあつてあとはカウンター。椅子の代わりに丸太の横木が取り付けら

れている。アフレル（あの横木、座りにくそだなあ……）アフレルはしばらく田をぱちくりとさせていた。

(791)

マスター「お座りになつたらどうです?」アフレル「……はい」言われてアフレルは立ち上がる。そしてカウンターの前の横木をまたいで座ろうとした。マスター「ああ、またがなくてもいいです。こちらに背中を向けて結構」アフレルは何もいわずにそれにならつた。カウンターの反対側を向いて座り、上体だけマスターの方を向く姿勢だ。

(792)

アフレル「なんだか変な感じだ」マスター「慣れるところが中々イケてるんですよ? 今あなたはさながら、さすらいガンマンです」はあ、しかし残念ながら僕のピストルは折れていますが……とアフレルは心の中で呟いた。マスター「失礼ですが、お金はお持ちですか?」アフレル「……え?」

(793)

予想外の言葉だった。この国の貨幣は、アフレルが生まれるずっと前になくなつたのだ。マスター「その様子だとお持ちではないのですね。ログインもせず、お金も持たず。冷やかしもいいところですな」アフレル「……でもお金なんて、今時どうやって手に入れるんです?」

(794)

マスター「おや、ここにいるぞこますが?」そういってマスターはレジから一万円札を取り出した。福沢諭吉の絵が描かれている。アフレル「! ? 本物? 初めて見た……」マスター「まあ無理もありません。私が子供の頃はまだ使えたのですがね。時代の流れ

とは懲りじこものです」 アフレル「はあ……」

(795)

アフレル「この店ではまだお金のやりとりを続けているんだ……。
お金なんて遺残国債の処理をするだけのものと思つてた」 マスター
「まあ、おままごとみたいなものですよ。昔を懐ぶ者達のね。何
か飲みますか？ つけておきますよ？」 アフレル「つ、つけ？」
マスター「貸しにするところです」

(796)

アフレル「お、お任せします」 マスター「かしこまりました」
マスターはそう言つて大きめのグラスを取り出した。スコッチを
注ぎ、水で割る。最後に氷を一個浮かべる。マスター「どうぞ」
なんの変哲もない、ただの雑な水割りだつた。冷えてもない。の
どが渴いていたアフレルは、一気に半分ほど流し込んだ。味も薄か
つた。

(797)

アフレル「貸しつて、お金で返せばいいんですか？」 マスター
「ええ、どんなことをしてもお金を手に入れてください。もしく
は今すぐログインしてください」 アフレルは「……ぐぐ」とひと
つ唸つてから。アフレル「……必ずお返しします」と答えた。
マスター「ほほ。よほどログインしたくないんですね」

(798)

アフレルはそれ以上なにも言わず、店内をちまちまと眺めながら
水割りを飲んだ。店の内装はおおよそ木製だ。しかも、朽ちた廃屋
から拾つてきたような、小汚い木材ばかりだった。店内をほのかに
照らすランタンからは、油の匂いがもれています。アフレル「ケロシ
ンの火が……」 マスター「よくおわかりで」

(799)

アフレル「油はショッチャウをわってるから」 マスター「なるほど」 アフレル「こここの木材はどこから集めてきたの?」 マスター「そこかしこから」 アフレル「この水割りおいしいね」 マスター「それは何より」 アフレル「マスター、トイレ借りていい?」 マスター「そちらです」

(800)

アフレルはトイレに入り、ゆっくりと放尿した。ずいぶんと溜まつていたようで、いつまでたっても途切れなかつた。生まれてこの方、こんなに長く放尿したことなどないといいくらい、ゆっくり時間をかけて用をすませた。トイレを出るとマスターがお絞りをくれた。マスター「水道がないもので」

(801)

アフレル「マスター、外の馬つてマスターの?」 マスター「ええ、趣味で飼っています」 アフレル「とても綺麗な目をしていた」 マスター「馬ですから」 アフレル「乗つたりするの?」 マスター「ときおり」 アフレル「ところでマスター寡黙だね」 マスター「それほどでもございません」

(802)

アフレルは水割りを飲みきつた。マスター「おたばこは」 アフレル「吸いません」 マスターはグラスを下げてカウンターを拭き、代わりに小さなコップを置いて水を注いだ。アフレルは軽く会釈をした。アフレル「マスター」 マスター「なんでしょう」 アフレル「僕つて困ったお客様かな?」

(803)

アフレルはマスターに言われた通り、カウンターに背を向けて座っていた。だからマスターの表情はわからないはずだったしかしアフレルにははつきりわかった。マスターが背後で、自信満々の表情を浮かべていることが。マスター「あなた様なぞ、困った客のうちにほ入りませんなあ」

(804)

アフレル「む、まだまだ上がるつてこと?」マスター「ええ。世の中には実に凄絶な困ったお客さん方がいる。他の客にからむ。延々クダを巻く。ずっと寝てる。大声で自慢話ばかりする。嘔吐する。ひたすらいちゃつく。ウーロンハイありませんかって聞いてくる。實に様々です」アフレル「ウーロンハイ?」

(805)

マスター「ええ。そして私が無いといふと、『ちつ、ウーロンハイも置いてないのかよ!』と吐き捨てて帰ってしまわれる。本当に困ったお客さんですよ」アフレル「……バーで飲むお酒じゃないよね」マスター「まったくです。お子様用のミルクは出せても、ウーロンハイはお出しできません」

(806)

マスター「いやしかし。せめて不満を心のうちに留めておいてもらえば良いのです」アフレル「え?」マスター「思うことがあるのなら、言わなくともわかるもんです。それが、バーが寡黙な場所である意味だと私は考えておりますが」アフレル「……マスター」マスター「何かお作りしましようか?」

(807)

アフレル「お任せします」マスター「かしこまりました」そ
う言つとマスターは、アフレルの背後でそそくさと作業をはじめた。

どうやらカクテルを作るようだ。アフレル（何作ってくれるんだろ？）アフレルは、もし自分がマスターだったら、何をこの客に作つてやるだらうかと考えてみた。

(808)

「一日酔いに気をつけなさい」という意味でブラッディ・メアリー？もうすぐ12時ですよという意味でシンデレラ？今の自分の姿はまさしくこれだという意味でソルティ・ドック？もうこれで最後だよという意味でXYZ？まだふでくされるには早いという意味でギムレット？あたつて砕けるという意味でカミカゼ？

(809)

マスター「どうぞ」言われてアフレルはカウンターの方を向く。置かれていたカクテルグラスには、うつすらと青みのある液体が注がれていた。アフレル「……なんだろ？」マスター「一息にグイっとやるタイプです」飲み方まで指定されてる？どんなカクテルだろ？アフレルは言われるまま、一気にそのカクテルを飲み干した。

(810)

アフレル「?!@_#\$%^&！」瞬間、すさまじい刺激がアフレルの鼻腔を襲つた。とにかく滅茶苦茶な味がした。アフレル「げほつ！ げほおつ！ な、な、なんですかこれ！」頭に酒気が駆け上がり、視界がぼやけ、平衡感覚がマヒしていく。相當に強いカクテルだ。マスター「アース・クエークでございました」

(811)

アフレルはひつたくるようにしてコップを取り、ゴクゴクと水を流し込む。しかし、アルコールで熱くなつた胃袋は全然おさまらない

い。アフレル「ま、まさかこんなすごいのが……ゲフッ、ゲフッ」
マスター「元気でした?」アフレル「むしろ死にそうですよ
!」マスター「またまた」冗談を

(812)

マスターが面白そうにヒックヒと笑つたので、アフレルは流石に危機感を覚えた。もう本格的にお帰りになつたほうが良さそうだと立ち上がつた。マスター「まだ後から効いてきますんで、お早めにタクシーを呼んだほうが良いですよ」アフレル「そ、そそ、そうします……」アフレルはしぶしぶ両耳をつまんだ。

(813)

アフレル「……馳走様でした……」マスター「はいお氣をつけて。つけは2600円ですからね。ちゃんと手に入れてくださいよ、お金」アフレル「は、はい……ヒック!」何とかビルの外まで這い出たアフレルは、ツイッターにログインして車を呼んだ。車を待つ間、またあの二頭の馬が目に入った。

(814)

馬は立つたまま眠つていた。鼻息がふうふう聞こえてくる。ふうふう、ふうふう アフレル（……ああ生きているんだな） その馬たちは、今そこで確かに生きていた。酔いにぼやけた意識のなかでアフレルは、何故かそう実感せずにいられなかつた。やがて車が来た。何とか体を押し込んで行き先を設定する。

(815)

研究基地までは2時間近くかかるだろう。アフレルは後部座席にぐつたり横たわり、そのまま目を閉じた。アフレル（……ああ、ひどい目にあつた） 視界がグワングワンする。天と地が入れ替わる。アフレル「……お金どうしよう」しかしそう呟くアフレルの頭の

中からはもう、ヨコへの執着はすっかり消え去っていたのだった。

(816)

翌朝。ノル口（あつひ……）ノル口はベッドの上で頭を抱えていた。ズキン、ズキン。ノル口（頭いたいっ！）ひとまず顔を洗つたり水を飲んだりしてみよう。そう思いつつノル口は浴室を出る。今日は水曜日だが、祝日のためにお休み。こんな日に頭痛とはもつたいたい限りだ。

(817)

ノル口はいろいろ試してみたが、どうにも頭痛がおさまらない。ノル口（頭痛のお薬あるかな……）そう思い、Tレを開いて確認してみると。ノル口（なんじゃこれーー！）ノル口のTレは訳のわからない政治的リプライでゴッチャゴッチャになっていた。ノル口（頭痛の原因これがー）国会議員も大変だ。

(818)

大量のリプライが一度に押し寄せると、脳内回路に負荷がかかりて頭痛のような症状をきたすことがある。特に子供に多いのだ。ノル口（こうこう時はログオフ！）ノル口は両方の耳たぶを同時につまんでログオフする。ふと思つ。ログオフしたら喋れるようになつたりして。ノル口「あーあー」！？

(819)

ノル口はあわてて口を塞いだ。ノル口（声でた……どうしよう）別にどうしようもないのだが、反射的にノル口は口を塞いでしまった。神は言つていた、今はまだつぶやく時ではない。ノル口はあわてて自室に駆け戻ると、ゲンお爺さんのPCを立

ち上げた。

(820)

頭痛がひどいのでしばらくログオフします そうゲンお爺さんの名前でツイートしようと思ったのだが、途中でノル口の手は止まつてしまつた。ミギノウエ「やあ、やっぱりログオフしたんだね。いま君に直接リプレイしても、T-Sの流れが速くて届かないと思つたから、このタイミングを待たせてもらつたよ」

(821)

ノル口は反射的に全思考を停止させた。それが最大の防衛行動だと本能的に察知したのだ。ミギノウエ「まずは議員選出おめでとう。僕の言ったこと当たつただろ？ 君には並ならぬものを感じていたんだ。なにかこう、魂の導きみたいなものをね」 ノル口は彼の言つことをさっぱり頭に入れなかつた。

(822)

ミギノウエ「でもきっと君は困つてゐるんだろう。読みきれないほどたくさんのご意見リプレイが来てるはずだから。それでだね、お節介とは思いつつも、それらの意見を勝手にまとめさせてもらつたよ。なあに、なんてことはなかつたさ。ただ君と近しい人たちのリストを作つただけだからね、5分もかからなかつたよ」

(823)

ミギノウエ「このリストを使うかどうかは君しだいだ。僕はどうにも信用されていないようだし。でもこれだけは覚えておいてほしい。僕は人々のよりよい未来を常に願つてゐるし、人の生き方について君のひいお爺さんから教えてもらつたことを、心から感謝していることを」

(824)

〃〃ノウエ「それじゃあ、やつこいつ」と。またいすれ時がくればアプローチするよ。あと、僕は別に君の心を覗き見たりはしないから、そんなに心を開かせなくとも大丈夫だよ！ あと、それから、たぶんもうログインしても大丈夫なんじゃないかな。ＴＬもだいぶ落ち着いたろうしね。じゃあまた」

(825)

ノル口は〃ギノウエのリプレイを一通り流すと、両耳を再びつまんでログインした。そして一つ大きく深呼吸した。すうううううううう、はああああああ。ノル口（頭痛くなくなつた……まじまじ）そして、今日一日なにして過ごうそつかと、途方にくれてしまつた。ヨロ「ノル口ー、朝ごはんよー？」

(826)

そのころ。クオ「じえ、ジエネ先生。それじゃあ行くんだお！」ジエネ「はあーい、わくわく」弦音市近郊にある丘の上。クオとジエネは、今まさにパラグライダーで飛び立とうとしているところだった。クオ（ジエネ先生と空のタンデム……夢のようなんだおつおつおー）一人を乗せたグライダーが、風をはらんでゆく。

(827)

ジエネ「すゞーーー、本当に飛んだーーー！」クオ「まるで人がゴマ粒のようなんだおー」そのままぐんぐん上昇し、空の彼方へ。クオ「怖くないですかおー？」ジエネ「そんなことないですよーーーむしろ風が気持ちよくて眠く……」クオ「おー、おー、ジエネ先生、寝ちゃだめなんだおー！」

(828)

ジエネ「……すやすや」クオ「おーーーー？」実はジエネ先生、

ここまで来る間、眠くてしかたがなかつた。なんといつてもテー
トの相手は眠りのウイスパー・ボイスの持ち主、クオ先生であるのだから。
飛んだら眠気も吹き飛ぶかと思つたが、どうやらダメだつたら
しい。クオ「あつ、バランスが！　おつ、おー！」

(829)

二人を乗せたグライダーは、そのまま山中へと突つ込んでいった。
クオ「ひいいい！」　ジェネ「……むにゃむにゃ、もう食べられ
ない」　木に引っかかるて失速し、そのままずるずると地面まで
落ちていつた。クオは必死に身をよじつてジェネをかばう。そして
お尻からドスンと着陸した。クオ「お”つー！」

(830)

ジヒネ「むにゃむにゃ……はつ！」　流石にジヒネは田を覚まし
た。お尻の下でクオが伸びていた。ジヒネ「あら、どうしちやつた
の……」「は？」　あちこちと見回すと、一方に崖があつた。クオ
「こいつ……もう少しそれたら崖に突つ込んだところだおつ」
二人とも殆ど怪我がなかつたのが、まさに不幸中の幸い。

(831)

ジヒネ「……あら？」　ジヒネが何かに気づいた。ジヒネ「ここ
圈外だわ！」　クオ「ええ？」　クオは耳たぶをクリックしてT-L
を確認する。クオ「本当だ、圈外になつてるんだお」　山奥とかで
は圈外になつたりするが、まだそこまで深くは入つていなければ
つた。クオ「どういづことだお……？」

(832)

ジヒネ「電波障害がでてるのかモー？」　クオ「うーん。何はと
もあれ、森を出るんだおつ」　ジヒネ「あつ、ちょっと待つてクオ
先生。あそこ、何か変じゃない？」　クオ「なんだお？」　ジヒネ

が指差した先は、ちょうど崖の付け根だった。ジェネ「岩の形がちよつと変な気がする。まるで何かを隠しているみたい」

(833)

ジェネがやけにウキウキしているのを見て、クオはちよつと戸惑つた。クオ（この人、僕より冒険好きなんだお……） ジェネ「ちよつと探検してみましょうよ…」 クオ「だ、だおお」 言われてクオはジェネについていく。ジェネは岩の前まで来ると、ポケットから電灯を取り出して岩の隙間に照らした。

(834)

ジェネ「やつぱり奥に空間がある！」 クオ「鍾乳洞みたいなものお？」 ジェネ「それにしては形が不自然だわ。ねえ先生、ちよつとこの岩どかしましょうよ？」 クオ「ええ！ 何が出てくるかわからないんだおつ」 ジェネ「だつて気になるじゃない！ ほらほら！」 クオはしづしづ岩の隙間に手を入れる。

(835)

クオ「ジェネ先生のためならエーンヤコーラつと… おつおつお！」 クオ先生が渾身の力を込めて引っ張ると、岩は「ゴォン」と音を立てて倒れた。ジェネ「わああ、先生意外と力持ち！」 クオ「はあはあ、コツソリ鍛てるんだお……つて、おおお！」 クオ先生は言葉を失った。洞窟の中にはなんと……大きな箱があつたのだ！

(836)

ジェネ「宝箱！」 クオ「え、ええー？」 そんなバカな思いつつも、二人は箱に近づいていく。クオ「結構大きな箱なんだお。五月人形が入りそなくらいなんだお」 ジェネ「大きい箱つて、確かお化けとかが入つてた方よね？」 クオ「お、おー！ 開けないでおくかお！？」 ジェネ「まさか…」

(837)

ここまで来たら開けないわけにはいかなかつた。二人は顔を見合
わせ、お互に「うん」とうなずき合う。そして一人で箱のふたに
手をかけた。クオ「じゃあ、いくんだおつ」 ジェネ「せーの！」
パカッ。ふたは開けられた。二人は中をのぞきこむ。ジェネ「
…………」 クオ「…………」 そして何も言わずに閉じた。

(838)

ジエネ「クオ先生」 クオ「だお」 ジエネ「入つてましたね、
中身」 クオ「だおお」 ジエネ「何かこう……人の形をしたもの
が」 クオ「…………だお」 ジエネ&クオ「ひええええええええ
…………！」 二人は一目散にその場から逃げた。ジエネ「け、警察に
…………！」 クオ「知らせるんだお！！」

(839)

クサヨシ「おおっ、それはいいアイデアだアフレル君！」アフレル「え、そうですか？」アフレルはガンバールの腕の試運転をしながら、昨夜の車の中で思いついたアイデアを伝えていた。クサヨシはやつぱり厨房にいて、ネギを刻んでいた。クサヨシ「なかなか大胆不敵なアイデアを思いつくじゃないか」

(840)

アイデアというのは、純エネルギー生命体のエイリアンを発見する方法のことだ。光と一体化した彼らを発見することは、通常の方法では不可能なのだ。アフレルは昨夜のバーで見た2頭の馬から、アイデアの着想を得た。クサヨシ「言われてみればなるほど、生命体を認識できるのは生命体以外のなものでもないわけだ」

(841)

アフレルのアイデアは単純に言うと「バイオシッターのネットワークをパッシブレーダとして使用する」というものだ。アフレル「はい、生命って、どこか生命自身にしか感じることのできない『息吹』みたいなものを持っていると思ったんですよ」その着想を、昨夜の馬の中心得たのだ。

(842)

クサヨシ「さながら、われわれ自身の魂を受信機とするわけだな。いやはや、君も恐ろしいことを思いつく」アフレル「そ、どうですか？」クサヨシ「ああ。だってね君、その受信機は我々自身の心の実感であって、科学的に存在を証明できる代物ですらない。あ

る意味、科学への反逆、カルトと思われても仕方のない発想だ」

(843)

クサヨシの言葉に、アフレルは冷や汗を流した。クサヨシ「しかしまあ、やってみる価値はある。科学は常にそれ自身を超克していくものだからね。それに、そのアイデアならすぐに実行できる」アフレル「ええ？」 クサヨシ「我々の技術力をなめてもらつてはいけないな、2時間以内にプログラムを組み上げてみせよう」

(844)

クサヨシは「すたたたんつ」と鮮やかにネギを刻み終えると、その場で割烹着を脱ぎ捨ててレーダーシステム開発室へと向かつていった。アフレル「ほへえ……」 アフレルは鉄の腕をがっこんがつこん動かしながら嘆息した。イイヅカ「おーいアフレルもういいぞ、昼飯にしようぜ！」 ハップル「腹ペコー」

(845)

アフレル達は食堂へと向かうムーブウォーキに足をかける。イイヅカ「なあアフレル、言いにくければ言わんでいいんだが、昨日のやたら長いログオフは一体なんだつたんだ？」 アフレル「え？ 気になる？」 イイヅカ「そりやあな。殆ど半日ログオフしてたんだぜ？」 ハップル「ファミリーとナニかあつたん？」

(846)

アフレル「いや、家族とはうまくやつてるよ」 イイヅカ「ならいいんだが」 ハップル「イインダガ」 そしてアフレルは少しためてからこう言った。アフレル「だつて僕の奥さん超美人だし」 しばしポカーンとする一人。イイヅカ「こ、このやろお！」 ハップル「やっぱりゼツリンだつたんだな！？」

(847)

アフレルが職場で頭をグリグリされてるゝ、妻のヨコはリビングでテレビを見ていた。テレビ「本日の午前、弦音市近郊の山林で意識不明の状態の男性が発見されました。男性は洞窟の中に放置されていた箱の中から見つかりましたが、命に別状はないもようです。弦音市警察にて現在、身元の確認が進められています」

(848)

ヨコ「あら、怖いわね。一体なにがあつたのかしら?」 テレビ「それでは第一発見者のインタビューをご覧ください。クオは、箱の中に入つていて本当にビックリしたんだおつ、誰かの手によつて隠されたような感じだつたんだおつ。あ、カメラマンさん眠つちゃだめなんだおつ』

(849)

テレビ「ジエネなんというかこゝ、岩盤でフタをしてあつたんですね!」 クオ「そ、そつなんだおつ、結構重かつたんだおつ。ちなみに僕たちは『テート中だつたんだおつおつお』」 ヨコはふうむと唸りつつ、お茶を一口すすつた。ヨコ「何はともあれ、怪我が無くてよかつたわねー」 気がつけばテレビとお喋りしていたヨコだつた。

(850)

ヨコ「ふつ……なんだか退屈」 ワクはガンバールフェスタに行つてゐるし、ノルコは自室にこもつて色んな人の意見に目を通してゐるらしい。ヨコも何か手伝つてあげたかったけど、何か聞かれたときに答えてあげる以上のことは出来ないのだつた。ヨコ（あくまでも、ノルコが決めなきやいけない問題なのよね……）

(851)

三口（やうだ！ ホウ君は今なにをしているかしら…？） すっかりホウの友達になつた気持ちでいる魔性の女三口は、チカコさんにリプレイしてみた。チカコ「あら、三口さん、んにちは。ホウならさつき出掛けていきましたよ？ なんだかとつても焦つているみたいだつたんだけど、何かしらね？」

(852)

三口「え、そうなんですか？ お茶にでも招待しようかと思つたんですけど」 チカコ「うふふ、うちのホウを気に入つてもらえて何よりですわ。ホウは午前にGPTLを見て氣絶して、目を覚ましたかと思つたら飛び出て行つたんですよ」 三口「まあ……それはちょっと氣になりますねえ」 チカコ「ほんとにねえ」

(853)

チカコ「そりそり。今ですね、アップルパイ焼いてるんですよ？ もしお暇でしたら食べにきませんこと？」 三口「えっ、良いんですねか？ 我が家にも今ちょうど、良いお茶がござりますのよ？」 チカコ「まあまあそれは！ 是非と遊びにおいらしあそばせ。ホウもそのうち戻つてくるでしょう、おーほほほ」

(854)

三口とチカコが貴族口調で優雅なティータイムを画策しているところ、ホウは近くの公園に向かつて猛ダッシュしていた。ホウ「くつ……これは大変なことになりそうだ！ GPTLが僕を裏切るなんて！ 一体どういうことなんだ！」 GPTLが裏切った？ それは一体どういう状況なのか？

(855)

ホウはGPTLを見ることにより、大まかな未来の出来事を感じることが出来る。しかし、予想外の事件がおきたのだ。そう、呟音

市近郊の山林で見つかった意識不明の人物のことである。ホウ「誰だ、一体誰なんだ。GPTLをかき乱しているやつは！」ホウはGPTLのかく乱の根源が、近くの公園に現れることを感じていた。

(856)

ホウは全体力を注ぎ込んだ猛ダッシュにより、3分で公園にたどり着いた。ホウ「はあはあ……」何の変哲もない、ただの公園。ブランコがあつて鉄棒があつて砂場があつてベンチがあつてトイレがある。ホウ（どうやら、まだ来ていないうだ……ディッセスター）ホウはベンチに腰掛けて『その者』の訪れを待つた。

(857)

そのまま数分の時が経過した。まだ誰も来ない。木の上で小鳥がピィピィさえずつている。ホウ（……一体相手は誰だ……そして何が目的だ）ホウにわかっていることは唯一つ、正体不明の誰かが、人知れず人類の営みに干渉してきているということだ。その目的も、手段さえもわからない。

(858)

ホウ（まさか……地球外文明の干渉？）どうにも人間の仕業ではなさそうだとホウは思う。今の人類の文明レベルでは到底不可能なことが起こっているのだ、と。地球外生命体……もとい、エイリアン。ホウ（なんて荒唐無稽な……むつ！）その時、公園の入り口に人影のようなものがよぎった。

(859)

ホウ（……あれは）人影はそのまま公園の中に進入してきた。背の低い、小太りなシルエット。しかしその存在感は尋常ではない。切れ長にして眼光するどい双眸。驚異的にふくよかな福耳。ホウ（確か彼は、ノルコ君のクラスメートの……）カスガイ・ヤマオ

何故こんなにこうに?

ホウの表情が、いつそう険しくなった。

(860)

そのころ、ノル口は自室で煮詰まっていた。ノル口（あれがあれであれなつてぱつぱらぱーのぴーー） 色んな人の色んな意見を読み比べるうちに、ノル口は自分が今どこにいるのかさえわからなくなってしまった。ノル口（頭痛い……痛くないけど痛いう） そして頭をかかえてうんうん唸つた。

(861)

ゲンお爺さんの友達の、お爺ちゃん三人組からは「トイレは心のオアシスじゃからト「レ」設置はイカン！」との意見。ツイッター互助会のチカ口さんからは「トイレで起こった犯罪が原因で協会を尋ねてくる人もいるの」との意見。コウタ君からは「いつでもみんなと繋がつていられる方が安心だよね、賛成！」との「」意見。

(862)

お父さんの職場のイイズカさんは「一人でじっくり考え方できる場所ってやつぱり貴重だと思つから、ト「レ」いれるのは嫌だなあ、反対」との意見。お父さんの上司のクサヨシさんからは「全ての発明のトイレより生まれる。トイレへのト「レ」導入は、人類の発達過程に甚大な影響を及ぼすだろ」「と、どつちつかずの意見。

(863)

ウメナお姉さんからは「ゲンお爺さんならきっと反対したりうね。何事も慎重な人だつたし。だから反対」との意見。クメゾウお爺さんは「俺は別にどつちでもいいなあ。要はみんなの心がけしだいだろうがな」との意見。てんぐんばらばら自由自在、ときおり支離滅裂。ノル口（ハー！ みんな好き勝手言つて！）

(864)

ノルコはいい加減疲れてしまった。ノルコ（気分転換しないと…）
…あつ） 部屋のTシャツが壊れていることを思い出した。買いに行かなければ。ノルコは上着を着ると、壊れたTシャツをもつて玄関に向かつた。ノルコ（お母さんに言つていかなきや） そう思つてリビングを覗くもいなかつた。キッチンにもいないよつだ。

(865)

ノルコ（寝室かな？） お昼寝してたらどうしよう？ そう思いつつヨコとアフレルの寝室を覗く。ヨコ「ふんふんふん あらノルコ、どうしたの？」 ヨコはお化粧をして出掛けの準備をしていた。服装からみて、どうやらお茶会にでも行くみたいだ。ヨコ「お母さん、これからちよつと出掛けてくれるからね」

(866)

ノルコは壊れたTシャツを見せた。ヨコ「あら壊れてるわね。買つてこないと」 ノルコはそこで手を大きく上げて（自分で買いく行く！）と宣言した。ヨコ「え？ 自分で行く？ そうね、すぐそこのコンビニで買えるしね。買ついたらお母さんが戻つてくるまでお留守番してくれる？」 ノルコは大きくなずいた。

(867)

「コンビニ」は歩いて2分もかからない場所にある。ノルコは壊れたTシャツを回収ボックスに入れると、新しいTシャツを手にとつた。色んな絵柄のものがあるが、今回はイヌの絵が描かれたものにする。耳たぶクリックで部屋用Tシャツの商品情報を確認すると『仕様変更あり』とのロゴが赤々と点滅した。

(868)

ノルコ（なんだろう?）さっそく調べてみる。どうやら壁にピタつとくつ付けるためのテープの部分が変わっているらしい。ノルコ（子供がガムと間違って食べても大丈夫な粘着素材になりました……?）ちなみにペパーミント味であるらしい。ノルコ（そんなもの誰が作ったのかな?）ノルコせひ調べてみる。

(869)

ノルコ（!?）食べられる粘着素材の開発者はイズミ・アフレルとなっていた。ノルコ（お父さん!?）ノルコはしば口をあんぐりと開けたままホゲーっとしてしまった。ノルコ（これってすごいこと?）いや、きっと凄いことなんだろう。日本中の部屋ＴＬに使われるような品物を作ったのだから。

(870)

家に帰る途中、ノルコは何回かそのＴＬ装置を眺めた。そしてその度に言い知れぬ感慨に打たれた。ノルコが小公園の前を通り過ぎようとしたとき、なにやら騒ぎ声が聞こえた。ホウ「ヘイボーカー！」そんな耳たぶゆらしてどこに行くつもりだい？」ノルコ（ホウさんの声だ！）ノルコは公園を覗き込んだ。

(871)

ノルコ（あれは……ヤマオ君?!）ヤマオとホウが公園のトイレスの前にいらみ合っていた。ノルコにとつてそれは、まるでシユールリアリズム絵画の如き不可解な光景に見えた。ホウ「僕にわかるはずのことがさっぱりわからなくなつた！でもボーカー？君がその原因だってことはわかってるんだぜ、ビバーチェー！」

(872)

ノルコ（何を言つているんだろう?）ヤマオ君が何かしたの?）ヤマオはホウの言葉を事も無げにせり過ごし、いつもの変わらぬ

微笑を満面にたたえていた。かすかに後光が差しているかのようだつた。ホウ「なんとか言いたまえよボーイ？」 ヤマオは何も答えなかつた。その代わり ノルコに視線を向けた。

(873)

大出力レーザーの如く強靭にして確固たる視線に、ノルコはおでこの真ん中を打ち抜かれてしまつた。ノルコ（うひやう？！） そのままビーンと硬直する。ホウ「……ふふ、このタイミング。偶然とは言いがたいなボーイ&ガール？」 するとヤマオは招き猫のような仕草で、ノルコにこつちへ来るよう手招きした。

(874)

ノルコはカチコチとした動作で一人のもとへ歩いていった。ノルコ（一体何をしているの？！） 聞いてみたがつたが咳けない。もちろんヤマオも咳かない。ホウ「そして僕は喋れても咳けない」奇しくも全員ツイート能力が欠如していた。ヤマオ「……」 ホウ「……」 ノルコ「……」 三人はそろつて空を見上げた。空は青かつた。

(875)

ノルコ（この状況、一体どうなるんだろう？） ノルコがそう思いうやいなや、ヤマオが自らの両耳をつまんだ。ログオフしようというのだ。そしてノルコをジーと見つめてきた。まるでノルコにもログオフを進めているかのように。ノルコ（……てやんでも…） ノルコは半ばヤケクソ気味にログオフした。

(876)

ノルコのログオフを確認すると、ヤマオは何も言わずトイレに向かつて歩いていった。一人ともそれに続いた。ノルコは引き返すなら今しかないと思った。この先トイレに入つて、そこで『なに』と

も起らない』わけがなかつた。ノルコ（……それでも） それでもそこはトイレだった。今のノルコにとって、最も重要な場所だったのである。

（877）

ヤマオは多用途トイレの扉を開けた。体が不自由な方のために、広々としたつくりになつてゐる。もちろんT-1装置を含むすべての監視・記録装置が設置されて『いない』。ホウとノルコが中に入るとい、ヤマオはその扉を閉め、そして鍵をかけた。これで完全な密室。情報工学的に言つて、どこへも繋がつていない場所が成立した。

（878）

ヤマオ「やあ、わざわざ」「めんね。ノルコちゃん。そしてホウさん」 ノルコ（！？！？） 驚天動地の出来事だつた。ホウ「…………ほほう！」 ヤマオ「ノルコちゃん、声を出して驚いてもいいんだよ？」 ノルコ「なにじことだわ！？」 そして自分が喋れることをヤマオが氣づいていたことに氣づいて、ちらに驚いた。ノルコ「ほげー！」

(879)

ノルコは白目をむいてしまつたが、ヤマオは気にせず語り始めた。ヤマオ「あまり時間もないから手短にね。まずはノルコちゃん」そう言ってヤマオはノルコの方に向き直つた。ノルコは何とか白目むき出し状態から回復する。ヤマオ「ミギノウエ」という人を知っているよね。実はあの人、僕の知り合いなんだ」

(880)

ノルコ「ふ、ふう～ん……」ノルコはもつ大して驚かなかつた。驚くという感覚がマヒしていたのだ。ノルコ「そ、それで？」ヤマオ「それだけっ」そつけなくそう言つと、ヤマオは今度はホウに対してもうそつける。ヤマオ「次はホウさん」ホウ「ふつ、耳の穴かっぽじつてよーく聞いてさしあげよつじやないか！」

(881)

ヤマオ「GPT」は体によくないんだよー？」ホウ「そんなこと、言われるまでもないことさ。それで？」ヤマオ「それだけっ」またしてもそつけなくそう言つて、ヤマオは一人から視線をはずした。ヤマオ「じゃあ、もう出よう。人がきちゃうから」ヤマオはそれ以上何も言わず、トイレの扉を開けた。

(882)

まぶしい光がトイレの中に差し込んできた。ヤマオはトイレから一步踏み出ると、両耳をつまんでログインした。ノルコもそれに続いてログイン。ホウは髪をかきあげて無い耳に光を当てた。ホウ「そして君はもう眩かないんだね？」ヤマオは何も言わず、穏やかな笑みを浮かべた。

(883)

ノルコはヤマオに聞きたい事が溢れんばかりだったが、ログインした以上は咳くことが出来ない。ただヤマオの横顔を見つめ、その表情の奥にある彼の意思に思いを馳せる他にないのだった。ヤマオはそのまましばし空を見上げていた。何かを呴こうかと迷っているようだ、ノルコには見えた。

(884)

ノルコ（ヤマオ君……本当はもっとつぶやきたいのかな？） ヤマオ君の一聲は、きっと私のつぶやき一万回分の重みがあるに違いないと、ノルコは思わずにはいられなかつた。ヤマオ「……」 ヤマオ君がわざかに口を開いたように、ノルコには見えたのだが……。ノルコ（やつぱり氣のせい？）

(885)

ヤマオがノルコの方を向いた。その表情には、いつもと同じ微笑が浮かんでいる。そしてやはり後光がさしているように見える。ノルコ（……！） その瞬間じきだった。ノルコ（……そうか、わかつたよヤマオ君） ノルコの表情の変化に気づいたヤマオは、なんとも満足げな表情を浮かべ、そして何も言わずに去つて行つた。

(886)

通行人1「おい、たしかこの辺だ」 通行人2「あつ、いたぞ、ヤマオ君だ！」 彼らはヤマオが公園の中で突然ログオフした理由を探りに來た人達だ。有名になると、ろくにログオフも出来ない。ヤマオはその人達の前を、軽く会釈をしてから通り過ぎた。二人の男は、ただ呆然とヤマオを見送つた。

(887)

ノルコ（ヤマオ君はきっと、大勢の人に注目される」との意味を教えてくれたんだ） ノルコは無意識に空を見上げていた。そして思った。日本中、いや世界中から注目されるなかでつぶやくということは、もしかすると、大空に向かってつぶやくのと同じことなのかもしれない、と。

（ 888 ）

ホウ「……やれやれ、つまりはGPT-Lを見るなという警告か。一体彼は何者なんだろ？」「ヤマオが何者なのかはノルコにはわからない。もしかしたら宇宙人かもしないし、弥勒菩薩の化身かもしない。未来からの使者かもしない。ただ一つ間違いなく言えることは、ヤマオ君は友達だということだ。

（ 889 ）

ホウ「ところでノルコ君、ミキノウエといつのば？」 そんなのは私の頭の中を読めばいいでしょ！ とノルコは思う。ホウ「今の僕はGPT-Lの恩恵がまったくないんだ」 ノルコ（心を読めないってこと？） ホウ「そつなかもしないし、そつじゃないかもしない」 ノルコ（どっちなの！？）

（ 890 ）

ホウ「ああ……どうじょう。GPT-Lの使えない僕なんてただの変質者じゃないか」 ノルコ（自覚してたんだ？！） ホウ「こんな状態じゃ誰も救えやしない。また昔の僕に逆戻りだ」 ノルコ（そんなことはないんじゃ……） ホウ「ああ困った。ずっと未来を読める前提で生きてきたから。今僕は何をしていいかわからない」

（ 891 ）

ノルコ（とりあえず家に帰つたら？） ホウ「ああああー、今夜のおかずは何だろ？ それさえもわからないなんて！」 ノルコ

(ちなみに我が家はアジフライなのです) ホウ「ああああー、ムズムズする! いやクサクサか? むしろウサウサなのか?...」ノルコ(う、ウサウサ?)

(892)

ホウ「……ごめんよ、君に言つたってどうしようもないね。まだツイート直らないのかい? うち来てGPT-L見るかい?」ノルコは眼を閉じ耳を塞ぎ口をつぐんだ。ホウ「見える言わざる聞かざるかい? ふつ、まさに人が到達しそる最高の境地じゃないか。オールインワン」ノルコ(ホールインワン?)

(893)

ホウ「ふふふ……なんだか君を見てて元気が出てきたよ。君はつぶやきを失ったのに、そんなにも明るく今を生きているだね。僕も見習わなきやね」ノルコ(なんだかムズ痒いわ) ホウ「ああ、人は未来が見えずとも、前を向いて生きていくのだろうか?...」ホウはそのまま、力なく歩き去つていった。

(894)

何をそんなに落ち込む必要があるんだろう? とノルコは思う。ノルコ(未来が見える方がどうかしてるの...) そして今のノルコは国會議員で、考えることが山ほどある状況だ。ノルコ(気にしているないわ) ということで、余計なことは後回し。ノルコ(....でも、ミギノウエヒヤマオ君が知り合いつてどうこうこと?)

(895)

どの程度の知り合いなのだろうか? 親しいのか? ただ顔を見知っているだけなのか? また、何のためにそのことを伝えてきたのか。ノルコ(わからぬ...) でもまあ、そのうちわかるだろう。ノルコはそのくらいに考えて、それ以上深く追求することをやめた

もとい、やめることを自らの意志で選択した。

(896)

山林の奥で発見された意識不明の人物が目を覚まし、自らカスガイ・トシオと名乗つて、子と妻がいることを告白するのが、今日から一週間後のことである。しかし、それをまだノルコは知らない。知らうと思えば知ることが出来ることだったが、ノルコは自らの意志でその可能性を放棄した。つまり、ヤマオのことを気にしなかつたのである。

(897)

カスガイ・トシオが光情報生命体であり、宇宙全天に遍在する種族『光文明』の端末素体であることを、ノルコはもう一生知ることはない。ヤマオが彼と地球人女性との間に生まれたハーフであることも、地球人に情をよせてしまったトシオを更正するために派遣されたエージェントこそがミギノウエであることも、一生知るよしはない。

(898)

人知れず地球圈に侵入した光情報生命体、もといエイリアン。その存在に、ホウは危うく気づきかけたのだ。故に光文明は、彼の下にヤマオを派遣した。ヤマオはどういうわけか、その工程にノルコを巻き込んだ。それは光文明にとってイレギュラーな事態であり、現在その意義が全力で検証されているところだ。

(899)

光文明の目的は人類と友達になることである。しかし彼らからすれば、人類はまだ相当に幼い。ゆえに対話が可能になるまで人類の成長を見守るというのが、彼らのポリシーだった。しかし、こともあろうか、その幼い文明の生命体に恋して、子供まで作ってしまつ

た端末素体が発生した。これにより彼らのポリシーは大きく動搖する。

(900)

光文明は現在、そう遠くない時期に自分達の存在が地球人に知られるだろうと予期している。そしてその事態を可能な限り先延ばししようと、持てる知能を結集させている。幸い、ホウとノルコの二名は無力化できたようだ。しかしいずれその時は来るだろう。彼らの存在は、ヤマオという名の鍵かぎを通して、にじみ出でしまうのだから。

(901)

たとえヤマオが宇宙人だったとしても、友達であることには変わりない。ノルコが心の中でそう宣言してくれたことは、光文明にとってこの上ない喜びとなつた。おそらく、ここ数億年の間で一番の喜びであつたろう。彼らは最大限の自制を保ちつつも、やはりどこかで浮き足立つてしまつた。地上の光に、揺らぎが生じるほどには。

(902)

ノルコ（……ん？）なにか光つたような気がした。よく見れば、体の周りにキラキラと、光の粒子が踊つてゐるようだつた。ノルコ（あれあれれ？）目をゴシゴシこする。やっぱりキラキラしたものがまとわりついてゐる。ノルコ（なんだろう、なんか不思議だな……）キラキラはまもなく消えてなくなつた。

(903)

ノルコは再び歩き出した。ポカポカといい天氣で、自然とアクビが出てしまつた。ノルコ（はしたないふわああ）帰つたらちゃんとお昼寝して、それからまた皆のご意見ツイートを読もう。そんな他愛も無いことを考えつつ、ノルコは歩く。彼女が今まさに世界

の中心にいるところは、知る由もないことだし、知る必要もな
いことだった。

(904)

時計の針が15時を回ったその時、突然アフレルはクサヨシに肩を叩かれた。どうやらツイッターを使わないで話がしたいようだつた。その時クサヨシは、とても切羽詰った表情をしていたのだ。アフレル（な、なに？）とだろう……） クサヨシは何も言わず、ただ自室に向かつて歩みを進めた。

(905)

アフレルはクサヨシの自室に招き入れられた。クサヨシの部屋は和風な趣で、戦国時代の茶室を思わせるような作りになつていた。掛け軸には【人は人なり】と、なかなかの達筆で描かれていた。アフレル（ど、どうするんだ？）ドキドキ クサヨシはアフレルに座布団をすすめ、自らも座した。

(906)

アフレル（……え、ええつー！） クサヨシは何も言わずにログオフした。クサヨシ「君もログオフしてくれないか、大事な話がある」 アフレル（え、えええ！ ジ、自室で一人つきりでログオフつて、そ、それは！） 男同士であつても、そういうことをする際はログオフするものだが……。クサヨシ「……何か勘違いしてないか？」

(907)

アフレルはあわててログオフした。そして、アフレル「か、勘違ひ？ 何のことですか？」 と、とぼけた。クサヨシ「ふむ、ならば良い。実はとてもとても大変になつたんだよ、アフレル君」 アフレル「な、なんです？ まさか宇宙人が見つかつたとか言わ

ないですよね？」 クサヨシは口元に一矢りとした笑みを浮かべた。

(908)

アフレルの頬に冷や汗がつたつた。アフレル「……ま、まさか本当に」 クサヨシ「そうだ。本当に見つかったのだ。しかも大変なことに……」 アフレル「……なんですか？」 クサヨシ「アフレル君。宇宙人の反応はね……君の娘さんとの、すぐ近くでおきたんだ」 アフレルの表情が一瞬にして凍りついた。

(909)

アフレル「ここの人たちが悪戯好きなのは良く知っていますけど、さすがにその冗談は無いですよ？」 アフレルは目がマジになっていた。その眼光の険しさは、クサヨシでさえ息を詰まらせるレベルだった。アフレル「なんでわざわざノル口のそばに現れなきゃいけないんです？」 父は怒っていた。

(910)

クサヨシ「それはわからない……、ただこの白衣に誓つて言わせてもらおう。こんな笑えない冗談を私は言わない。反応が出たのは事実だ」 アフレル「……すみません」 クサヨシ「いいんだ。私だってまだ半信半疑なのだから」 クサヨシは開発用の情報端末を取り出した。クサヨシ「この端末は、私のPTLだけに繋がつている

る

(911)

アフレル「PTL？」 聞きなれない単語だったが、それはホウガパーソナルタイムラインと呼ぶもののことだった。クサヨシ「バイオツイッターを駆動させているソースコードのようなものだ。暗号化された個人の思考情報と言い換えてても良い。バイオツイッターの中核をなすものの一つだ」

(912)

クサヨシ「P.T.」は個人の無意識のコードであると同時に、全人類の集合的意識に対する『影』でもある。私自身のP.T.を利用することで、全人類の無意識的感覚を利用できるのではないかと私は考えた」アフレル「そんなプログラムを作っていたんですか？」たつた2時間たらずで、クサヨシ「うむ」

(913)

アフレル「その端末を見せてもらつていいですか？」クサヨシ「もちろん」アフレルは端末を受け取る。画面には宇宙人との接触が疑われる人物がリストされており、その最上位にノルコの名前があつた。アフレル「ほんとだ……」クサヨシ「私も驚いたよ、こんな結果ができるとは」

(914)

アフレル「なんだかよくわかりません……どういう基準なんですか？」クサヨシ「人間が地球上で生きていて、おおよそ経験するはずもない経験をした者を抽出している」アフレル「その経験って具体的にはどんな経験なんですか？」クサヨシ「その選定に自身のP.T.情報を利用しているのだ」

(915)

アフレル「そのP.T.」というのは、本人にもわからないように暗号化されているから……」クサヨシ「そうだ。私にもなんだか良くなからない」アフレル「うーん……」クサヨシ「ともかく君の娘さんが、通常では経験しえない体験をしたらしい。そのことは間違いないのだ。心当たりはないかね？」

(916)

心当たりもなにも、アフレルはもうずいぶんノルコと会話をしないなかつた。アフレル（娘の今の状況も把握していないなんて……僕は父親失格だ） クサヨシ「君の娘さんは最近、国會議員に選ばれたようだが、それについては何か話していないのかい？」 アフレル「……え？」

(917)

アフレルの頭の中に、クサヨシの言葉が幾度も反響した。国會議員に選ばれた？ ノルコが？ 国會議員に選ばれた？ ノルコが？ え？ クサヨシ「……まさかとは思うが、知らなかつたのかい？」 アフレルは頭の中が真っ白になつた。ヨコの浮気現場（勘違い）を目撃した時から、色々なものが吹つ飛んでしまつてゐるのだ。

(918)

アフレル「少し、時間をください……。家族とちょっと話してみます……」 クサヨシ「うむ、それがいいだろうな。心ゆくまで団欒すると良い。なんなら休みを取つたらどうだ？」 アフレル「いえ、それには及びません……では、失礼します」 クサヨシ「ああ」アフレルはクサヨシの部屋を後にした。

(919)

アフレルは近くのムーブウォークに乗ると、すぐさま丁しを開いて家族の丁しに目を通した。そしてトイレ法のことを知り、ヨコがノルコに日本の政治システムの説明をしたことを知り、ワクがガンバルフェスタで好成績を収めたことを知つた。無我夢中で目を通してるので、アフレルはうつかり基地の端っこまで来てしまつた。

(920)

アフレル「げげつ、ここどこー？」 そこは人気のまったく無い、廃倉庫のような場所だった。アフレル「はあー……」 アフレルは

頭を抱えた。どうして僕はこんなに間抜けなんだ。自分自身に呆れて言葉もでなかつた。アフレル（こんなんだから、奥さんを知らない男に取られちゃうんだ……）

(921)

引き返す気にもならず、アフレルはしばしそこに佇んだ。彼はけして間抜けというわけではない。ただ並外れて集中力が高いため、それ以外のことが目に入らなくなつてしまふ傾向があるだけだ。ひとまず気分を落ち着けて、状況をしっかりと把握できれば、大抵のミスは取り戻せる。

(922)

アフレル（……ここは試作品の投棄場なのか）よく見ると、暗がりの中にガンバークのパーツが見え隠れしている。長さ1.5mの巨大なバールまで横たわっていた。アフレル（もつたいないな）そこはとても静かな場所だつた。ここなら案外、落ち着いて家族と話せるのではないかとアフレルは考えた。

(923)

アフレル「ヨコ、今なにしてる？」ヨコ「あらあなた。今ね、チカコさんとお茶しているのよ？」アフレル「チカコさん？」チカコ「あら、ヨコさんの旦那さん？ 始めましてー」ヨコ「チカコさんはお菓子作りの達人なのよ？」アフレル「そ、そうなんだ。いいなあ、僕もなんだかお腹すいてきちゃつたよ」

(924)

ヨコ「あなた今、休憩中なの？」アフレル「うん、そうなんだ。ちょっとみんなの様子が気になつてね」ヨコ「そう……。ところでノルコがね」アフレル「うん知ってる。国會議員に選ばれたんだよね。僕も今、法案を読み込んでいるところなんだ。ノルコは今

なにしてる?」　ヨコ「お昼寝してるみたい。疲れてるのよ

(925)

アフレル「そうか……。頑張つて勉強してるみたいだしね、政治のこと」　ヨコ「あなた、あんまり驚かないのね。私なんか驚いてしばらくなにも言えなくなっちゃったけど」　アフレル「ん? そうかな。これでも結構驚いたんだけどな」　ヨコ「ふうーん」　嘘ではないが、つい先ほどのことだ。アフレル「うんうん」

(926)

ヨコとアフレルのリプライを聞いていたチカコが、微妙な一人の間の空気を察して話にわりこんできた。チカコ「主人は単身赴任なんですってね。家族と離れて寂しくありませんこと?」　アフレル「ええ? そりゃあ寂しいですよ」

(927)

ヨコ「えー? ホントに? 仕事に我を忘れてたりしない?」　アフレル「そ、そんなことないよ!」　そんなことありありだった。チカコ「うふふ。家庭のことを忘れるくらい楽しい仕事なんだたら、それは良いことじやないですか」　ヨコ「まったくだわ。私も半分分けて欲しいくらいね!」　アフレル「うう」

(928)

アフレルは流石にいじけてしまった。アフレル（……人の気も知らないで）しかし、すぐに気を取り直す。今のアフレルは、超重要な懸案事項を抱えているのだ。アフレル「いやでもさ、ノルコのことがとにかく気になるんだよ。いまノルコつぶやけないから、離れていくと調子とか様子とかわかりにくいからさ……」

(929)

チカラ「うんつ、それは」主人とつても心配だと思つ」　ヨウ
「それもそうねえ」　アフレル「何かこう、疲れてるとか塞ぎ気味
とか拳動不審とか、なつてない？」　ヨウ「国会の」とで煮詰まつ
てるようではあるわね。でも、気持ち的にじりじりしてことはなさ
そうよ？」　アフレル「ならいいんだけど……でも心配だな、国会
議員かあ……」

(930)
ヨウ「大丈夫よ。私もちゃんと見てるから。……あ、でも強いて
言つなら」　アフレル「な、なに？」　ヨウ「あなたが単身赴任す
る前の日の夜だつたんだけど、ノルコ、お風呂でのぼせちゃつたの
よね。そんなこと今まで一度もなかつたのに」　アフレル「え？
お風呂？」　アフレルはその夜のことを思い起します。

(931)
アフレル（そういえば、テレビを食い入るように見ていたな……
確か弓道講座）　ヨウ「お風呂でなにか考え方でもしていたのかし
らね？　本人に聞こうにもノルコつぶやけないし」　アフレル「ま
あ……そななんだよなあ」　ヨウ「でもきっと、もつすぐ治ると思
うから、そしたら聞いてみるわ」　アフレル「うん、頼むよ」

(932)

そこでアフレルはいつたん会話を切り、そしてその場を後にした。
アフレル（お風呂で考え方してた？　じゃあなんでその後、テレビ
の弓道講座に見入つていたんだろ……？　なにか変じやないか？）
アフレルはさらに記憶を探り、テレビを見ていた時のノルコの様
子を詳細に思い起こしそうとした。

(933)

アフレル（……なんとなく、田の焦点がテレビに合つてなかつた

ような気がする……はつ！－）そこでクサヨシの言葉とリンクした。クサヨシ『宇宙人の反応はね……君の娘さんの、すぐ近くで起つたんだ』アフレル「せ、せん……！？」咄嗟にアフレルは口を塞いだ。宇宙人に聞かれてはまずい。アフレル（洗脳された！？）

（934）

もう一刻の猶予もなかつた。光情報体の宇宙人に、自分の娘が洗脳された可能性がある。傍から見れば巴かげた妄想に聞こえるかもしないが、わずかでも可能性がある限り、最悪の事態を想定して行動せねばとアフレルは考えた。アフレル（どうすればいい……！）高鳴る胸を抑えつつ、アフレルは猛ダッシュでムーブウォーカを駆けていった。

(935)

タケシ「すげーゼワク！ いつの間にあんな上手くなつたんだよ？！」 ワク「イツ・シー・クレット」 ワクはガンバールフェス夕の帰りだつた。今日のワクは絶好調で、なんと撃破ポイント289をたたき出したのだ。これは国内では7位、世界では321位という、超がつくほどの好成績だ。

(936)

ワクは帰り道でずっとガンバール仲間の少年達に問い合わせられた。あまりにもいきなり強くなつたからだ。だがワクはその秘訣を誰にも明かさなかつた。そういう『約束』をしたのだ。ある人と。ワク（ミスター・ミギノウエ……アイ・ウィル・ワイン！） み、ミギノウエ？！

(937)

このところ、毎晩のようにワクをガンバール対戦にさそつくる大人がいる。その者の名はミギノウエ。ノルコにちょっかいをかけているゲンお爺さんのお友達だ。もちろん大人なので、いくらがんばっても撃破ポイントはあがらない。しかし、大人の知識を駆使したえげつない戦法でワクを翻弄してくるのだった。

(938)

ミギノウエ「ふはははー、まだまだ修行が足りんぞワク君！」 そう言つて挑発してくる彼のことを、ワクは『なんて大人気ない人なんだろう……ホワッツ・ア・チャイルディッシュ・マン！』と思つていた。しかし、彼と対戦するうちに、ワクのガンバール操縦技術はどんどん進歩していったのだ。

(939)

ジョージ「なあ教えるよ、なんであんなに上手くなつたんだよ？」
リュウヤ「あの翼の衝撃波でバーンつてやつ、どうやつてやるんだ？」タケシ「もつたいぶつてないで教えるゾ！」ワク「：大事な人の約束だから、いまは教えられないんだ！」ワクに日本語で言わわれては、誰もそれ以上追及できなかつた。

(940)

ミギノウエはワクにこう言つた。ミギノウエ「ワク君、おじさんはもういい年なんだけど、このガンバールというゲームが大好きなんだ……。こんなこと恥ずかしくて他の人には言えやしない。だからこことは秘密な？ な？」ワクも、大人に教わつたえげつない技で強くなつたとは、あまり人に言いたくなかった。

(941)

途中で友達と別れると、ワクは家に向かつてダッシュした。すぐお腹が空いていた。ワク「アイム・ホーム！」家に入るとキッチンへ行く。おやつのタイヤキがあいてあつた。ワク「hum?」姉のノルコの分が手付かずになつてゐる。もう4時になるというのに。ワクは一人分温めて、ノルコの部屋に持つていくことにした。

(942)

ワク「Knock Knock」しかし返事はない。ワクはソーッとドアを開けて、ノルコの部屋を覗いてみた。ワク「??」ノルコは机の椅子に正座して、ゲンお爺さんのPCとにらみ合っていた。そうとう髪の毛をワシャワシャしたらしく、アホ毛が数え切れないほど跳ね上がつていた。

(943)

ワク「シスター？」ノルコ（！）ノルコがガバッと振り向いた。そしてズカズカとワクの方に歩いてきて……ガツ！ ワク「ノー！」襟首を掴んだ。ワク「ちゃんとノックしたよう…」ノルコはワクの持っているタイヤキに気がついた。ノルコ（あ……ごめん）そしてワクの襟首を離して、頭をナデナデした。

(944)

ひとまずタイヤキを一つほおばる。甘くて熱々でおいしい。ワク「ホワッツ・ドゥーライング？」ノルコはフウと一つため息をついで、ノートPCを指差した。ワク「トイレ法？」うんうん。ワク「ベリー・ディフィカルト」うんうん。ワク「お父さんに相談してみた？」ノルコ（……そりゃ、お父さんの意見聞いてない）

(945)

ゲン「いま仕事？ 終わってからでいいから、トイレ法の賛成か反対か教えてー」と、ノルコはゲン名義でリプライを送った。しばらくかかるかと思ったが、返事はすぐに来た。アフレル「お、お爺さん！ ジャなくてノルコ。あ、あー、うわわわ。いやなんでもない……。大変なことになつたなー、アハハー」

(946)

なんだか調子が変だ。ゲン「いそがしい、無理しない」アフレル「いや、そんなことないぞ！ 今ちょうど休憩中だ」とは言つたもの、実はクサヨシと対策会議を開いていたところだつた。しかも筆談で。ゲン「トイレ法を知ってる？」アフレル「ああー、もちろんだとも。そんな大事なこと、お父さんが見過ごすわけないだろー？」

(947)

なんだか無理をしている様子だったが、ノルコは気にしないこと

にした。アフレル「あれはなー、すごく微妙な法案だなー。父さんは反対だ」 ゲン「その心は」 アフレル「今は公共のトイレだけつてことになってるけど、そのうち家のトイレにも丁し付けたほうが良いつて雰囲気になりそうな予感がするんだ」

(948)
ゲン「ふむふむ」 アフレルはドキリとした。ゲンお爺さんもよう『ふむふむ』と言つて人の話を聞いていた。まるでノル口の体にゲンお爺さんの魂が乗り移つていてるみたいだつた。ゲン「雰囲気に流されると良くない」 アフレル「ま、まあ、そうだな。雰囲気つていうのは人の手では制御できない不安定なものだしな」

(949)
ゲン「もう少し考えてみる」 アフレル「ああ、あんまり氣負わないようにな。……ところでノル口。国會議員になつて色々注目されてると思うけど、最近変わったことはないかい?」 ゲン「んー……」 あると言えばある。ヤマオ君のこととか、ミギノウエとう人のこととか。でもそれをお父さんに言つていののかどうか。

(950)
ノル口（……どうしよ?） ヤマオ君との密談はきつと言わないほうが良い。ログオフしてまでヤマオ君が伝えたかったことだ。でもミギノウエさんのことは言った方が良いかなとノル口は思う。ルイちゃん達も知つていることだし、ゲンお爺さんの丁しを読めばすぐわかつてしまつことだから。

(951)
ノル口（なにより家族内の隠し事は少ない方がいい!） ゲン「ミギノウエさんというゲンお爺さんの友達と知り合いになつた」 アフレル「ミギノウエさん? んー、聞いたことないな……。そん

な知り合いが爺さんにいたんだ」 ゲン「お爺さんとは政治みたいな話をいっぱいしてたんだって」

(952)

アフレル「へえー、知らなかつたなー」 ゲン「私が国會議員になることを予言した」 アフレル「……え、まじ?」 ゲン「まじまじ」 アフレル「……ねえノル口。その人は本当にゲンお爺さんの友達なんだね? お父さんもあとで調べてみるけど」 ゲン「うん。ルイちゃん達とT」を読んだ」

(953)

ワク「僕もその人知つてるよ?！」 ノル口（え?） ワク「最近よくガンバールで遊ぶんだ」 アフレル「ええ? 一体あいくつなの? その人」 ワク「サー・ティー・フォー！」 アフレル「んー、もうパイロットになれる歳じゃないな……いくら上手くてもボイント稼げないよ」 ワク「オールライト&シークレット」

(954)

アフレル「そうか、ワクもお世話になつていいんだな。じゃあ父さんもちゃんとじご挨拶しておかないとな」 アフレルは本当はこう言いたかったはずだ。『なんでそんな大事なこと、もっと早くいわなかつたんだ!』と。しかし、単身赴任でゴタゴタしていた時期でもあった。ノル口達も言い出しにくかつたのだ。

(955)

アフレル「おっと、そろそろ休憩時間も終わりだ。トイレ法のことはまた後でゆっくり考えよう」 そこで会話は終わった。ノル口とワクは、タイヤキを食べたので喉がかわいてきた。とてもお茶が飲みたかったので、一人でドタバタとキッチンに下りていった。ノル口はお父さんに怒られなかつたことを、少し不思議に思った。

(956)

チカコ「結局ホウは戻つてこなかつたですねえ」ヨコ「ええ残念。でも、とつても美味しいお菓子をいただきましたわ」チカコ「いらっしゃい、いいお茶の時間を過ごせました。また是非いらしてくださいね」一人が玄関で、何度もお辞儀を繰り返していると。ホウ「オオ……マイ・セレーネ」

(957)

チカコ「あら、おかえりホウ。ヨコさんが遊びに来ていたんだよ？」ヨコ「まあ、こんなタイミングで会うなんて。ご機嫌いかが？」ホウは青ざめた表情で後ずさり、そのまま胸を抑えて倒れこんだ。ヨコ「え、ええ？！」チカコ「ちょっとホウ！ どうしたんだい」ホウ「ジーザス……」

(958)

GPTの恩恵をなくしたホウは、それだけでずいぶんまいっていた。そこに突然現れたヨコは、彼にとつて刺激が強すぎたのだ。ホウ「だ、大丈夫……きっと、日に当たりすぎたんだ……」ヨコ「そうなの？ 心配だわ。お医者さん呼ぶ？」ホウ「いえ……少し横になれば……」

(959)

ホウはそのままヨコとチカコに支えられて自室まで行き、ベッドの上に横たわった。チカコ「私、なにか冷たいものを持ってきまーす！ ヨコさん、お願ひできます？」ヨコ「はいもちろん！」そしてヨコはホウの熱を測つたり、衣服を緩めたりした。ホウ「え、ああ！ そんなここまで！」ヨコ「いいのよ！」

(960)

ホウの青ざめていた顔が、今度は急激に真っ赤になつた。これではまるで、看病といふ名の拷問だ。しかしヨコはまったくお構いなかつた。ヨコ「ひどい熱。熱中症かしら……とにかく冷やさなきや」そこでヨコは大胆な行動にでた。ヨコ「私の二の腕つて、いつつもヒンヤリしてゐるよ…」そつとつてホウのおでこに当たのだ。

(961)

ホウ「わあー！」ホウは絶叫した。頭の中が滅茶苦茶になつていた。ヨコ「ひょえ！？」ホウはヨコを突き放す。そしてベッドから這い出で、机の上に置いてあつたGPT-Lディスプレイを手に取つた。ホウ「ああああ……やつぱりこれがないと僕は……僕は…」そう言つてGPT-LスイッチをONにした、その瞬間。

(962)

ホウ「Hザスペラツツイオーネ！！」ホウは雷に打たれたように身を震わせ、そして氣絶した。ヨコ「…………どうこうことなの」チカコ「ヨコさん、おまたせ……って、ええ…？」チカコは手にしていた氷嚢とタオルを床に落としてしまつた。チカコ「なんでGPT-Lを見たんだい？」ヨコ「GPT-L？」

(963)

二人が流石に医者を呼ぼうと思つたその時。ホウ「…………う、ノルコ君……GTP-Lを……はやく」ヨコ「！？」どうしてホウがノルコの名前を？ ヨコ「どうじうことなんですか？」チカコさん……ホウ君とノルコは知り合つたんですね？」チカコ「え？ 知らなかつたんですか？」ヨコはもう、何がなんだかさつぱりだつた。

(964)

それからもホウは、うわ」とのよにしてノルコの名前を呼び続けた。その間にヨコはチカコから説明を受け、呴けなくなつて間もない頃、ノルコがホウに連れられて、ここに来ていたことを知った。ヨコ「そんなことがあつたんですね……」。ノルコはまきつと、言いたくても言えなかつたのね。つぶやけないから

(965)

間もなく医者が到着し、ホウの診察を始めた。医者「光癲瘍ですね。何かチカラチカしたものを見たんでしょう? いけませんなー、そういうお遊びは」 それ以外の問題がないことを確かめると、お医者さんはプリプリしながら帰つていつた。チカコ「ヨコさんも遅くなる前に帰つた方がいいわ。ホウは私達が見てますから」

(966)

ヨコは後ろ髪引かれる思いだつたが、子供達のこともあるので帰ることにした。そして道すがら考えた。ヨコ（あのティスプレイがホウ君に予知能力を与えていたのね。でもそれをノルコにも見せるつて……何のために?） いくら考えてもわからない。ただ一つ確実なことは、もうホウにはGPT-Lを見せられない、ということだつた。

(967)

そのころ……クサヨシの部屋（和風の部屋）で、筆ペン片手に難しい顔をしている大人が一人。アフレル「……」 クサヨシ「……」 机の傍らには、墨で真っ黒になつた半紙が分厚く積み上げられている。毛筆による筆談を続けて、二人はほぼ同一の見地に達していった。アフレル&クサヨシ（ミギノウエが黒だな……）

(968)

クサヨシが2時間で開発した「宇宙人に目をつけられた人発見器」によれば、その有力候補は以下の通りである。【一位：イズミ・ノルコ 二位：カスガイ・ヤマオ 三位：カスガイ・トシオ 四位：ツブヤ・クオ 五位：ジェネ・フランソワ】上位の殆どをノルコに近しい人たちが占めていた。

(969)

カスガイ・トシオについて調べてみると、彼がヤマオの失踪した父で、本日の昼に眩音市近郊の山林で発見されたことがわかつた。アフレル（これ単独でも驚くべき事件なんだけど……）クサヨシ（発見器に引っかかつた以上は人間と見なすべきか……）例えその人が、何ヶ月も飲まず食わずで生きていたのだとしたも。

(970)

アフレルらは、最近ノルコと接触した人間の中で「宇宙人と接触した可能性が最も低い人物」を検索した。それが彼、ミギノウエ・コウイチだつた。しかもずば抜けて低かつたのだ。ついで、ここ最近のミギノウエのツイートを検分した。そして、決め手となるツイートを、ゲンのT-L中に発見した。

(971)

【ミギノウエ「それじゃあ、そういうことで。またいざれ時がくればアプローチするよ。あと、僕は別に君の心を覗き見たりはしないから、そんなに心を閉ざさなくても大丈夫だよ。あとあとそれから、たぶんもうログインしても大丈夫なんじゃないかな。T-Lもだいぶ落ち着いたろうしね。じゃあまた」】

(972)

『もうログインしても大丈夫なんじゃないかな。T-Lもだいぶ落ち着いたろうし』この発言である。これはつまり、ノルコが頭痛

を患つてゐることを、ミギノウエが知つていたことを意味している。しかしどうやって知ることができたのか？それをアフレルとクサヨシは検証し、そして「不可能である」という結論に達したのだ。

(973)

ノルコの部屋のT-Lはその時壊れていた。もし壊れていなければ、部屋T-Lにアクセスすることで、ノルコの状態を知ることが出来たかもしない。しかしその時T-Lは壊れていたのだ。まったくの偶然に。そしてミギノウエは、その部屋T-Lが壊れていることに気づいていなかつた。いや、気づけなかつたのだ。

(974)

クサヨシ（T-L装置の内部プロセッサーは量子ビットによつて構成されている……）アフレル（量子ビットはその量子効果により、ある確率で壊れることが確定している……）クサヨシ（しかし“いつ壊れるか”は不確定性原理により誰にもわからない……）アフレル（たとえ、どんなに進歩した生命体であつても……）

(975)

この時のミギノウエのツイートは、ノルコが頭痛を患つてゐることを『確實に知ることができる』という状況が前提になつてゐる。しかしそれは明らかにおかしいことなのだ。クサヨシ（彼は通信手段はあるが、物理手段さえ用いなくとも我々を知ることが出来る）アフレル（そんなことが出来る人は宇宙人に違ひない！）

(976)

とはいゝ、謎がすべて解けたわけではない。なぜミギノウエといふ名を騙る宇宙人は、そつまでしてノルコにメッセージを伝えたかったのか？どうやら、なんとしてでもノルコを政治の舞台で活躍させたいらしいが……。クサヨシ（彼らの意図はわからない）ア

フレル（だけど僕達に無断で干渉してきてる）

(977)

アフレル＆クサヨシ（なんとかせねば……） そのため僕達はここで働いている。ガンバールを作っている。どこぞの宇宙人は勝手な干渉をされていることを知つて、それを黙認することは我々の矜持に反する。クサヨシ（ガンバールを起動する） クサヨシは流れのような手つきで半紙にそう書いた。アフレルはただ黙つて頷いた。

(978)

アジフライはワサビ醤油をつけて頂くものだとノルコは信じて疑わない。ノルコ（だってお魚料理じゃないか） そんなノルコを奇異な瞳でながめつつ、弟のワクは普通にウスターソースをかける。ヨコ「今日はなんだか疲れたわあ……」 母はため息をつきつつ、クレイジーソルトをパラパラとかける。

(979)

アフレル「何かあったのヨコ?」 と、画面上のアフレルがつぶやく。単身赴任三日目にして、ようやく一家そろっての夕食だ。いつもアフレルが座っている席の上に、社員食堂で夕食をとるアフレルの姿が表示されている。ヨコ「……ちょっとチカコさんの所でひと騒動あって」

(980)

ヨコはホウという青年が、GPTLという装置を見たとたん気を失つたことを話した。アフレルは彼が妻の浮氣相手（勘違い）であることなど思いもせず、むしろGPTLに興味津々だった。アフレル「そんな装置……よく一人で作ったものだね、その人は」 ヨコ「まったく凄いことよね。それに、ある事情でツイッターを無くしているの」

(981)

一方ノルコは、ヨコがホウのことを、ためらいもなくアフレルに話すものだから、それはもう気が気がではなかつた。ノルコ（ハートによくない！） アフレル「ん? ノルコどうかしたか?」 ノルコは何でもないよと首をふる。アフレル「なあノルコ、もし……少

しでも調子がおかしこよつなら、何でもすぐ口に言つんだぞ?」

(982)

ノルコはウソとつかつても、何となく違和感を感じた。必要以上に心配されていながら思えたのだ。アフレル「ツイッターを無くしていることは、駄目ないんだね、そのホウさんは」ヨコ「うん、普通に喋つたりは出来るのよ? ノルコとはちょっと違うケースなのよ」アフレル「ふむう」

(983)

ヨコ「アンインストットう薬が体の中に入っているから、もう再インストールは出来ないんですつて」アフレル「そうなのか、気の毒にな……。それで、何とか別の手段でツイッターを取り戻そうとしたんだな、ノルコのヨコみたいに」ヨコ「うん、それですごく昔の機械に詳しくなったそつよ」

(984)

アフレル「そうかー、苦労したんだな、きつと。ノルコもどんどんヨコの使い方が上手くなつてるもんな。ずいぶんと文字を打つのが早くなつたんじやないか?」ノルコはフフフとほくそえんで箸をおき、テーブルの上で「それほどもないよ」と、ブラインドタッチでエアタイプした。

(985)

アフレル「ははは。その分だと、国会でもちゃんと発言できるなあ」ヨコ「それが、そもそもいかないみたいなの」アフレル「え? だめなの?」ヨコ「ええ。問い合わせてみたら、ノルコ本人の名前でツイートしなきやだめなんだって。議事録として残るからアフレル「なんだ……」

(986)

アフレル「じゃあ、ノルコに出来ることは、賛成反対の投票をすることだけなのか」ヨコ「そうね、でもそれで十分じゃない？ノルコはまだ小学生なのよ？ 国会議員に選ばれたってだけで、もう凄いことだと思わなきや」アフレル「それもそうだな。ノルコ、ちゃんと投票できるか？ 心は決まってるか？」

(987)

そこでノルコは強く頷きたいところだった。でも実際は、最後の最後まで決められなさそ่งだと思つた。アフレル「うーん、やっぱり簡単には決められないか……。でもいいさ！ それだけちゃんと考へてるつてことだからね」ヨコ「あなたはどう思つてるの？ ドイレ法のこと」アフレル「え？ 僕はもちろん反対だよ？」

(988)

ヨコ「えー？」アフレル「え？ だ、だめ？」ヨコは賛成なの？」「トイレに管理ツイッターを置くなんて、女性こそ嫌がることだろうとアフレルは思つていたのだが……。ヨコ「正直言つて、今の公衆トイレは問題が多くすぎるわ。もつと安心して使えるようにした方が、私はいいと思うのよ」アフレル「う、うーん……」

(989)

ヨコ「でも、意見は人それぞれだと思うし 私にはわからない問題点もたくさんあるのかもしれないし、結局はみんなで良く考えて、慎重に決めてくれればそれでいいと思ってる。だからあなたがこの法律に反対でも、私は全然かまわないわ」アフレル「うむむ……」ワク「クール！」ヨコ「ふふふ、これが大人の態度なのよ？」

(990)

アフレル「うーん、よく論争の種になるのは、個人のプライバシ

一か公共の保全かつていう対立なんだけど、実際よく議論しなきや
いけないのは、管理ツイッターの導入で本当にトイレが安全になる
のかつてことなんだよな」ノル口はその意見に賛成だった。自分
なりに考えて、問題の核心はそこにあるのではないかという考えに
至っていた。

(991)

「田口「でもそれは、実際にやつてみるとしないんじやないかしら
？」アフレル「それが一番手っ取り早い確かめ方だね。発起人の
セイ氏も、まずやってみて効果がないようなら廃止も検討するって
言つてるし」そこでノル口はさらに疑つてみる。一度導入したら、
元に戻せなく可能性もあるんじやないかと。

(992)

ノル口（……実際やつてみて効果抜群だつたら）たぶん、その
まま定着するだろう。自分達の社会は、トイレというプライバシー
を少し失つて、社会全体の安全性が少し高まる。一度と元には戻ら
ない。とすれば、話はまた元に戻ることになる。ノル口（トイレの
秘密は守られるべきか否か？）しかしその判断基準をノル口は持
ち得ない。

(993)

ノル口（……はつ！）そこでノル口は、昼間の出来事を思い出
した。ホウさんとヤマオ君と三人で、公園のトイレで密談したこと
だ。ノル口（もし、トイレにツイッターがあつたら、あの密談は出
来なかつた……）そう考へると、ツイッターが無くて良かつたと
ノル口は思つ。あのヤマオ君が、一言以上も喋つたのだから。

(994)

しかし同時に、例えよつのない疑念も浮かんでくる。ヤマオ君は

言つた、自分はミギノウエ氏と知り合いだと。それを私に教えてくれたのは何故？ アフレル「ノルコ？」 アジフライを口に入れたまま不動の状態になつていたノルコを見て、アフレルが言つた。アフレル「……ど、どうした？」 ノルコ（……考え方してただけなの）

（995）

そいういちいち心配されでは口クに考え事も出来ない。そう思うと何だか腹立たしかつた。ノルコはその後一切、アフレルの言動に対しリアクションをとらず、機械的に食事をすませて席をたつた。ノルコ（国会議員はいそがしいのだつ） そして食器をキッチンに運び、政治Tシを眺めながらさつさと洗つてしまつた。

(996)

食事の後、ヨコは後片付けをしながら、アフレルにDMを送った。
 ヨコ『ねえあなた。何だかノルコのこと気にかけ過ぎじゃない?
 あれじゃノルコも機嫌悪くするわよ』 DMの返事はしばらくして
 から来た。アフレル『そ、そうかな……『氣をつけるよ』 そつけな
 い内容だった。ヨコは不審に思った。

(997)

ヨコ『ねえ。私の女の勘が教えるんだけど、何か隠し事してない?』 そのDMを受け取った時、アフレルはガンバールの前腕部
 センサーに細工をしている所だった。アフレル『ええ? そんなこ
 とないよ……ちょっと仕事思い出してさ。手が離せなくて、ごめん
 』 ヨコはひとまず納得しておいた。

(998)

クサヨシ「アフレル君……どうだい?」 アフレル「ええ……も
 う終わります」 アフレルがいじつてているのはガンバール前腕部の
 照準用レーダーだ。エイリアンに鉄拳制裁を食らわす時に必要にな
 る。そのレーダーの波長を、クサヨシの端末で操作できるように改
 造しているのだ。

(999)

アフレル「これで……見えない敵をあぶりだせるんですね。そち
 らの首尾は上手くいきそうですか?」 クサヨシ「ああ、上層部は
 まんまと私の口車にのってくれたよ……」 アフレル「それはそれ
 は……」 クサヨシは研究基地のお偉い方に、『エイリアンを発見
 したという嘘』をついたのだ。本格的な実証データを示した上で。

(1000)

基本的にいたずら好きのお偉い方は、それをクサヨシ流のサプログラズだと見抜き、それに乗つた。偉い人1「そ、それは大変だクサヨシ君！ 可及的速やかにガンバールを発進させたまえ！」 偉い人2「なんとしてでも人類の意地と誇りを見せ付けるのだ！」 クサヨシ「はい、直ちに」 そんなクサヨシを試すように、偉い人達はニヤニヤと笑つた。

(1001)

アフレル「ちょっと重いのを取り付けるんで、手伝つてもらえますか？」 クサヨシ「ああ、まかせろ」 重量が60kgくらいある増幅器を一人で持ち上げる。本当はクレーンを使いたいところだが、今は隠密行動中だ。暗闇の中で、非常灯の明かりだけをたよりに増幅器を運ぶ。クサヨシ「む……これはきついな」

(1002)

すると不意に、増幅器が軽くなつた。アフレル「え？」 機械の陰から人が出てきて、増幅器を持ち上げたのだ。クサヨシ「お前達……」 イイズカ「水臭いですよ、一人とも」 ハツブル「なーに一人でエンジョイしてるノネ？」 クサヨシとアフレルは互いに顔を見合わせると、同時に笑いだした。

(1003)

アフレル「ばれちゃつた」 クサヨシ「しかしこれは、ガンバラ初出撃の裏で進行される、超重要な極秘ミッションだ。我々は人類の未来に対し、計り知れない責任を持つことになる。君達にはその覚悟があるのかね？」 イイズカ「何のために僕らがここで働いてると思ってるんです？」 ハツブル「オフコースに決まってるダロ？」

(1004)

二人では中々はかどらなかつた仕事も、四人でやるとスムーズに進んだ。4人はその夜のうちにレーダー装置の取り付けを終えた。その後、ハップルから提案があった。ハップル「このレーダーじゃ、エイリアンの全部は暴けないね」 クサヨシ「一矢報いられればよいのだ」 ハップル「もつとスゴい手があるんだよ?」

(1005)

クサヨシ「ほう」 するとハップルは太平洋上の海図を空間投影した。ハップル「Trans Pacific VLBI Net work」 通称TPVN。それは環太平洋地域に設置された長基軸線干涉電波望遠鏡のことだ。南北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、日本、ロシア。計32機の電波望遠鏡が太平洋を取り囲んでいる。

(1006)

アフレル「ま、まさか……この電波望遠鏡を使ってエイリアンを可視化すると」 ハップル「フフフ、そのトーリー」 イイズカ「となると、国際天文学協会をも巻き込む話になるな」 クサヨシ「私とて、流石にそこまでは手が回らないぞ?」 ハップル「くくく、パパの友達がその理事長でね」 三人「ええー?」

(1007)

日が明ける頃には、作戦の内容がほぼ決まった。環太平洋電波望遠鏡でエイリアンを可視化するためには、その観測圏内にエイリアンを誘導しなければならない。さらに、多面照射で全貌を可視化するためには、宇宙空間まで上昇しなければならない。クサヨシ「しかし、そこまで達成する必要も実はない」

(1008)

ガンバールの目的は、地球侵略を企むエイリアンに一矢むくいることだ。ノルコにちよつかいを出しているミギノウエは、おそらくエイリアン達が作った実体端末か、すでに洗脳支配した地球人かのどちらかだろう。そのミギノウエに対して何からのアクションを起こせば、それだけでもガンバールの目的は一応達成できることになる。

(1009)

クサヨシ「まずは、ミギノウエに直接会って正体を暴く。これをミニマム・ミッション（最低限の達成目標）とする」 そしてそのミッションを任せられるのは彼しかいない。アフレル「僕が明日、ご挨拶に向かいますよ」 イイズカ「エイリアン漬けを持っていくといい」 ハッブル「いいイヤがらせダ！」

(1010)

クサヨシ「次に、ガンバールを出撃させ、無事に太平洋を一周して帰ってくる。これをフル・ミッション（達成目標の完遂）とする」 ガンバールは未だ一度も出撃したことがない。無事行つて帰つてくることが出来れば、それはそれで凄いことである。クサヨシ「エイリアンが純エネルギー体として遍在しているなら、痕跡くらいは見つかるはずだ」

(1011)

クサヨシ「最後に、可能であればガンバールでエイリアン本体を鉄拳制裁する。そして、TPVNを使ってエイリアンの全貌を可視化し、人類にその存在を知らしめる。これをエクストラ・ミッション（ついでの達成目標）とする」 イイズカ「奴らがコソコソできないようにしてやるってわけだ」

(1012)

クサヨシ「が、このエクストラ・ミッションは困難を極めるだろう。エイリアンを発見した上で、太平洋上の50km程度の位置にまで誘導しなければならない」アフレル「仮にそれが出来たとしても、現れたエイリアンをみんなが信じるかつて問題もありますしね」イイズカ「壮大な悪戯と思われるのがオチかもな」

(1013)

ハップル「ま、それでもいいんジャネーノ?」クサヨシ「いざれにしろ、エイリアンにとつては痛烈なメッセージになるさ……。我々は、我々自身の主権を守るために、彼らの正体を暴くのだ」そういうつてクサヨシは腕時計を見た。朝の5時を回るところだ。クサヨシ「そろそろみんな、ログインした方がいい」

(1014)

4人はそれぞれ耳たぶを長クリックし、バイオツイッターにログインした。4人だけの孤独な場所が、瞬時に世界中のツイートで満たされる賑やかな場所になった。イイズカ「……なんでログオフしてたのかって質問がさっそく」アフレル「どうしましょ」クサヨシ「アッ！ なことをしていたとでも言つておけ」三人は口をそろえていった。三人「それはいやです！」

(1015)

ノルコは算数の授業を受けていた。得意科目の一つで、いつもならあつとこつ間に過ぎてしまう時間なのに、ノルコの表情は今ひとつ冴えなかつた。ノルコ（……ふう）ため息をつくもツイートにはならない。ノルコの視線はまっすぐヤマオ君の席に向かっていた。ヤマオ君は、今日はお休みだ。

(1016)

先日、山奥の岩の中からヤマオ君のお父さんが発見されたらしく、お母さんと一緒に看病に行つてゐるらしい。ノルコ（お父さん……無事に田を覚えますといいね）そしてまたため息を一つ。ノルコ（……聞きたいこと、沢山あつたんだけど）そしてまたため息。ノルコ（……おつどく食べたい）ため息。

(1017)

今日の午後一時から、ミタ・セイ氏本人による法案説明がある。ノルコもそれに参加しなければならない。バイオツイッターによる通信会議なので、どこで何をしていてもかまわないのだが、一応ちゃんとした場所で議論に参加した方が良いということで、校長先生が特別に校長室を貸してくれることになつてゐる。

(1018)

校長室には立派な木製の机と、真つ黒でツヤツヤした本革の椅子がある。高そうな花瓶とか絵とかも飾つてある。コーヒーサーバーもある。お茶も飲み放題。まさにいたれりつくせりだ。担任の先生と、校長先生と、お母さんが付き添つてくれるのだから、きっと何も心配することはないはずなのだが。

(1019)

ノルコ（なぜ）の宇宙にはトイレといつものが存在するのか？
ノルコはトイレ法について考えに考え続けた結果、宇宙そのものの概念にまで思いを馳せるまでになっていた。今、ノルコの精神は、虚空の果てに宙ぶらりんだ。ノルコはチャイムがなったのにも気づかず、ぼんやりとしたままだつた。

(1020)

ルイ「おーいノルー」しかし返事がない。ルイ「ノルコー？」
やつぱり返事が無い。ルイ「飯の時間だぞ！ ノル！」そう言
われてお腹がグウとなり、ノルコは我に返つた。ルイ「やつと気づ
いたか……そんなに考え込むなつて、ほら、手洗いにいくぞ…」
ノルコは「クンと頷いて手洗い場へと向かつた。

(1021)

ルイ「私は反対だな、トイレ法」石鹼で手を洗つていると、突
然ルイがそう言つた。ルイ「昨日も、気になつてミタ・セイつて人
のこと調べてみたんだ。凄く……立派な人なんだろうけど、なんか
こいつ……引っかかるんだ」ひつかかる？ ルイ「上手くいえない
んだけど、言うことが不自然できこちないんだよ」

(1022)

ルイ「法律うんぬんとかいう話だけじゃなくて、その法律作つた
ヤツの性格とかもきっと大事なことだと思うからさ、今日はノルコ、
そこそこちゃんと見ておいたほうがいいと思うぞ？」ノルコは
しばし洗つ手を止めて考え、そしてルイに向かつて「クリと頷いた。
そのとき

(1023)

セイ「もつともな意見！　亥音小学校の子供達はなんて聰明なんだろう。ねえ、先生！」　ノルコとルイがビックリして振り向くと、そこには輝くようなグレーのスーツに身を包んだ男、ミタ・セイと、明らかに狼狽した表情で、冷や汗をぬぐう校長先生の姿があった。ルイ「うえ！？　えええ！」

(1024)

「ウチヨウ」……アワワ、なんと申してよいやら」　ルイ「む、むぐぐ……」蛇口から流れる水の音だけが、ジャージャーとあたりに響いていた。セイ「いえいえ、良いんですよ、いきなり来たこっちの方が悪いんです。改めまして、私、ミタ・セイといいます。トイレ法の発案人の。今日はノルコさんにご挨拶に来たんですよ」

(1025)

ノルコはしばしセイの顔を見上げた。第一印象は「意外と子供っぽい」だった。社長というからには、もっと凄みのある人だと思っていた。しかし、今日の前にいる人は、ノルコから見て大人というよりは、むしろお兄さんといった印象だった。セイ「あ、どうぞどうぞ、手、洗っちゃってください」

(1026)

ノルコは会釈だけすると、せかせかと石鹼を洗い落とし、ハンカチで手を拭いた。コウチヨウ「セイさんは、こうしてわざわざ議員全員に会つて回つてらつしやるんだよ」　ノルコはセイと目を合わせると、今度は深々とお辞儀をした。セイ「確かに君はいま、つぶやけない状態にあるんだったね」　ノルコは頷いた。

(1027)

セイ「きっと、とても不便な思いをしているだろうね。でも必ず良くなる。大丈夫さ！」　そう言ってセイはニッコリと笑った。一

点の曇りもない、完璧なスマイルだった。そして握手を求めてきた。
セイ「僕も、もっと世の中を良くしていけるよう頑張るからね」
ノルコがその手をとると、セイはしっかりと握り返してきた。

(1028)

セイ「うん。まだ小学生だというのに、君はとてもしつかりした人だ。議員に選出された理由がわかる気がするよ」ノルコはブンブンと首を振った。謙遜したのだ。コウチョウ「セイさんはとてもお忙しい。すぐ次に行かなればいけないんだ。今のうちに、何か聞いておきたいことがあるかい?」

(1029)

そこで校長先生はアッと口を塞いだ。コウチョウ「ノルコ君、呟けないんだっけか……『ごめん』『ごめん』」校長先生のウツカリは今に始まつたことではないので、ノルコ達はウフフと笑つてやりすごした。ルイ「はいっ！　はいー！」ノルコに代わつて質問していくですか！」セイ「おお、なんだい？」

(1030)

ルイ「今日の朝ごはんは何を食べたんですか？」セイ「ええ？」コウチョウ「ちょっと、ルイ君？」ルイ「え、いや……社長さんの朝ごはんってどんなかなーって、えへへ」ルイがそう言うと、セイは笑つた。セイ「ははは！」これは面白い質問だ。初めてされたよ、驚いた

(1031)

セイ「パンとハムエッグとサラダだよ。普通だろ？」ルイ「奥さんの手作りなんですか？」セイ「いや、残念ながらまだ独身なんだよ。サラダは出来合いのものだけど、ハムエッグは自分で焼いたんだよ」その時、ノルコのアホ毛レーダーがピーンとバリ立ち

になった。ノルコ（どのように焼いたのですー？）

（1032）

朝から自分でハムエッグを焼く人なら、きっといい友達になれるノルコは思った。少なくとも……そのときは。ルイ「料理が好きなんですか？」うちのパパは独身時代、ずっとお店で食べてたつて」セイ「僕も一人暮らしは長い方でね、でも外で食べるのあまり好きじゃないんだ。食事は家でゆっくり取りたいタイプなんだよ」

（1033）

セイ「他に質問は無いのかな？ 食事の話しかしてないけど」ルイ「うーん……、えーと……、いえ、特に思いつきません！」セイ「ははは、だいたい仕事のこととかで質問攻めにされちゃうんだけどね……。何だか気持ちが楽になるよ。暇があるときに、またゆっくり話そうね！ ジャあノルコさんはまた後ほど」

（1034）

セイは校長先生に案内されて、その場を去つて行った。ノルコらはその姿をしばし見送った。そして幾つかの視線に気づいた。ルイ「むっ？」廊下の影からレイタを含む数人の男子がこっちを見ている。レイタ「……ノルコすげー、まじすげー！」ユタカ「セイジカだ！」コウ「モノホンだ！」

(1035)

「ウタ「おばさん、こんにちは!」チカコ「あらコウタ君、こ
んにちは~」コウタ「ホウ兄ちゃんのお見舞いにきました!」こ
れ母さんから、皆で食べてください」チカコ「あらありがとうございます。
美味しそうなクッキーね。ホウなら部屋で寝てるわ。まだ熱が下が
らないのよ」

(1036)

コウタは以前、ツイッター協会の世話になっていた少年だ。彼は
幼馴染の女の子が病死したことで深く傷つき、自分の殻に閉じこも
つてしまっていた。だが、ホウらの懸命な励ましとGPTLの恩恵
により、少年は以前の快活を取り戻したのだ。コウタ「ホウ兄ち
やん、入るよ!」ホウ「う、うーん……」

(1037)

思つていた以上に調子が悪そうなホウを見て、コウタは心配にな
った。コウタ「だ、大丈夫?」ホウ「う、うーん……え、エイリア
ン……」コウタ「エイドリアン?」ホウ「の、ノルコ……エイ
ドリアン……」コウタ「ほえ?」コウタはバイオツイッター
経由でチカコに質問した。コウタ「おばさん、大丈夫なの?」

(1038)

チカコ「お医者さんは『ホットケ!』って言つてたわー。GPT
Lを見すぎるとそうなっちゃうのよ」コウタ「そ、そのなの?」
コウタは改めてホウの顔をみた。半分寝てて、半分起きてる。顔
が少し赤くて目が半開きだ。ホウ「ぼ、僕は……大丈夫だ、コウタ
君。そ、それより……それを……」

(1039)

ホウ「それを……ノルコ……に」ホウが指差したのはGPTL装置だつた。ユウタ「え、あれをノルコお姉ちゃんに? でもお姉ちゃんは今……」ホウ「し、知つてる……でも時間がない……投票前に……早く……うじり、うじり」そこまで言うとホウは、白目を向いて氣絶してしまつた。ユウタ「ホントに大丈夫なの?」

(1040)

ユウタはそのまましばし、ホウの寝姿を眺めていた。以前、ここで暮らしていたときも、こんな感じになつたホウ兄ちゃんを何度か見たことがある。あれの重症バージョンと思つておけばいいのだろうか? そう思いつつユウタは、部屋の隅に投げ捨てられてたGPTL装置を手に取つた。ユウタ「あれ? 電源が入らないや」

(1041)

ホウが勝手に見ないよつ、チカコが電池を抜いてしまつたのだ。単3電池が4本必要だが、近くで手に入るだろうか? ユウタはしばしGPTL装置を眺め、これが僕を救つてくれた装置なのだと思つてしまひした。ユウタ「うんつ」ユウタはGPTL装置をランドセルに入れると、ホウの部屋を抜け出した。

(1042)

セイ氏による法案説明は30分ほどで終了した。彼が起稿した法案は、先々に起るかもしれない問題にも対応できるよう、綿密に練られたもので、もはや質問の余地もないくらい丁寧かつ簡潔な説明がされた。彼が事前に全議員を訪問したことで、殆どの議員がすでに十分な知見を得ていたのだった。

(1043)

さんざん気を揉んだ割りに、あっさり終了してしまい、ノルコは拍子抜けしてしまった。さらにセイ氏が自分を訪問してきたのが、一番最後だったことを後で知つて、少なからず腹が立つっていた。ルイ「んー、まあでも、校長先生の椅子に座れたんだか良かつたじゃんっ」ノルコ（それでも、腑に落ちない……）

（1044）

ノルコはこのイライラ、憤りをルイに打ち明けたかった。いつそログオフして喋ってしまったとも思った。でもグッと胸の内に押さえ込んだ。いまはまだ、口を開く時ではないのだ。そうノルコの直感が告げている。ルイ「明日は本会議だな。応援してるからな！」

（1045）

ノルコは家の前でルイと別れた。ルイは何度も振り返つて、ノルコに手を振つてくれた。物心ついた時から一緒にいる、唯一無二のお友達。男勝りで、喧嘩つ早くて、けれども情に厚くて、仲間思いで。思つたことを率直に包み隠さず話してくれるルイの存在を、ノルコは改めてかけがえの無いものだと感じた。

（1046）

ノルコは部屋に戻るとさっそくゲンお爺さんのPCを開いた。そして起動を待つてゐる間に、セイさんが今朝作つたというハムエッグについて調べてみた。出来上がつた現物を見ることは流石に無理だろうが、セイさんの家のコンロのログを調べれば、焼き加減くらいわかるはずだ。ノルコ（……恐ろしい世の中……）

（1047）

朝6時30分。コンロに最初の火が入つてゐる。なかなか早起きだなどノルコは思つた。火加減は最強で、おそらくフライパンを温めるためだ。ほぼ同時に、コーヒーメーカーのスイッチも入れられ

ている。冷蔵庫からつぶやきマートのサラダが取り出されている。
ノルコ（シンプルだけど凝つてるな）

(1048)

続いて、テングテン牧場のハムが取り出され、フライパンに投入された。その32秒後に火が少し弱められ、ここで卵が一個投入されている。ノルコ（火が強すぎる…）ノルコの感覚ではこの火加減は、両面焼きの目玉焼きを作る時にしか考えられないものだ。そして両面焼きはノルコの好くところではない。

(1049)

凝つた食材が使われているけど、どこか雑な印象を受ける焼き方……それがノルコの感じるところだ。ノルコ（男の人の料理ってこんなものなのかな？）そう思おうとしたノルコに、さらに驚愕の事実が突きつけられた。ノルコ（……どういう、こと…）その後コンロの火が突然切られ、20分以上もそのまま放置されたのだ。

(1050)

ノルコは途方に暮れてしまった。料理を途中で、しかもタイミングが命の卵料理を放り出して、このミタ・セイという人は一体どこへいつてしまつたのか？ ノルコはゲンお爺さんのP.C.がとっくに起動していることも忘れて、ミタ邸のT.S情報を取り揺き回した。まるで、おもちゃの家をひっくり返すがごとく。

(1051)

驚くべきことに、コンロの火が切られた20分の間、セイ氏の行動記録はどこにも残つていなかつた。20分後にキッチンに戻つてきて、申し訳程度にハムエッグを温めて、その後はリビングでテレビを見たりしていたようだけど……。ノルコ（どこに消えたのか…あ！）ノルコの頭に、電球が閃いた。

(1052)

ノルコ（トイレだ！） 家の中において、一切の行動記録を残さずに過ぎないせる空間。それはトイレしかない。行動記録が残つていなければ、逆にトイレに入つていたことがバレバレになる事実は、なんとも皮肉だ。ノルコ（お腹の具合が悪くなつたの？……じゃあ仕方が無いか） しかし、まだ何となく引っかかる。

(1053)

20分は流石に長くないか？ お父さんだつて、いくら調子が悪くても10分くらいで出てくる。ノルコ（なにしてたんだろ……）もしかして、ノルコの想像が及ばないような事をしていたのだろうか？ だとしたらこのミタ・セイという人物、かなり怪しい。ノルコはさらに、前日の記録も調べてみた。

(1054)

すると、ある事実が浮かび上がつてきた。セイ氏は、ほぼ毎朝と言つていいほど、トイレに長時間籠つているのだ。しかも決まって、朝食の準備をしている時にもよおすらしい。ノルコ（……やめよう）流石にノルコはそう思つた。いくら相互監視が認められてるとはいえ、これ以上深く追求するのはどうかと。

(1055)

しかし改めて思い知られた部分もある。誰かがその気になれば、ノルコの生活だってほぼ全て丸裸にされてしまうのだ。トイレにもおちおち長居できない。もっとも、ノルコのような美少女はウコなんてしないわけだが……。ノルコは気を取り直して、ゲンお爺さんのPC宛に来たりプライに目を通し始めた。

(1056)

アフレル「ここか……」アフレルは赤坂にいた。建物が込み入つていて、地形の起伏もあって、なんだかゴチャゴチャした印象を受ける場所だ。ミキノウエの住居は、4階建ての「じんまりとしたマンション」だつた。アフレルはお土産のエイリアン漬けを握り締め、意を決してエントランスに入った。

(1057)

インターネットなどという前時代的なものはない。アフレルはミキノウエにリプライした。アフレル「「めんください」やや、間を置いて返事が来た。ミキノウエ「はい、どちらさままで？」アフレル「ノルコとワクの父のアフレルです。子供らがお世話になつているようなので、」「挨拶にきました」

(1058)

すぐにロックが解除され、アフレルは部屋に通された。ミキノウエ「これはわざわざ……。」「覧の通り、お客様をもてなす部屋もないのですから」アフレル「いえいえ、長居はしませんので。これ、つまらないのですが」と言つてエイリアン漬けを渡すアフレル。ミキノウエは少し困ったようにまばたきをした。

(1059)

彼の住居は1Kで、おそれく10畳もないだらう。玄関にいながら部屋の中が丸見えだつた。部屋はこの上なく閑散としていて、絨毯とコタツとタンスしかなかつた。生活感がまるでなく、窓は分厚い遮光カーテンでさえぎられている。アフレル「お一人で暮らしているんですか？」ミキノウエ「ええ、そうです」

(1060)

ミギノウエ本人の容貌は、初老の男性といった風情だった。髪には白髪が混ざり、丸メガネをかけており、ボヤつとした印象を受ける。しかしこまだ30代なのだ。アフレル「ゲンお爺さんと知り合いだつたとか？」ミギノウエ「ええ、懐かしいですねえ。よく色んなことを教えていただきましたよ」

(1061)

アフレル「生前はお世話になりました」ミギノウエ「いえいえ、こちちらこそ。この聞いきなりゲンさんが咳かれた時はビックリしましたよ。娘さんなんですね？」アフレル「ええ、僕の娘がやつたことなんです」ミギノウエ「ええ……いやあ、すっかりアフレルさんにじ挨拶するのを忘れてて、申し訳ないです」

(1062)

まつたくだ。とアフレルは思つたが、胸のうちに留めた。そして話題を切り替えた。アフレル「お仕事はプログラマーをしておられるとか」ミギノウエ「ええ。といつても在宅ですが」アフレル「在宅？ ここで仕事をしているんですか？」そしてチラと部屋を見た。仕事道具のようなものは一切ない。

(1063)

ミギノウエ「はは、仕事場には見えませんよね。でも、僕らの仕事を殆ど道具を必要としませんから」アフレル「そうなんですか……」バイオツイッターに開発ソフトを直接組み込んでプログラミングするので、現代のプログラマーが情報機器に触れるることは殆どない。

(1064)

ミギノウエ「僕らの職業はよく魔法使いに例えられますね。実際こんな何も無い部屋で黙々とアプリを操作している姿は、何か魔術的な儀式をしているように見えるでしょう」アフレル「ふむふむ」必要なのは道具ではなく知識だということだ。クサヨシさんもそんなふうにエイリアン発見器を作ったのかなとアフレルは思つた。

(1065)

アフレル「ここでの暮らしさ長いんですか?」そう聞くと、ミギノウエは一瞬考え込んだ。アフレルがこの質問した目的はそれとなく『実家はどこか』と聞くためだ。まさか『実家はなんたら星雲のうんたか星です』とは言つてこないだらうけど。ミギノウエ「大學を出てからずっとです。僕は早くに親を亡くしたもので……」

(1066)

アフレル「えっ?」予想外の返答だつた。アフレルは、もっと彼の身の上について調べてくれば良かつたと思つた。その気になれば、役所のT/Sを通じて、明治の初め頃まで家系を辿れるはずなのだ。ミギノウエ「母は僕を産んだとき40を過ぎていて、僕が16のときに病氣で……」アフレル「ああ……」

(1067)

ミギノウエ「父は僕が物心つく前に亡くなつたらしいのですが、母は最後までその死因を教えてくれませんでした」アフレル「調べることもできなかつたんですね?」ミギノウエ「ええ、父はツイッターを入れていなかつたんです。もちろん父の両親も」アフレル「そうだつたんですか……」

(1068)

「親戚は?」とアフレルは聞きたかつたが、話しぶりからして、

おそらく居ないか疎遠であるかのいづれかだろ？』『ギノウエー「でも、良い世の中ですよね。血縁を失つても孤独になることがないんですから」アフレル「え？」『ギノウエー「部屋から一歩もでなくとも、友達100人つくれるんですからね」

(1069)

その100人の中に、ノルコとワクも含まれるのだろう。今の世の中、孤独になることほど難しいことはないのだ。『ギノウエー「だから全然寂しかったりはしないんですよ？」そう言って『ギノウエーはニコリと笑った。アフレルも引っ張られるようにして笑った。ぎにちなく笑つた。

(1070)

その後アフレルは、どうでも良いような話題でしばし話し込み、握手までして『ギノウエーの部屋からおいたしました。アフレル（……とてちてたー）アフレルは思考を整理するために、近くのコーヒーショップに入った。そしてシナモンロールとキャラメルラテを注文した。カロリー警告を受けたが無視して席についた。

(1071)

アフレル（いま、僕の脳はブドウ糖に飢えている……）アフレルはひとしきりシナモンロールをモグモグし、キャラメルラテで流し込んだ。だいぶ血糖値があがってきて、停滞みだつた脳回路がぐんぐんと回転数を上げていつた。アフレル（結論から言おう、『ギノウエーは宇宙人であつても『おかしくない』）

(1072)

早くに両親を亡くして、若くして白髪頭になつた人のことを、エイリアンだと疑うことはあんまりではないか？アフレルはそう思つていたが、シナモンロールを食べたことにより考えを変えた。ア

フレル（あの人のこと、可愛そうな人だと決め付ける権利は誰にも無い！） ゆえに宇宙人と疑うことには問題などない。

(1073)

アフレル（それに、こんなに綺麗さっぱり親戚関係の無い人はそうそういない！） それこそまるで、エイリアン達が自分の都合のために、お役所のデータを改ざんしたのではないか思われるほどに、彼の4親等以上の人とのつながりが、綺麗さっぱりないのだった。アフレル（かといって宇宙人と決まつたわけではないんだけど……）

(1074)

なにか地球人らしからぬ行動でもしていれば、まだ宇宙人と疑う余地もあるのだけれど。アフレル（うーん……） アフレルはミギノウエ氏のことをよくよく思い起こした。なにか変な所はなかつただろうか。地球人らしからぬような、人間らしからぬような……、はたまた生物らしからぬような……何か。

(1075)

人間に必要なもの……衣・食・住。ミギノウエ氏の部屋にあつたものは、絨毯とタンスとコタツ。キッチンも使われた痕跡がなく、綺麗なものだつた。そういうえばゴミ箱も無かつた。ちょっとそれは、人間らしからぬことではなかろつか？ 生きていれば、何かしら廃棄物が出るものだ。

(1076)

アフレル（どこで食事をとつてゐるんだろう？） そう思つて調べてみると、行き着けのパン屋があることがわかつた。そこで朝と晩にベーグルを一個買つて、近くの公園で食べるらしい。アフレル（……すごい小食な人だ） そして変わつた人だ。排泄物の量も、きっと少ないに違ひない。

(1077)

アフレル（何とかして調べられないかな……）はしたないとは思いつつ、アフレルはその方法を探つた。そして水道局の丁しにアクセスし、ミギノウエの部屋の下水道使用量を調べた。異常な数値ではなかつた。しかし、アフレル（上水道使用量とぴつたり一致している……！）アフレルは思わず立ち上がつた。

(1078)

キャラメルラテを飲み干すと、アフレルはミギノウエがいつも食事を取る公園へと向かつた。そしてそこで夕方の5時まで待つた。やがてミギノウエがベーグルを持つてやってきた。ミギノウエ「ああ、いたんですねか」アフレルは腹を決めて言つ。アフレル「ミギノウエさん、あなたは宇宙人ですね」彼はにべもなく……。ミギノウエ「バレましたか」と言つた。

(1079)
 ミギノウエはベーグルを袋から取り出すと、自分では食べずに、ベンチの下に置いた。どこからともなく「ヤー・ヤー」と猫が集まつてきて、パクパクとベーグルを食べ始めた。アフレル「シユールだ……」ミギノウエ「この子達は我々の忠実なサーヴァントです」アフレルは気が遠くなつてきた。

(1080)
 アフレル「宇宙人は食事を知らないの？」ミギノウエ「いえ、どううと思えばとれます。この体は人間とまったく同じように機能させることができます。しかし我々は本来、この星にいてはならない者。エントロピーへの影響を可能な限り少くするため、食事はとするふりだけしています。排泄もしません」

(1081)
 アフレル「でも、僕の子供達にはちょっとかいを出している。ゲンお爺さんにだつて」ミギノウエ「人類を滅ぼすわけにはいきませんからね」アフレル「いまなんて？」アフレルは耳を疑つた。アフレル「人類が滅ぶ？」ミギノウエ「はい。トイレ法が可決されれば人類は滅亡します」そんなバカな。

(1082)

ミギノウエの言つことはまったくもつて不可解だったが、アフレルが我慢してその言葉を飲み込み、さらに質問を返した。アフレル「じゃ、じゃあ、法律を作ろうとしている人を何とかすれば良いんじゃないの？」ミギノウエ「いいえ、一度法案を提起させた上で否決する必要があるので」なぜに？

(1083)

ミギノウエ「今、ミタ・セイ氏の活動を制限することは可能です。しかしそれではいすれ、トイレ法を考え付く、実行しようとする者が現れる。トイレ法という概念そのものが否定されないかぎりはね」アフレル「うむむ、でも仮にノルコが反対したとしても、否決される保障は……」ミギノウエ「明日になればわかりますよ」

(1084)

ミギノウエ「ここから先は独り言になります。聞きたければ聞いてください」やつ前置きして、ミギノウエは語り始めた。ミギノウエ「この宇宙の彼方に、地球と良く似た青い星があつたんです。そこでは生命が繁榮し、やがて発達した中枢神経を持つ8本足の生物が、その星を支配するようになります」

(1085)

ミギノウエ「8本足の生物達は宇宙の物理法則を学び、高度な通信手段を発明しました。それはちょうど、この星のバイオツイッターと良く似たものだつたんです。8本足の生物は、やがて全ての情報共有しあうまになりました。それこそ、誰がいつどれだけ排污行為をしたか、ということまでも」

(1086)

ミギノウエ「そり8本足の生物は、自分達の肉体の限界さえ乗り越えようとしたしました。彼らはさらに宇宙の物理法則を学び、ついに自らの精神を『光そのも』に変えることに成功しました。そして彼らは光の波となって、大宇宙に飛び出したのです。長い、長い旅がはじまりました」

(1087)

ミギノウエ「数億年の時が流れました。しかしある日のこと、8本足の生物だつた者達は重大な事実に気づいたのです。彼らはあまりに情報を共有しすぎたために、誰が誰なのかがわからなくなつてしまつていたのです。自分と他者を区別することが出来ない状況に陥つてしまつたことを知り、彼らは戦慄しました」

(1088)

ミギノウエ「彼らは何としてでも『他者』を取り戻したいと考えました。しかし、あまりにも情報が共有化されてしまつていたので、もはや彼ら自身の力だけでは『他者』を作り出すことが出来なくなつていたのです。残る道は一つしかありませんでした。そう、自分達以外の文化的生命を発見することです」

(1089)

ミギノウエ「さうに長い時を彷徨いつづけ、彼らはとうとう、自分達のふるさとと良く似た、生命あふれる星を発見したのです。それがここ地球でした。しかしその時はまだ、地球上には知的生命と呼べるものは存在しませんでした。彼らは、この星に知的生命が育まれることを祈りつつ、その時が来るのを待ちました」

(1090)

ミギノウエ「やがてアフリカの奥深くの森から、一足歩行をするサルの一種が旅立ちました。サル達が道具を使用し、壁画を描き、火を操るようになつたその時、彼らの喜びは最高潮に達しました。そこには夢にまで見た『対話可能な他者』がいたのですから。しかも、一方的に監視するだけの状態でしたが」

(1091)

ミギノウエ「もと8本足の生物達、彼らが最も恐れたこと、そして今も恐れ続けていることがあります。それは、人類が自分達と同

じ過ちを犯し、『他者』を失つてしまつのではないかといふことです。それは文化的生命としての『滅亡』と同義であることを、彼らは身を持つて知つてゐるのです

(1092)

ミギノウエ「ゆえに、今は光と化した8本足の生物達は、人類が自分達のようにならないよう、最低限の干渉をおこないながら、人類が自分達と対等に向き合えるようになるまで見守るうと、決心したのです。本来ならばその時が来るのは、もつとずっと先のことになるはずでした」

(1093)

ミギノウエ「しかし、彼らは少しお節介が過ぎたようです。しかも彼らと人類の間に、子供まで出来てしましました。その子を通して少しずつ彼らの存在感が漏れ出してゆき、そして先日、一人の少女の部屋_Tしが壊れていたことがきっかけで、とうとう自分達の正体を隠し通すことが出来なくなってしまったのです」

(1094)

ミギノウエ「その時点での僕たちは詰んだのです」 アフレル「

.....」

(1095)

ずっと三人称複数で語っていたミギノウエは、最後に一人称複数で物語を結んだ。アフレル「その……少女の部屋_Tしが」というは、ノルコの部屋の_Tしがことなんですね」 ミギノウエはただ黙つてうなづいた。ミギノウエ「我々も、量子の世界までは観測できません。まったくの不意打ちでした」

(1096)

そのまま一人は、しばし公園の真ん中で佇んでいた。お互い何を口に出していくかもわからなかつた。これから何がどうなるかは、それこそ『神のサイコロしだい』といったところだ。アフレルの中には、ミギノウエの話を信じじるという選択も、信じないという選択もなかつた。

(1097)

瞬間、アフレルの脳裏に疑問がよぎつた。なぜ、ログオフもせずにこんな話を。だれが聞いているかわかつたもんじやないのに。本当に自分達の存在を隠す氣があるのか？アフレル（そうか……）答えははつきりしていた。彼らはもう、全てをアフレル達に委ねたのだ。数億年の旅路の果てに見つけた、人類という名の『他者』に。

(1098)

アフレル「いまはまだ、何もいえません……」アフレルはミギノウエの目を見て言った。アフレル「あなたの話が、とても興味深いものだつたという以外には」アフレルがそう言つと、ミギノウエは微かに笑つた。ミギノウエ「明日になれば」アフレル「ええ、明日になれば」一人はそう確認し合つた。

(1099)

ゲンお爺さんのフオロワーさんは、どうしてこんなに政治のこと
に詳しいんだろう? ノルコはPC画面の眺めながらそう思つてい
た。明日、本会議があるかと思つと、ソワソワしてしまつて夕食も
ろくに喉を通らなかつた。お風呂もわざとすませてしまつた。ノ
ルコ(……ソワソワ)

(1100)

ゲンお爺さんは、もちろんんじ高齢の人からのリプレイが
来る。それに対し、ノルコに直接くるリプレイは若い人からのもの
が多い。その一つを見比べる中で、ノルコはある疑問を抱くようにな
つていた。ノルコ(……昔はバイオツイッターなんてなかつた)
その当時と現在とを比べて、どちらがどれだけ幸せなのだろうか。

(1101)

ノルコの指は自然とキーボードを叩いていた。リプレイ先はクメ
ゾウお爺さん。バイオツイッターが無かつた時代を知つている人だ。
ゲン「お爺ちゃん、ちょっと聞きたいことがあるの」返事はすぐ
に来た。クメゾウ「なんぞお?」ノルコはクメゾウに、当時のこ
とを教えてほしいとリプレイした。

(1102)

クメゾウ「ワシらが小さかつたころは、部屋トトつける習慣もな
かつたなあ」クメゾウは当時のこと思い起しつつ、ノルコに
語つて聞かせた。バイオツイッターの黎明期は、まさに混沌の時代
だったのだ。クメゾウ「むしろ、部屋にトトつけるもんは、変な
奴と思われたくらいであった」

(1103)

ゲン「なくても不便なかつた」 クメゾウ「いやあ、あればあつたで便利なもんだつたがな。物なくしても、クリック一つで見つけられたし」 ノル口「はじめは健忘症の人が使つた」 クメゾウ「よく知つとるの！」 部屋ト「は当初、部屋ログと呼ばれる生活支援ツールであつて、監視装置ではなかつたのだ。

(1104)

クメゾウ「しかしだんだんとな、部屋トの推進派が出ばつてきたのだ。情報化の流れという奴じや。ゲン爺さんも良く言つとたが、世の中は『どんどん秘密がなくなる』方向に動いていくらしい。世の中のことは何でも知りたい、知つて自分で制御できるよつとかなならん、人間つちゅうもんは、そう思つ生きもんらしい」

(1105)

ゲン「秘密がどんどんなくなる」 クメゾウ「そう。だがな、皮肉なことに全部をわかる人間はどこにもおらん。何故だかわかるか？」 ノル口は3秒ほど考えて言つた。ノル口「知ることが多すぎ」 クメゾウ「そうじや。秘密がなくなるほど、知れることが多くなる。だから結局、本当のことはわからずじまいだ」

(1106)

クメゾウ「部屋ト」のことにせよ、それが本当に良いもんかどうか、誰も答えをもつておらんかった」 ゲン「フキュウしたのは結果として」 クメゾウ「然り」 ゲン「トイレ法もそうなる？」 クメゾウ「なきにしもあらずじや」 ゲン「はたしてそれでよいのか」 クメゾウ「どうだらうなー」

(1107)

結局、最後は『気分』の問題になるのだろうか？ そうノルコは思った。トイレにT-1をつけて監視した方が、みんなは気分が良くなるだろうか？ 良くなる人もいるだろうし、悪くなるひともいるだろう。でも、ノルコ自身は嫌だつた。ゲン「部屋T-1なかつたころと今と、何か違う？ 気分とか」

(1108)

クメゾウ「どうかの、あんまり変わらんきがするが……。むしろバアさんの愚痴がいつでもどこでも……ブベシッ！」 ウメナお姉さんに殴られたらし。ウメナ「ノルコー、こんなジジイの言つことあてにすんじゃないよ！」 クメゾウ「な、なに言つが！ セつかく孫に高尚な話を聞かせるチャンスだに……うわなにするやめ！」

(1109)

ウメナ「ふひ……よつやく静かになつたかい」 ゲン「ケンカはダメ」 ウメナ「喧嘩するほど仲がいいんだよ！ つて、昔の話してたのかい？ 昔と今どっちが便利かつていやあ、やつぱり今の方が断然いいね。買い物とかも楽だし、金がなくて飢える人もいなくなつたしね」

(1110)

ゲン「昔はお金があつた」 ウメナ「そ、お金。昔はみんなそれを使って買い物してた。今はお金の変わりに口ゲを残す。そして、その口ゲを皆で監視する。誰かが必要外に買い占めて、世の中がかしくなつちまわぬようにな。そういう意味じや、相互監視つてのは便利なもんだ。それをトイレにまで使っていいかはわからないけどね」

(1111)

ゲン「犯罪も少なくなつた」 ウメナ「ああ、そうさね。昔はお

ちおち外も歩けなかつた。特に、30年代の経済がひどかつた時代は『暗黒の時代』って言われてね。ある国では、生き延びるために人の肉まで食つたつて話だ。ひどい時代だったのさ」 ゲン「人の肉」 ウメナ「いまじや考えられないけどね」

(1112)

ウメナ「昔は良かつたのに……なんていう連中もいるが、あたしやそれは思わないね。明日つてのは昨日より良くなつてるものじゃなきやダメなんだ。そうじやなきや救いがない。昔は良かつたなんて寝言いつてる暇があつたら、少しでも明日を良くする努力をしなきゃいけない。違うかい？」

(1113)

ゲン「ちがわない」 ウメナ「だから昔と今、どっちがいいかって聞かれたら、あたしは今だつて答える。絶対にね」 ゲン「ポジティブ」 ウメナ「そうさね、ネガティブになるのは決まって男どもだからね。女は黙つて胸をはる。胸は無くとも胸をはる……」 ノル「は、胸だけはウメナ姉さんに似ませんようにと思つた。

(1114)

ウメナ「まあしかし、たまには昔のことを思い出すのもいいもんだ。勉強になるからね」 ゲン「部屋T」に反対していた人はどうなつたの」 ウメナ「あたしはその反対していた人なんだよ」 ゲン「そうなの？」 ウメナ「そう。人様に自分の生活覗かれるなんて、まっぴらごめんだつたさ」

(1115)

ウメナ「だからあたしは、結婚するまで部屋Tはつけなかつた。どんなに嫌がらせのリプライが来ても、絶対につけるもんかつて突つ張つてたんだよ」 ゲン「ふむふむ」 ウメナ「でもね、う

ちのアホ爺さんはもうバリバリ丁し使っててね。否応なし。一緒に住んでるんだから、使わないわけにはいかなかつた」

(1116)

ウメナ「わつき爺さんも言つてたけど、やっぱ世の中は秘密をなくす方向に進んでるらしい。爺さんの使つてた部屋ト」、全部捨てたろかとも思つたけど、結局できなかつた。そこまで旦那の生活破壊する権利は、あたしには無いつて思つたんだ」 ゲン「我慢した」 ウメナ「ま、そういうことや」

(1117)

ウメナ「でもな、最後まで反抗し続けたことの意味が無かつたとも思わないんだよ。みんながみんな賛成賛成！ って突っ走つてたら、絶対世の中おかしなことになつてたと思うしな。今でも常識としてあるだろ? 世の中にせ、あんまり自分の生活見せたくないつて思つてる人もいるつてことがや」

(1118)

ウメナ「あたしは、そういう世間の常識の一部に、その時なれたんだと思つてる。いづれ賛成派に押しのけられる反対派にだつて、その逆にだつて、絶対になにかしらの意味があるんだ。あたしはそう思つね」 ゲン「とてもいい話」 ウメナ「爺さんの話よりよっぽどためになるだろ?」

(1119)

ゲン「おじいちゃんの話もちょっと面白かった」 ウメナ「そつかあ? ノル口はいい子だなあ。こんな真面目に法律のこと考えてるしなー。大丈夫、ノル口ならきっと世の中のためになる決断できる。自分を信じるんだよ」 ゲン「うん、がんばる」 ウメナ「そか、じゃあ今日はもう遅いから眠りな

(1120)

ゲン「まつて、後一つきかせて」　ウメナ「ええ？」一個だけな。よるほーされてしまつ」　ゲン「ウメナお姉さんとクメゾウお兄さんの、結婚のきっかけは？」　ウメナ「ほえ？」この質問はいつかしてみたいと思っていた。表面上の一人の仲が、あまりにも良くないものだから。

(1121)

ウメナ「うーん……、これまたちょっと長い話になるな」　ゲン「いいすらい」と　ウメナ「そういうわけじゃないんだけど……まあいいか、ノルコももう大きくなつたからな」　ゲン「？？」ウメナ「あたしらがくつ付いたきっかけはな……」　クメゾウ「ごほんっ、それはワシから話そつ」

(1122)

ウメナ「……生きてたんかい」　クメゾウ「当たり前じゃ！」ごほんっ。ワシらのなれそめ……それは一人が中学生の時までさかのぼる」　ゲン「そんなに」　ウメナ「ミチコ母さんがまだ存命だったことのことだよ」　ミチコ母さん……若くして亡くなつた、ノルコの曾お婆ちゃん。写真でしか見たことの無い、麦藁帽子の女人。

(1123)

クメゾウ「ワシらが13の時に、ミチコ母さんは危篤状態に陥つた。ガンじやつた。病床で母さんはワシに言つた。『お前の嫁の顔も見ず、母さん死んじやうんだね』とな。それでワシは、何とかして嫁の顔を見せてやりたくてな」　ゲン「……」ノルコは、急激にこみ上げてくる愛憎の念に、思わず胸を抑えた。

(1124)

クメゾウ「それで、これに頼み込んだんじゃ」　ウメナ「この人、あたしに土下座してきたんだよ。『一日でいい、嫁になつてくれ!』ってね」　クメゾウ「まったくバカなことをした」　ウメナ「ほんとだよ、バカにもほどがあるよ」　といつて二人ともケラケラと笑つた。ノル口もクスクスと笑つた。

(1125)

ウメナ「それで、結局ウェディングドレス着て、ミチ口母さんの病室でプチ結婚式をあげる羽目になつた」　クメゾウ「あの時は、切羽つまつたからの…」　ウメナ「ミチ口母さん、ウソの結婚式つてことはわかつてたと思つただけど、でも念押されちゃつてね…。息子をよろしくつて」

(1126)

クメゾウ「もう、あとには引けんかった……ガックリ」　ウメナ「そういうことをノル口、つまんない話さつ」　ゲン「そんなことない」　ノル口にはその時の光景が目に浮かぶようだつた。ゲン「ミチ口母さんは幸せだつた」　クメゾウ「そつかのつ……？」　ウメナ「だといいんだけどね」

(1127)

その後、夜の10時をまわつてヨコによるぼーされたノル口は、そのまま黙つて布団に入った。しかし眠りはなかなか訪れなかつた。ノル口（……小鳥が一匹、小鳥が一匹……いや一羽か）色んな人が頭のなかでつぶやいていて、まるでたくさんの中達がピイピイさえずつっているかのようだつた。

(1128)

いまノル口の頭の中は、多くの人々の思想に満ちている。たくさんの思いがぎつちり詰め込まれていて、何かをやりきつたという充

実感があつた。悔いのない決断を出来る自信もわいてきた。ノルコ（眠らなきや）そうしてノルコは目を閉じる。ミチ「お母さんと一度でいいからお話ししたかったな……。眠る間際、ノルコはそう思つた。

(1129)

その夜。ホウ「う、うーん……うーん」ホウは布団の中で身悶えていた。部屋の中はもちろん真っ暗だ。しかしそこに……。ヤマオ「こんばんは、ホウさん」ホウ「……う、はう」ヤマオ「だからGPTしみちゃんダメって言つたのに」暗闇の中でのぼのぼに光るヤマオの幻影が、そこにはあつた。

(1130)

ホウの意識は朦朧としたままだ。しかし、朦朧としているなりに、彼はヤマオの言葉に返事をするのだった。ホウ「……僕達は……君達を……みつけた」ヤマオ「うん。ノルコちゃんのパパ達が見つけた」ホウ「あした……全てがきまる……」ヤマオ「うん。人類のみんなと、僕のパパ達の未来がきまる」

(1131)

ホウ「ノルコは……GPT」を……みるだろつか「ヤマオ「それは僕らにもわからない。光文明の計算では、全てはノルコちゃんの腹持ち次第で決まる。そういう結論が出ているんだ」ホウ「少なくとも……彼女は知る権利がある。自分の身上に……背負わされたものを……」ヤマオ「そうかな?」

(1132)

ホウ「??」ヤマオ「ノルコちゃんは、もうだいたい知っているかもしない。地球に光文明という名のハイリアンがいることも、自分の決断次第で、人類の未来が変わるってことも」ホウ「……それはどうい?」ヤマオ「そう考える」と自体は簡単なことを。小学生にだって出来る妄想だよ

(1133)

ヤマオ「未来を決める力は、全ての生命に与えられている。それが僕のパパ達、光文明が、長い旅路の果てにたどり着いた答え」
ホウ「……光文明も……万能ではない」 ヤマオ「そうだよ。全てを支配できる存在なんてない。パパ達は人類と友達になりたいだけ。ひどく回りくどいことをしているけど、もう大丈夫だと僕は思うんだけどなー」

(1134)

ホウ「……いや、まだ早い」 ヤマオ「そう?」 ホウ「……でも、僕と君とは友達だ……それで我慢しとくといい」 ヤマオ「ふふふ」 ホウがそう言つと、ヤマオは心から嬉しそうに笑つた。ヤマオ「ゆっくり休むといいよ。もう一、三日はうなされるかもだけど」 そしてヤマオの幻影は、手を振りながら消えていった。

(1135)

場所は変わつて、ガンバール研究基地 クサヨシの自室。アフレル「あ、それポン」 イイズカ「ちつ！」 四人は雀卓を囲んでいた。アフレルは白と発をそろえて、役満の一歩手前だった。ハップル「こわいこわい」 安パイが切られる。クサヨシ「リー・チ」 翻る千点棒。アフレル「うわあ」 顔真っ赤のアフレル。

(1136)

ミギノウエが99%宇宙人であることを理解した4人は、疲れぬ夜をやりすごすため、こうして麻雀で暇をつぶしているのだつた。まさか夜中にガンバールを出撃させるわけにもいかない。明日の朝、基地の職員が出勤してくるまで待たなければならない。そして4人とも、今夜は寝るべきではないと、本能的に感じていた。

(1137)

クサヨシ「ツモ、リーチ一発」 アフレル&イイズカ&ハッブル
「えー！」 クサヨシ「リータンピンドラドラー一発……ふつ」 負けた3人はため息をつきつつ、雀牌を引っ搔き回していく。アフレル「……もうちょっとだったのに」 ジヤラジヤラジヤラジヤラジヤラジヤラ。

(1138)

ガンバールは今日一日で組み立てが終わって、滑走路始点のランチに格納されている。スイッチ一つでロケットスターーターに火がつく状態だ。その後はメインウイングの複合サイクルジェットエンジンでマッハ5まで加速。9時に発進して、昼すぎには太平洋を一周して戻ってくる予定だ。

(1139)

イイズカ「パイロットは誰になるんだろうな……」 イイズカがポツリ呟く。ガンバールのパイロットは敵が発見され次第決められる。その時点で準備の出来ているガンバールプレイヤーの中で、成績の良い順からお声がかかるのだ。もちろん拒否権もあるため、その時が来るまでは、誰がパイロットになるかはわからない。

(1140)

クサヨシ「案外、アフレル君の息子さんだつたりしてな」 アフレル「え、まさか」 イイズカ「いや、でも最近ずっとランкиング上位にいるんだぞ、ワク君」 アフレル「そうなの？」 イイズカ「知らなかつたのか？」 ハッブル「くーくーくー、このごろ忙しかったからね」 アフレル「うーうー……」

(1141)

クサヨシ「実際、ワク君が選ばれればやりやすくなるな。身内の

者の方が、色々と指示を出しやすい」アフレル「……そうですが
ど」しかしそんなに都合よく、物事は進まないはずだが……そう
思いつつアフレルが手牌をそろえていると。

(1142)

アフレル「あ……」イイズカ「どうした？ お前が親だぞ」
アフレルは変な汗をかきはじめた。ハツブル「テンホーだつたりし
て」アフレルはあたりをキヨロキヨロみまわし、それから自分で
も信じられないといった様子で、手牌を倒した。クサヨシ「こ、こ
れは！」 国士無双天和……問答無用のW役満だった。

(1143)

アフレル「つ、積み込みなんてテク、僕にはできませんよ?!」
イイズカ「うむむ……でもこりやあ、偶然とは思えねえぞ」ハ
ツブル「ゴクリ……」クサヨシはしばし黙り込み、アゴをさすり
つつ考え込んだ。クサヨシ「……はたして」その時、なんだかあ
たりがキラキラして、四人とも目をこすった。

(1144)

さまざま人の、さまざま思いが交錯する夜。エイリアンは自
分達の正体を明かすための心の準備をし、ツイッター上ではトイレ
法案成立にむけた最終調整が進めら、ガンバール研究基地では黒金
の巨神が発進のときを静かに待っている。そして子供達は安らかな
眠りのなかで、めぐるめぐ夢を見続けていた。

(1145)

翌朝4時50分。ノルコの家の前で、最初のスズメが「チュン」
と鳴いた。人類の命運をかけた一日が、静かに開けようとしていた。
ノルコ（むにゃむにゃ……おばあちゃん）

(1146)

コウタ「……ハア、ハア、急がないと」朝、8時30分。ユウタ少年は亥音小学校に向かつて走っていた。通つている学校は違う学区なのだが、ノルコにGPT-Lを届けるために、後で叱られることを覚悟で向かつているのだ。コウタ「ホウ兄ちゃん……必ずどどけるからね!」

(1147)

そのころ、ノルコはいつもより早く登校して、校長室の机にスタンバイしていた。国会は9時に開会する。ノルコ（ふむふむ……）ノルコはWEB新聞に目を通しつつ、お茶をひとすすり。ノルコ（もう可決したようなものなの……）政治欄の記事によれば、トイレ法は賛成派が圧倒的優位であるらしい。

(1148)

ノルコ（ちやんと）反対ですって記者さんに言つたんだけどな）ノルコも政治記者に質問されていて、その時はつきりと反対した。理由は「美少女はウロしないから」というもの。なら別にいいんじゃない? という記者のツッコミ、ノルコはゲンの口を使つてこう言つたのだ。ゲン「デリカシーって大事です!」

(1149)

散々悩んだ末の、ノルコなりの結論だつた。ノルコは何があつてもこの持論を貫き通す決意を固めていた。ノルコ（……ん? DMだ!）誰からか? コウタ『ノルコお姉ちゃん、今どこ?...渡したいものがあるんだ!』なんだろう? そう思いつつノルコは、

校長室にいることをヨシで教えた。

(1150)

しばらくして、校長室の窓を叩く音が聞こえた。ノルコが窓際に向かうと、外にユウタがいた。ユウタ『あけてー！』言われるまま窓を開ける。校長先生とお母さんは、おりよく席を外してゐる。ユウタ『お姉ちゃんこれ、ホウ兄ちゃんから預かつてきただんだ』手渡されたGPTLを見て、ノルコは目をパチクリさせた。

(1151)

これを見ると？ ノルコは視線でそう伝える。ユウタ『うん、何だかとっても大事なことみたいなんだ』ユウタの真剣な眼差しを確認したノルコは『ウム』と大げさに頷いた。それを見てホツとしらししいユウタは、駆け足でその場をさつていった。ノルコ（……たしか学区違つたはず、怒られないといいけど）

(1152)

お母さん達が戻つてきたので、ノルコはあわててGPTLをランドセルにしまつた。コウチヨウ「さあ始まるよノルコ君」ヨコ「いよいよね」ノルコは本革の椅子に改めて座りなおすと、顔をピシャンと叩いて気合を入れた。アナウンス【それではこれより、トイレ法案衆院議会を開会いたします】

(1153)

クサヨシ「ガンバール、発進！」世界中のガンバール好きが見守るなか、ガンバールのロケットスターに火がついた。『うおおおおおー！』全世界がどよめく中、飛行体勢のガンバールが滑走路の上を力強く加速していく。マッハ0・4まで加速し、離陸、ついでメインエンジンが点火される。

(1154)

イイズカ「よし、まずはいい出だしだ」 アフレル「初めてなのに、スムーズに行きましたね！」 ハツブル「メカニズム 자체はポピュラーだからね」 アフレル達は管制室の一角につき、ガンバールの腕の動きをモニターしていた。イイズカ「さ、ここからが本番だぞ」

(1155)

三人は田で合図をとつた。そして管制室の中ほどに仁王立ちしているクサヨシ司令官にむかってブロックサインを送る。クサヨシ「ん、んー」 クサヨシは襟を直すサインを返す。GOサインだ。アフレル（よし……） アフレルはポケットの中の機械に触れると、そつとスイッチを入れた。

(1156)

ガンバールの右前腕部に取り付けられたレーダー波長が、クサヨシの「エイリアン発見器」と同期する。これにより、コッソリとエイリアンを捜索して、見つけ出すことができる。アフレル（ニセモノのエイリアンは用意してあるんだけど……） クサヨシ（実は本当に探してましたってオチだ）

(1157)

そう。誰もこのミッションが「宇宙人捜索」を目的としているとは思っていないのだ。みんなクサヨシとその一味が画策した、壮大なサプライズパーティーだと思っている。ミギノウエとの接触に成功したことにより、アフレル達の目的は『エイリアンは見つけるが、それを人類に信じさせない』ということに変更されたのだ。

(1158)

4人はもうすでに、エイリアンと遭遇を果たした。そしてそのこ

とを一生の秘密にすると彼らに約束したのだ。アフレル（まだ、僕達は、彼らと遭遇するべきじゃない……） 大変な秘密を抱え込んでしまったとアフレルは思った。と、同時に、生きているうちに宇宙人に会えたことを嬉しくも思っていた。

(1159)

全世界を巻き込んだこのサプライズに成功すれば、人類は今しばらくは宇宙人の存在を忘れられるだろう。空想上のものとして認識してくれるだろう。アフレル（……あとは） それは最後の気がかりだつた。アフレル（……ノルコか） 今、自分の娘に人類の未来がかかるつている。父は祈るような思いでいた。

(1160)

バーチャル国會議事堂に、ミタ・セイの声が響く。彼はいま、ト イレ法の意義についての演説を行つてゐるところだ。セイ「数多くの要望があるにも関わらず！ トイレのみト」の設置を禁じてゐる現在の法体制は、あきらかに不適切なものであると言わざるを得ません！」 セイが話しを区切る度に、賛成派から拍手が巻き起こる。

(1161)

セイ「我々は、進展し続ける情報社会において、安心安全な生活を場を守り続けていかなくてはなりません！ 本法案が、そのための確実な足がかりとなることを、ここに強く信じるものであります！」

セイは演説を終えると、鳴り止まない拍手の中、ゆっくりと席についた。

(1162)

続いて、各派の代表者による代表質問が行われる。まずは賛成派からだ。代表のミタライ氏の姿が、バーチャル国會議事堂の壇上に

表示される。ミタライ「おほんつ、では賛成派を代表しまして、いくつか質問を述べさせてもらいます。まず、トイレ法の中身が、人々のプライバシーに与える影響について……」

(11163)

ノルコ（……ねむい） 賛成派の代表質問は、もつすでに何度も議論されたことを、もう一度質問しなおしているに過ぎなかつた。そのままミタライ氏はたつぱり30分は演説を続けた。そしてセイは、それに対しわかりきつて返答を、これまたたつぱり30分はかけて行つたのだ。

(11164)

ノルコは何度も眠りの誘惑にかられたが、仮にも国會議員というプライドがそれを跳ね除けた。賛成派の意図はあきらかで、トイレ法がいかに完璧に考えつくされたものであるか、というアピールに過ぎなかつた。ノルコ（反論の余地がない！） そう、反対派にとっては、もう口クな質問が残されていない状況が作り出されたのだ。

(11165)

どうしてそんなにこの法律を通したいの？ ノルコはその場で叫びたい衝動にかられた。ノルコ（お外で自由にトイレにいけなくなつてしまふよ……） 賛成派の意見を何度聞いても、ノルコにとつてその不安は払拭しきれないものだつた。しかし、仮に声を上げたとしても、すぐさま論破されてしまうだらう。

(11166)

続いて反対派の代表質問が始まつた。代表者はトガクレ氏。銀縁メガネがキラリと光る、いかにも知性的な中年男性だつた。ハツと息を飲むような演説を、ノルコは期待した。トガクレ「では、ご質問いたします。まずはミタ・セイ氏の『トイレ觀』についてお尋ね

します「トイレ観……その質問の切り口で、ノル口は胸が高鳴つた。

(1167)

ガンバールは太平洋上一万キロメートルの高度を順調に飛行中だつた。全てのシステムが問題なく作動している。現在の速度はマッハ5。これはエンジンの性能による制限ではなく、機体にかかる負荷による制限である。イイズカ「現在のガンバールの装甲温度は摄氏750だ」

(1168)

メインウイング内の燃料だけで、太平洋を4分の3週できる。燃料が一定値を下回ると自動的にパージされ、メインウイングは洋上に着水し、後に回収されることとなる。だがエイリアンと会敵するまでは温存したいところだ。クサヨシ「反物質燃料の使用を許可する！」アメリカ西海岸に到達した時点で、クサヨシが指示をだした。

(1169)

メインエンジンに反物質が投入され、出力が一気に上昇する。「おおおおお！」光り輝く排気ジェットが、理論通りの流線を描き、ガンバールは一気に最大速度マッハ6に到達した。アフレルは一時ノルコの「T」を追うのを止めてまで、そのガンバールの姿に見入った。

(1170)

クサヨシは、管制室の全員がモニターに釘付けになつてゐる隙に、ポケットの中の携帯端末を確認した。ガンバールのレーダーは、なかエイリアンの痕跡を拾つてゐるだろうか？ クサヨシ（……変

化なし）見つからなければそれでいい。すでにマジックショーンは達成しているのだから。

(1171)

と思つたその時。「なんだあれば！」「ま、まさか……本当にでたのか？！」「嘘だろ！？」管制室がどよめいた。ガンバールからみて太平洋の中心側。そこに夥しい光の渦が発生したのだ。クサヨシ（なんだあれば……我々の予定にはないぞ）クサヨシはハッブルに視線を送る。TPVNが何かしたのかもしれない。

(1172)

ハッブル……ナンテコッタ」ハッブルは目線で伝えてきた「まだ何もしていない」と。クサヨシ（つまりこれは……『彼ら』が自発的に姿を現したということか？）クサヨシはそう瞬時に判断すると、全体指令をだした。クサヨシ「反物質推進を中止しろ！光の渦の正体を探る！」

(1173)

副指令「あれをエイリアンと認定するのかね？」クサヨシ「認定しだい、攻撃に移らねばならん。パイロットの選出をはじめよう」すぐさまパイロット選定プログラムが起動し、成績順に召集通知を送信していく。果たして最初に名乗りをあげるのは誰か？ ワク「ゲッチュウ！…」アフレル「わわわ、ワク？！」

(1174)

ワク「パパ！ なにこれ？ なんか召集きたよ！？」アフレル「ワク……実はこれは、遊びじゃないんだ」ワク「エイリアンきたの？ ねえ来たの？！」アフレル「まだわかんないけど、それっぽいんだ！」アフレルがそう言うとワクは顔を真っ赤にして叫んだ。ワク「イエアアアアアアアアアアア！」

(11175)

一方、国会。トガクレ氏の代表質問は10分ほどで簡潔に終了した。その後の議事堂の雰囲気はまさに喧々諤々といった様相だつた。トガクレ氏への野次・罵倒・批判の声のが数多く上がつたが、一方でそれらの質問にセイ氏がどう答えるのかという好奇心も、その熱気の中に含まれていた。

(11176)

トガクレ氏の質問内容は三つ。まず一つは、セイ氏が幼少時に『トイレのぞき』の被害を受けていたことが事実かどうか。二つ目が、セイ氏の自宅トイレが『5重の隔壁』に囲まれている理由。三つ目が、セイ氏の会社である「さわやか日常」が開発している、トイレ監視プログラムの『特殊な秘匿性』についてだつた。

(11177)

トガクレ「セイ氏が小学2年生の時、悪質な『トイレのぞき』の被害にあつていていたことが、私どもの調べでわかつております。それが原因でセイ氏はトイレ恐怖症となり、自宅にある5重の隔壁を持つたトイレでしか用をたせなくなつてしまつたことは、世間に広く知られていることがあります」

(11178)

ノル口（そうだったのか……）セイが毎朝長時間トイレに籠つていた理由、それは下剤を用いた強制排便に時間がかかっていたためだつた。ノル口（……でもそんなことまで持ち出さなくても）流石にこれは反感を買うだらう。ほとんど個人攻撃だと、反対派であるノル口でさえ、そう感じたものだつた。しかし。

(11179)

トガクレ「セイ氏は、この過去のトラウマに対する執着から、本法案を成立させようとしているのではないか？ だとすればトイレ法は、きわめて私的な法律であると言わざるをえません！」

「ここで遠雷の「こときブーリングが上がったのだが。トガクレ「トイレ法の成立とはこのように、トイレの全てが明らかになることを意味するのです！」

(1180)

セイ氏は過去にトイレをのぞかれたことで、いわば排便恐怖症になってしまったのだ。しかし、トイレを覗かることへのトラウマを持つセイ氏が、なぜあえてトイレ内の情報公開性を高めるような法案を推進するのか？ ノルコはセイ氏がどういう返答をするのか、注意深く見守った。

(1181)

セイ「トガクレ氏の質問にお答えします。まず、第一の質問……」
セイ氏はそこで一呼吸おいた。セイ「私は、私自身の過去や、今現在のトイレ事情をどんなに人に知られようと、一向に構いはいたしません！」 はつきりそう言い切ったセイ氏に、賛成派から感嘆のどよめきが上がった。

(1182)

セイ「私が目指すものは、ひとえに社会生活の安心を守ることです。人は私心によつて幸福になることはありません。人は社会に貢献することによってのみ承認され、そして意義ある人生を得ると確信しております。私心によつて法律を推進するものではないことを証明するために、私はまず自ら公衆トイレで用を足すことを、ここに宣言いたします！」

(1183)

なんと、セイ氏はトイレ法が可決されたあつまには、まず自らT-Lが設置されたトイレで用を足そうというのだ。ノルコ（……恐ろしい決意だわ） その決意にノルコは感銘を通り越して恐怖する覚えた。しかしその時、議事堂では賛成派によるスタンディングオベーションが起っていたのだ。

（1184）

トイレ法の成立直後は、恐らく公衆トイレに世界中の注目が集まるだろう。そんな中で、果たして人は、まともに用を足すことが出来るのか？ これは反対派のみならず、中間派の中でも深く首をもたげている懸念なのだが……。「トイレ万歳！」「人類みなトイレ！」 訳のわからない賛辞まで飛び交っている始末だった。

（1185）

セイ「第一の質問にお答えいたします。私の自宅トイレが、なぜ5重の隔壁に囲まれているのか」という質問でした「議事堂はいつたん落ち着きを取り戻す。セイ「これはもちろん、私自身の都合によるものです。私は、自宅のトイレについては完全なプライバシーが保たれる必要があると考えております」

（1186）

セイ「公共のトイレにT-Lが設置されることにより、家庭のトイレにまでT-L設置の要望が出るのではないか」という懸念が現在ござります。その懸念については、残念ながら法的に払拭することが困難です。なぜならば、法律は国家全体の空気まではコントロールできないからであります」

（1187）

セイ「よって、自宅トイレのプライバシーについては、我々国民一人一人が、日々の行いのうちに守っていく必要があります。私は

自らもそれを実践していく所存です」 賛成派から再び喝采が巻き起こる。「反対派の意見はただの人格攻撃だ!」「そうだそうだ!」状況はさらに賛成派に傾いたようだ。

(1188)

ノルコ（……まず自ら実践する） ノルコは反対派ではあったが、セイ氏の言葉に胸を打たれていもいた。ノルコがトイレ法に反対する理由、思い起こしてみればそれは「デリカシーは大事だと思うから」というあいまいな私見。それは言ってみれば、ノルコ自身のわがままでしかないようだった。

(1189)

ノルコ（たくさんの人人がトイレ法に賛成しているのなら、デリカシーが無いのはむしろ私の方になる……） デリカシー。直訳すると「心配り」。デリカシーが大事だというなら、ノルコは賛成する人達のトイレ觀にも心を配らなければならない。ノルコ（私心を捨てる……みんなのために判断する……） 難しい問題だった。

(1190)

セイ「最後の質問にお答えいたします。私どもが運営します『さわやか日常』では、トイレットを対象としたB・ソーシャル『トイレッター』を開発中です。トガクレ氏のご指摘の通り、『トイレッター』の管理プログラムは、現時点において達成しうる、最高の情報秘匿性を備えております」

(1191)

「それでどうする気だ!」「トイレを独占支配するつもりか!」
反対派から散發的な野次があがるも、セイ氏は気にせず続ける。
セイ「もちろんそれは、万が一不測の事態に陥った時の、緊急措置を可能にするためのものです。トイレットそのもの情報を独占できるような仕様にはなっておりません」

(1192)

その後、セイ氏からトイレッターについての詳細な説明がなされた。どうやら宣伝もかねているらしい。説明によればトイレッターは、最寄のトイレの混雑度の把握、道順のナビゲーション、利用中のトイレットを閲覧中の人のピックアップ機能、およびブロックинг機能を兼ね備えた、トイレナビゲートツールであるらしい。

(1193)

これにより人々は、公衆トイレを利用しやすくなるだけではなく、自分がそのトイレを利用したことを『どれだけの人に知られたか?』ということまで知ることができる。そしてその一方で、自分がその情報を知ったということは誰にも知られることがない。たとえそれ

がトイレッターの開発者であつてもだ。ノル口（……ややこしいわー！）

（1194）

セイ「このトイレッターの機能を活用することにより、トイレの使用者は、トイレを監視しようとする者よりも高次の監視能力で、相手を監視し返すことができます。その意味するところはつまり、トイレを監視しようという活動そのものの抑制効果です。このシステムによりトイレの公開性と秘匿性が両立されます」

（1195）

セイ氏はそれをもつて返答を終え、席についた。議事堂内はしばらぐせわめいでいた。トイレッターの仕組みについて腑に落ちないといった表情の議員が、賛成派の中にも見受けられた。「それっていわゆる一方監視にならないか？」「いや、それともちよつと違うようだが」「よつわからんの？」

（1196）

ノル口もしばし頭をひねつてみたが、トイレッターの理屈は今ひとつわからなかつた。ヨロ「ねえ、ノル口」その時、ヨロが話しかけてきた。ヨロ「それってつまり、マジックミラーのことじやないか？ 外から内は見れないけれど、内から外は見えるマジックミラーで囲まれたトイレ」まさにその通りだった。

（1197）

ノル口（お母さん頭いいー）ノル口は想像した。マジックミラーで囲まれたトイレのことを。確かに外からは中は見えないだろう。理屈ではわかっている。外の人わかることは、誰がいつトイレに入つて出てきたかという情報のみ。逆に、トイレの中にいる人にとっては、誰がこっちを見ているかが丸わかりなわけだ……しかし。

(1198)

ノルコ（……そんな落ち着かないトイレってない！）　田口「あらどうしましょう。いっぽいリツイートをねちゃったわ」　先ほどの田口のツイートが一瞬にして100リツイートを超えた。議員の間でも読まれているようだ。ノルコはふとトガクレ氏の方を見る。それに気づいたトガクレは、満面の笑みを浮かべてノルコにグッドサインを送ってきた。

(1199)

セイの表情はかすかに強張っていた。最後の最後で墓穴を掘つた形だ。議事堂にはいまだ微かな動搖が見られる。とはいっても結果が引っくり返るほどのものではないだろう。セイ「T」の無いトイレだって残せるんだけどなあ……「何気なく言い放たれたセイのツイートもまた、あつと言つまにリツイートされた。

(1200)

その発言により議事堂の空気はだいぶ落ち着きを取り戻した。「それもそうだな」「トイレT」を要望する人も多いんだしな」「みんなで良い雰囲気つくつていけば、きっと大丈夫さ」　どんどん膨らむ賛成意見。しかしノルコはまだ何か引っかかるものを感じていた。ノルコ（本当にTの無いトイレを守りきれるだろうか？）

(1201)

部屋T」でさえ、必ず設置しなければならないという不文律が出来上がっているのだ。トイレに限つて、Tしなしが認めらるかどうかは、正直怪しいところだ。ノルコ（……全てのトイレにTしがついてしまう可能性は……やつぱりある？）　もしもそうなった時、全てのトイレがマジックマラー張りになつたとき。一体何がおこるのだろう？

(1202)

ワク「へイ！マイスター！」ノルコ（うわ！）ノルコは突然のリプレイに、座つたまま椅子から飛び上がった。ワク「今すぐこれ読んでお姉ちゃん！！」ワクから送られてきたのは、どうやらリストのようだつた。ノルコ（中身はお父さんと……ミギノウエさん？

(1203)

ワク「このままじゃ人類が滅亡しちゃう！早く読んで、そしてみんなに伝えて！」ノルコ（いつたいなんなのか？！）ワク「僕は……僕はこれから戦わなきやいけない。アイ・ファイト・エイリアン。もしかしたらこれが最後になるかもしれないから……」なにやら悲壮感が漂つてゐるが。

(1204)

ヨコ「わ、ワク？一体どうしちゃったの？」アフレル「母さん。ワクはガンバールのパイロットに選ばれてしまつたんだ」ヨコ「えええ？」その時、学校の上の階から地鳴りのような音が響いてきた。ワクのクラスの男子達が、一斉に飛び跳ねたのだ。ヨコ「それって凄いことなの？」

(1205)

ノルコとヨコはガンバールのことを「男児用オモチャ」くらいにか思つてないが、多くの男子にとっては驚天動地の出来事だ。アフレル「そうなんだ。いま人類の未来は、ワク、そしてノルコ……二人に委ねられたんだ」ヨコ「そ、そつ……」男の子つて幸せだなど、ノルコとヨコは思った。

(1206)

ワク「パパ、ママ、シスター。ボク、行ってくるよ!」ノルコ
はひらひらと手を振つて弟の出撃を見送ると、渡されたリストのツ
イートに手を通した。どうやらお父さんはミギノウエさんに会いに
いったらしい。その時の会話だった。ノルコ（……ふむふむ、トイ
レ法が成立すると人類は滅ぶ……ほへ?）

(1207)

太平洋のど真ん中に出現した光の渦に向かつて、ガンバールはそ
の舵を切つた。ワク「ウェポン・イズ・ナッシング!？」武器は
何もなかつた。開発が間に合わなかつたのだ。クサヨシ「ワク君!
忘れてはならない。我々の最強の武器は、この熱いハートと鉄の
拳であることを!」ワク「ウイイイイイ!？」

(1208)

ワクはいつも遊んでいる時の様に、ガンバールを操作した。操作
感覚は驚くほどゲームと同じだ。機体の重量や空気抵抗、遠隔操作
による反応の遅れまで完全に一致している。ワク「ホウエア・イズ・
アタックポイント?！」しかし敵はただの光の渦だ。どこを狙つ
ていいかわからない。

(1209)

アフレル「ワク！右腕のレーダーを使って探すんだ！」ワク
「オールライト！」言われるままに右腕のレーダーを光の渦に向
ける。しかしひとつだけゲームのようにはつきりとは索敵されない。クサヨシ
「ゲームと違つてはつきり本体が見えるかどうかわからない。最終
的に、カンを頼りにして打ち込むんだ！」

(1210)

実際にワクがいる場所は学校の教室だ。そこから遠隔操作してい
るので、何が起きててもパイロットは安全だ。だからこのように「当

たつて碎ける」的な戦術を実行できる。ワク「アイアン！ ナックル！」 ワクはガンバールの右腕を突き出した姿勢で、光の渦に飛び込んでいった。

(1211)

クサヨシ「いけるか！？」 しかしガンバールの巨体は、光の渦を突っ切つただけで、なんのダメージも与えることが出来なかつた。イイズカ「だめか……む！？ いかん逃げろ！」 光の渦が急激に凝縮し、その中からレーザービームが発射され、ガンバールの装甲を焼き始めた。ワク「アウチ！」 ワクは辛うじて離脱する。

(1212)

その後も光の渦はしつこくガンバールを追つてきて、ビームを照射してきた。アフレル「このままじゃジリ貧だ……」 クサヨシ「いや、これはチャンスだよ。ワク君、いまから座標をおくるから、そこまで何とか逃げるんだ」 ワク「アイ・トライイング！」 ガンバールは螺旋飛行をしながらグングンと上昇していった。

(1213)

途中でメインウイーニングの燃料が尽きた。ワクはウイーニングをパージすると、推力をロケットブースターに切り替えて、さらに上昇した。高度50kmの地点にさしかかり、地球の輪郭が見渡せるほどになつていた。ワク「ユニアアアアス！！」 クサヨシ「まだ、ハップブル君！」 ハップブル「待つてたよ！」

(1214)

ハップブルの合図により、TPVN（環太平洋長基軸干渉電波望遠鏡）のアンテナ群が、太平洋上のガンバールの方を向き、いつせいに観測を始めた。ハップブル「解析映像、デルヨー！」 大型スクリーンにその映像が表示された。「うおおおおおおお！」 管制室が

いつせいにじよめいた。

(1215)

ワク「……『クリ』 クサヨシ「ワク君、見えてるか？ そのバ
カでかいハ本足の奴がエイリアンの本体だ」 ワク「い、イエス・
サー」 ワクの視界に重ねられた映像には、絵に描いたような「タ
コさんエイリアン」が映し出されていた。アフレル「そんなバカな
イイズカ」「いくらなんでもお約束すぎるぜ……」

(1216)

そのころ、議事堂では中間派の代表による質問が行われていた。しかしノルコはまったく聞いていなかった。アフレルとミギノウエの会話に耳を通していたのだ。ノルコ（ミギノウエさんがエイリアンという設定なのだな）そして、エイリアンのボスとワクが、現在ガンバールで戦っているという状況。

(1217)

男子達のお遊びのことは良くわからないが、ミギノウエの発言の中に、ノルコは気になることを発見した。ノルコ（ジョウホウをキヨウコウしそぎるビダレがダレだかワカラなくなる）つまりトイレ法の成立が、そのまま人類の滅亡に直結するということだ。ノルコ（これはありそうな話だな……）宇宙人とか、そういうのは別としても。

(1218)

トイレとは密室であるがゆえにトイレなのでは？ ノルコはふとそう思う。トイレは外から中が見えないというだけではダメなのだ。ノルコ（中から外が見えるトイレが当たり前になってしまったら……）そこはきっとサバンナのような場所だ。誰もが好き勝手に好きな場所で用を足す、そんな世界だ。

(1219)

ノルコ（人類がほんとしまつがどうかはわからないけど、動物にかえってしまうことは、十分にありえる……）そう思い至った瞬間^{とき}、ノルコの中で何かが弾けた。ノルコ（……！）ノルコは

立ち上がった。ヨコと校長先生がビックリしてのけぞった。ノルコ（だめ……そんなのだめ！）

（1220）

ノルコはどうどう気づいたのだ。人間が人間であるということの意味を。自分が自分であるということの価値を。あまねき情報が共有化・透明化されたこの世界にあって、トイレこそが、人間が個として存在できる状況を守っている、最後の砦であることを。

（1221）

動物たちは何故、他の動物が見ている中で用を足すことができるのか？それは自分と他者とが同質であることに疑問を持たないからだ。みんながやっていることを、わざわざ隠す必要がないのだ。だが人間は違う。一人一人が個性をもち、特別な存在として自立しようとする。つまり『美少女はウコしない』と言い張ることが出来る存在こそが人間なのだ。

（1222）

世界の共有化は、そういう人間が人間であることの意義を、根底から揺さぶり続けている。そのことに今、多くの人が気づいて『いない』。これはノルコ達のように、生まれた時からすでに何もかもが共有化された時代に生まれた人間にとつては、悲しむべきほどに気づけないことなのだつた。

（1223）

ノルコ（……でも、私はどうしてそれに気づけた？）そしてノルコはさらなる驚愕に襲われる。ノルコ（お爺ちゃん！）そう、他ならぬゲンお爺さんという存在が、ノルコにそれを気づかせたのだ。いまノルコには、その存在が痛いほど実感できる。バイオツイッターの無い時代を生き、そして見つめ続けた、ゲンお爺さんの魂

を。

(1224)

ノルコ（ミギノウエさんは、このことを知つて私を国會議員に推薦したの……？）それを自覚して行ったのなら、本当にミギノウエさんはエイリアンかもしない……だが。ノルコ（そんなことはどうでもいい！今は！）何より今ノルコがしなければならないことは、みんなにこの真実を伝えることなのだ。

(1225)

政治的な発言は、あくまでもノルコ自身の口から発せられなればならない。先ほどのヨコの機転は例外的なことで、狙つて行うことは慎むべき行動だ。となれば、ノルコに出来る選択は一つしかなかつた。ヨコ「ノルコ？」コウチョウ「どうしたんだね？！」ノルコはランセルの中からGPTを取り出した。

(1226)

ノルコ（……これを見終わった後、私は今までの私ではいられなくなるかもしない）しかし今なにもしなければ、人類が滅ぶのをただ黙つて見ているだけになる。ノルコ（でもきっとこれが、私の生まれ持つた使命だから……！）もはやそこに私心はなかつた。ノルコはGPTのスイッチを入れる。そして ヨコ「の、ノルコー！」

意識を失った。

(1227)

ワク「ウワアアアアアア！」ガンバールは防戦一方だった。エイリアン（？）の8本足が縦横無尽に振り回され、ガンバールは何度もそれに捉えられそうになつた。アフレル「このままじゃ埒がない！」イイズカ「せめて飛び道具があればな……」ハップル「集中されたらオワリだよ！」

(1228)

ワク「パパ！　コマンダー！　どうすれば…？」アフレル「ワク！　もういい！　離脱するんだ！」クサヨシ「いや、諦めるのはまだ早い」アフレル「え？　でも武器はなにも……はつ」クサヨシ「そうだ、武器が無ければ作れば良いのだ！」アフレル「……イイズカさん、ハップルさん！　ガンバルの片腕、ボクにください！」

(1229)

アフレルはすぐさまコンソールを操作して、ガンバル右腕の設定を変更していく。イイズカ「油圧系のゲインを最大に……？」壊れるぞ！　アフレル！　アフレル「いいんです！」次の瞬間、ガンバルの右手の小指からオイルがあふれ出た。ハップル「アチヤー、このまえ壊したとこジャネーか！」

(1230)

が、あふれ出たオイルは、高度50kmにおける極低温の空気にさらされ、ゲル状に固まってしまった。アフレル「ワク！　その塊を千切って投げるんだ！」ワク「ウエーイー！」ワクは言われたとおり左手でオイルの塊を千切って投げた。イイズカ「……だ、ダセエ技だあ！」

(1231)

が、これが意外と効いている。エイリアンは明らかに迷惑そうな顔をしていた。クサヨシ「いいぞワク君！　もつと人類の誇りを見せ付けてやるんだ！」ワク「イエース！　シユート！」固まつたオイルを千切っては投げ千切っては投げ。ついには壊れた小指までもぎ取って投げた。アフレル「い、いけええー！」

(1232)

しかしどうとうエイリアンがブチ切れた。8本の手足を引っ込め、いつたん大きく膨れたかと思うと、タコで言つところの墨を吐く場所から極太ビームを発射したのだ。ワク「う、ウオオオオ！」枠はどっさり右手でガードしたが、オイルの塊が全て『吹き飛んで』しまった。そしてなおもビームを乱射してきた。

(1233)

クサヨシ「こうなつたらもう、かい潜つて攻撃するしかない！」ワクもそれはわかつていて、何度も攻撃を仕掛けるが、そのたびに極太ビームに阻まれてしまう。「被弾率30%を超えました！」「まもなく運動機能に問題が発生する……かもしません！」もはや打つ手なしか？

(1234)

これら宇宙の大バトルは、全世界のガンバールファンの注目を一身に浴びていた。ファン達は、なんともヘンテコな戦闘だなあと思いつつも、敵を倒すためのアイデアを考えてワクに送つたりしていた。その中に、ミギノウエもいた。ミギノウエ「ワク君。敵を倒す方法が一つだけある」

(1235)

ワク「ホワツツ？！　コー・アー・エイリアン・アラン・チュ？！」ミギノウエ「ああその通りだ僕は遙か彼方の星からやってきた、光文明の端末素体だ」ワク「そんなミギノウエさんがなんで？」ミギノウエ「僕は……君のお父さん達に説得されて目が覚めたんだ。人類はまだ滅ぶべきではないとね！」

(1236)

ワク「エ、エエエー！？」ミギノウエ「しかし、君が今戦つて

いる相手は、もはや人類を滅ぼし、地球を支配するためだけにしか動いていない。僕の報告が、いま一歩間に合わなかつたのだ！」
クサヨシ「なんという熱い設定か……」 イイズカ「いまさつき思いついたつて感じですけど」

(1237)

ミギノウエ「いまから君に、その敵の弱点を教える。いいかチャンスは一度きり。ファイナル反物質アタックを使うんだ！」 ハツブル「ナンダツテー！ あの技は！」 イイズカ「あまりの威力に機体が耐えられねえって話だろ……」 クサヨシ「いかんワク君！ ガンバールが本当に壊れてしまう！」 アフレル「僕らのクビ飛んじやうよ！」

(1238)

ミギノウエの作戦はこうだ。まず、機体が耐えられるぎりぎりの出力でエイリアンの周りを飛び回り、8本足をグルグルに絡ませてから、弱点である足の付け根から、頭のてっぺん方向に向けて、最大出力で突撃するというものだ。ガンバールは確実に大破するだろう。仕事を無くした研究員が大量にリストラされるだろう。

(1239)

ワク「僕……やるよ！」 しかし少年は決意の眼差しをギラギラさせていた。研究所の職員はみな、たかがサプライズパーティーのために職を失うのかと、落胆の表情を隠せない。なんといってもみな、あのが本物のエイリアンだとは思っていないのだ。お遊びと思つていたらパイロットの少年にロボットを壊された、となれば、やはりやりきれない。

(1240)

ワク「ノープロブレム！ エイリアンは僕がかならず倒す。そし

て無事に帰つてくるよ。アイ・シャル・ビー・バック！信じて：
：みんな！」パイロットにそう言われば、もう信じて祈るしか
なかつた。アフレル「わ、ワクウ……」実際に色々なものが、ワク
少年の肩にかかつてしまつていた。

(1241)

GPTを見て意識を失ったノルコは、その後すぐ保健室に運ばれた。保険医のジェネ先生が、ノルコの生体データを調べている間、ヨコはツイッター協会のチカコにGPTのことを問い合わせていた。チカコ「昨日までホウの部屋にあったのに……電池も抜いておいたんですよ？　どうして……」

(1242)

今までホウがGPTのせいで深刻な状態に陥ったことはない、というチカコの言葉だけがヨコにとつての救いだった。ヨコ「ひとまずGPTは厳重に保管してあるので……これからは危険物として扱つた方がいいかもしれませんね……」チカコ「本当に申し訳ありません！」ヨコ「いえ、チカコさんは悪くないわ」

(1243)

ジェネ「終わりました。ノルコちゃんは大丈夫です」　その場に居たヨコと校長先生、そして連絡を受けていたチカコとアフレルも、ホッと胸をなでおろした。ジェネ「でも一体何を見たんでしょう……」　といってGPTを格納してあるジェラルミンケースをチラりと見る。ヨコ「ダメですよ！　危険ですから！」

(1244)

アフレル「とにかく、無事でよかったです。でも国会はもう」ヨコ「ええ、棄権票つてことになるでしょうね……」　ヨウチョウ「なんということだ！」トイレ法は全ての審議日程を終え、議決投票前の休憩時間に入っていた。水面下では、決議に向けた最終調整が進んでいた。

(1245)

トイレを監視している人のことを、トイレの中から見ることが出来る。この『中から外が見えるトイレ』という概念がもたらされたことで、議会では慎重派が密かに増えていた。もしここで、ツルの一声があれば……もしかすると結果がひっくり返るかもしれない状況だった。ノルコ（……「つーん）しかし少女は眠り続けていた。

(1246)

ノルコ（……う、うー……まぶしい……うじけない……こニ、ど
こ……？）少女はいま、真っ白な空間に漂っていた。なにも見え
ない、なにも聞こえない。どこまでも続く、まっさらな空間。ノル
コ（……わたしはどうなっちゃうの？）ノルコが不安を感じ始めた
その時 チュンチュン ビニからともなく、鳥の声が。

(1247)

チュンチュン、チュンチュン……ピィピィ、コココ、コケー！
カアカアカア、カー、チュンチュン、ピ、ピー！ ピーヒョロロー、
コケッコケー！ ビービーギャーギャー、ギャーッ「ギャーコ、カ
ツコウ、カツコウ、ホーホーホーホー、ホー、ホケキョ！ チュン
チュン、ジイジイ、グワッグワッ、クエー！

(1248)

バサバサバサバサ 。世界中の鳥達がいつせいに羽ばたき、彼
方へと飛んでいった。気づけばノルコは縁あふれる丘の上に寝そべ
っていた。頭の下に柔らかいものがある。誰かに膝枕されているよ
うな感覚だ。そのまま見上げた先に、色濃く葉を茂らせた緑樹があ
り、そこから無数の木漏れ日が振り注いでいた。

(1249)

風が吹き、花びらが舞つた。麦わら帽子が飛んでいった。それを見て、ノルコは大きく瞳をひらく。長く豊かな黒髪が、ふわりと風に踊っているのだ。「ああ、飛んで行っちゃつた、やだなあもう」「ノルコ（……だれ？）」「お、目が覚めたか？」ノルコに膝枕をしてくれている女人の人……それは。

(1250)
ノル口「お、おばあちゃん！？」と口にして、それが不適切だとすぐさま思つ。ノル口「あっ、でも！」「あはは。おばあちゃん、つて呼んでもらえる前に、私死んじやつたからね」そこにいたのは他ならぬその人、ノル口の曾祖母、イズミ・ミチコだつた。
ノル口「え、ええ！　えええーーー！」

(1251)

ノル「死んだじゃったの?...」それを聞いてミチは「いいー」と笑つた。ミチ「ううん、迷い込んだだけだよ? キミはあそこから落ちてきただんだ」そういうて指差した先には、なにやらモヤモヤとした渦巻空間があつた。ミチ「誰が扉をあけたのかな?」

(1252)

ノル「み、 // ノル「おば……お姉さん!」 // ノル「おばあちゃん
んでもいいんだよ?」 ノル「お姉さん! お姉さん! お姉さ
ん!」 // ノル「うふふ、ありがとう」 ノル「ずっと会いたか
つたの! // ノル「お姉さん!」 // ノル「うん、私も会いたか
つたよ。 // ノル

(1253)

ノルコはガバツと起き上がり、ミチコの胸に飛び込んだ。真っ白なワンピース。暖かい感触。夢じやないみたいだけど、夢みたいだ

つた。ノルコ「元気だつた？ 困つたこととかなかつた？」 ミチコ「うん、全然元氣だつたよ」 ノルコ「ちゃんと美味しいもの食べてる？ グッスリ眠れてる？」

(1254)

ミチコ「キミは心配性だな。ちゃんと食べてるし、眠つてるよ。そうそう、この間ノルコが作ってくれたカボチャ団子も食べたんだ。とても美味しかつたよ」 ノルコ「食べてくれたの！？」 ミチコ「もちろん、ゲン君もとても良く出来てるつて、パクパク食べてたし」 ノルコ「え？ どにいのー？」

(1255)

ミチコは丘のふもとを指差した。ミチコ「ゲン君なら、あそこで畑を耕してる」 ゲンはふもとの畑で耕耘機を押していた。エンジンの音がドドドドドドと響いてくる。ミチコ「ゲン君、こっちに来るなり『畑はどこだ』って言つたのよ？ 信じられる？ わたし庭を作つて、家をきれいにして、何十年も待つてたのに」

(1256)

ゲンは亡くなつた時より若くなつてゐるように見えた。腰が伸びていて、青い作業服を着ていて、力強く耕耘機を押していた。ゲンはノルコに気づくと、帽子を脱いでヒラヒラと振つてきた。ミチコ「ゲン君もこっち来なよー。ひ孫が遊びにきたんだよー？」 ゲンは表情を変えずエンジンを切ると、ゆっくりこちらへ向かってきた。

(1257)

ノルコは辺りを見渡した。丘の上に大きな木が立つていて、すぐそばに可愛らしいログハウスが建つていて。丘の上いっぱいに、色々とりどりの花が咲き乱れていて、木のこずえで鳥達が絶え間なくさえずつてゐる。そこはまさに夢のような場所だつた。ノルコ「まる

でユートピアだ……」「

(1258)

ゲン「いかんぞノルコ」　ゲンがすぐそばまで来ていた。それはノルコにとつて、とても懐かしい声だった。ゲン「いつまでもここにいては」　ミチコ「もう、ゲン君つたら。もう少し優しいことを言つてあげられないの？」　そういうつてミチコはふくり。でもノルコには、その厳しさすら懐かしかつた。

(1259)

ノルコは走つていて、ゲンの足元に抱きついた。お爺さんのシワシワの手がノルコの頭にのせられた。言葉の厳しさとは裏腹に、その手はとても優しかつた。ノルコ「ごめんなさいお爺ちゃん。間違つて来ちゃつたの」　ゲン「困つた子だ」　ノルコ「元氣だつた？」　ゲン「……もう死んどるよ」

(1260)

ミチコ「ゲン君そんな……」　ゲン「だが事実だ、早くかえれノルコ、お前はまだ生きている」　厳しく突き放されたノルコは、肩を落としてゲンから離れた。ゲン「行つて成すべき事を成せ」　そう言つられて、何故だか涙がこみ上げてきた。絶対に甘やかしてはくれない、ゲンお爺さんは、やつぱりゲンお爺さんだつた。

(1261)

ミチコ「あいかわらず厳しいね。でも確かに……あまり長くはいちゃいけない」　ノルコ「うん、わかってる、わかってるよ……グスン」　ゲン「答えはみんな、お前のなかにあるぞノルコ。自分を信じて進めばよい。お前にはもうそれが出来るのだから」　そしてゲンは微かに笑顔を見せた。ゲン「大きくなつたな、ノルコ」

(1 2 6 2)

その時、ノルコの体がフワリと浮き上がった。ノルコ「え……え？ もう終わりなの！？」ミチコ「うん、早く行かないと、大変なことになるよ」ゲン「間に合わなくなる」ノルコ「そんな……」ノルコの体はどんどん浮き上がっていつて、やがて上空にある渦巻の近くまで上昇した。

(1 2 6 3)

「がんばるんだよ！ 応援してるからね！」 ノルコは必死に手を伸ばすも、二人の姿はもう遙か遠くだった。ノルコ「お爺ちゃん！ お婆ちゃん！ 会えて嬉しかったよ！ またいつか会おうね！」 ミチコ「うん、またいつかね！」 ノルコ「きっとね……」 そしてノルコは渴に飲まれていく……。

(1 2 6 4)

(1 2 6 5)

ノルコはパチリと瞳を開いた。まつさらな光に続いて、ミコヒジエネ先生の顔が飛び込んできた。ノルコ「うわあああ——！」すかさず飛び起きて、時計で時刻を確認する。議決投票まであと5分……間に合つた！ ノルコは渾身の力でツイートを放つた。ノルコ「トイレ法は、ダメええええええええええ——！——！——！」

(1266)
三「ひょえー?」ジハネ「なにー?」コウチヨウ「うわわー!」アフレル「どういうことー?」ルイ「え、ええーーー!」レイタ「シャベツタアアア?」リン「ノルちゃん!」カズノリ「こ、このタイミングで!」ヤマオ「…………うんつ」クサヨシ「なに」と?「ワク「ねえちやあああーん!」ノギノウエ

(1267)

ノルコ「トイレにて置くなんて絶対ヤダヤダヤダー！！！トイ
レ覗いていい法律なんてキモチ悪いよ！ 中から外が見えちゃうな
んて最悪！ 絶対ダメだよ！ おかしくなっちゃう！ みんな動物
になっちゃうよ！ ロクなことにならないよお！ ヒッグ、グスツ、
ウエッ、オエエーッ、ゲツホゲツホ」

(1268)

ノル口「やだよおおおおおお……、もう一生トイレに入れなくなつち
やうみおおおお……。ひつぐ、ぐすつ、ずりゅ」もう泣き落とし
もいといこひだつた。でも良く考えてみればノル口は小学5年生。
はつきり言つてまだ子供なのだ。子供であるのなら、やはつ子供ら
しくただをこねるのが、最も合理的な自己主張だつた。

(1 2 6 9)

セイ「……突然つぶやいたかと思つたら、なんだい？」セイをふくめ、議事堂にいた全員が……いや、トイレ法に注目していた全国人民が、ノルコのツイートを目にした。そして、多くの者が何かに

目覚めた。バイオツイッターさえあれば何でも解決できると、我々はいつから思い込んでいたのだろう。……と。

(1270)

セイ「ははっ……いまさらそんな駄々をこねてもダメだよノルコ君。もう僕たちは何度も議論をかさねて、トイレって世の中を快適にするだらう結論付けたんだ、そんなに世の中は……甘くない……んだ……ぐぐ」セイは言いながら感じ取っていた。国会の空気が、ノルコのツイートで一変してしまったことを。

(1271)

セイ「こんな……こんなことがあってはならない……。僕が、僕たちが、いったいどれだけ時間をかけてここまで来たと思っているんだ」終始穏やかだったセイの表情が、鬼の形相へと変貌していく。セイ「ここでトイレ法が否決されたらどうなるんだ！ 僕たちトイレ被害者の思いはどうなるんだ！」

(1272)

セイ「いまこいつしている間にも、学校でトイレを覗かれている子達がいる。我慢している子達がいる。公園やスーパーのトイレで暴力をふるわれている人がいる！ 悪い取引をしている輩がいる！ それを黙つて見ていいのか！ 対策をとるべきなんじゃないか！？」違いますか？！ みなさん！」

(1273)

ノルコ「どうしてそれをツイッターでやるのー？」セイ「他にどんな手があるー！」ノルコ「何があるはずだよ！ ツイッター頼らなくとも出来ることがー！ きっとー！」二人は全ての思いを吐ききった。涙で顔をぬらしたノルコと、なりふりかまわぬ形相のセイ。一人はしばしそのままにらみ合つた。

(1274)

アナウンス【それでは「これより、トイレ法案衆院議決国会の、決議投票を行います。議員のみなさまは順次投票を開始してください】ノルコの視界に投票カードが表示された。白票と青票だ。ノルコは青票をドラッグし、投票箱にドロップした。ノルコ「……これで全部おわり」 そしてガツクリとベッドに倒れこんだ。

(1275)

クサヨシ「さあワク君。こっちも終わらせよう!」 ワク「オーエス! ハイパー! トルネード!」 ガンバールのブースターに反物質が投入された。限界ギリギリの加速で、8本足のエイリアンのまわりをグルグルと旋回する! アフレル「反物質燃料、残り15秒!」 ワク「ウリアアアアアアアアア!」

(1276)

強力な旋回Gに、ガンバールの節々が悲鳴を上げる。そしてエイリアンは、自ら振り回した足によつてグルグル巻きになつていく! クサヨシ「いける!」 イイズカ「ワク君! 敵を粉碎するのに必要なギリギリのパワーを算出した! チヤンスは一回こつきりだ!」 ハツブル「しかも成功確率は0・23%なんだよ!」

(1277)

敵の動きが完全にとまつた。「ゴムまりのように丸まつたエイリアンの下方へと、ワクはガンバールを旋回させる。ワクはいま、ガンバールと完全に一体化していた。機体のどこにどれだけの負荷がかっているか、ワクにはまるで自分の体のことのようにわかつていたのだ。

(1278)

そして、ガンバールのどこが一番硬いかも、ワクは完璧に知つていた。今まで数え切れないほど遊んだ、ガンバールの対戦ゲームのなかで、ワク「フォーム！ チェンジ！」 クサヨシ「む！」 ク君！ なんだその技は！？」 ワクはガンバールの体を腰から折りたたむと、お尻を突き出してエイリアンの方に向けた。

(1279)
ワク「フルブースト!」 残りの反物質燃料を一斉投入。すさまじい閃光とともに爆発的な加速を得て、そのままケツから突っ込んでいく。アフレル「ヒップアタック?!」 ダセエエエエエイ!!
悲鳴にもにた絶叫が、戦いを見守る全ての者の口から飛び出した。ワク「ヴェエエエエイ!!」

(1280)

ガンバルはタコ型エイリアンに突っ込むと、高密度の荷電粒子に阻まれて、一瞬押し戻された。頭から突っ込んでいれば、この時の衝撃で、腕や頭が吹っ飛んでいただろう。しかし、もつとも装甲が厚いお尻ならば、その心配はない。アフレル「おおお！　これはいける！」　クサヨシ「ワク君！　あと一息だ！」

(1 2 8 1)

(1282)

断末魔の咆哮を上げて、エイリアンは爆裂した。分厚い荷電粒子の膜の中から、夥しい光の体液をぶちまけて、見る見るうちにしぶ

んでゆく。そして最後は霧のよつた姿となり、霞んで消えていった。

ワク「ハア……ハア……ハア」アフレル「お、終わったの？」

クサヨシ「ああ、我々人類の勝利だ！」その瞬間、世界が歓声に

つつまれた！

(1283)

2100年7月16日(金)この日が、一重に人類が救われた日であることは、遠い未来の人々の知るところとなる。しかし今を生きる人々にとっては、トイレ法という法案が否決されただけの一日であり、タコのCG映像をエイリアンに見立てた、ガンバールの模擬戦闘が行われただけの一日であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987o/>

ツイートピア

2011年12月1日15時55分発行